

国立国語研究所学術情報リポジトリ

送り仮名法資料集

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002263

国立国語研究所資料集 3

送り仮名法資料集

国立国語研究所

1952

国立国語研究所資料集 3

送り仮名法資料集

国立国語研究所

1952

刊 行 の 言 葉

国立国語研究所では、研究項目の一つとして、書き言葉の実状を明らかにし、書き言葉に現われる諸問題を解決するための基礎資料を作ろうとしている。この調査研究には、研究第一部第二研究室が主として当たっているが、その仕事の一部として、国語の表記法を定めるために、これまで現われた送り仮名法に関する資料を集め、これまで行われた仮名の送り方を展望しようように整理したものが、最近一応完了を見た。そこで、「国立国語研究所資料集三」として公刊することとした。

この仕事を実際に担当したのは、第二研究室に属する大野彌穂子・水谷静夫の両所員である。

本書に文献の轉載を許された毎日新聞社・日本速記協会、および内田百閒・若林方雄・野田信夫・平井巖夫の諸氏に心からの謝意を表する。

昭和二十七年二月

国立国語研究所長

西

尾

実

目次

刊行の言葉	(一)
序説	(一)
送り仮名対照表	(五)
送り仮名法文献集	(九二)
送假名法（内閣官報局）	(九三)
送假名大概（中根 淑）	(二四)
新撰送假字法（佐藤仁之助）	(三九)
送假名法（国語調査委員会）	(三五)
スタイル・ブック「送りがな」（大阪毎日新聞社）	(六五)
動詞の不変化語尾について（内田百閒）	(六八)

送り仮名法(案)(三宅正太郎・若林方雄・野田信夫)	(一七)
送り仮名法(案)について(野田信夫)	(一七)
「送り仮名法(案)」を読む(平井厳夫)	(一九)
送りがなのつけ方(案)(文部省国語調査室)	(一九)
会議録用字の手引き「送りがなのつけ方」(日本速記協会)	(一九)
附 送り仮名事項索引	(二〇)

解 説

一 送り仮名問題発生の基盤	(二四)
二 送り仮名法の略史	(二五)
三 文献解題——この資料集でふれた送り仮名法について——	(二六)

序

説

序 説

だれが書いても、どんな場合であつても、ある一つの単語は常に一定の語形で書かれる。それは今さら言うまでもないことであらう。だからこそ、西洋の諸国でも、つづりがやかましく言われ、学校においても教育される。わが国でも仮名遣がやかましく言われるのも、この語形の一定を願う心持の現われであらう。

これまで、すべて文章は「歴史的仮名遣」で統一されて来た。最近では、口語文を書く場合の仮名遣の規範として「現代かなづかい」が登場した。ところで、われわれの文章は、仮名遣だけを正しくしただけで語形の一定が見られるであらうか。もし仮名遣だけを用いる仮名文であるならば、仮名遣を正しくさえすれば、すべて語の形は一定されるであらう。ところが、われわれの文章は、漢字と仮名とを用いて書く漢字仮名まじり文である。語形を一定しようとすれば、漢字の使い方、漢字と仮名の使いわけ、平仮名と片仮名の使いわけが問題になる。それに、いわゆる送り仮名が問題になるのである。

アキラカニという語を、仮名だけで「あきらかに」と書けば問題はないが、「明」という漢字を使って書く場合になると、ある人は「明かに」と書き、ある人は「明らかに」と書き、ある人は「明きらかに」と書いている。

仮名遣においてはあれほどやかましくとがめだてされながら、送り仮名が放任されているように見えるのはいかにも不思議である。いや、送り仮名が一定されることはだれも願っていることでありながら、まだその規範が立っていないと言うのが実状であらう。漢字仮名まじり文における今後の問題として、送り仮名の規範を立てることは早急になされなければならないことである。

送り仮名の規範を立てるには、それが最も妥当であり、われわれの従いやすいものでなければならぬ。われわれは、そういう規範をさがし求めなければならないのである。これまでにも、送り仮名の規範を立てようと努力したものが無いではない。明治以降、多くの人々が、立案し、またこれを実行に移そうとして来た。今後、送り仮名の規範を立てるためには、こういう先人の努力を省み、そこから取るべきものは取り、さらに考えを深くして、万人の従う

べきものを打ち立てる必要がある。

今、送り仮名の資料集を編んだのも、この意味に基づく。

送り仮名は、一語を書き表わすのに、漢字と仮名という、性質の違った二種類の文字を使うところから起る問題である。従つて表意文字である漢字では表わし得ない活用語尾などの部分が仮名で送られるのは当然であるが、しかし活用語尾などを仮名で送つただけでは不十分な場合がある。たとえば、アラワスを「表す」と活用語尾だけを送つたのでは、場合によつてはヒヨウスと読みまちがえられるおそれがある。そこでアラワスの場合には「表わす」と書くように、読みまちがえを防ぐために活用語尾以外の部分にも仮名を送るという原則が立てられる。ただ、この場合に問題になるのは、その時代の語彙組織である。たとえば、アカルイという語は、活用語尾を送るという原則では「明い」とするされるが、昭和に入つて、古典に現われるアカシ（明し）という形容詞が一般の文章にもしばしば用いられるようになる。すると、「明い」では、アカイかアカルイか区別がつかない。そこで、これらを区別するために、アカルイの場合には「明るい」と書くということが行われた。このように、読みまちがえを防ぐという場合には、その時代に行われる他の語との関係の上で考えられるのである。

アケル、アカルイ、アキラカニなどを書き表わすのに「明」という漢字が用いられる。この場合、漢字に隠れる音節を一定しようという考え方が起つて来た。「明かるい」「明きらかに」という書き表わし方の現われたゆえんである。この考え方は、主として児童の学習上の便を考慮した結果と思われる。

「歩く」「悲しい」などでは、アル、カナという二音節が、「麗しい」「驚く」などでは、ウルワ、オドロという三音節が漢字に隠れている。このような漢字に隠れる音節数を二音節までに限つて、それ以上の場合には仮名を送るという考え方も現われた。こうして「麗わしい」「驚ろく」という書き方も出て来たのである。

このように、仮名の送り方にもいろいろの原則があり、それが、人によつても異なり、また時代によつても変化している。全体的に言つて、古くは、漢字を中心としてそれを助けるために仮名を送るという考え方であつたために、仮名を送ることが割合に少なかったが、後には、読みやすくするという考え方から、仮名を多く送ろうとする傾向が現われた。

仮名の送り方に、いろいろの原則の立てられることは事実である。しかし、今まで現われたどの送り仮名法の案について見ても、たいいていの場合、例外が見られる。例外のない原則が立てられることは望ましいことであるけれども、なかなか理想通りに行かないのが自然であろう。最後には、どうしても、一語一語について仮名の送り方を定めるといふのはない。

そこで、仮名の送り方が問題になるのはどんな語であるか、またそういう語が、各種の送り仮名法の案によってどのように送り方が違っているかを一覽しうる状態にまとめておくことは、今後の送り仮名を定めるのに便利であろう。こういう考えから、各種の送り仮名法の案に現われた語例を集めて五十音順に排列したのが「送り仮名対照表」である。

そして、このような一々の語の仮名の送り方の基礎とされた原則がどういうものであるかを明らかにするために、送り仮名法を述べた各種の文献をそのまま再録しようと試みた。これが「送り仮名文献集」である。ただし、紙数があまりにも多くなるのを恐れて、文献の中でも主要なものに限り、しかも、そうたやすくは見がたいものだけにとどめた。なお「送り仮名文献集」のあとに、事項索引を附したが、これは、求める事項が、各種の文献のどこに記載されているかを知ることが出来るようにしたものである。

なお、本書の最後に「解説」として、送り仮名の統一しがい要因と、明治以降の送り仮名法が、時代によってどのように移り変って行つたかを大観すると共に、さらに主要文献について一々解題を加えた。

送り仮名の問題を解決するには、これまでに立てられた送り仮名法の検討と共に、実際の文章に現われる書き表わし方の傾向を細かく調査する必要がある。また、単に送り仮名だけを切り離して考えるだけではなく、漢字の使い方や仮名遣などとあわせ考えて、総合的に、語の書き表わし方としてとらえる必要がある。本書は、今後の、語の書き表わし方を決定する仕事のための一段階として試みたものである。

(国立国語研究所研究第一部長 岩淵悦太郎)

送り仮名対照表

凡 例

一 この「送り仮名対照表」を作った目的は、一々の言葉を書く際、今までに現われた諸種の送り仮名法によると、どんな異同があるかが一覽できるようにすることである。

二 この表で対照の用に供した送り仮名法は、次の十二種である。これらの文献については、巻末の解説を参照されたい。

- 1 内閣官報局「送仮名法」(明治二十二年五月) この表での略称「官報局」。
- 2 中根淑「送仮名大概」(明治二十八年十月) 略称、「中根」。
- 3 佐藤仁之助「新撰送仮字法」(明治三十三年十一月) 略称、「佐藤」。
- 4 国語調査委員会「送仮名法」(明治四十年三月) 略称、「調査会」。
- 5 内田百閒「動詞の不変化語尾について」(昭和十年二月) 雑誌『東炎』第四卷第二号所載 略称、「内田」。
- 6 服部嘉香「正しい仮名遣と送り仮名」(昭和十一年十一月) 略称、「服部」。
- 7 木枝増一「送仮名法」(昭和十三年十月) 雑誌『国語・国文』第八卷第十号所載 略称、「木枝」。
- 8 三宅正太郎・若林方雄・野田信夫「送り仮名法(案)」(昭和十四年二月) 雑誌『国語運動』第三卷第三号所載 略称、「国語運動」。
- 9 文部省国語調査室「送りがなのつけ方(案)」(昭和二十一年三月) 略称、「案」。
- 10 文部省著作教科書「中等国語」の送り仮名——「中等国語」の送り仮名について正式に発表されたものはないが、次の文献から推すことができる。すなわち、文教協会編「総合当用漢字表」巻末の「現行教科書 おくりがな対照表」および久松潜一編「新編国語辞典」附録である。従って10にはこの両書をあてた。略称、「中等国語」。
- 11 総理庁・文部省「公文用語の手びき」(昭和二十二年九月、改訂版昭和二十四年三月) 中の「送りがなのつけ方」 略称「公文用語」。(ここでは主として改訂版によった)。
- 12 文部省「表記の基準」(昭和二十五年十二月) 略称、「基準」。

三 この表の第一段には、主として口語文で送り仮名が問題となるような言葉を掲げ、第二段以下に、それぞれの送り仮名法を適用した場合の形を示した。

第一段の見出し語は、現代かなづかいで五十音順に並べてある。

これらのうち先の十二種の文獻で実例に引かれているものは、もちろんそれを写した。実例に出て来ない言葉も、それぞれの規定を適用して得られる形を、努めて示すことにした。こうして編者が補った用例には、*印をつけて他と区別してある。

四 用例の下に加えてある数字・品詞名の略号、イロハなどは、原典の規則の番号または章節である。なお「参」字は、参照の意味する。用例の送り仮名の平仮名・片仮名の別は、適用した語が、口語か、文語かの別である。

五 用例中、同じ読みに対し違う漢字が当てられても送り仮名に变りのないものは、一方を()の中に収めた場合がある。

六 *印をつけた用例(編者が補ったもの)で、()に囲まれた部分は、規定の解釈のしかたなどで、あるいは加えられ、あるいは省かれる部分である。また原典に適切な規定がなく疑わしい場合などは、空欄にしておいたが、必要があれば「?」をつけて編者の解釈による形を示した。

七 第二段以下は、ほぼ時代の逆順に並べてある。ただし、印刷上の制約から、

文獻5の用例には○をつけて「国語運動」の欄に、

文獻7の用例には△をつけて「国語運動」の欄に、

文獻6の用例には◎をつけて「調査会」の欄に、

それぞれ収めた。

八 文獻7から引いた形には、木枝が参照として示したものもあるから、必ずしも木枝自身の意見とは限らない。

文獻11で、改訂版と初版とに違いのある場合、初版だけに用例のあがっている場合には、(旧)の注記を加えた。

文獻9の用例で傍線のある言葉は、仮名書きが望ましいとされたもの、△をつけた仮名は、省いてもよいとされたものである。九 この表には、「送り仮名法文獻集」に収めた大阪毎日新聞「スタイル・ブック」および日本連記協会「会議録用字の手引き」

による用例の欄がない。これは表を作る時にその原本がまだ得られなかったからで、ほかの理由によるものではない。

見出し	<p>アイ (アイカタル アイカマエテ ナイナリ ナイツイデ アイミル アエテ アカス アカナリ アカミ アカム アカラメル アカリ ガル カルイ スキ スキタラズ スキナイ スキナウ スキバレ キラカ キラケシ アクビ アケガタ アケハナツ ガル アゲル アケワタシ アザムク アザカ ジロイ</p>	基準	<p>相國連させる あいついで あえて 明かす あかり 上がる 明るい 満う 明らか あくび 上揚げる 欺く 味わい</p>
公文用語	<p>* 相語る * あいし * あい語る * あいついで * あえて * 明かす * あがなう * 赤み * 赤らむ * 赤らめる * 明かり 上がる 明かるい * 飽き * あきたらず 満い 満う * 秋晴れ 明らかに * あくび * 明け方 * 明け放つ 上(擡)げる * 明け渡し 欺く 味わい</p>	中等国語	<p>鮮やかに 味わい</p>
案	<p>* 透ひ見る 敢へて 明かす 購ふ * 赤らむ 赤らめる一・五 上(擡・攀)がる 明かるい 満ふ 明らかに三・三 明け方 上(擡)げる 挙げる 鮮やかに 味わい 三・三</p>		

[illegible]

<p>國語運動 △本校○内田</p>	<p>△味はひ 二 △味はふ 二 △預り 二、九 預かり金 五備考 ○預かる ○預ける △恰も 三 温たかい 二五 △暖かい 温たまる ○温まる △新しい 二 ○当てる △披ひ 二 披かう △集り 二 △集まる ○集まる △集める 一九 △後片附 ※後片附 ※集ム ※厚ミ ※集ル ※集リ ※披フ ※披ヒ ※当ル ※新シ ※温ム ※温ル 暖ニ 副 恰モ 副 預ク 副 預ケ金 副 与ル 預リ金 副 預リ 名二乙</p>	<p>調査 ◎服会 部</p>	<p>※味ハヒ 味ハフ △預リ ※預リ金 ※与ル ※預ケ金 ※預ク ※恰モ ◎暖(温)かい ※暖ル ◎暖まる △暖ム ※新シ ※当ル ※披フ ※集リ ※集ル ※厚ミ ※集ム ※充ツ ※後片附 ※跳チ ※侮ル ※嵩 ※甘シ ※甘サ △剩ハ △剩ハ △おまつさえ △甘さ 六 △危ない 二五 △嵩 三〇 ※侮る △集める 一九 △後片附 ※後片附 ※集ム ※厚ミ ※集ル ※集リ ※披フ ※披ヒ ※当ル ※新シ ※温ム ※温ル 暖ニ 副 恰モ 副 預ク 副 預ケ金 副 与ル 預リ金 副 預リ 名二乙</p>	<p>佐藤</p>	<p>※味ハフ(?) △預リ ※預金 ※預ル ※与ル ※預ケ金 ※預ク ※恰モ △暖カニ ※暖ル ※温ム ※新シ ※当ル ※披フ ※集リ ※集ル ※厚ミ ※集ム ※充ツ ※後片附 ※跳チ ※侮ル ※嵩 ※甘シ ※甘サ △剩ハ △剩ハ △おまつさえ △甘さ 六 △危ない 二五 △嵩 三〇 ※侮る △集める 一九 △後片附 ※後片附 ※集ム ※厚ミ ※集ル ※集リ ※披フ ※披ヒ ※当ル ※新シ ※温ム ※温ル 暖ニ 副 恰モ 副 預ク 副 預ケ金 副 与ル 預リ金 副 預リ 名二乙</p>	<p>中根</p>	<p>※味フ(?) △預リ ※預金 ※預ル ※与ル ※預ケ金 ※預ク ※恰モ △暖カニ ※暖ル ※温ム ※新シ ※当ル ※披フ ※集リ ※集ル ※厚ミ ※集ム ※充ツ ※後片附 ※跳チ ※侮ル ※嵩 ※甘シ ※甘サ △剩ハ △剩ハ △おまつさえ △甘さ 六 △危ない 二五 △嵩 三〇 ※侮る △集める 一九 △後片附 ※後片附 ※集ム ※厚ミ ※集ル ※集リ ※披フ ※披ヒ ※当ル ※新シ ※温ム ※温ル 暖ニ 副 恰モ 副 預ク 副 預ケ金 副 与ル 預リ金 副 預リ 名二乙</p>	<p>官報局</p>	<p>△剩ハ △剩ハ △おまつさえ △甘さ 六 △危ない 二五 △嵩 三〇 ※侮る △集める 一九 △後片附 ※後片附 ※集ム ※厚ミ ※集ル ※集リ ※披フ ※披ヒ ※当ル ※新シ ※温ム ※温ル 暖ニ 副 恰モ 副 預ク 副 預ケ金 副 与ル 預リ金 副 預リ 名二乙</p>
------------------------	---	-------------------------	--	-----------	--	-----------	---	------------	--

見出乙

[illegible]

案

△余り 二
△余り 三四
△余りに 三四
△繩物 八
△危うい
※怪しい 一七
△怪しむ
△誤 二
※荒い
△予め 二二
※新たに
※改まる
△改る 一九
○※改まる
△改める 一九
※張(理)わす
△現はす 一九
※著わす 一九
※現われる
△現はれる 〇
△有含はせる 四
△有含はせる 二二
△有難い 二二

治シム 甘ヤカス 余 余リ 余リニ 〇竊み始める 〇竊物 危シ 怪シ 怪シム 異ム 誤 歩寄リ 荒シ 荒シメ 荒ス 非ス 一際外ニ 吞ス 一際外ニ 〇新ニ 〇新に 改ル 改ム 表 表(現)ス 表理・感ばす 現ル 現著ス 表 表(現)ハル 在方 在有ハセ 在有ハス 在有難シ 有標 有リ 在リ

余 甘ヤカス
余 余ニ 五・一・イ
余 編ミ 始ム
危クシテ 五・二・ハ
怪シム
誤 歩 荒シ 荒ス
新ニ 改ル
改ム 表ス
著ス 現ル
有合 有リ 合ハス
在方 有リ 難シ
有様 一・二・イ
アリ 三・二・二
在リ

甘カス
余リ
余リニ
編ミ始ム
危シ物
怪シ
怪シム
誤リ
歩ミ寄リ
荒シ
荒ス
改ル
改ム
衰ス
著ス
現ル
ハセ
合ハス
在方難シ
有リ様
有リ
在リ

余 余 余ニ 福始ム 福物 危シ 怪シ 怪シム 誤 歩寄(リ) 荒シ 子メ 荒ス 新ニ 副(一) 改ル 改ム 表ス 著ス 現ル 有合セ 有合ス 在方 有難シ 有 有リ アリ 在リ 動一

[illegible]

官報

見出し	<p>イキモノ イクラ イクラ イクバナ イササカ イサミタツ イスクレン イズル(出) イズレ(代名・副) イズレ 忙しい いだす いたずらに いたつて イタワシイ イタワシイ イチヂルシイ イスクシム イスク イスクリ イスクル イトナミ イトナム イトワシイ イニシエ</p>	基	<p>いづれ いくつ 生花 いざさか 勇ましい イズレ 忙しい いだす いたずらに いたつて いづくしむ 著しい *偽る いとわしい</p>	公文用語	<p>生き物 幾つ いざさか 勇ましい *いざさか *勇ましい *いづれ 忙しい *いだす *いたずらに *いたつて 痛ましい 著しい 玉つ *偽り *偽る *読み *いにしえ</p>	中等国語	<p>生き物 四・二 幾つ 四・五 *幾つ *いざさか 勇ましい二・四 *勇み立つ *いづれ 忙しい *いだす *いたずらに *いたつて 痛ましい 著しい 玉つ 四・五 慈しむ</p>	案
-----	---	---	--	------	--	------	--	---

<p>国語退校 △木校 ○内由</p>	<p>生き物 三 △生き物 一〇八 五備考</p>	<p>生け花 △聊か 三二 △勇ましい 言 △勇み立つ 一八 五備考</p>	<p>△何れ 三三 △忙しく 三三 △急ガシ 二四 ○出だす △徒に 三三 △至って 三四</p>	<p>著るしい 一 痛マシ 痛ハシ 著シ 繚シム 五シ紋 偽 偽ル</p>	<p>古 眠ハシ ◎営み ◎営ム 偽ル</p>	<p>古 眠ハシ ◎営ム ◎営み 偽ル</p>	<p>古 眠ハシ ◎営ム ◎営み 偽ル</p>
<p>調査 ◎服会部</p>	<p>生き物 ◎服会部</p>	<p>生け花 ◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>
<p>佐藤</p>	<p>生き物 ◎服会部</p>	<p>生け花 ◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>
<p>中根</p>	<p>生き物 ◎服会部</p>	<p>生け花 ◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>
<p>官報局</p>	<p>生き物 ◎服会部</p>	<p>生け花 ◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>	<p>◎服会部</p>

宋

[illegible]

[illegible]

見出し	ウケモチ ウケモツ ウゴカス	ウゴキ	ウシナウ ウシロ	ウスワル	ウズメル cf ウモル	ウスラグラ ウダガイ ウダガウ ウダガワシイ	ウチアワセ ウチアワセ ウチアワセカイ	ウチキリ ウチキリ ウチキル	ウチヤブ ウチヤブ ウチヤブ	ウチタエ ウツタエ ウツガス ウレカリ ウレカル	促す ウツタス ウツガス ウレカリ ウレカル	生れる ウツタス ウツガス ウレカリ ウレカル
来準	受持 動かす	失う うしろ	うずめる (目) 埋める うずまる (目) 埋まる	疑い 疑う 疑わしい	打合せ 打合せ 打合せ	打切 打切 打切	訴える 訴える 訴える	促す 促す 促す	生れる 生れる 生れる			
公文用語	受持 動かす	失う うしろ	うずめる (目) 埋める うずまる (目) 埋まる	疑い 疑う 疑わしい	打合せ 打合せ 打合せ	打切 打切 打切	訴える 訴える 訴える	促す 促す 促す	生れる 生れる 生れる			
中等国語	受持 動かす	失う うしろ	うずめる (目) 埋める うずまる (目) 埋まる	疑い 疑う 疑わしい	打合せ 打合せ 打合せ	打切 打切 打切	訴える 訴える 訴える	促す 促す 促す	生れる 生れる 生れる			
案	受持 動かす	失う うしろ	うずめる (目) 埋める うずまる (目) 埋まる	疑い 疑う 疑わしい	打合せ 打合せ 打合せ	打切 打切 打切	訴える 訴える 訴える	促す 促す 促す	生れる 生れる 生れる			

局

見出し	ウメアワセ ウメアワセ ウモレ cf ウズモル ウヤマウ ウラツケ ウラチサ ウラミ	ウラメシイ ウラヤメシイ ウラヤム ウリダシ ウリダス ウルオイ ウルオウ ウルオム ウルオス ウルシイ ウレエ ウレシナミダ エガク	オイタチ オイタチ	オオセ オオキイ オオオニ オエ オウギ オオ	オオセ オオキイ オオオニ オエ オウギ オオ
基準	埋合せ 埋めれる	敬う 占う	うらやましい 売出し	潤う 潤す	潤う 潤す
公文用語	埋合せ 埋め合せる	葬つけ 占う (田) 葬付け	売出し 売出す	うるおう (田) 潤おう 潤す (田) 潤す 潤わす 麗しい 憂える	おい立ち (田) 生立ち おいこ おいて 終える 大いに 大きい
中等国語	*埋め合わせる 埋めれる	敬う 占う *恨み	恨めしい *売り出す *売出し	潤う *潤い 潤す *潤わす 麗しい 憂い 憂える	*おいこ 扇 終える 大いに 大きい 仰せ
案	埋合せ	点なふ	恨めしい 羨む 売出し *売り出す *潤ひ *潤ふ	*潤ふ 潤す *潤わす 麗しい 憂い 憂える 描く 阿かく	於いて 終へる 大いに 大きい 二・三

[illegible]

[illegible]

<p>国體運動 △本校動 ○内田</p>	<p>△概ね 三三</p>	<p>※公やげ ※植なり</p>	<p>※遅れる 起こす ○起こす △疎かに △疎かナリ二八</p>	<p>行なう △行ハル 一〇 △起り 二 起こる △押さへる一六</p>	<p>幼ない △納る 一九 △納める 一九</p>	<p>△教 ※教える</p>	<p>△惜しむ 一七 △恐らく 三四</p>	<p>恐ろしい ○恐ロシ ○教はる</p>	<p>調査部 ◎服部</p>	<p>概ネ</p>	<p>公ニス ※植ヲ</p>	<p>※置物 ※起ク ※後ル ※起ス ※興ス ◎疎かに 行ハル 二(一)</p>	<p>起り ※起ル 押サフ</p>	<p>※幼シ ※取ル ※教フ ※押取ル</p>	<p>惜(吝・愛)シム 恐ラク 一(二) ※恐 ※恐ル</p>	<p>穩ナリ</p>	<p>佐藤</p>	<p>概(奉)五・一イ</p>	<p>※公ケ ※植ヲ ※置物 ※起ク ※遅ル 起コス 三・四・四</p>	<p>※疎カニ 行フ ※起 ※起(コ)ル ※抑フ</p>	<p>※幼シ ※取ル ※収ム 教 一・二・イ ※教フ 推取ル 三・四・ニ</p>	<p>恐ラク 三四・五 恐(名詞) 三・一 恐シ(動詞) 一・三 ※恐ル 怖ロシ 四・一</p>	<p>穩ヤカニ 五・一・二</p>	<p>根</p>	<p>副</p>	<p>名</p>	<p>公ケ ※植ヲ ※置キ物 ※起ク ※遅ル ※起ス ※疎カニ 行フ ※起り ※抑フ</p>	<p>※収ム ※教へ ※教フ ※押シ取ル ※惜シム ※抑シ寄ス ※恐シ ※恐レ</p>	<p>動</p>	<p>副</p>	<p>官報局</p>	<p>概(奉)オ</p>	<p>公 ※補フ ※置物 ※起ク ※遅ル ※起ス ※疎ニ 行フ 起り ※起ル ※抑フ</p>	<p>名 二乙</p>	<p>※幼シ ※取ル ※収ム 教 名 二乙 ※取ル ※惜シム ※抑寄ス 恐ラク 動 二 ※恐ル ※恐ロシ</p>	<p>穩ニ 副 二(一)</p>	<p>穩ニ 副 二(一)</p>	<p>穩ニ 副 二(一)</p>	<p>穩ニ 副 二(一)</p>	<p>穩ニ 副 二(一)</p>	<p>穩ニ 副 二(一)</p>	<p>穩ニ 副 二(一)</p>	<p>穩ニ 副 二(一)</p>	<p>穩ニ 副 二(一)</p>	<p>穩ニ 副 二(一)</p>
------------------------------	---------------	----------------------	---	--	-----------------------------------	--------------------	----------------------------	-------------------------------	--------------------	-----------	--------------------	--	---------------------------	-------------------------------------	---	------------	-----------	-----------------	--	--	--	--	-------------------	----------	----------	----------	--	---	----------	----------	------------	--------------	--	-------------	--	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------

見出し

オチイル
オチッキ
オチツク
オチバ
オツチ
オツシイル
オトスモノ
オトズレル
オトナリ
オドロカス
オドロク
オノオノ
オノズカラ
オノレ
オビ
オビヤカス
オビル
オモイダス
オセニ
オセムキ
オセムロニ
オセンミル
オヨロ
オヨビ(接續)

基

陥る
落ち積き
落ち積く
落ち垂
おつてゝする
落す
訪れる
驚かす
驚く
おのおの
おのずから
おのれ
帯
帯かす
帯びる
思い出す
おもに
趣
おもむくに
およそ
および
折り曲げる

準

公文用語

落着き
落着積く
落着垂
おとしいる
(田)陥れる
落し物
落す
訪れる
驚かす
おのおの
(田)各々
おのずから
帯
帯かす
帯びる
帯出す
おもむくに
折り返す

中等国語

陥る
落ち積き
落ち積く
落ち垂
落す
訪れる
驚かす
驚く
おのおの
おのずから
帯
帯かす
帯びる
帯出す
おもむくに
折り返す
折り曲げる

案

落着き
落し物
落す
訪れる
自ら
おのれ
及び
折返線
折り返す
折り込み
徐ろに

見出し	オリメ オリモ オリル オレカエリ オレコム オロカ オロス	オロソカ オワリ オウル	カイイレ カイイレル カイシメ カイシメル カイチ カイモノ カエス カエヅテ (副) カエリミル カエル (返) (換・変代・替) ガエソズル ガバール カガメル カガヤカシイ カガヤカス カガヤキ カガヤク
基	折り目 續物 降りる	終り	終る
準	買入れ	買入れ	返す かえつて 願省みる 換える かがまる
公文用語	折り目 *折れ込む おろす 卸す おろす	おろそかに	終る 買入れ 買入れる 買占 買占める 買手 かえつて 願省みる 代える かがまる (旧)雇まる かがめる 難かしい (旧)かがやく
中等國語	*折り目 *續物 降りる *折れ込む 愚か 降ろす *おろす 卸す	*終り	終る *買入れ *買入れる *買占め *買占める *買手 返す *かえつて 願省みる 換(変・代)える かがまる *難かしい *難かす *難き 難く
案	折り目	頭かに	終る
		買占め	切つて 願省みる 変へる 肯ずる 雇まる 雇める 難かしい 難く

(III)

見出し	基	準	公文用語	中等國語	案
カカル	係る	係る	係る	係る	掛懸る
カキアテラフ	掛かる	掛かる	掛かる	掛かる	掛かる
カキカエ	書き換へ	書き換へ	書き換へ	書き換へ	書き換へ
カキカエル	書き換へる	書き換へる	書き換へる	書き換へる	書き換へる
カキトメ	書留	書留	書留	書留	書留
カキトメル	書き留める	書き留める	書き留める	書き留める	書き留める
カキトリ	書取	書取	書取	書取	書取
カキトリル	書き取る	書き取る	書き取る	書き取る	書き取る
カキアフリ	書き取り	書き取り	書き取り	書き取り	書き取り
カキモノ	書き物	書き物	書き物	書き物	書き物
カギリ	限り	限り	限り	限り	限り
カク(斯)	重なる	重なる	重なる	重なる	重なる
カサナル	重なる	重なる	重なる	重なる	重なる
カサネル	飾り	飾り	飾り	飾り	飾り
カシコイ	賢い	賢い	賢い	賢い	賢い
カシコイル	(旧)かしこまる	(旧)かしこまる	(旧)かしこまる	(旧)かしこまる	(旧)かしこまる
カシバシ	貸出し	貸出し	貸出し	貸出し	貸出し
カシバシキソ	貸出金	貸出金	貸出金	貸出金	貸出金
カシバス	貸し出す	貸し出す	貸し出す	貸し出す	貸し出す
カシツケ	貸付	貸付	貸付	貸付	貸付
カシツケル	貸主	貸主	貸主	貸主	貸主
カシヤ	貸家	貸家	貸家	貸家	貸家
カスカ	かすかに	かすかに	かすかに	かすかに	かすかに
カズヅケナク	かたどる	かたどる	かたどる	かたどる	かたどる
カズムキ	傾き	傾き	傾き	傾き	傾き
カズラフ	語る	語る	語る	語る	語る
カズル	かたわら	かたわら	かたわら	かたわら	かたわら

<p>国語運動 △本校○内田</p>	<p>△掛る 一九 ○掛かる △書き物 一〇 △限り 二 斯く 五 か 五 △重なる 一九 ○重なる △重なる 一九 △飾 二 賢い</p>	<p>◎書き表はす △書換 書留 書取 ◎書き取る ◎書き振 書キ物 限 スク 八 斯(此)ク至ニハ 限 一・二・イ スク</p>	<p>◎書キ表ス 書換 書キ換フ 書留 書キ留ム 書取 書キ取ル 書振 書キ物 限 スク</p>	<p>◎書キ表ス 書換 書キ換フ 書留 書キ留ム 書取 書キ取ル 書振 書キ物 限 スク</p>	<p>◎書キ表ス 書換 書キ換フ 書留 書キ留ム 書取 書キ取ル 書振 書キ物 限 スク</p>	<p>◎書キ表ス 書換 書キ換フ 書留 書キ留ム 書取 書キ取ル 書振 書キ物 限 スク</p>	<p>◎書キ表ス 書換 書キ換フ 書留 書キ留ム 書取 書キ取ル 書振 書キ物 限 スク</p>	<p>◎書キ表ス 書換 書キ換フ 書留 書キ留ム 書取 書キ取ル 書振 書キ物 限 スク</p>	<p>◎書キ表ス 書換 書キ換フ 書留 書キ留ム 書取 書キ取ル 書振 書キ物 限 スク</p>
------------------------	--	---	--	--	--	--	--	--	--

見出し	<p>カチマケ (副・接) カツチ</p> <p>カヅマタ カツマ</p> <p>カナラズ カナラズ</p> <p>カナラズシモ (副) カネチ</p> <p>カノ カヨウ</p> <p>カヨウス カヨウス</p> <p>カラス カラス</p> <p>カリ (借) カリイシ</p> <p>カリイシキン カリニ</p> <p>カレタ カレタ</p> <p>カレル カレル</p> <p>カヨガイ カワカス</p> <p>カワリ</p>
基	<p>勝負 かつ</p> <p>かつて</p> <p>かなた 必ず</p> <p>かねて</p> <p>かの 通う</p> <p>枯らす 借入れ</p> <p>かりに かりに</p> <p>かれら 枯れる</p> <p>かわり</p>
準	<p>* かわら</p> <p>* かつ 勝負け</p> <p>且つ</p> <p>必ず</p> <p>かねても 兼ねて</p> <p>かの 通う</p> <p>* 通ふ</p> <p>* 通す 枯らす</p> <p>* 借り入れ</p> <p>* かりに</p> <p>かれ</p> <p>彼</p> <p>かれら 枯れる</p> <p>かわかす (自) 乾かす</p>
公文用語	<p>* かつ 勝負</p> <p>* かつて</p> <p>* かつまた</p> <p>かなた 必ず</p> <p>かねても 兼ねて</p> <p>かの 通う</p> <p>* 通ふ</p> <p>* 通す 枯らす</p> <p>* 借り入れ</p> <p>* かりに</p> <p>かれ</p> <p>彼</p> <p>かれら 枯れる</p> <p>かわかす</p> <p>* 川沿い</p> <p>* かわり</p>
中等国語	<p>かつ勝負</p> <p>且つ</p> <p>必ず 三・一</p> <p>必ずしも 三・四</p> <p>兼ねて</p> <p>* 通ふ</p> <p>枯れ草</p> <p>枯れる</p> <p>* 懸やか</p> <p>案</p>

[illegible]

見出し	<p>カワル カンガエ カンガエル カンガミル キキグルシイ キコエ キコエル キベク キベツケル キタス キタル キバランシ キマリ 決まる 決める 切替え 切リカエ 切リサガエル キワナル キワメテ きわめて 驚める クカギル クサカス クサラス クシケズル</p>
基 準	<p>代(変)る 考え 考える かんがみる 聞き吉しい 聞える 築く 傷つける きたす (田)来たす きたる (田)来たる 気はらし 来たる…日 きまり 決まる (田)極り 決める 切替 切リ替える 切下け 驚まる 驚める きわめて (田)極まる 驚める (田)極める 腐らす</p>
公 文 用 語	<p>代(変)る 考え 考える かんがみる (田)鑑みる かんがみる 聞き吉しい 聞える 築く 傷つける きたす *きたす きたる 決まる 決める *切リ替える *切下け 驚まる 驚める きわめて 腐らす *くしける</p>
中 等 国 語	<p>代(変)る *考え 考える *かんがみる 聞き吉しい 聞える 鑑みる 聞き吉しい 二・八 *聞え 聞える 来たす 来たる 来たる十日 決(極)まる 決(極)める 切替 驚まる *腐らかす *腐らす</p>
案	<p>代(変)る 考え 考える かんがみる 聞き吉しい 聞える 鑑みる 聞き吉しい 二・八 *聞え 聞える 来たす 来たる 来たる十日 決(極)まる 決(極)める 切替 驚まる *腐らかす *腐らす</p>

<p>国語 木校 内田</p>	<p>○ 變はる 考がえ △ 考 考える 鑑みる</p>	<p>△ 聞え ○ 聞ユ 二</p>	<p>* 築ク △ 傷ツク △ 来たす △ 来たる 二 ◎ 来たす ◎ 来たる 二 △ 氣晴らし 八参四</p>	<p>△ 決まる 一九 ○ 決まる 一九 △ 決める 一九 ○ 決める 一九</p>	<p>○ 極まる △ 極めて 三四</p>	<p>一</p>	<p>調査 ◎ 服会 部</p>	<p>* 変ル * 考ル * 考フ * 鑑ミル</p>	<p>* 聞 * 築ク 城ヅク 傷(創)ツク * 来ス ◎ 来たす * 来ル ◎ 来たる</p>	<p>* 決リ * 決ル * 決ム * 切替 * 切(リ)替フ * 切下 * 窮ル * 極マテ 七</p>	<p>* 窮ム * 転ル * 腐ラス * 梳ル</p>	<p>佐藤</p>	<p>* 変ル * 考ル * 考フ * 鑑ミル</p>	<p>* 聞 * 築ク カ七 聞ユ 三・二</p>	<p>* 傷ツク * 来ス * 来ル * 氣晴シ * 決 * 決ル * 決ム * 切替 * 切(リ)替フ * 切下 * 窮ル * 極マテ 二・一</p>	<p>* 窮ム * 転ル * 腐ラス * 梳ル</p>	<p>中根</p>	<p>* 変ル * 考ル * 考フ * 鑑ム</p>	<p>* 聞 * 築ク * 聞キ苦シ * 聞ユ * 聞ユ * 氣晴シ * 決リ * 決ル * 決ム * 切替 * 切(リ)替フ * 切下 * 窮ル * 極マテ 副</p>	<p>動 動 動</p>	<p>動 動 動</p>	<p>動 動 動</p>	<p>動 動 動</p>	<p>* 梳ル * 窮ム * 転ル * 腐ラス * 腐ラス * 腐ラス</p>	<p>官報局</p>	<p>* 変ル * 考ル * 考フ * 鑑ル 動(五)</p>	<p>名二乙</p>	<p>* 築ク * 来ス * 来ス * 来ス * 氣晴 * 決 * 決ル * 決ム * 切替 * 切(リ)替フ * 切下 * 窮(極)ル 七</p>	<p>七</p>	<p>七</p>	<p>七</p>	<p>七</p>
-------------------------	--	----------------------------	--	--	---------------------------	----------	--------------------------	---	--	---	---	-----------	---	---	--	---	-----------	--	---	--------------	--------------	--------------	--------------	---	------------	---	------------	--	----------	----------	----------	----------

見出し

クダサル
クダス
クダル
クミアイ
クミアワセ(名)
(動)

クダサル
クダス
クダル
クミアイ
クミアワセ
クミアワセル
クミダチ
クミダチル
クセリ
クセシイ
クヤミ
クヤム
クラシ
クラシム
クラス
クリアゲ
クリアガル
クリアワセ
クリアワセル
クリイレル
クリカエシ
クリカエス
クリコシ
クリコシキン
クリコス
クリサゲ
クリン

基

下る

組合
組合せ

組み合わせる

曇り

悔しい

悔む

暮し

暮す

繰上げ

くり返す

繰越金

準

下さる・くださる

(用)下さる

(用)下さる

組合
組合せ

組み合わせる

組み立てる

曇り

悔み

悔む

暮し

暮す

繰上げ

繰上げる

繰り合わせる

繰り入れる

繰返し

繰り返す

繰越し

(用)繰越

繰越金

繰り越す

公文用語

* 下さる

下る

* 組合

* 組み合わせ

* 組み合わせる

* 組み立て

* 曇り

* 悔しい

* 悔み

* 悔む

* 暮らし

暮らす

* くり上げ

* くり上げる

* くり合わせる

* くり入れる

* くり返し

* くり返す

* くり越す

* くり延べ

中等国語

案

組合
組合せ

組立

悔しい 二・五

悔み

悔む

暮し

暮す

繰上げ

* 繰り上げる

* 繰り合わせる

* 繰り入れる

* 繰返し

* 繰り返す

繰越し

繰越金

繰下け

繰延べ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

見出し

カカシ	カキダツ	カキホコル	カキンズル	カクビゴエ	カケル	カシアイ	カシアゲル	カシアタリ	カシイレ	カシオク	カシオサエ	カシオサエル	カシダシニソ	カシダス	カシツカエ	カシツカエル	カシトメ	カシトメル	カシヒキ	カシヒク	カズカル	カズル	カソウ	カガカニ	カダマリ	カダメル	カダメ	カダメテ(副)
-----	------	-------	-------	-------	-----	------	-------	-------	------	------	-------	--------	--------	------	-------	--------	------	-------	------	------	------	-----	-----	------	------	------	-----	---------

基

盛んに	* 咲き誇る	* 先んずる	下げる	さしあがり	差入れ	差押え	差出人	さし出す	さしつかえ	* 差止め	授かる	授ける	誘う	定まる
-----	--------	--------	-----	-------	-----	-----	-----	------	-------	-------	-----	-----	----	-----

公文用語

盛んに	先だつ	* 咲き誇る	先んずる	* 叫び	下げる	* 差合	* 差しあがり	(旧)差当り	* 差入れ	* 差し置く	差押	差し押さえる	* 差し出す	さしつかえ	(旧)差支	さしつかえる	(旧)差し支える	差止	差し止める	差引	差し引く	授かる	授ける	* 誘う	* さだかに	* 定まり	定まる	定めて
-----	-----	--------	------	------	-----	------	---------	--------	-------	--------	----	--------	--------	-------	-------	--------	----------	----	-------	----	------	-----	-----	------	--------	-------	-----	-----

中等国語

盛んに	先だつ	* 咲き誇る	先んずる	* 叫び	下げる	* 差し合い	* 差しあがり	* 差し入れ	* 差し置く	* 差し押さえる	* 差し出す	さしつかえ	さしつかえる	* 差止め	差止める	* 差引	差し引く	授かる	授ける	* 誘ふ	* 定かに	* 定まり	定まる	* 定め	* 定めて
-----	-----	--------	------	------	-----	--------	---------	--------	--------	----------	--------	-------	--------	-------	------	------	------	-----	-----	------	-------	-------	-----	------	-------

案

盛んに	先だつ	* 咲き誇る	先んずる	* 叫び	下げる	* 差合	* 差し上げる	差当り	* 差入れ	* 差置く	差押	* 差押える	差出す	さしつかえ	差支える	* 差止める	* 差引	授かる	授ける	誘ふ	* 定かに	* 定まり	定まる	一・四	定めて
-----	-----	--------	------	------	-----	------	---------	-----	-------	-------	----	--------	-----	-------	------	--------	------	-----	-----	----	-------	-------	-----	-----	-----

国語運動
△本校
○内田

△下がるに参る
○下がる

△座ナリ二八
△座に二八参る

△先だつ二一

△先づける
△先づける

△下げる一九
△下げる

△差合ひ一七
△差合ひ

△差止一八
△差止

△差支七
△差支

△差出ず
△差出人

△差止置く
△差止

△差止置く
△差止

△差止置く
△差止

△差止置く
△差止

△差止置く
△差止

△差止置く
△差止

△差止置く
△差止

△差止置く
△差止

△差止置く
△差止

△差止置く
△差止

△差止置く
△差止

△差止置く
△差止

△差止置く
△差止

△差止置く
△差止

調査
◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

佐藤

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

中根

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

根

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

官報局

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

官報局

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

◎服会
部

[illegible]

[illegible]

[illegible]

見出し	スワウ ズミヤカ セバマル セバメル セイイ セメヨセル リウラエバズ ソクロウ ソコナウ ソコナレル ソチエル ソチタ ソナクル ソノ ソバダツ ソマル ソモリモ ソラス ソラシズル ソレシ ソイレラ ソウル タイラ
基準	住まう すみやかに すみやかに せばまる （田）狭まる せはめる （田）狭める 狭い そこなり （田）損害（う） 備える 備わる その 染まる そもそも そろす それぞれ 平ら
公文用語	住まう すみやかに （田）通やかに せばまる （田）狭まる せはめる （田）狭める 狭い ＊すみやかに ＊せはまる ＊せはめる ＊狭まる ＊狭める ＊そこなり ＊備える ＊備わる ＊その ＊染まる ＊そも／＼ ＊そろす ＊それ ＊それぞれ・ それぞれ それら それる 平らに
中等国語	住まう ＊すみやかに ＊せはまる ＊せはめる ＊狭まる ＊狭める ＊そこなり ＊備える ＊備わる ＊その ＊染まる ＊そも／＼ ＊そろす ＊それ ＊それぞれ・ それぞれ それら それる 平らに 添わる 平ら
案	連やかに三・三 狭まる 狭める 備へる 備はる 害損・賊（ふ） 梁まる （外）らす 外れる 平に

<p>国語運動 △本校 ○内田</p>	<p>△進に 元参三</p>	<p>△攻め寄せるて △候へば参マ △候はず参マ △候 四〇 損たう</p>	<p>△備へる 一九 △備る 一九 ○△備はる その (五ウ) △其の 一三</p>	<p>抑も △抑^三 三六</p>	<p>それ △其 二二 五備考</p>	<p>△卒な 二九</p>	<p>調査 ◎服会 部</p>	<p>住(梗)マフ ◎速ナリ ◎速かに</p>	<p>狭ム 狭ル ◎速かに</p>	<p>狭ム 狭ル</p>	<p>狭シ 攻メ寄ス 候ハバ 候ハズ 候 一除外二</p>	<p>損 損ハル 損ハズ 損ハズ 損 一除外二</p>	<p>損 損ハル 損ハズ 損ハズ 損 一除外二</p>	<p>備ル 備ル 備ル 備ル 備ル</p>	<p>其ノ 其ノ 其ノ 其ノ 其ノ</p>	<p>側ダツ 敬(仄・崎)ッ 染ル</p>	<p>抑、 抑、 抑、 抑、 抑、</p>	<p>其ノ 其ノ 其ノ 其ノ 其ノ</p>	<p>逆ラス 逆ス 其、 其、 其、</p>	<p>夫々 夫々 夫々 夫々 夫々</p>	<p>其等 其等 其等 其等 其等</p>	<p>添(副)ハル ◎平らに</p>	<p>△平らに 二九</p>	<p>佐 藤</p>	<p>速ヤカニ 速カニ</p>	<p>狭ム 狭ル</p>	<p>狭ム 狭ル</p>	<p>狭シ 攻メ寄ス 候ハバ 候ハズ 候 一除外二</p>	<p>損 損ハル 損ハズ 損ハズ 損 一除外二</p>	<p>備ル 備ル 備ル 備ル 備ル</p>	<p>其ノ 其ノ 其ノ 其ノ 其ノ</p>	<p>抑、 抑、 抑、 抑、 抑、</p>	<p>逆ラス 逆ス 其、 其、 其、</p>	<p>夫々 夫々 夫々 夫々 夫々</p>	<p>其等 其等 其等 其等 其等</p>	<p>添ハル ◎平らに</p>	<p>△平らに 二九</p>	<p>中 根</p>	<p>速ヤカニ 速カニ</p>	<p>狭ム 狭ル</p>	<p>狭ム 狭ル</p>	<p>狭シ 攻メ寄ス 候ハバ 候ハズ 候 一除外二</p>	<p>損 損ハル 損ハズ 損ハズ 損 一除外二</p>	<p>備ル 備ル 備ル 備ル 備ル</p>	<p>其ノ 其ノ 其ノ 其ノ 其ノ</p>	<p>抑、 抑、 抑、 抑、 抑、</p>	<p>逆ラス 逆ス 其、 其、 其、</p>	<p>夫々 夫々 夫々 夫々 夫々</p>	<p>其等 其等 其等 其等 其等</p>	<p>添ハル ◎平らに</p>	<p>△平らに 二九</p>	<p>官報局</p>	<p>速ヤカニ 速カニ</p>	<p>狭ム 狭ル</p>	<p>狭ム 狭ル</p>	<p>狭シ 攻メ寄ス 候ハバ 候ハズ 候 一除外二</p>	<p>損 損ハル 損ハズ 損ハズ 損 一除外二</p>	<p>備ル 備ル 備ル 備ル 備ル</p>	<p>其ノ 其ノ 其ノ 其ノ 其ノ</p>	<p>抑、 抑、 抑、 抑、 抑、</p>	<p>逆ラス 逆ス 其、 其、 其、</p>	<p>夫々 夫々 夫々 夫々 夫々</p>	<p>其等 其等 其等 其等 其等</p>	<p>添ハル ◎平らに</p>	<p>△平らに 二九</p>	<p>官報局</p>
-----------------------------	----------------	--	--	---------------------------------	-----------------------------	-------------------	-------------------------	---------------------------------	---------------------------	------------------	---	---	---	---------------------------------------	---------------------------------------	-------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	--	---------------------------------------	---------------------------------------	------------------------	--------------------	----------------	---------------------	------------------	------------------	---	---	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	--	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------	--------------------	----------------	---------------------	------------------	------------------	---	---	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	--	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------	--------------------	------------	---------------------	------------------	------------------	---	---	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	--	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------	--------------------	------------

[illegible]

見出し	タチガレ タチギエ タチドコロニ タチナラフ タチバナシ タチマナシ タチマナ タチモノ 建物 たとい タノシミ タノシム タノミ タノム タノモシイ タセノ タマル タワル タメル タヤス タヨリ タラス タムレ タムレル チカイ チガイ チカヨル チヂメ チヂム
基	たちまち たちまぢ 立ち場 立ち並ぶ 立ち消え 立ち枯れ 立ちどころに
準	奉る 建物 たとい 楽しむ 楽しむ 頼む 頼み たのもし
公文用語	奉る 建物 たとい 楽しむ 楽しむ 頼む 頼み たのもし
中等國語	奉る 建物 たとい 楽しむ 楽しむ 頼む 頼み たのもし
案	怒り 立場 建物 楽しむ 楽しむ 頼む 頼み たのもし

<p>国語運動 △不校○内田</p>	<p>△立枯れ 六</p>	<p>△立ち並ぶ一八</p>	<p>△立話 八</p>	<p>忽ち 三二一</p>	<p>△忽ち 三二一</p>	<p>たえ 五</p>	<p>△乗じき 六</p>	<p>△乗しみ 六</p>	<p>△乗しむ 一七六</p>	<p>△頼む 二七</p>	<p>△頼む 二七</p>	<p>△頼む 二七</p>	<p>△頼む 二七</p>	<p>△頼む 二七</p>	<p>△頼む 二七</p>	<p>△頼む 二七</p>	<p>△頼む 二七</p>
<p>調査 ◎服会部</p>	<p>◎立ち入る</p>	<p>◎立ちどころに</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>
<p>佐藤</p>	<p>◎立ち入る</p>	<p>◎立ちどころに</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>
<p>中根</p>	<p>◎立ち入る</p>	<p>◎立ちどころに</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>
<p>官報局</p>	<p>◎立ち入る</p>	<p>◎立ちどころに</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>	<p>◎立ち並ぶ一八</p>

次

見出し	<p>ツブツカ ツビビラカ ツヤム ツヤル (罰) ツミコミ ツミコム ツミタテ ツミタイル ツミタイル ツモリ ツモリ ツメル ツラナル ツラスク ツラネル ツリ (名) ツルス テアテ テアヒセ デイル デイル デイル テオチ テガカリ テズカラ テダ テダ テビキ デムカエ テラス トイ</p>	基	<p>つまむ * つまり 詰まる 積立 冷たい 積り・つもり 積る 連なる 貫く 連ねる つるす 手当 * 出入り * 出入口 手がかり 手伝い 手続 手びき 照らす</p>	公文用語	<p>つまびらかに つまびらかに つまびらかに 詰まる * 積み込む * 積み込む * 積み立て 積み立てる 冷たい * つもり 積もる 連なる 貫く 連ねる つり * つるす * 手当 * 手合わせ * 出入り * 出入口 * 手入れ * 手落ち * 手がかり * 手伝い * 手続 * 手続き * 手続き 照らす * 問</p>	中等国語	<p>詰まる 詰まる * つまり 詰まる * 積み込む * 積み込む * 積み立て 積み立てる 冷たい * つもり 積もる 連なる 貫く 連ねる つり * つるす * 手当 * 手合わせ * 出入り * 出入口 * 手入れ * 手落ち * 手がかり * 手伝い * 手続 * 手続き * 手続き 照らす * 問</p>	案	<p>詰まる 詰まる * つまり 詰まる * 積み込む * 積み込む * 積み立て 積み立てる 冷たい 二・三 連なる 貫く 連ねる つり * つるす * 手当 * 手合わせ * 出入り * 出入口 * 手入れ * 手落ち * 手がかり * 手伝い * 手続 * 手続き * 手続き 照らす * 問</p>
-----	---	---	---	------	--	------	---	---	---

国語運動
△本校動
○内田

誰かに
△詐カナリ二八

△語り 三

△積込 八

△冷たい 二五

△積り 二

△實ぬく 二

△釣 二

△手当 八

出入り 五備考

△手入れ 八

△手伝 八

△出迎 八
○△照らす
○△照らす

調査
◎服会
部

※具ニ
詐ナリ
詐(審)ニス
四

撮ム
摘ム
◎詐カナリ
◎詐かに
ニス

◎積み込む
◎積(ミ)立ッ
◎積リ
◎積ル
連ナル 一五・二

貫ク
串ク
連ス

釣ル
吊ス

◎手合せ
◎手合ハセ

◎出入(リ)
◎出入口

◎手落
◎手掛

◎手伝
◎手籠

◎出迎
◎照ス

佐藤

※具ニ
詐ナカニ
詐(摘)ム

撮ム
摘ム
◎詐カナリ

◎積込
◎積ミ込ム
◎積立
◎積ミ立ッ
◎積リ
◎積ル
連ル

貫ク
串ク
連ス

釣ル
吊(釣)ス

◎手合(？)
◎手合ハセ

◎出入
◎出入口

◎手落
◎手掛

◎手伝
◎手籠

◎出迎
◎照ス

中根

※具ニ
詐カニ
詐(摘)ム

撮ム
摘ム
◎詐カナリ

◎積込
◎積ミ込ム
◎積立
◎積ミ立ッ
◎積リ
◎積ル
連ナル

貫ケル
串ケル
連ス

釣リ
吊(釣)ス

◎手合ハセ
◎手合

◎出入
◎出入口

◎手落
◎手掛

◎手伝
◎手籠

◎出迎
◎照ス

官報局

※具ニ
詐ニ
詐(副)ニ
詐(副)ニ

撮ム
摘ム
◎詐ナリ

◎積込
◎積ミ込ム
◎積立
◎積ミ立ッ
◎積リ
◎積ル
連ル

貫ケル
串ケル
連ス

釣ス
吊(釣)ス

◎手合
◎手当

◎出入
◎出入口

◎手落
◎手掛

◎手伝
◎手籠

◎出迎
◎照ス

問

副

形二(三)

名二乙

國語通則
△木枝○内田

△問ひ含はせ
△問ひ含はせ
入参四

△遠ざかる二

△通

△届

○止まる

△止る
○止まる
△止める 一九

伴なふ
△伴なふ 二一表

△取扱
△取扱かう
△取扱ふ 一八四

調査
◎服会部

* 問合ハセ
◎ 問合せ

* 問合ハス

* 遠ザカル
* 通

* 融カス
* 閉ス

* 年寄
* 届

* 届ケ出ヅ
* 滞リ

* 止(留)ル

* 止ム

* 隣カス
* 飛バス

* 止(留)ル
* 止

* 伴ナフ

* 捕
* 捕ヲ

* 取扱所
* 取扱フ

* 取扱
* 取扱ム

佐藤

* 問合

* 問合ハス

* 遠ザカル
* 通

* 融カス
* 鎖ス

* 年寄
* 届

* 届ケ出ヅ
* 滞

* 止ル

* 隣カス
* 飛バス

* 止ル
* 止ム

* 伴ナフ

* 捕
* 捕ヲ

* 取扱所
* 取扱フ

* 取扱
* 取扱ム

中根

* 問合ハセ

* 問合ハス

* 遠ザカル
* 通

* 融カス
* 鎖ス

* 年寄リ
* 届ケ出ヅ

* 滞リ
* 滞ル

* 止ル

* 隣カス
* 飛バス

* 止ル
* 止ム

* 伴ナフ

* 捕
* 捕ヲ

* 取扱所
* 取扱フ

* 取扱
* 取扱ム

官報局

問合 名三五)

* 問合ハス

* 遠ザカル
* 通

* 融カス
* 鎖ス

* 年寄 名三(四)

* 届 名二(五)

* 届ケ出ヅ 名二(五)

* 滞 名二(五)

* 滞ル

* 止リテ 勅二(五)

* 止メテ 勅二(五)

* 隣ス
* 飛ス

* 止ム
* 伴ナフ
* 捕
* 捕ル
* 取扱 名三(五)
* 取扱フ
* 取扱所
* 取扱
* 取扱ム

見出し	トリクミ トリクム トリクシ トリクス トリクマリ トリシアル トリシラ トリツギ トリツグ トリハカライ トリハカラウ トリハライ トリハラウ トリヒキ ナイガシロ	ナオ ナガシダス ナカバ ナガメ ナガラク ナカシ ナカシ ナカシ ナカシ	情 なごやかに なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい	斜め 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休	斜め 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休	案
基準	トリクミ トリクム トリクシ トリクス トリクマリ トリシアル トリシラ トリツギ トリツグ トリハカライ トリハカラウ トリハライ トリハラウ トリヒキ ナイガシロ	ナオ ナガシダス ナカバ ナガメ ナガラク ナカシ ナカシ ナカシ ナカシ	情 なごやかに なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい	斜め 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休	斜め 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休	案
公文用語	トリクミ トリクム トリクシ トリクス トリクマリ トリシアル トリシラ トリツギ トリツグ トリハカライ トリハカラウ トリハライ トリハラウ トリヒキ ナイガシロ	ナオ ナガシダス ナカバ ナガメ ナガラク ナカシ ナカシ ナカシ ナカシ	情 なごやかに なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい	斜め 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休	斜め 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休	案
中等国語	トリクミ トリクム トリクシ トリクス トリクマリ トリシアル トリシラ トリツギ トリツグ トリハカライ トリハカラウ トリハライ トリハラウ トリヒキ ナイガシロ	ナオ ナガシダス ナカバ ナガメ ナガラク ナカシ ナカシ ナカシ ナカシ	情 なごやかに なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい なつかしい	斜め 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休	斜め 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休 夏休	案

国語運動
△本校動
○内田

△取消 七

○**取り締ま
る

△取次 七

△取計らひ参監

尚なお
(お)

半ば一・五備考
△半ば 一四
△眺め 二

△慨カハシ 画

楷け
△懐かしい 二四

△夏休 八

調査
◎服会
部

**取組
**取組ム
**取消ス
**取消
**取締ル

**取次
**取次グ
**取計ラヒ
◎取計ヒ
**取計ラフ

**取拵
**取拵フ
**取引
蔑ニス

◎蔑ロニス
◎猶ハ・尙
◎猶(候交)

流シ出ス 六

半ハス
◎眺め
永(長)ラク
**就中
**慨カハシ(ハシ) 二

**和ナリ
**情カシ
**懐カシ

**名ヅク
**夏休
何ゾ

佐藤

**取組
**取組ム
**取消ス
**取消
**取締ル

**取次
**取次グ
取計
**取計ラフ

**取拵
**取拵フ
**取引
蔑ニス

◎蔑ロニス
◎猶ハ・尙
◎猶(候交)

流シ出ス 六

半ハス
◎眺め
永(長)ラク
**就中
**慨カハシ(ハシ) 二

**和ナリ
**情カシ
**懐カシ

**名ヅク
**夏休
何ゾ

中根

**取組
**取組ム
**取消ス
**取消
**取締ル

**取次
**取次グ
**取計ラヒ
**取計ラフ

**取拵
**取拵フ
**取引
蔑ニス

◎蔑ロニス
◎猶ハ・尙
◎猶(候交)

流シ出ス 六

半ハス
◎眺め
永(長)ラク
**就中
**慨カハシ(ハシ) 二

**和ナリ
**情カシ
**懐カシ

**名ヅク
**夏休
何ゾ

形 副

形 副

形 副

官報局

**取組
**取組ム
**取消ス
**取消
**取締ル

**取次
**取次グ
**取計ラヒ
**取計ラフ

**取拵
**取拵フ
**取引
蔑ニス

◎蔑ロニス
◎猶ハ・尙
◎猶(候交)

流シ出ス 六

半ハス
◎眺め
永(長)ラク
**就中
**慨カハシ(ハシ) 二

**和ナリ
**情カシ
**懐カシ

**名ヅク
**夏休
何ゾ

形 副

形 副

形 副

見出し	<p>ナアグサイ ナアモノ ナヤモシイ ナヨセ ナラス(慣・均)</p> <p>ナラビニ ナラワシ ナリタヂ ナリタツ ナリエキ ナソゾ ニエカエル ニオイ ニオウス ニガイ ニガス ニギヤカ ニギウヤ ニクラシイ ニゴラス ニゴル ニヅクリ ニナウ ニワカニ</p> <p>ヌカワク ヌアガリ ヌアゲ 値上げ 値うち 願 願う 寝かす</p>
基準	<p>生臭い 慣らす 慣らす ならす ならびに ならわし なりたつ なりゆき におい 古い 逃がす 濁す 濁らし 濁る 荷造 になう (旧)荷う にわか にぬかず *ぬかずく 値上げ 願 願う</p>
公文用語	<p>悩ましい 悩ませ 慣らす (旧)慣し ならびに ならわし 成立ち 成り立ち 成行き す (旧)ならす・均 *なま臭い *悩ましい *悩ませ 慣らす 慣らす *なりびに *習わし *成り立ち *成り立ち *成り行き *におい 古い 逃がす *にきやかに *にきわり *憎らしい 濁る *にわか *ぬかずく *値上がり *値上げ *願 *願う 寝かす</p>
中等国語	<p>願 願ひ 願ふ</p> <p>額 額つ 額かに 額なふ・担ふ</p> <p>賑 賑ふ 賑やかに 賑やかに三・三</p> <p>迷 迷がす 迷やかに三・三</p> <p>習 習はし 並びに三・五 均す 均す 馴らす 馴らす</p> <p>成り立つ一・八</p>
案	

[illegible]

ネカガワシ
ネカガリ
ネサゲ
ネタマシイ
ネムイ
ネムク
ネムダ
ネムリ
ネンコロ
ノチ
ノツトル
ノドヤカニ
ノホス
ノホル
ノリオリ
ノリカエ
ノニコシ
ノニコス
ノリセ
ノハス
バカス
ハカドル
ハカライ
ハカヲ
バガム
ハサム
ハサル
ハザ
ハザリ

値下げ 眠い ねむけ 眠たい 後 のころ 上(登)る 乗換 乗越し 乗物 計らう 計ばかり 励ます 励む はやむ ばしまり

願わしき 値下り 値下げ
ねんごん (田) 懸念
めいとう (田) 興隆
乗降り
乗越し (田) 乗越
乗り越す
計し 計らう
励ます 励む
はげまふ 是む
恥 (田) 始り

願わしい
 ※値下げ
 ※値下がり
 眠い
 ※眠たい
 ※眠り
 ※念入り
 ※ねんごう
 後
 ※のことろ
 上ず
 上登る
 ※垂り降り
 化かす
 ※計らい
 ※ばかり
 励ます
 励む
 ※ほごむ
 恥
 ※始まり

願はしむ
如ましむ
眼け
惡に
則どる
※上ず
※上る
乗り降り
乗り越し
化かす
計らひ
計らふ
扱む
扱まる
始まり

<p>国語運動 △木枝動 ○内田</p>	<p>△願はしい二四 *値下がり *値下げ △眠 △念入 五備考 八二</p>	<p>△上ぼるニ参 △乗り降り 入、一〇 *後(む) *乗り物 *抄どる *計らう *励ます *扱まる △始り 二、九</p>	<p>調査 ◎服会 部</p>	<p>*願ハシ *値下リ *値下 妬マシ *眠シ *眠ケ *眠タシ *念入 *懸ナリ 後 則(送)トル</p>	<p>*上ス *上ル *乗リ ◎乗リ越ス *剗ガス *化カス *抄ドル ◎計ひ *励マス *扱ム *恥 始り</p>	<p>佐藤</p>	<p>*願ハシ *値下 *値下 妬マシ *眠シ *眠ケ *眠タシ *念入 *懸ニ 後 則ル 長閑ヤカニ 上セラレ 乗替 *乗越 *乗リ越ス *乗物 *乗越ス *剗ガス *化カス *抄ル *計ラフ *計バカリ *励マス *扱ム *恥 始り 一・二・イ</p>	<p>中根</p>	<p>*願ハシ *値下リ *値下 妬マシ *眠シ *眠ケ *眠タシ *念入リ *懸ニ 後 法トル *上ス *上ル *乗リ降リ *乗リ換へ *乗リ越シ *乗リ越ス *乗物 *剗ガス *化カス *抄ル *計ラヒ *計ラフ *励マス *扱ム *恥 始り</p>	<p>附 *名</p>	<p>官報局</p>	<p>*願ハシ *値下リ *値下 妬マシ *眠シ *眠ケ *眠タシ *念入 *懸ニ 後 則ル *上ス *上ル *乗降 *乗換 *乗越 *乗越ス *剗ス *剗名(三) *化カス *計ヒ *計ナ 幾計 *励ス *扱ム *恥 始り 名二乙 副四</p>	<p>動 *名</p>
------------------------------	---	---	-------------------------	---	--	-----------	--	-----------	---	-----------------	------------	---	-----------------

見出し	ハシマル ハシメテ ハシメル ハズカシイ ハタシテ ハタス ハタラカス ハタラク ハチ ハナシ ハナシガイ ハナハダ ハナハダシイ ハナハダシイ ハナヤカ ハライダシ ハライダス ハラス ハルカ ハレギ ハレヤカ ヒカエ	始まる 初め 初め はじめ 始める 聴ずかしい はたして 果して 果す 側かす 側く はて はなはだ はなはだし はなやかに 晴らす 晴 晴れ 晴れ ヒカエ	基	始まる 初め・はじめ (田)初(始)め	始まる 初め 初め はじめ 始める 聴かしい 果して 果して 果す 側かす 側く 話 はなはだ はなはだし はなやかに 拾出し 払い出す 晴らす はるかに 晴れやかに 冷える	公文用語	始まる 初(始)め 初め はじめ 始める 聴ずかしい 果して 果して 果す 側かす 側く 話 はなはだ はなはだし はなやかに 払い出す 晴らす はるかに 晴れやかに 冷える 冷える	中等国語	始まる 初(始)め 初め はじめ 始める 聴ずかしい 果して 果して 果す 側かす 側く 話 はなはだ はなはだし はなやかに 払い出す 晴らす はるかに 晴れやかに 冷える 冷える	案	始(初)まる一・四 初め 始め 三・五	始(初)める 聴つかしい 果して 果す 一・四 話 四・三 甚だしい二・六 甚だ 晴れやかに 冷える
-----	---	---	---	---------------------------	---	------	---	------	---	---	------------------------------	--

[illegible]

光
△光
三例外
二

△引合はせ七
△引受ける一八四
△引出
△引出す一八

○ * 潜まる
○ * 潜む
○ * 潜める

* 左り
* 目付け
△引越
△引越す 一八

國語運動
△本校 ○内田

調査部 ◎服會部
光 控臺
引揚 引上揚者 引上揚グ 引上グ 引合ハセ 引受 引受人 引受ク
引込線 引込ム 引下 グ 引出(シ)
引渡ス 引渡キ 引取ル 引分ク 引渡ス 密ナリ
潜メル 潜ム ◎密やかに 左日附 引越ス 引越ス
引込思案

藤
依
光一・二・イ
※ 引揚
※ 引止
※ 引揚者
※ 引止ダ
※ 引合三・四・二
※ 引受
※ 引受人
※ 引受ダ
※ 引込
※ 引込線
※ 引下
※ 引下ダ
※ 引出
※ 引出
※ 引繰キ
※ 引取人
※ 引取ル
※ 引分
※ 引分ク
※ 引渡
※ 密カニ
五・一・イ
潜ル
潜ム
潜ム
※ 智ヤカニ
左
※ 目附
※ 引越ス
※ 引越
※ 引越ス
※ 引込
※ 引込(?)
※ 引込
※ 引込(?)

中 根
※ 控 案 光リ
※ 引 揚 ガ
※ 引 上 ガ
※ 引 揚 ガ 者
※ 引 上 ガ 者
※ 引 キ 合 七
※ 引 キ 受 ケ 人
※ 引 キ 受 ケ
※ 引 キ 込 ム
※ 引 キ 下 ガ
※ 引 キ 出 シ
※ 引 キ 出 ス
※ 引 キ 藏 キ
※ 引 キ 取 ル 人
※ 引 キ 効 ケ
※ 引 キ 効 ケ
※ 引 キ 渡 シ
※ 引 キ 渡 ス
※ 効 カ ニ
※ 潜 ム
※ 潜 ム
※ 潜 ム
※ 潜 ム
※ 引 キ 越 シ
※ 引 キ 越 ス
※ 引 シ 込 ミ
※ 引 シ 込 ミ 思 案

官報局
光控案
引上揚
引上揚者
引上ダ
引合(七)
引受名三(五)
引受人
引受ダ
引込線
引下云
引下ダ
引出ス
引出キ
引取人ル
引分夕
引渡ス
審二 副二(一)
潜ル
潜ム
潜ム
左ニ 副二(一)
日附
引越ス
引越云
引込
引込思案

見出し	<p>ヒツコム ヒトキレ ヒトシイ ヒトシク ヒトタビ ヒトツ ヒトリ ヒビカス ヒビキ ヒビク ヒカス ヒヤス ヒヤカ ヒタダイ ヒラニ ヒルガエス ヒルガエル ヒロガル ヒロマル ヒロメル ヒロヤカ ヲエル フタタビ(副) フバライ フミキリ フミキル フミダイ フヤス フラス フリタイ</p>	基
準	<p>ひとしく ひとたび 一つ ひとり 響き 響く 冷やす 冷やかに 平たい ひらに ひかる 広める 広まる 広げる ふえる ふたたび 不払 踏切 踏合 降らす 振合</p>	公文用語
中等国語	<p>ひこむ 等しい 等しく (田)ひとしく ひとたび 一つ ひとり 響かす 響く *ひやかす 冷やす 冷やかに 平たい ひらに *ひかる *広める *広まる *広げる *ふやかだ *ふえる 再び *不払い *踏切 *踏み切る *ふやす 降らす</p>	中等国語
案	<p>一 四・五 冷かす 冷やす 冷やかに 平たい二・七・イ *平に 広がる 広まる 広める 殖える 再び 踏切 殖やす</p>	案

国語運動 △不校○内田	△一切れ 一〇	△一ツ 一四	△響 二	○冷やかす	○冷やす	△平たし 二七	ひらに 五備考 △平に	△広がる 一九	△広げる 一九	△広まる 二二	再び 三一	△踏切 八	○殖やす	調査部 ◎服会	△引込ム	△一切レ	△等(均)シク	◎一度び	△一ツ	△狼リ	△響カス	△響ク	△冷カス	△冷ス	△平タシ	△平に	△翻ル	△(弘)ガル	△(弘)ナル	△踏切	△踏合	△降ス
藤佐藤	△引込ム	△一切	△等シク	一タビ五・一・イ	△一(?)	△響カス	△響ク	△冷ヤカス	△冷ヤス	△平タシ	△平ニ	△翻ル	△(弘)ガル	△(弘)ナル	△広ヤカニ	△三・一	再、五・一・イ	△不抜	△踏切	△踏合	△降ス											
中根	△引込ム	△一切レ	△等シク	△一ツ	△響カス	△響キ	△冷カス	△冷ス	△平タシ	△平ニ	△翻ル	△(弘)ガル	△(弘)ナル	△広ヤカニ	△不抜	△踏切	△踏合	△降ス	△不抜	△踏切	△踏合	△降ス										
官報局	△引込ム	△一切(一)	△等シク	一タビ	△一ツ	△響カス	△響ク	△冷カス	△冷ス	△平タシ	△平ニ	△翻ル	△(弘)ナル	△(弘)ナル	△殖ユ	△不抜	△踏切	△踏合	△降ス	△不抜	△踏切	△踏合	△降ス									

濁音字 副四

副一

副四

見出し	準	公文用語	中等国語	案
<p>フリカエ フリカエル フリムク フル フリ フルエル フルス フルル フルダリ フルダ フルダス フル ホガラカ ホガラ ホガラシイ ホコラシイ ホコリ ホコル ホシイマニ ホシイマニス ホソ ホソル ホソヤカ ホソンド ホネオリ ホボ ホム ホムレ</p>	<p>振替 ふり返る ふり向く 振る ふるう ふるう(マ、) ふるえる ふるわす 減れる フルダリ フルダ フルダス フル ホガラ ホガラシイ ホコラシイ ホコリ ホコル ホシイマニ ホシイマニス ホソ ホソル ホソヤカ ホソンド ホネオリ ホボ ホム ホムレ</p>	<p>振替 振る 振る 振う 壁(マ、) 壁える 不渡り 不渡形 隔たる 隔て 隔てる 減らす 減る 隔らかに 隔らしい 諮る 細い 細まる 細やか ほとんど ほとんど ほねおり ほ</p>	<p>*振替 *ふり返る *ふり向く 振る 振るう 壁える 壁わす 壁れる *隔たり *隔たる 隔て 隔てる 減らす 減る 隔らかに 隔らしい 諮る 細い 細まる 細やか *ほとんど *ほとんど *ほねおり *ほ</p>	<p>振る 振(震)ふ 隔たる *隔て 隔てる 減らす 減る 隔らかに三・三 諮る 細い 細まる 細やか 殆ど 略と</p>

[illegible]

見出し	ホリダシモノ ホリダス ホロビル ホロブ ホロホス アイ	舞上がる 負かす 任せる ガル ガリ ガリカド ガバコ グラス グライシイ	ギレ ケル ゲル コトニ サニ ザリモノ ザエル ジエル ジル ジワリ ズ マス タ アチイ	ホリダシモノ ホリダス ホロビル ホロブ ホロホス アイ
基準	減びる 減ぼす	舞上がる 負かす 任せる 曲る 紛らす 紛らわしい	ギレ ケル ゲル コトニ サニ ザリモノ ザエル ジエル ジル ジワリ ズ マス タ アチイ	減びる 減ぼす
公文用語	掘り出す 減びる 減ぶ 減ぼす 舞	舞上がる 負かす 任せる 曲る 紛らす 紛らわしい	ギレ ケル ゲル コトニ サニ ザリモノ ザエル ジエル ジル ジワリ ズ マス タ アチイ	掘り出す 減びる 減ぶ 減ぼす 舞
中等国語	掘り出し物 亡(滅)びる 亡(滅)ぼす 舞	舞上がる 負かす 任せる 曲る 紛らす 紛らわしい	ギレ ケル ゲル コトニ サニ ザリモノ ザエル ジエル ジル ジワリ ズ マス タ アチイ	掘り出し物 亡(滅)びる 亡(滅)ぼす 舞
案	掘り出し物 亡(滅)びる 亡(滅)ぼす 舞	舞上がる 負かす 任せる 曲る 紛らす 紛らわしい	ギレ ケル ゲル コトニ サニ ザリモノ ザエル ジエル ジル ジワリ ズ マス タ アチイ	掘り出し物 亡(滅)びる 亡(滅)ぼす 舞

国語運動
△本校
○内田

舞い
○亡ぼす
○亡ぼす
△舞ひ上る一八二
○負かす

△曲り

※ 紛らす
※ 紛わしい
○ 紛らす
◎ 紛らハシ

調
◎衣会
部

※ 掘出物
◎ 掘り出す
※ 減ヲ
※ 減ス
※ 舞

※ 任ス
※ 曲リ
※ 曲リ角
※ 曲ル
※ 卷煙草

※ 紛ル
※ 負ク
※ 曲グ
※ 誠ニ

※ 正ニ

※ 雜リ物
※ 交ヲ
※ 混ル

※ 交
※ 交ル
※ 先ヅ
※ 施・施ス

※ 混ス
※ 又
※ 待合

作
藤

※ 掘出物
※ 掘り出ダス
※ 減ヲ
※ 減ス
※ 舞

※ 任ス
※ 曲
※ 曲リ角
※ 曲ル
※ 卷煙草

※ 紛ハシ
※ 紛ラハシ
※ 紛ル
※ 負ク
※ 曲グ
※ 誠ニ

※ 正ニ

※ 雜(混)ル
※ 交ヲ
※ 混ル

※ 交
※ 交ル
※ 先ヅ
※ 施・施ス

※ 混ス
※ 又
※ 待合

中
根

※ 掘り出シ物
※ 掘り出ス
※ 減ヲ
※ 減ス
※ 舞

※ 任ス
※ 曲リ角
※ 曲ル
※ 卷煙草

※ 紛ハシ
※ 紛ラハシ
※ 紛ル
※ 負ク
※ 曲グ
※ 誠ニ

※ 正ニ

※ 雜(混)ル
※ 交ヲ
※ 混ル

※ 交
※ 交ル
※ 先ヅ
※ 施・施ス

※ 混ス
※ 又
※ 待合

官報局

※ 掘出物
※ 掘り出ス
※ 減ヲ
※ 減ス
※ 舞

※ 任ス
※ 曲
※ 曲リ角
※ 曲ル
※ 卷煙草

※ 紛ハシ
※ 紛ラハシ
※ 紛ル
※ 負ク
※ 曲グ
※ 誠ニ

※ 正ニ

※ 雜(混)ル
※ 交ヲ
※ 混ル

※ 交
※ 交ル
※ 先ヅ
※ 施・施ス

※ 混ス
※ 又
※ 待合

見出し	チアワセ チアワセル アタタク アトワスル アツリ アドイ アドヤ アカレル アラ	アレ ミタイ ミヤウ ミヤセ ミヤワセル ミイダス ミオタリニ ミオタル ミカエリ ミガエリ ミガワリ ニコミ ニコム ミカイ	ミシカスギル ミエカラ ミス ミセサキワダシ ミソジ ミダシ ミダス ミダリニ	見出し
基準	待合せ まったく 全うする	祭 恐う 免れる まれに	見返り 見込 短い みずから	見出し 見出し 見出し みだりに
公文用語	待合せ 待ち合わせる 全く 全うする (田)全うする 恐う 免かれる まれに	見合 見合う 見合せ 見合わせる 見いだす 見送り 見送る 見返り 見込 見込む 短い 自ら (田)みずから	店売り 店先渡し 見出し みだりに	見出し 見出し 見出し みだりに
中等国語	待合せ 待ち合わせる 全く 全うする 祭 恐う 免れる まれに	見合 見あう 見合せ 見合わせる 見いだす 見送り 見送る 見返り 見込 見込む 短い 自ら	見出し 見出し 見出し みだりに	見出し 見出し 見出し みだりに
楽	待合せ 全く 全(完)うする	見合 見合せ 四・三	見出し 見出し 見出し みだりに	見出し 見出し 見出し みだりに

△淫りに三四
△店番 八
△唐から 二三
△身代り 八
△見参人 八
△見合はせ 八
△参 二
△恋ひ 二
△第(ふ)すま 二
△見参 二
△見合はせ 八
△参 二
△恋ひ 二
△第(ふ)すま 二
△見参人 八
△身代り 八
△唐から 二三
△店番 八
△淫りに三四

調 養 會 服 部
 ※ 待 合 ハセ
 ※ 待 合 ハス
 ※ 全 ク
 全 ヲ ス 二 三 二
 ※ 祭
 ※ 惑
 ※ 惑
 ※ 惑
 ※ 禪
 ※ 禪 ナリ
 ◎ 禪 に
 ※ 禪
 ※ 禪
 ※ 見 合
 ※ 見 合
 ※ 見 合
 ◎ 見 合 セ
 ※ 見 合 ハス
 ※ 見 出 ス
 ※ 見 送
 ※ 見 送 人
 ※ 見 送 ル
 見 送 (リ)
 ※ 見 送 物 資
 ※ 考 代
 ※ 見 込 ム
 ※ 短 シ
 ◎ 短 カ イ
 ◎ 短 カ 過 ぎ
 ※ 目 ラ
 ※ 店 売
 ※ 店 売 (シ)
 ※ 見 出 シ
 満 (卷) タス
 ※ 安 (瀧) リニ

佐 藤
 ※待合
 ※待ち合ハス
 ※全ク
 ※全クハス
 祭 一・二・イ
 ※謔
 ※謔フ
 ※免ル
 ※諫ラニ
 稀ニ 五・一・イ
 ※見合
 ※見合フ
 ※見合ハス
 ※見出ス
 ※兄送
 ※兄送人
 ※兄送ル
 ※兄返
 ※兄返物寶
 ※年代
 ※兄込込
 ※短カシ (フ)
 自、五・一・イ
 ※兄スノ
 ※唐娼
 ※唐先渡
 ※兄出
 ※漏タス
 濫ニ 五・一・イ

中
根

待チ合ハセ
待チ合ハス
全ク
全クス
祭リ
惑ヒ
惑フ
私ル
疎ラニ
稀ニ
見合ヒ
見合フ
見合ハセ
見合ハス
見出ス
見送リ
見送り人
見送ル
見送リ
見返リ物資
身代リ
見込ミ
見込ム
短カシ(？)

形
副

見ス々々
店売リ
三店先渡シ
三十チ
見出し
満タス

安ニ

官報局

※待合セ
※待合ス
※益ク
※益シス
祭
名ニ乙
名ニ乙
※惑フ
※惑ル
※預ル
疎ニ
副ニ
※見合
※見合フ
見合 名ニ(五)
※見合ス
※見合ハ
※見出ス
※見送
※見送人
※見送ル
※見返
※見返物
※時代(リ)
見込 名ニ(三)
短キ 形ニ(一)
自ラ
副ニ
※店荒
※店荒
※店先渡
※見出
充セリ
動ニ(五)
安穩ニ副ニ(一)

見出し	ミチビク	ミツ	ミツ	ミツモリ	ミツモリ	ミツモリ	ミツモリ	ミツモリ	ミツモリ	ミツモリ	ミツモリ	ミツモリ	ミツモリ	ミツモリ	ミツモリ	ミツモリ	ミツモリ	ミツモリ	ミツモリ
準	導く	三つ	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り
公文用語	導く	三つ	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り
中等国語	導く	三つ	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り
案	導く	三つ	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り	見積り

[illegible]

[illegible]

国語運動 △本校○内田	△召使 珍らし(い)々、表	△中込	○燃える ○燃ユ もし、若し △若し △若しくは三五	△持ち運ぶ一八 △以て 最も 尤も 専ら	三二 三一 三八
----------------	------------------	-----	--	----------------------------------	----------------

調査 ◎在会 服部	◎群ガル ◎群れ ◎群ル ◎召使 ◎珍シ ◎目盛 ◎申合(ハセ)	◎申合ハス ◎申入ル ◎申込 ◎申込書 ◎申込ム ◎申立 ◎申立ッ 燃ユ	若シ 若シハ 若クハ 若ハ 六・一	◎持合ハセ ◎持合ハス ◎持越 ◎持場 ◎持(チ)運フ ◎以テ ◎最セ ◎専ラ ◎専	八 八 八 八 八
-----------------	--	---	-------------------------------	--	-----------------------

佐藤	◎群ル ◎群ル ◎群ル ◎召使 ◎珍シ ◎目盛 ◎申合 ◎申合事項	◎申合ハス ◎申入ル ◎申込 ◎申込書 ◎申込ム ◎申立 ◎申立ッ 燃ユ 三・一	若シ 若クハ 若ハ 六・一	◎持合ハス ◎持越 ◎持場 ◎持手運フ ◎以テ ◎最、五・一・一・一 尤、五・一・一・一	八 八 八 八 八
----	--	--	------------------------	--	-----------------------

中根	◎群ル ◎群ル ◎群ル ◎召使 ◎珍シ ◎目盛 ◎申合ハセ ◎申合事項	◎申合ハス ◎申入ル ◎申込ミ ◎申込書 ◎申込ム ◎申立 ◎申立ッ 燃ユ	若シ 若クハ 若ハ 六・一	◎持合ハス ◎持越シ ◎持場 ◎持手運フ ◎以テ ◎最モ 接・副	八 八 八 八 八
----	--	--	------------------------	--	-----------------------

官報局	◎群ル ◎群ル ◎群ル ◎召使 ◎珍シ ◎目盛 ◎申合 ◎申合事項	◎申合ハス ◎申入ル ◎申込 ◎申込書 ◎申込ム ◎申立 ◎申立ッ 燃ユ	若シ 若クハ 若ハ 六・一	◎持合ス ◎持越 ◎持場 ◎持運フ ◎以テ ◎最モ 副二(三)	八 八 八 八 八
-----	--	---	------------------------	---	-----------------------

<p>國語運動 △本校 ○内田</p>	<p>△元 三〇</p>	<p>△物置 八 △物思 八 △物知り 八 ○燃やす</p>	<p>優男 玉備考 △優シケレニ二 △養 二 休マール</p>	<p>△止ム △止める 一九 ※吝かに △宿リ 二 △雇主 八 二入參二 △安らかな 二九 二</p>	<p>調 査 會 部 ◎服會部</p>	<p>※基 基 △(本)ツク 固ヨリ ※物置 ※物思 物思ハシゲ 一 物思ハシゲ 一</p>	<p>※物指 ※物知 ◎物好 ※紅葉 燃ス 漏ス ル</p>	<p>※病病 ※吝カニ 宿リ 一〇六 ※雇主 安カラニ 一五 一五 休マツ 息マツ 休ム ※休ム ◎養ひ ※養シ 優シ 養 休ム 休ム 安カラニ 一五 五・一・ハ</p>	<p>佐 藤</p>	<p>元(桑) 五・一・イ ※基 固ヨリ 五・三・ハ ※物置 ※物思 物思ハシゲ 一 物語 一・二・イ ※物指 ※物知 ※物好 ※紅葉 燃ヤス 漏ラス ※漏ル 頓テ 一・一・イ</p>	<p>※養 優シ 養 休ム 休ム 安カラニ 一五 五・一・ハ</p>	<p>※病病 ※吝カニ 宿リ 一・二・イ ※雇主 安カラニ 一五 五・一・ハ</p>	<p>中 根</p>	<p>元 五・一・イ ※基 固ヨリ 五・三・ハ ※物置 ※物思 物思ハシゲ 一 物語 一・二・イ ※物指 ※物知 ※物好 ※紅葉 燃ス 漏ラス ル</p>	<p>※養 優シ 養 休ム 休ム 安カラニ 一五 五・一・ハ</p>	<p>※病病 ※吝カニ 宿リ 一・二・イ ※雇主 安カラニ 一五 五・一・ハ</p>	<p>官 報 局</p>	<p>元(素)ト 二(五) ※基 基ク 固ヨリ 二(五) ※物置 ※物思 物思ハシゲ 一 物語 一・二・イ ※物指 ※物知 ※物好 ※紅葉 燃ス 漏ス ル</p>	<p>※養 優シ 養 休ム 休ム 安カラニ 一五 五・一・ハ</p>	<p>※病病 ※吝カニ 宿リ 一・二・イ ※雇主 安カラニ 一五 五・一・ハ</p>
-----------------------------	--------------	--	---	---	-------------------------	--	--	---	------------	--	--	--	------------	---	--	--	--------------	---	--	--

形

副

名

副

[illegible]

<p>同語連動 △本校 ○内田</p>	<p>△稍 三〇 △稍 かい 川五</p>	<p>△夕暮 八</p>	<p>△行 二</p>	<p>△行語まり 八参四</p>	<p>△行先 八</p>	<p>ゆする △豊かに三参三 五</p>	<p>△許 忽セニ △緩ヤカナリ 二</p>	<p>調 査 服 部</p>	<p>△稍 柔シ 柔カ ◎柔 にか</p>	<p>◎和ラ 夕暮 ◎柔 にか</p>	<p>△行 行過 行語リ</p>	<p>◎柔 柔シ 柔カ ◎柔 にか</p>	<p>◎和ラ 夕暮 ◎柔 にか</p>	<p>△行 行過 行語リ</p>	<p>◎和ラ 夕暮 ◎柔 にか</p>	<p>△指サス 指サス一五(イ)</p>	<p>◎豊かに 指サス一五(イ) ◎許 忽セニ ◎緩ヤかに</p>	<p>緩 (寛)ニス 挿ル</p>	<p>佐 藤</p>	<p>△稍 柔、五・一・イ 柔シ 柔カ</p>	<p>◎和ラ 夕暮 ◎柔 にか</p>	<p>△行 行過 行語リ</p>	<p>◎柔 柔シ 柔カ ◎柔 にか</p>	<p>◎和ラ 夕暮 ◎柔 にか</p>	<p>△行 行過 行語リ</p>	<p>◎和ラ 夕暮 ◎柔 にか</p>	<p>△指サス 指サス一五(イ)</p>	<p>◎豊かに 指サス一五(イ) ◎許 忽セニ ◎緩ヤかに</p>	<p>緩 ヤカニス 挿ル</p>	<p>中 根</p>	<p>△稍 柔シ 柔カ ◎柔 にか</p>	<p>◎和ラ 夕暮 ◎柔 にか</p>	<p>△行 行過 行語リ</p>	<p>◎柔 柔シ 柔カ ◎柔 にか</p>	<p>◎和ラ 夕暮 ◎柔 にか</p>	<p>△行 行過 行語リ</p>	<p>◎和ラ 夕暮 ◎柔 にか</p>	<p>△指サス 指サス一五(イ)</p>	<p>◎豊かに 指サス一五(イ) ◎許 忽セニ ◎緩ヤかに</p>	<p>緩 ヤカニス 挿ル</p>	<p>官 報 局</p>	<p>△稍 柔シ 柔カ ◎柔 にか</p>	<p>◎和ラ 夕暮 ◎柔 にか</p>	<p>△行 行過 行語リ</p>	<p>◎柔 柔シ 柔カ ◎柔 にか</p>	<p>◎和ラ 夕暮 ◎柔 にか</p>	<p>△行 行過 行語リ</p>	<p>◎和ラ 夕暮 ◎柔 にか</p>	<p>△指サス 指サス一五(イ)</p>	<p>◎豊かに 指サス一五(イ) ◎許 忽セニ ◎緩ヤかに</p>	<p>緩 ヤカニス 挿ル</p>
-----------------------------	---------------------------------------	------------------	-----------------	----------------------	------------------	------------------------------	------------------------------------	----------------------------	---------------------------------------	---------------------------------	--------------------------	---------------------------------------	---------------------------------	--------------------------	---------------------------------	--------------------------	---	---------------------------	----------------	-------------------------------------	---------------------------------	--------------------------	---------------------------------------	---------------------------------	--------------------------	---------------------------------	--------------------------	---	--------------------------	----------------	---------------------------------------	---------------------------------	--------------------------	---------------------------------------	---------------------------------	--------------------------	---------------------------------	--------------------------	---	--------------------------	----------------------	---------------------------------------	---------------------------------	--------------------------	---------------------------------------	---------------------------------	--------------------------	---------------------------------	--------------------------	---	--------------------------

見出し	エ ワ ル	ヨ ア ケ	ヨ イ	ヨ ウ ヤ ク	ヨ ウ ヨ サ キ	ヨ ユ ギ ル	ヨ タ エ ル	ヨ タ ワ ル	ヨ ナ ガ シ	ヨ ナ ガ レ	シ ジ	シ ン バ	シ セ ガ キ	セ テ	ソ ノ オ サ	ヲ テ	ヨ バ ル	ヨ ビ タ シ ル	ヨ ビ タ デ ジ ン ソ ウ	ヨ ビ タ ス	ミ カ キ	ヨ ミ ス ル	ヨ リ ア イ	ヨ ロ コ バ シ キ	ヨ ロ コ バ ス	ヨ ロ コ ビ	ヨ ロ コ ア フ	ヨ ロ シ ク	ヨ ロ シ ク	ヨ ロ ス	ヨ ウ マ ル	ヨ ウ マ ル	ウ ガ
基	ゆわえる	*夜明け	良い	ようやく *よい・良い	*横書き	*横切る	*横たえる	*横たわる	*横流し	*横流れ	*よし	*よしんば	寄せ書き	装う	よって	呼出し	呼はわる	呼び出し	呼び出す	読み書き	寄合	(目)よみする	喜ぶ	喜ばす	喜ぶ	喜ぶ	喜ぶ	よるしく	よるず	弱まる	弱める	*わが	
準	結わえる	(目)ゆわえる	*よい・良い	ようやく *よい・良い	*横書き	*横切る	*横たえる	*横たわる	*横流し	*横流れ	*よし	*よしんば	寄書	寄手	装う	呼出し	呼はわる	呼び出し	呼び出す	読み書き	寄合	(目)よみする	喜ぶ	喜ばす	喜ぶ	喜ぶ	喜ぶ	よるしく	よるず	弱まる	弱める	*わが	
公文用語	結わえる	(目)ゆわえる	*よい・良い	ようやく *よい・良い	*横書き	*横切る	*横たえる	*横たわる	*横流し	*横流れ	*よし	*よしんば	寄せ書き	寄せ手	装う	呼出し	呼はわる	呼び出し	呼び出す	読み書き	寄合	(目)よみする	喜ぶ	喜ばす	喜ぶ	喜ぶ	喜ぶ	よるしく	よるず	弱まる	弱める	*わが	
中等国語	結わえる	*夜明け	*よい・良い	*ようやく	*横書き	*横切る	*横たえる	*横たわる	*横流し	*横流れ	*よし	*よしんば	寄せ書き	寄せ手	装ふ	呼出し	呼はわる	呼び出し	呼び出す	読み書き	寄り合ひ	喜ばしい	喜ばす	喜ぶ	喜ぶ	喜ぶ	よるしく	よるず	弱まる	弱める			
案		*夜明け		*ようやく			横たへる	横たはる	*横流し	*横流れ			寄せ書	寄せ手	装ふ	呼出し	呼はわる	呼び出す	読み書き	嘉する	喜ばしい	喜ばす	喜ぶ	喜ぶ	喜ぶ	よるしく	よるず	弱まる	弱める				

中
根

我ガ	代
**弱ム	
**弱マ	
**万ッ	
**宜シク	
**喜マ	
**喜ビ	
**喜ハス	
**喜バシ	
**寄り合ヒ	
**癒ス	
**詠ミ書キ	
**呼ビ出ス	
**呼ビ出シ電話	
**呼ビ出シ	
因ツテ接・副	
**寄セ手	
**寄セ書キ	
**離シハ	
**離シ	
**横流シ	
**横流シ	
**横タラハル	
**横タラフ	
**横書き	
漸ク	動
**晝シ	附副
**夜明ケ	

[illegible]

調 査 部	藤	中	根	官 報 局
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ 一六	△分かる 一六	○分かる 一九	△分ける 一九	僅か 一
△分かつ				

送り仮名法文献集

凡 例

一 送り仮名対照表に用いられた文獻の内容を明らかにするため、全文を翻刻して掲げることにした。(ただし次の文獻は省略した。すなわち、服部のもの、木枝のもの、「中等国語」の規準、「公文用語の手びき」「表記の基準」。)なお、対照表には用いなかったが、大阪毎日新聞社「スタイル・ブック」のうちの「送りがな」の項と、日本速記協会「会議録用字の手引き」のうちの「送りがなのつけ方」の項を収めた。この二つは、実務家の間に使われる送り仮名法として代表的なものと認められるからである。

二 ここに翻刻した文獻については、この資料集の解説の三を参照されたい。

三 翻刻にあたっては、文章・文字使い・句読法はすべて原文のままとした。ただし、次の点に限って改めた。

(1) 漢字の字体については、印刷の都合上、必ずしも原本の通りではない。また、横括弧は、縦括弧に改めた。

(2) 「新撰送仮字法」および大阪毎日新聞「スタイル・ブック」における₂は、特にア行のエと區別してヤ行のエに用いているのでそのまま残したが、それ以外の変体がなは、すべて現行の字体に改めた。

(3) 行数・字詰は、原文と一致しない。

(4) 官報局編纂「送仮名法」には、尾題のあとに「送仮名法ノ應用」十九ページがあるが省略した。

(5) 中根淑「送仮名大概」の附録のうち、「ウ」「ン」「ツ」三音の辨は、送り仮名に関係がないので省略した。

(6) 「新撰送仮字法」には、国文に應用した例が毎条あるが、ページ数が多くなるので、特に送仮名法上重要と思われるものを除いて、省略した。省略した部分については、「」に入れて、一々その旨を注記した。

(7) 国語調査会「送仮名法」の巻末附録の用例集は省略した。

(8) 平井盛男「送り仮名法(案)を読む」の「小学校読本の送り仮名」の項は省略した。

(9) 文部省「送りがなのつけ方(案)」の用例の部は省略した。

(10) 原本において明らかに誤植と認められるものは、訂正した。

内閣官報局編纂 送假名法 全

(明治二十七年五月)

版發售セシム敢テ學海ノ指針ヲ以テ擬スルニアラス聊カ興文
輔道ノ一端ニ供スト云爾

明治二十七年四月 官報局長 奥田義人

本邦純粹和漢文ハ今ヤ官民ノ實用ニ適セス而シテ眞假兩字ノ
混淆錯綜セルモノヲ以テ上下普通ノ文章ト爲ス所謂假名交リ
文是ナリ乃チ其眞字ハ衆語ノ首本ヲ寫シテ主形ヲ爲シ假字ハ
衆語ノ末尾ヲ寫シテ客勢ヲ爲ス主ハ定靜シテ移ラス客ハ往來
シテ變ス故ニ其經用ニ及ヒテハ定靜ナルモノハ惑フコト少ク
往來スルモノハ誤リ易シ蓋シ自然ノ理ナリ彼麗文ノ心裁ヲ亂
シ至理ノ感動ヲ殺クト否トハ實ニ此假字ノ用法如何ニ存スル
ナキヲ知ランヤ抑々今體文ニ於ケル假字ノ用ハ手足ノ人體ニ
於ケルカ如キカ身體ノ動作ハ手足ニ依リ文意ノ變化ハ假字ニ
依ル是ヲ以テ假字ノ用法整ハサランカ寔ニ人體ニ於テ手足ノ
疾アルニ異ナラス人ニハ之ヲ不具ト云フ故ニ文ニハ之ヲ不文
ト謂フヲ得ヘキナリ然ルニ世人多ク假字ヲ度外ニ措キ握管ノ
際取捨斷續一ニ其意ニ任セ放誕支離ノ文字ヲ臚列シテ愧ル所
ヲ知ラス偶々假字ノ用法ヲ説ク者アレハ頗ル迂拘ノ論ト爲ス
察セサルノ甚シキナリ

本邦現用ノ文章ハ眞假兩字ノ混交體ニシテ眞字ハ總テ衆語ノ
首本ヲ寫シ假字ハ總テ衆語ノ末尾ヲ寫シ衆語ノ末尾ヲ寫ス所
ノ假字ヲ送假名ト稱ス送假名ノ用ハ言語ノ意義ヲ析ケ語句ノ
接續ヲ明ニシ以テ通讀ニ便ニスルニ過キス然レトモ古來其用
法一定セス甚シキハ一編ノ文章中同一ノ言語ニシテ其送假名
ヲ二三ニシ讀者ヲシテ更ニ滴從スル所ヲ知ル能ハサラシムル
モノアリ是レ尙ホ可ナリ其言語ノ意義、語句ノ接續區々ニ涉
リ爲ニ語勢滯滯シテ通讀ニ便ナラサルニ至リテハ其弊ナシト
セス是レ蓋シ送假名ニハ自ラ一定ニシテ且ツ普通ナルヘキ原
則ノ在ルモノ之ヲ講究セスシテ徒ラニ箇々ノ言語々句ニ就キ隨
時任意ノ送假名ヲ附スルノ姑息ニ坐スルノミ之ニ反シテ一定
ノ原則ヲ講究シ送假名法ヲ定ムルトキハ獨リ其區々ノ煩ヲ避
クルノミナラス素ト其標準ヲ原則ニ取リテ箇々ノ言語々句ニ
取ラサルカ故ニ博ク送假名ヲ譜記スルノ勞ヲ去ルコト亦寡シ
ト爲サ、ルナリ

本書ハ主トシテ右ニ掲クル所ノ旨趣ヲ體シ又本局官報編輯ノ
經驗ニ徴シテ間々實際ノ便宜ヲ稽考シ以テ總則四條及各則二
十三條ヲ定メ且ツ各則ニ釋例ヲ附シテ其應用ヲ明ニセリ蓋シ
送假名法ハ此二十七則ニ於テ之ヲ悉セリ是故ニ僅ニ此二十七

明治二十五年六月

黒川眞頼

則テ語シ其應用ヲ愼ルナケレハ送假名ノ一定ヲ得ルコト果テ容易ナルノミナラス再ヒカノ言語々句ニ就キ區々タル任意ノ送假名ヲ施シ意義ノ明晰ト語形ノ一定トヲ關クノ弊ニ陷ルコトモ亦之ナキヲ期スヘキナリ

本書原案ハ局員文學士濱田健次郎ノ起稿ニ係リ稿成ルノ後更ニ局員ノ審查ニ付シ數回ノ討議ヲ經テ多少ノ修正改竄ヲ加ヘ頃日始テ之ヲ完成セリ今回本書ヲ印刷シテ局員ニ頒ツニ方リ聊カ其編纂ノ旨趣旨及顛末ヲ記ス

明治二十二年四月 官報局長 高橋健三

送假名法序

我みくにのことはにはいちちやうのりありそれかきしるすもしのつかひさまにはいちちやうのりなしされはその時にしたかひてその人によりてはたらき詞やてにをはやさまくにもしをかきてそれよむへきたよりとせりこれを今の世にはおくりかなとなむいふなるこのおくり假名にはいちちやうのりなしといへともむかしより今にいたるまでにさのみまとはしからざりしはこと葉にいちちやうのりあるかゆゑなりことはにいちちやうのりあらんにはそれよむにたよりとせんもしのつかひさまにもいちちやうのりあらむかたなむことによるしかるへきとてたひ濱田のぬしのしるしいてられたる送假名法これなりことわりまことにさることなりとおほゆるまゝに卷のはしめにひとことかくなむ

送假名法目録

○總則

第一原則

第二原則

第一變則

第二變則

○名詞

第一則

第二則

第三則

○代名詞

第四則

○形容詞

第五則

第六則

第七則

第八則

第九則

○動詞

第十則

第十一則

第十二則

○副 詞

第十三則

第十四則

第十五則

第十六則

第十七則

○接 續 詞

第十八則

第十九則

第二十則

○後 置 詞

第二十一則

○感 嘆 詞

第二十二則

第二十三則

○音 便 ノ 事

○略 字 及 濁 音 ノ 事

送假名法

○總 則

假名交リ文ニ於ケル眞名ト假名トノ關係ハ眞名ハ言語ノ首本

ノ變化セサル所ヲ寫シ假名ハ其末尾ノ變スル所ヲ寫スモノナ
リ兩者ノ關係正ニ斯ノ如クナルヨリシテ左ニ示ス所ノ送假名
法ノ二大原則ヲ生ス

第一原則 語尾變化セサルモノハ送假名ヲ附セス

第二原則 語尾變化スルモノハ其變化スル所ヨリ寫シテ送

假名トス

右ハ送假名法ノ二大原則ナリ然リト雖モ間々古來ノ慣用ト便
宜トニ依リ左ノ如キ變則ニ從フ

第一變則 語尾變化セサルモノト雖モ慣用ト便宜トニ從ヒ

送假名ヲ附スルコトアリ

第二變則 語尾變化スルモノト雖モ罕ニハ慣用ト便宜トニ

從ヒ送假名ヲ附セサルコトアリ

今邦語八品詞ヲ右四則ニ配當スレハ大要左ノ如シ

名詞、代名詞及咏嘆詞 第一原則

動詞及形容詞 第二原則

副詞、接續詞及後置詞 第一變則

動詞ヨリ轉成セル名詞及副詞 第二變則

右大別配當ハ固ヨリ大體ニ就キテ之ヲ言フモノニシテ各自例
外ナキニアラス其詳細ハ各品詞ノ條ニ就キテ之ヲイ知スヘシ

○名 詞

凡ソ名詞ニ三種アリ (一) 本然名詞 (二) 轉成名詞 (三) 合
成名詞是ナリ右三種名詞ノ送假名法ハ左ノ如シ

第一則 本然名詞ハ總テ送假名ヲ附セス

第二則 (甲) 形容詞ノ轉成名詞ハ總テ送假名ヲ附ス

(乙) 動詞ノ轉成名詞ハ通常送假名ヲ附セス但シ同字異義ナルモノハ便宜送假名ヲ附ス

第三則 合成名詞ハ通常送假名ヲ附セス但シ同字異義ナルモノハ便宜送假名ヲ附ス

〔釋例〕

(第一) 本然名詞 本然名詞トハ事物ニ命シタル名稱ニシテ其語尾變化スルモノニアラ 故ニ本然名詞ニハ送假名ヲ附セス其例左ノ如シ

日^ヒ 月^{ツキ} 星^{ホシ} 雨^{アメ} 雪^{ユキ} 風^{カゼ} 山^{ヤマ} 川^{カハ}
草^{クサ} 木^キ 春^{ハル} 秋^{アキ} 東^{ヒガシ} 西^{ニシ} 上^{ウヘ} 下^{シモ}
神^{カミ} 人^{ヒト} 男^{オトコ} 女^{メナ} 手^テ 足^{タラシ} 飯^{イヒ} 酒^{サケ} 時^{トキ}
衣^キ 机^{ツエ} 書^{カキ} 花^{ハナ} 鳥^{トリ} 聲^{コエ} 夢^{ユメ}

(第二) 轉成名詞 轉成名詞トハ他詞ノ轉シテ名詞ト成レルモノヲ謂フ轉成名詞ニ二種アリ即チ一(甲)ハ形容詞ヨリ轉成セルモノ一(乙)ハ動詞ヨリ轉成セルモノ是ナリ

(甲) 形容詞ヨリ轉成セル名詞ニ四種アリ(一)「キ」若クハ「ナル」ヲ履ム形容詞ヨリ轉成セルモノニシテ其語尾ニ「サ」ヲ帶ヒ(二)「シキ」ヲ履ム形容詞ヨリ轉成セルモノニシテ其語尾ニ「シサ」ヲ帶ヒ(三)「ケキ」ヲ履ム形容詞ヨリ轉成セルモノニシテ其語

尾ニ「ケサ」ヲ帶ヒ(四)「キ」ヲ履ム形容詞ヨリ轉成セルモノニシテ其語尾ニ「ミ」ヲ帶フ而シテ此等四種ノ轉成名詞ハ皆其語尾ヲ寫シテ送假名トス其例

(一) (二) (三) (四)

左ノ如シ
重^{オモシ} 輕^{カサ} 廣^{ヒロシ} 速^{ハヤシ} 明^{アカリ} 平^{ヒラ} 深^{フカシ} 遠^{トホシ} 長^{ナガシ} 速^{ハヤシ}
靜^{シズカ} 寂^{サマシ} 親^{カタリ} 貧^{ヒナシ} 嬉^{ウレシ} 悲^{カナシ} 怪^{オドロシ} 烈^{ハヤシ}
爽^{スヅカ} 閑^{ヒラカ} 遙^{トホシ} 明^{アカリ} 露^{ツルシ} 寒^{サムシ}
安^{ヤスシ} 長^{ナガシ} 閑^{ヒラカ} 明^{アカリ} 露^{ツルシ} 寒^{サムシ}
重^{オモシ} 厚^{アツシ} 青^{アヲシ} 黑^{クロシ} 深^{フカシ} 高^{タカシ}
暖^{ヌクシ} 面^{オモシ} 白^{シロシ} 可^{カシ} 笑^{ウレシ} 黑^{クロシ} 深^{フカシ} 高^{タカシ}

(乙) 動詞ヨリ轉成セル名詞ハ皆盡ク本然動詞ノ連動言ニシテ四段活用、中二段活用及一段活用ニ屬スル動詞ハ總テ五十音連ノ第二段ノ音即チ「キ」「シ」「チ」「ヒ」「ミ」「イ」「リ」ノ音ヲ以テ轉シ其下二段活用ニ屬スル詞ハ皆五十連音ノ第四段ノ音即チ「エ」「ケ」「セ」「テ」「ネ」「ヘ」「メ」「エ」「レ」「エ」ノ音ヲ以テ轉ス此等動詞轉成名詞ハ本然動詞ト判然區別セシムルタメ送假名ヲ附セス其例左ノ如シ

燒^{ヤキ} 向^{ムク} 嘆^{ナガク} 趣^{オモク} 飽^{ウレシ} 寫^{ウツシ} 增^{マシ} 蒸^{モシ}

試流染染東告報耻譏代爭謠貸
 鑑催覺教受戀用契借樂問嘶
 願戲費譽屈老媚眠曲悲疑囉
 晴支衰妨悔鑄釣張惱思勝
 飢榮答助(以上中二段活用)
 聞改瘦寄定寄(以上四段活用)
 見定寄定寄(以上四段活用)
 寒留尋(以上四段活用)
 浴悟賴惑舞
 又一字ニテ二様ノ意義アル動詞轉成名詞及音訓兩用
 ノモノニシテ特ニ其訓讀ヲ要スルモノハ時宜ニ依リ
 送假名ヲ附シ以テ之ヲ分別スルコトアリ其例左ノ如
 シ
 預^{アツカ}預^{アツカ}起^{オキ}起^{オキ}
 悔^{クダシ}悔^{クダシ}向^{ムカフ}向^{ムカフ}
 樂^{タカラ}樂^{タカラ}營^{イロフ}營^{イロフ}
 又動詞ノ連名言ヲ其儘ニ若クハ之ニ「コト」ヲ加ヘ
 テ名詞ノ如ク用フルコトアリ此場合ニ於テハ動詞本
 然ノ語尾ヲ寫スヘシ其例左ノ如シ
 往^{ユク}クヲ送^{オウ}リ 來^キルヲ迎^{ムカフ}フ 入^{イル}ル(又ハ入^{イル}ルコト)ヲ

量^リ出^イツル(又ハ出^イツルコト)ヲ量^ラス
 (第三) 合成名詞 合成名詞トハ二箇以上ノ詞ノ連合シ
 テ熟語名詞ヲ成セルモノニシテ之ヲ分チテ六種トス
 (一) 本然名詞ト連合セルモノ (二) 形容詞ト本然名
 詞ト連合セルモノ (三) 形容動詞ト本然名詞ト連合セ
 ルモノ (四) 本然名詞ト動詞轉成名詞ト連合セルモノ
 (五) 本然動詞ト動詞轉成名詞ト連合セルモノ (六)
 形容詞ト動詞轉成名詞ト連合セルモノ是ナリ此六種ハ
 孰モ送假名ヲ附セサルヲ常トス其例左ノ如シ
 (一) 氷^{ヒョウ}山^{ヤマ}櫻^{オウ} 松^{マツ}藍^{アイ}玉^{ギョク} 鈴^{スズ}蟲^{ムシ} 月^{ツキ}夜^ヨ 露^{ツキ}月^{ツキ} 海^{ウミ}魚^{イサナ} 春^{ハル}蟲^{ムシ}
 早^{ハヤ}業^{ゴト} 青^{アヲ}物^{モノ} 薄^{ウス}紙^シ 古^コ手^テ 長^{ナガ}靴^{カブチ} 毛^ケ絲^シ 酒^{サケ}樽^{ツル}
 枯^{カレ}草^{クサ} 白^{シロ}魚^{イサナ} 薄^{ウス}茶^{チャ} 甘^{アマ}酒^{サケ} 太^{フト}物^{モノ} 黑^{クロ}馬^{ウマ} 新^{アタラシ}身^ミ
 渡^{ワタリ}船^{フネ} 飛^{トビ}火^カ 借^{カケ}屋^ヤ 縷^{イト}言^{ゴン} 卷^{マク}烟^{エン} 摺^{スリ}附^{ツケ}木^キ
 標^{ヒシ}卷^{マク} 冬^{フユ}着^キ 水^{ミヅ}吞^{ノド} 人^{ヒト}込^コ立^{タテ} 荷^カ造^{ゾウ} 荷^カ持^チ 山^{ヤマ}崩^{クレ}
 芝^{シバ}居^イ 實^{ジツ}入^{イル} 年^{トシ}寄^{ヨリ} 人^{ヒト}込^コ 折^{オリ}合^{アヒ} 問^ト合^{アヒ} 取^{トル}取^{トル} 立^{タテ}消^{シユス}
 縷^{イト}替^{カヘ} 取^{トル}引^{ヒキ} 買^{カウ}進^{シン} 見^ミ合^{アヒ} 近^{チカ}附^{ツケ} 太^{フト}織^{オリ} 黑^{クロ}塗^ヌ 早^{ハヤ}起^キ
 (六) 早^{ハヤ}出^デ 遠^{トホ}乘^{ノリ} 古^コ著^{ショク} 近^{チカ}附^{ツケ} 太^{フト}織^{オリ} 黑^{クロ}塗^ヌ 早^{ハヤ}起^キ
 此等ノ合成名詞ノ内同字ニテ異義ヲ有スルモノハ便宜
 送假名ヲ附シテ以テ其孰ノ意義タルヤ判別スルヲ要
 ス例ヘハ入口ハ入り口又ハ入^{イル}レ口ナリヤ判別スルヲ

メ「リ」又ハ「レ」ヲ加ヘ預主ハ預ケ主又ハ預リ主ナ
リヤヲ判別スルタメ「ケ」又ハ「リ」ヲ加ヘ押入ハ押
入リ又ハ押入レナリヤヲ判別スルタメ「リ」又ハ「レ」
ヲ加フルカ如キ是ナリ

○代名詞

凡ソ代名詞ニ三種アリ (第一) 人代名詞 (第二) 指示代名詞

(第三) 疑問代名詞是ナリ

右三種代名詞ノ送假名法ハ左ノ如シ

第四則 人代名詞、指示代名詞及疑問代名詞ハ孰モ送假名

ヲ附セス

〔釋例〕

(第一) 人代名詞 人代名詞トハ人名ニ代用セラル、モ
ノニシテ之ヲ再別シテ二トス (一) 真稱人代名詞 (二)

假稱人代名詞是ナリ

(一) 真稱人代名詞トハ本來人名ヲ代示スルモノナリ

其例左ノ如シ

我 吾 余 予 己
彼 彼

(二) 假稱人代名詞トハ他物ノ名ヲ取りテ代名詞ト爲

シタルモノナリ其例左ノ如シ
身 僕 童 妾 此方 私
手前 君 主 其方 其許 那方

眞假兩種ノ人代名詞ノ複數モ亦送假名ヲ附セス其例
左ノ如シ

我等 余等 余輩 我輩 吾輩
吾曹 我儕 身共 私共 僕等
汝輩 君等 汝等 主達 汝達
彼輩 彼等

(第二) 指示代名詞 指示代名詞トハ或ル人事物ヲ指示

シテ其名詞ノ代ニ用ヒラル、モノナリ其例左ノ如シ

是 此 維 斯 之 其
夫 彼

(第三) 疑問代名詞 疑問代名詞トハ人ナリ又事物ナリ

判然之ヲ指定シ能ハサル場合ニ其人又ハ其事物ヲ代表

疑問スルタメニ用ユルモノナリ其例左ノ如シ

誰 孰 何

以上三種ノ代名詞ニシテ「カ」又ハ「ノ」ヲ以テ受ケ

ラル、トキハ總テ其「カ」又ハ「ノ」ヲ寫シテ送假名

トスヘキモノナレトモ 彼此 其 我 ノ四詞ハ便

宜ニ任シテ之ヲ寫サス

○形容詞

凡ソ形容詞ニ四種アリ (第一) 本然形容語尾ヲ履ム形容詞 (第

二) 他種ノ詞ヲ履ム形容詞 (第三) 指示形容詞 (第四) 數形

容詞 (第五) 合成形容詞是ナリ

右五種ノ形容詞ノ送假名法ハ左ノ如シ

第五則 本然形容語尾ヲ履ムモノハ其語尾ヲ寫シテ送假名

トス

第六則 他種ノ詞ヲ履ムモノハ其語尾ヲ寫シテ送假名トス

第七則 指示形容詞ヲ漢字ニテ寫ストキハ總テ送假名ヲ附

セス

第八則 數形容詞ハ送假名ヲ附セス但シ一ヨリ九ニ至ル數

形容詞ニシテ音訓兩讀ノモノヲ特ニ訓讀セシムル

トキハ便宜「ツ」等ノ語尾ヲ寫シテ送假名トスル

コトアルヘシ

第九則 合成形容詞ハ唯下ニ連リタル詞ノ語尾ヲ寫シテ送

假名トス

〔釋例〕

(第一) 本然形容詞語尾ヲ履ム形容詞 本然形容語尾ヲ

履ム形容詞ニ三種アリ (一) 其語尾ニ「キ」ヲ履ムモ

ノ (二) 其語尾ニ「シキ」ヲ履ムモノ (三) 其語尾ニ

「ケキ」ヲ履ムモノ是ナリ此等三種共ニ其語尾ヲ寫シ

テ送假名トス其例左ノ如シ

(一)
古^コ高^{カウ}長^{チヤウ}善^{ゼン}
キ^キキ^キキ^キキ^キ
尊^{ソウ}低^{テイ}短^{タン}惡^{アク}
キ^キキ^キキ^キキ^キ
憎^{ソウ}白^{ハク}太^{タイ}早^{ソウ}
キ^キキ^キキ^キキ^キ
強^{キヤウ}黑^{コク}細^{サイ}遲^{オシ}
キ^キキ^キキ^キキ^キ
脆^{スイ}明^{メイ}薄^{ハク}遠^{トウ}
キ^キキ^キキ^キキ^キ
全^{ゼン}暗^{アン}厚^{コウ}近^{キン}
キ^キキ^キキ^キキ^キ

(二)

宜^イ寂^{シヤク}惡^{アク}樂^{ラク}苦^ク嬉^キ悲^ヒ
シ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シ
正^{テイ}騷^{ソウ}同^{ドウ}賤^{セン}貧^{ヒン}親^{シン}美^ミ
シ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シ
空^{クウ}烈^{リョウ}怪^{クワイ}甚^{シヤン}睦^{ムツ}
シ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シ

(三)

爽^{スワン}明^{メイ}遙^{テウ}靜^{セイ}平^{ヘイ}露^ロ寒^{カン}
ケ^ケケ^ケケ^ケケ^ケケ^ケケ^ケ
安^{アン}遙^{テウ}長^{チヤウ}閑^{カン}平^{ヘイ}露^ロ寒^{カン}
ケ^ケケ^ケケ^ケケ^ケケ^ケケ^ケ

又外ニ一種アリ即チ動詞ヨリ轉シテ此 (二) 種ニ入レ
ルモノ是ナリ此等ハ皆動詞本來ノ語尾變化スル所ヨリ
之ヲ寫シテ送假名トス其例左ノ如シ

願^{ガン}願^{ガン}願^{ガン}願^{ガン}願^{ガン}願^{ガン}
ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}
義^ギ義^ギ義^ギ義^ギ義^ギ義^ギ
マシ^{マシ}マシ^{マシ}マシ^{マシ}マシ^{マシ}マシ^{マシ}マシ^{マシ}
痛^{ツウ}痛^{ツウ}痛^{ツウ}痛^{ツウ}痛^{ツウ}痛^{ツウ}
マシ^{マシ}マシ^{マシ}マシ^{マシ}マシ^{マシ}マシ^{マシ}マシ^{マシ}
喜^キ喜^キ喜^キ喜^キ喜^キ喜^キ
ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}
混^{コン}混^{コン}混^{コン}混^{コン}混^{コン}混^{コン}
ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}ハシ^{ハシ}

又「マジキ」、「カマシキ」、「ラシキ」等ノ語尾モ亦總
テ之ヲ寫シテ送假名トス

(第二) 他種ノ詞ヲ履ム形容詞 他種ノ詞ヲ履ム形容語

尾ニ九種アリ (一) 「ナル」 (二) 「タル」 (三) 「ケル」

(四) 「セル」 (五) 「テル」 (六) 「ヘル」 (七) 「メル」

(八) 「レル」 (九) 「ノ」ヲ履ムモノ是ナリ此等九種共

ニ其語尾ヲ寫シテ送假名トス其例左ノ如シ

(一)
斜^{シャ}詳^{シャウ}朗^{ラウ}靜^{セイ}明^{メイ}緩^{クワン}平^{ヘイ}速^{ソク}愚^オ
ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}
斑^{ハン}鮮^{セン}緩^{クワン}暖^{ナン}平^{ヘイ}誠^{セイ}稀^{セイ}專^{セン}健^{ケン}愚^オ
ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}
圓^{エン}盛^{セイ}暖^{ナン}平^{ヘイ}誠^{セイ}稀^{セイ}專^{セン}健^{ケン}愚^オ
ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}
疎^ソ疎^ソ疎^ソ疎^ソ疎^ソ疎^ソ疎^ソ疎^ソ疎^ソ
ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}
細^{サイ}細^{サイ}細^{サイ}細^{サイ}細^{サイ}細^{サイ}細^{サイ}細^{サイ}細^{サイ}
ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}ナル^{ナル}

ノ如シ

(二)

美麗ナル 寬大ナル 有名ナル 高尚ナル 卑劣ナル
 貴重ナル 簡短ナル 溫順ナル 殘忍ナル 壯大ナル
 過^スキタル 朽^スチタル 老^カイタル 舊^キリタル 枯^カレタル
 肥^コタタル 鑄^コタル 重^シリタル 立^タタル 續^ツキタル
 曲^カリタル 乾^カキタル 濕^シリタル 鏽^サビタル 破^カレタル

此「タル」ヲ履ム形容詞ハ皆動詞ノ連動言即チ四段活用、ラ行變格、中二段活用、一段活用及三段活用ノ詞ハ五十連音ノ(イ)ノ横行ヨリ變化シ又下二段活用ノ詞ハ(エ)ノ横行ヨリ變化スルモノナルカ故ニ今形容詞ヲ成スニ方リテモ動詞本來ノ送假名法ニ從ヒ右例ニ示セルカ如ク動詞語尾ノ變化スル所ヨリ寫シテ送假名トス(動詞ノ條ヲ參看スヘシ)

又此「タル」ノ語尾モ亦漢語ニ附セラル、コトアリ其例左ノ如シ

(六)(五)(四)(三)

確乎タル 儼然タル 窈窕タル 渺茫タル 鏗々タル
 堂々タル 漫々タル 寂寞タル 判然タル 漠然タル
 畫ケル 貫ケル 琢ケル 燒ケル
 寫セル 増セル 鑠セル
 立テル 穿テル 滿テル 鎖セル
 浮ヘル 漂ヘル 狂ヘル 慙ヘル

(八)(七)

沈^シムメル 包^ツメル 富^トメル 病^ヤメル
 曲^カレル 反^ツレル 懸^カレル 撚^ヨレル

(九)

(イ)種々ノ風説 色々ノ花夥多ノ貨物 百般ノ事
 (ロ)露ノ命 夢ノ浮世 花ノ顔 月ノ眉
 右「ノ」ナル語尾ニニ意アリ一即チ(イ)ハ助動詞ノ「ナル」ト同義ナルモノニシテ一即チ(ロ)ハ「如ク」トノ意ニ解スル所ノ「ノ」是ナリ

(第三)指示形容詞 指示形容詞トハ事物ノ位置關係ヲ指示スルモノニシテ「コノ」「ソノ」「カノ」ノ三詞アルノミ若シ漢字ニテ之ヲ寫ストキハ共ニ送假名ヲ附セス其例左ノ如シ

此世^{コノヨ} 此國^{コノクニ} 此時^{コノトキ} 此身^{コノミ}
 其人^{コノヒト} 其家^{コノイヘ} 其價^{コノツケ} 其事^{コノコト}
 彼地^{ソノチ} 彼書^{ソノカキ} 彼言^{ソノコト} 彼物^{ソノモノ}

但シ右三詞ハ便宜全ク假名ニテ寫スコトアルヘシ

(第四)數形容詞 數形容詞ハ其數、序數共ニ語尾變化セス故ニ送假名ノ附スヘキナシ其例左ノ如シ

四十七士 十六羅漢 二十五菩薩 三十二相
 四書 五經 四季 八景
 第一條 第二款 第三卷 第四號
 一ヨリ九ニ至ル數形容詞ニシテ音訓兩讀ノモノヲ特ニ訓讀セシムルトキハ便宜「ツ」等ノ語尾ヲ寫シテ送假

名トスルコトアルヘシ

(第五) 合成形容詞 合成形容詞トハ二語以上連合シテ形容詞ト成レルモノヲ謂フ是等ノ形容詞ハ唯其下ニ連リタル詞ノ語尾ヲ寫シテ送假名トス其例左ノ如シ

薄暗キ ウスグサ 細長キ ホソナガ 青白キ アヲシロ 手輕キ テカラ 待遠キ マタトホ 心易キ ココロハヤシ 意地悪キ イヂワル 見苦シキ ミクルシ 輕ミシキ カウミシ 苦ミシキ クミシ 手重ナル テオモシ 重立チタル オモタチタル 年古リタル トシヨシタル 氣強ナル イキヨクナル 足弱ナル タビヨロナル

○動 詞

凡ソ動詞ニ四種アリ (第一) 本然動詞 (第二) 延長動詞 (第三) 短縮動詞 (第四) 合成動詞是ナリ

右四種ノ動詞ノ送假名法ハ左ノ如シ

第十則 本然動詞ハ總テ其語尾ノ變化スル所ヨリ寫シテ送假名トス但シ同字異様ノ訓義アルモノニシテ其語

尾同一ナルトキハ便宜一字ヲ増附シテ送假名トス 第十一則 延、縮兩種ノ動詞ハ延ヒタルモ約リタルモ共ニ其語尾ヲ寫シテ送假名トス

第十二則 合成動詞ハ總テ下ニ連リタル詞ノ語尾ノ變化スル所ヨリ寫シテ送假名トス

〔釋例〕

- (第一) 本然動詞 本然動詞ニ五種アリ (一) 四段活用 (二) 三段活用 (三) 中二段活用 (四) 下二段活用 (五) 一段活用トス五種共ニ其語尾ノ變化スル所ヨリ

寫シテ送假名トス左ニ各種活用ノ法ヲ示シテ以テ送假名ノ附法ヲ知ラシム

(一) 四段活用 四段活用ノ動詞ハ五十連音ノ横行「ア」「イ」「ウ」「エ」「ノ」四段ニ轉シテ變化シ其縦行ハ「カ」「サ」「タ」「ハ」「マ」「ラ」ノ六行ニ限ルモノナリ其例左ノ如シ

將然言

連動言

終止言

使令言

已然言

カ行	サ行	タ行	ハ行	マ行	ラ行
行 ^キ カ ^ン 開 ^カ カ ^ン 爲 ^シ サ ^ン 移 ^シ サ ^ン 待 ^チ タ ^ン 穿 ^ツ タ ^ン 問 ^ヒ ハ ^ン 願 ^フ ハ ^ン 摘 ^ム マ ^ン 賴 ^ミ マ ^ン 折 ^リ ラ ^ン 祈 ^ル ラ ^ン	行 ^キ サ ^ン 開 ^カ サ ^ン 爲 ^シ サ ^ン 移 ^シ サ ^ン 待 ^チ タ ^ン 穿 ^ツ タ ^ン 問 ^ヒ ハ ^ン 願 ^フ ハ ^ン 摘 ^ム マ ^ン 賴 ^ミ マ ^ン 折 ^リ ラ ^ン 祈 ^ル ラ ^ン	行 ^キ タ ^ン 開 ^カ タ ^ン 爲 ^シ タ ^ン 移 ^シ タ ^ン 待 ^チ タ ^ン 穿 ^ツ タ ^ン 問 ^ヒ ハ ^ン 願 ^フ ハ ^ン 摘 ^ム マ ^ン 賴 ^ミ マ ^ン 折 ^リ ラ ^ン 祈 ^ル ラ ^ン	行 ^キ ハ ^ン 開 ^カ ハ ^ン 爲 ^シ ハ ^ン 移 ^シ ハ ^ン 待 ^チ ハ ^ン 穿 ^ツ ハ ^ン 問 ^ヒ ハ ^ン 願 ^フ ハ ^ン 摘 ^ム マ ^ン 賴 ^ミ マ ^ン 折 ^リ ラ ^ン 祈 ^ル ラ ^ン	行 ^キ マ ^ン 開 ^カ マ ^ン 爲 ^シ マ ^ン 移 ^シ マ ^ン 待 ^チ マ ^ン 穿 ^ツ マ ^ン 問 ^ヒ マ ^ン 願 ^フ マ ^ン 摘 ^ム マ ^ン 賴 ^ミ マ ^ン 折 ^リ ラ ^ン 祈 ^ル ラ ^ン	行 ^キ ラ ^ン 開 ^カ ラ ^ン 爲 ^シ ラ ^ン 移 ^シ ラ ^ン 待 ^チ ラ ^ン 穿 ^ツ ラ ^ン 問 ^ヒ ラ ^ン 願 ^フ ラ ^ン 摘 ^ム ラ ^ン 賴 ^ミ ラ ^ン 折 ^リ ラ ^ン 祈 ^ル ラ ^ン

此四段活用ニ屬スルモノ甚タ多クシテ動詞總數ノ八九分ハ此活用ノ詞ナリト謂フモ不可ナキカ如シ 此四段活用ニ屬スル二種ノ變格アリ一ヲ「ラ」行變格ト云ヒ一ヲ「ナ」行變格ト云フ

「ラ」行變格 「ラ」行變格ニ屬スル動詞ハ唯^ヨ有^リノ一詞アルノミニシテ其大體ノ活用ハ尋常四段活用ニ異ナルコトナシト雖モ其他詞ト續ク様ノ相同シカラサルヨリシテ變格ノ名ヲ得タリ即チ尋常四段活用ニ於テハ第三段即チ「ウ」ノ橫行ハ終止言ト連名言トヲ兼ネ第二段即チ「イ」ノ橫行ハ全ク連動言ナリ然ルニ此「ラ」行變格ニ於テハ第二段即チ「イ」ノ橫行ハ連動終止ノ兩言ヲ兼ネ第三段ハ專ラ連名言ナリ左ニ示ス所ヲ以テ之ヲ知レ

將然言 連動言 連名言 既^レ然言 使^レ令言

有^ラン 有^リ 有^ル 有^レ

此有^リト云フ詞ハ他ノ詞ト合シテ種々ノ助動詞ヲ成スモノニシテ其活用極テ廣大ナリ尙ホ委シキ事ハ下ノ短縮動詞ノ條ニ於テ言フヘシ

又此有^リト云フ詞ハ諸他ノ四段活用ノ「ラ」行ニ屬スル詞ト同シク「アラン」「アリ」「アル」「アレ」ト

「ラ」「リ」「ル」「レ」ニ變化シテ「ア」ノ音ハ動カサルヲ以テ有^{ラン}、有^リ、有^ル、有^レト有ナル眞字ニ「ラ」「リ」「ル」「レ」ノ假名ヲ附シテ送假名トスヘキナレトモ世用ノ習慣ニ依リ茲ニハ全ク假名ニテ之ヲ寫ス即チ左ノ如シ

ア^ラン ア^リ ア^ル ア^レ
(附言) 居^ラン 居^リ 居^ル 居^レ ト活ク詞ハ先人皆

之ヲ「ラ」行變格ニ入レタリ然レトモ今其活語ノ現用ヲ察スルニ全ク尋常ノ四段活用ニ異ナル所ナク且ツ其語調ノ四段活用ニ屬セシムル方遙ニ圓滑ナルヲ覺ユ故ニ茲ニモ之ヲ「ラ」行變格ニ入レスシテ尋常ノ四段活用ニ屬セシメタリ

「ナ」行變格 「ナ」行變格ハ往^ヌ 死^スノ二詞ニ限り將然言、連動言、終止言、連名言、既^レ然言及使^レ令言(希求言)孰モ語尾ヲ變化スルモノナリ即チ左ノ如シ

將然言 連動言 終止言 連名言 既^レ然言 使^レ令言(希求言)

往^{ナン} 往^ニ 往^ヌ 往^{ヌル} 往^{ヌレ} 往^ネ
死^{ナン} 死^ニ 死^ヌ 死^{ヌル} 死^{ヌレ} 死^ネ

(二) 三段活用 三段活用ハ縱行ハ「カ」「サ」ノ二行ニ限り而シテ其橫行ハ各々異ニシテ「カ」行ニ屬スルモノハ「コ」「キ」「ク」ノ三段ニ活キ「サ」行ニ屬スルモノハ「セ」「シ」「ス」ノ三段ニ活クモノナリ即チ左ノ如シ

將然言 連動言 終止言 連名言 既^レ然言 使^レ令言
カ^行 來^コ 來^キ 來^グ 來^ル 來^レ
サ^行 爲^コ 爲^キ 爲^グ 爲^ル 爲^レ

此三段活用ノ詞ハ右ニ擧ケタルヨリ外ニハアラス且ツ來ノ字ノ如キハ之ヲコキククルクレト三段ニ活シテ用フルハ今日ニ在リテハ唯雅言ト俗言トニ

サ 行	カ 行	ア 行	シ	ヤ 行	マ 行	ハ 行
失 ^フ 載 ^ル セ○セ○	受 ^ケ 告 ^グ ケ○ケ○	得 ^ル	連動言 連動言	悔 ^イ 老 ^イ イ○イ○	怨 ^ミ 恨 ^ミ ミ○ミ○	媚 ^ビ 強 ^ビ ビ○ビ○
失 ^ス 載 ^ス	受 ^ク 告 ^ク	得 ^ル	終止言	下 ^ル 懲 ^ル	悔 ^ユ 老 ^ユ ユ○ユ○	媚 ^フ 強 ^フ フ○フ○
失 ^ス 載 ^ス	受 ^ク 告 ^ク	得 ^ル	連名言	下 ^ル 懲 ^ル	悔 ^ユ 老 ^ユ ユ○ユ○	媚 ^フ 強 ^フ フ○フ○
失 ^ス 載 ^ス	受 ^ク 告 ^ク	得 ^ル	將然言	下 ^ル 懲 ^ル	悔 ^ユ 老 ^ユ ユ○ユ○	媚 ^フ 強 ^フ フ○フ○

タ行	ナ行	ハ行	マ行	ヤ行	ラ行	ワ行	右下一段活用ノ動詞ハ其數實ニ多シト雖モ其「ヤ」行ニ於テ		ハ右ニ出セル覺ユ、消ユトノ外ニハ		及「ワ」行ニ屬スル詞ハ甚タ少シ即チ「ヤ」行ニ於テ		等ノ詞アルノミ又「ワ」行ニ於テハ右ニ出セル植ウ、		飢ウノ外ニハ		据ウノ外ニハ		蹴ウノ外ニハ		蹴ウノ外ニハ		蹴ウノ外ニハ	
捨 ^ス テ ^テ	寢 ^ネ ネ ^ネ	經 ^フ ヘ ^ヘ	譽 ^ム ム ^ム	消 ^ユ ユ ^ユ	枯 ^ル ル ^ル	植 ^ク ク ^ク	飢 ^ウ ウ ^ウ		癒 ^ユ ユ ^ユ		消 ^ユ ユ ^ユ		飢 ^ウ ウ ^ウ		飢 ^ウ ウ ^ウ		飢 ^ウ ウ ^ウ		飢 ^ウ ウ ^ウ		飢 ^ウ ウ ^ウ		飢 ^ウ ウ ^ウ	
捨 ^ス ツ ^ツ	寢 ^ネ ス ^ス	經 ^フ フ ^フ	譽 ^ム ム ^ム	消 ^ユ ユ ^ユ	枯 ^ル ル ^ル	植 ^ク ク ^ク	飢 ^ウ ウ ^ウ		癒 ^ユ ユ ^ユ		消 ^ユ ユ ^ユ		飢 ^ウ ウ ^ウ		飢 ^ウ ウ ^ウ		飢 ^ウ ウ ^ウ		飢 ^ウ ウ ^ウ		飢 ^ウ ウ ^ウ		飢 ^ウ ウ ^ウ	
捨 ^ス ル ^ル	寢 ^ネ ル ^ル	經 ^フ ル ^ル	譽 ^ム ル ^ル	消 ^ユ ル ^ル	枯 ^ル ル ^ル	植 ^ク ル ^ル	飢 ^ウ ル ^ル		癒 ^ユ ル ^ル		消 ^ユ ル ^ル		飢 ^ウ ル ^ル		飢 ^ウ ル ^ル		飢 ^ウ ル ^ル		飢 ^ウ ル ^ル		飢 ^ウ ル ^ル		飢 ^ウ ル ^ル	
捨 ^ス レ ^レ	寢 ^ネ レ ^レ	經 ^フ レ ^レ	譽 ^ム レ ^レ	消 ^ユ レ ^レ	枯 ^ル レ ^レ	植 ^ク レ ^レ	飢 ^ウ レ ^レ		癒 ^ユ レ ^レ		消 ^ユ レ ^レ		飢 ^ウ レ ^レ		飢 ^ウ レ ^レ		飢 ^ウ レ ^レ		飢 ^ウ レ ^レ		飢 ^ウ レ ^レ		飢 ^ウ レ ^レ	

カ行	ナ行	ハ行	マ行	ヤ行	ト一段活用ノ如クニ用ヒラル、ニ至レリ		ト一段活用ノ如クニ用ヒラル、ニ至レリ		ト一段活用ノ如クニ用ヒラル、ニ至レリ		ト一段活用ノ如クニ用ヒラル、ニ至レリ		ト一段活用ノ如クニ用ヒラル、ニ至レリ		ト一段活用ノ如クニ用ヒラル、ニ至レリ		ト一段活用ノ如クニ用ヒラル、ニ至レリ		ト一段活用ノ如クニ用ヒラル、ニ至レリ		ト一段活用ノ如クニ用ヒラル、ニ至レリ		ト一段活用ノ如クニ用ヒラル、ニ至レリ	
著 ^キ 著 ^キ	煎 ^ニ 煎 ^ニ	干 ^ヒ 干 ^ヒ	噴 ^ヒ 噴 ^ヒ	見 ^ミ 見 ^ミ	然將言		然將言		然將言		然將言		然將言		然將言		然將言		然將言		然將言		然將言	
著 ^キ ル ^ル	煎 ^ニ ル ^ル	干 ^ヒ ル ^ル	噴 ^ヒ ル ^ル	見 ^ミ ル ^ル	使令言連動言		使令言連動言		使令言連動言		使令言連動言		使令言連動言		使令言連動言		使令言連動言		使令言連動言		使令言連動言		使令言連動言	
著 ^キ レ ^レ	煎 ^ニ レ ^レ	干 ^ヒ レ ^レ	噴 ^ヒ レ ^レ	見 ^ミ レ ^レ	終止言		終止言		終止言		終止言		終止言		終止言		終止言		終止言		終止言		終止言	
著 ^キ ル ^ル	煎 ^ニ ル ^ル	干 ^ヒ ル ^ル	噴 ^ヒ ル ^ル	見 ^ミ ル ^ル	然然言		然然言		然然言		然然言		然然言		然然言		然然言		然然言		然然言		然然言	
著 ^キ レ ^レ	煎 ^ニ レ ^レ	干 ^ヒ レ ^レ	噴 ^ヒ レ ^レ	見 ^ミ レ ^レ	然然言		然然言		然然言		然然言		然然言		然然言		然然言		然然言		然然言		然然言	

覺^サメ^メ。切^キレ^レ。折^アレ^レ。覺^サシ^シ。切^キリ^リ。折^アリ^リ。破^ヤレ^レ。破^ヤリ^リ。離^ハレ^レ。離^ハリ^リ。テ。テ。テ。テ。テ。テ。テ。テ。

以上ノ諸語ニ於テハ下二段活用ハ自ラ活ク詞ニシテ四段活用ハ他ニ活掛クル詞ナリ

(第二) 延長動詞 延長動詞トハ語勢ヲシテ圓和ナラシメンタメニ動詞本然ノ語尾ヲ延セルモノヲ謂フ其送假名法ハ總テ本然語尾ノ變化スル所ヨリ之ヲ寫ス其例左ノ如シ

本語	延ヒタル語	本語	延ヒタル語
申 ^{コト} ス	申 ^{コト} サ ^サ ク	願 ^{ネガ} フ	願 ^{ネガ} ハ ^ハ ク
翼 ^{ハネ} フ	翼 ^{ハネ} ハ ^ハ ク	思 ^{おも} フ	思 ^{おも} ハ ^ハ ク
疑 ^{ウタガ} フ	疑 ^{ウタガ} フ ^フ ク	言 ^{コト} ハ ^ハ ン	言 ^{コト} ハ ^ハ マ ^マ ク
見 ^ミ ン	見 ^ミ マ ^マ ク	恐 ^{おそ} ル	恐 ^{おそ} ラ ^ラ ク
聞 ^キ カ ^カ ム	聞 ^キ カ ^カ マ ^マ ク	恨 ^{くら} ム	恨 ^{くら} ム ^ム ラ ^ラ ク

(第三) 短縮動詞 短縮動詞トハ連合語尾ノ約リタルモノヲ謂フ其種類凡ソ九種アリ其送假名法ハ總テ語尾ノ約リタル所ヨリ寫スモノナリ其例左ノ如シ

(一) 「ク」「シク」及「ケク」ノ副詞語尾ト「有ラ」ント云フ詞ト連合シテ「有ラ」ント約レルモノ

安^{やす}ク有^アラン。面^{おも}白^{しろ}ク有^アラン。嬉^{うれ}シク有^アラン。樂^{たの}シク有^アラン。安^{やす}ケク有^アラン。露^{つゆ}ケク有^アラン。

(二) 副詞語尾ノニト「有ラン」ト連合シテ「ナラ」ントナレルモノ

平^{へい}ニ有^アラン。靜^{しやう}ニ有^アラン。當^{たう}然^{ぜん}ニ有^アラン。

(三) 「テ」及「ト」ナル助動詞ト「有ラン」ト合シテ「タラン」トナレルモノ

落^おチ^チテ有^アラン。違^{ちが}ヒ^ヒテ有^アラン。渺^{せう}茫^{ぼう}ト有^アラン。

(四) 「キ」ト「有リ」ト合シテ「ケリ」トナレルモノ

飽^あケ^ケリ。行^ゆケ^ケリ。置^おケ^ケリ。畫^えケ^ケリ。

(五) 「シ」ト「有リ」ト合シテ「セリ」トナレルモノ

押^おセ^セリ。寫^かセ^セリ。増^まセ^セリ。充^みセ^セリ。

(六) 「チ」ト「有リ」ト合シテ「テリ」トナレルモノ

ト寫スヘシ

○副 詞

待^{マツ}テリ。 立^{タツ}テリ。 勝^{カサ}テリ。 持^{モツ}テリ。

(七) 「ヒ」ト「有リ」ト合シテ「ヘリ」トナレルモ

伴^{トモナ}ヘリ。 駢^{ハナ}ヘリ。 逢^アヘリ。 舞^{マフ}ヘリ。

(八) 「ミ」ト「有リ」ト合シテ「メリ」トナレルモ

沈^{シヅ}メリ。 含^{フク}メリ。 住^{スモ}メリ。 積^{ツメ}メリ。

(九) 「リ」ト「有リ」ト合シテ「レリ」トナレルモ

織^{オリ}レリ。 居^ユレリ。 釣^ツレリ。 張^ハレリ。

(第四)合成動詞 合成動詞トハ動詞ト相合シテ成レ

ルモノヲ謂フ此等ノ動詞ハ總テ下ニ連リタル動詞ノ語尾ノ變化スル所ヨリ之ヲ寫シテ送假名トス其例左ノ如シ

差^{サシ}遣^{カハ}サン。 差^{サシ}遣^{カハ}シ。 差^{サシ}遣^{カハ}ス。 差^{サシ}遣^{カハ}セ。

行^{ユク}過^スキン。 行^{ユク}過^スク。 行^{ユク}過^スクル。 行^{ユク}過^スクレ。

届^{トク}出^デテン。 届^{トク}出^デツ。 届^{トク}出^デツル。 届^{トク}出^デツレ。

逢^ア見^ミン。 逢^ア見^ミル。 逢^ア見^ミレ。

以上四種動詞ノ終止言ヲ受ケテ隨分廣ク用ヒラルル

「ヘシ」ト云フ詞ハ往々可シ可キ可ク可ケレ

ト「ベ」ノ音ヲ眞字ニテ寫スト雖モ茲ニハ總テ假名ニテ

ヘシヘキヘクヘケレ

ト寫スヘシ

○副 詞

凡ソ副詞ニ五種アリ(第一)本然副詞(第二)轉成副詞(第三)合成副詞(第四)熟語副詞(第五)疊字副詞是ナリ

右五種ノ副詞ノ送假名法ハ左ノ如シ

第十三則 本然副詞ハ今、唯、只、惟、嘗、皆、相、復、

ノ八詞ヲ除クノ外ハ總テ其語尾ノ一音ヲ寫シテ送假名トス

第十四則 轉成副詞ハ其語尾ノ「ニ」、「ク」、「シク」、「ケク」、「テ」又ハ「ト」ヲ寫シテ送假名トス

第十五則 合成副詞ハ合成セル品詞ノ本來所屬ノ法ニ從ヒ

送假名ヲ附ス

第十六則 熟語副詞ハ總テ送假名ヲ附セス

第十七則 疊字副詞ハ疊音ノモノハ々符ヲ附シ疊訓ノモノ

ハ々符ヲ附ス

〔釋例〕

(第一) 本然副詞 本然副詞ハ專ラ副詞トシテ用ヒラル

ルモノニシテ其語尾常ニ定リテ變化セス故ニ理ニ於テハ當ニ單用スヘキモノナレトモ今慣用ト讀續ノ便宜ト

ニ依リ

今、唯、只、惟、嘗、皆、相、後

ノ八詞ヲ除キテハ總テ其語尾一音ヲ寫シテ送假名トス

其例左ノ如シ

争カテ。躬ヲ。剩ヘ。最モ。概ネ。午ゾ。凡ソ。故ニ。既ニ。嘗テ。争カテ。自ラ。聊サ。豫メ。率ネ。忽チ。殆ト。盗ソ。已デ。曾テ。乃親先。専。蓋。未。幾。曷。業。將。チ。ラ。ツ。ラ。シ。ダ。ト。ソ。ニ。ニ。則。豈。臆。獨。恰。尙。沉。何。終。方。チ。ニ。デ。リ。モ。ボ。ヤ。ソ。ニ。ニ。夫。寧。倍。甚。宛。猶。否。焉。遂。當。レ。ロ。デ。タ。モ。ホ。ヤ。ソ。ニ。ニ。是。必。自。太。尤。仍。頗。安。爲。應。レ。ス。ラ。タ。モ。ホ。ル。ソ。ニ。ニ。

(第二) 轉成副詞 轉成副詞トハ他品種ノ詞ヨリ轉成セ

ルモノニシテ分チテ五種トス即チ(一) 語尾ニ「ニ」ヲ履ムモノ(二) 「ク」 「シク」 「ケク」 ヲ履ムモノ

(三) 「チ」ヲ履ムモノ(四) 「ト」ヲ履ムモノ(五) 本語ヲ其儘副詞トシテ用フルモノ是ナリ共ニ其語尾ヲ

寫シテ送假名トス

(一) 「ニ」 ヲ履ム副詞 「ニ」ヲ履ム副詞ハ時又ハ所

ヲ示ス名詞及代名詞、「ナル」若クハ「ノ」ヲ帶フル

形容詞及數形容詞ヨリ轉成セルモノナリ其例左ノ如シ
始ニ。終ニ。右ニ。左ニ。東ニ。西ニ。

シ
キ」ヲ履メル形容詞ヨリ轉成セルモノナリ其例左ノ如

(一) 「ク」 「シク」 「ケク」 ヲ履ム副詞「ク」 「シ
ク」 「ケク」 ヲ履ム副詞ハ「キ」 「シク」 若クハ「ケ
ク」 ヲ履ム副詞ヨリ轉成セルモノナリ其例左ノ如
一。美麗ニ。二。寬大ニ。第三。苛酷ニ。丁寧ニ。輕卒ニ。
忽。俱。遠。殿。互。細。誠。速。巧。茲。橫。內。
ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。
假。漫。憩。大。送。新。眞。愚。料。何。縱。外。
ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。
常。濫。特。罕。竊。鮮。健。懇。遙。彼。傍。上。
ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。
重。妄。殊。稀。仄。專。盛。朗。靜。其。中。下。
ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。
頻。更。俄。穩。僅。詳。暖。明。如。前。
ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。
若。共。粹。恣。纒。具。緩。平。後。
ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。

明。高。細。遠。善。
ク。ク。ク。ク。ク。
暗。低。太。近。惡。
ク。ク。ク。ク。ク。
重。白。薄。長。早。
ク。ク。ク。ク。ク。
輕。黑。厚。短。遲。
ク。ク。ク。ク。ク。

嬉シク 悲シク 樂シク 苦シク
 賤シク 貧シク 寂シク 驚シク
 親シク 空シク 宜シク 驚シク
 正シク 美シク 涼シク 安シク
 明ケク 爽ケク 遙ケク 寒ケク
 靜ケク 平ケク 露ケク 寒ケク

又一種動詞一轉シテ形容詞ニ入り再轉シテ副詞ト爲レ
 ルモノアリ其送假名ハ動詞語尾ノ變化スル所ヨリシテ
 寫スコト猶ホ形容詞ニ於ケルカ如シ其例左ノ如シ
 願ハシク 歎カハシク 紛ラハシク
 頼モシク 好マシク 羨マシク

(三) 「テ」ヲ履ム副詞 「テ」ヲ履ム副詞ハ動詞ヨ
 リ轉成セルモノナリ其例左ノ如シ
 初テ 始テ 甫テ 定テ 極テ
 凡テ 都テ 渾テ 總テ 敢テ
 肯テ 以テ 却テ 反テ 因テ
 依テ 就テ 尋テ 次テ 強テ
 兼テ 豫テ 追テ 重テ 續テ

右動詞ヨリ轉成セル副詞ノ送假名ハ正則ニ據ルトキハ
 當ニ動詞語尾ノ變化スル所ヨリ寫スヘキモノニシテ例
 ハハ極メテ 始メテ 總ヘテ 因リテ 就キテ等ノ如
 クニ寫スヘキナレトモ今慣用ニ從ヒ右ニ示セル如ク單
 ニ「テ」ノミヲ寫ス方動詞ト區別スルタメ却テ便宜ナ

ルモノ、如シ故ニ茲ニハ正則ニ據ラスシテ變則ニ從フ
 (四) 「ト」又ハ「トシテ」ヲ履ム副詞 「ト」又
 ハ「トシテ」ヲ履ム副詞ハ漢語ノ語尾ニ「タル」ヲ帶
 ヒテ形容詞ヲ爲セルモノヨリ轉成セルモノナリ其例左
 ノ如シ
 寂然ト 確乎ト 窈窕ト 錚々ト
 寂然トシテ 確乎トシテ 窈窕トシテ 錚々トシテ

(五) 本語ヲ其儘副詞トシテ用フルモノ 本語ヲ其儘
 副詞トシテ用フルモノハ便宜語尾一字ヲ寫シテ送假名
 トス其例左ノ如シ
 初メ 始メ 元ト 素ト 固ト

但シ「ヨリ」ニテ此等ノ詞ヲ受クルトキハ「ヨリ」ノ
 ミヲ寫シテ送假名トス其例左ノ如シ
 初ヨリ 始ヨリ 元ヨリ 素ヨリ 固ヨリ
 (第三) 合成副詞 合成副詞ハ數詞連合シテ副詞ヲ爲セ
 ルモノニシテ其送假名ノ附法ハ總テ本來所屬ノ法ニ從
 フ其例左ノ如シ
 是故ニ 此故ニ 其故ニ 何故ニ 是ニ於テ
 是ヲ以テ 是ノ如ク 斯ノ如ク 何ヲ以テ 之カタメニ
 是カタメ 細長ク 青白ク 手輕ク 待遠ク
 薄暗ク 心易ク 見苦シク 手重ク

(第四) 熟語副詞 熟語副詞ハ送假名ヲ附セス其例左ノ

如シ

大凡 大抵 大概 太約 大略 一切

萬一 過半 總體 大體 全體 畢竟

到底 今般 過般 今日 昨日 明日

昨今 方今 現今 目下 當時 往時

隨時 即今 輓近 近頃 不日 比年

前年 幾計 若干 各自 漸次 逐一

逐次 追次 早晚 流石 只管 以下

今後 以來 爾後 爾來 以上

第一 第三 兩度 數度 數回

但シ一度二度ノ如ク度數ヲ示ス副詞ニシテ訓讀スルモノハ左ノ送假名ヲ附ス

一タビ 二タビ 十タビ 百タビ 千タビ

又再ノ字ニハ單ニ「ヒ」ノミヲ寫シテ送假名トス

(第五) 疊字副詞 疊字副詞トハ同音又ハ同訓ヲ重ネテ

副詞ト爲シタルモノニシテ同音ノモノニハ「々」符ヲ附シ同訓ノモノニハ「」符ヲ附ス其例左ノ如シ

(一) 同音ヲ重ネタルモノ

往々 日々 時々 歳々 漸々

處々 方々 區々 箇々 一々

近々 代々 萬々 懇々 的々

(二) 同訓ヲ重ソタルモノ

抑々 倍々 益々 愈々 彌々

屢々 數々 各々 人々 夫々
次々 會々 偶々 適々 諸々
交々 間々 世々 常々 折々
熟々 吳々 緩々

○接續詞

接續詞ニ本然ノモノアリ他詞ヨリ轉シタルモノアリ又數詞相連リタルモノアリ共ニ其數僅少ナルヲ以テ今一々其類ヲ分ク

第十八則 又、亦、及ノ三詞及就中、加之等ノ熟字接續詞

ハ總テ送假名ヲ附セス

第十九則 前則外ノ接續詞ニシテ數詞連合ニアラサルモノ

ハ便宜其語尾一音若クハ數音ヲ寫シテ送假名トス

第二十則 數詞連合ノ接續詞ハ總テ各品詞本然ノ送假名法

ニ從フ

〔釋例〕

(第一) 送假名ヲ附セサル接續詞 送假名ヲ附セサル接續

詞ニ單字ノモノト熟字ノモノトノ二アリ其例左ノ如シ

又 亦 及 就中 加之 設若 假令 縱令

就中 加之 設若 假令 縱令

(第二) 送假名ヲ附スヘキ接續詞 送假名ヲ附スヘキ接續

詞ニ語尾一音ヲ寫スモノト數音ヲ寫スモノト、二アリ

其例左ノ如シ

- 111 -

嗚呼
吁嗟
噫
嘻

(第二) 假名ニテ寫ス咏嘆詞 假名ニテ寫ス咏嘆詞ハ別ニ送假名ノ附スヘキナシ其例左ノ如シ

カナ ヤ ヨ カ

右等ノ咏嘆詞ノ内「カナ」「ヤ」ノ如キハ句調ニ依リテ哉乎ト漢字ニテ寫スコトモアルヘケレトモ通常ノ場合ニ於テハ皆假名ニテ寫ス可トス

音便ノ事

音便トハ口調ニ依リ正音ノ轉シテ他音ト成リタルモノニシテ其種類ハ大概左ノ如シ

第一

第一 キノ音ヨリ流レテイトナレルモノ
 衡立^{ツキガキ} ヲ 衡立^{ツキガキ} 朔^{ツキガキ}
 築^{ツキガキ} ヲ 築^{ツキガキ} 朔^{ツキガキ}
 多^{ナホ} ヲ 多^{ナホ} 善^{ヤシ}
 抱^{イダ} ヲ 抱^{イダ} 善^{ヤシ}
 就^{ツキ} ヲ 就^{ツキ} 叩^{ツキ}
 就^{ツキ} ヲ 就^{ツキ} 叩^{ツキ}

此等ノ詞ハ其名詞ナルモノハ通常其音便ノ儘ニ傍假字ヲ寫スト雖モ其他ハ概ネ皆正則ナル變化ニ從ヒテ之ヲ寫ス可トス尤モ純然タル和文物語文體ニ於テハ音便ノ儘ニテ之ヲ寫スモ妨ナシ

第二

第二 クノ音ヨリ流レテウトナリタルモノ
 長^{ナガ} ク シ テ ヲ 長^{ナガ} ク シ テ ヲ
 重^{オモ} ク シ テ ヲ 重^{オモ} ク シ テ ヲ
 宜^{ヨシ} シ ク シ テ ヲ 宜^{ヨシ} シ ク シ テ ヲ

此等モ純然タル和文ノ外ハ正法ニ從ヒテ寫ス可トス

第三

第三 チヲ轉シテツト呼フモノ
 立^{タツ} チ テ ヲ 立^{タツ} チ テ ヲ
 斷^{タツ} チ テ ヲ 斷^{タツ} チ テ ヲ
 放^{タツ} チ テ ヲ 放^{タツ} チ テ ヲ
 勝^{カチ} チ テ ヲ 勝^{カチ} チ テ ヲ

第四

第四 リヲ轉シテツト呼フモノ
 限^リ リ テ ヲ 限^リ リ テ ヲ
 取^リ リ テ ヲ 取^リ リ テ ヲ
 語^リ リ テ ヲ 語^リ リ テ ヲ
 飾^リ リ テ ヲ 飾^リ リ テ ヲ
 偽^{イハ} リ テ ヲ 偽^{イハ} リ テ ヲ

第五

第五 ヒヲツニ轉シテ呼フモノ
 戰^ヒ ヒ テ ヲ 戰^ヒ ヒ テ ヲ
 奮^ヒ ヒ テ ヲ 奮^ヒ ヒ テ ヲ
 窺^ヒ ヒ テ ヲ 窺^ヒ ヒ テ ヲ
 歌^ヒ ヒ テ ヲ 歌^ヒ ヒ テ ヲ

第六

第六 ヒヲフト轉シテ呼フモノ
 思^ヒ ヒ テ ヲ 思^ヒ ヒ テ ヲ
 沿^ヒ ヒ テ ヲ 沿^ヒ ヒ テ ヲ
 言^ヒ ヒ テ ヲ 言^ヒ ヒ テ ヲ
 救^ヒ ヒ テ ヲ 救^ヒ ヒ テ ヲ

第七

第七 ミヲンニ轉シテ呼フモノ
 涙^ミ ミ テ ヲ 涙^ミ ミ テ ヲ
 嚙^ミ ミ テ ヲ 嚙^ミ ミ テ ヲ
 病^ミ ミ テ ヲ 病^ミ ミ テ ヲ
 飲^ミ ミ テ ヲ 飲^ミ ミ テ ヲ

第八

第八 ビヲンニ轉シテ呼フモノ
 病^ビ ビ テ ヲ 病^ビ ビ テ ヲ
 嚙^ビ ビ テ ヲ 嚙^ビ ビ テ ヲ
 飲^ビ ビ テ ヲ 飲^ビ ビ テ ヲ

但シ必要ノ場合ニハ濁音ヲ附シテ之ヲ別ツコトアルヘシ
アラサルヘカラス

飛^トビ^ビテ^テ ヲ 飛^トン^ンテ^テ 浮^ウビ^ビテ^テ ヲ 浮^ウン^ンテ^テ
呼^コビ^ビテ^テ ヲ 呼^コン^ンテ^テ 結^{ムス}ビ^ビテ^テ ヲ 結^{ムス}ン^ンテ^テ
悦^エビ^ビテ^テ ヲ 悦^エン^ンテ^テ 擇^{ハル}ビ^ビテ^テ ヲ 擇^{ハル}ン^ンテ^テ
轉^{クル}ビ^ビテ^テ ヲ 轉^{クル}ン^ンテ^テ

第九 リ^リヲ^ヲニ^ニ轉^{クル}シ^シテ^テ呼^コフ^フモノ^{モノ}アリ
盛^{サカ}ナ^ナリ ヲ 盛^{サカ}ナ^ナリ ヲ 畢^{ハル}リ^リヌ^ヌ ヲ 畢^{ハル}ン^ンヌ^ヌ
件^{ケン} ヲ 件^{ケン} ヲ 去^サリ^リヌ^ヌ ヲ 去^サン^ンヌ^ヌ
第十 ク^クヲ^ヲ流^ナレ^レテ^テウ^ウト^トナ^ナリ^リ更^スニ^ニ轉^{クル}シ^シテ^テン^ント^トナ^ナレ^レル^ルモノ^{モノ}

重^{オモ}ク^クス^ス 重^{オモ}ウ^ウス^ス 重^{オモ}ン^ンス^ス 輕^{カウ}ク^クス^ス 輕^{カウ}ウ^ウス^ス 輕^{カウ}ン^ンス^ス
賤^{イシ}ク^クス^ス 賤^{イシ}ウ^ウス^ス 賤^{イシ}ン^ンス^ス 安^{ヤス}ク^クス^ス 安^{ヤス}ウ^ウス^ス 安^{ヤス}ン^ンス^ス

右十ノ音便ノ内名詞ヲ成セルモノハ大低平常文ニモ其儘
ニ傍假字ヲ附シテ妨ナシト雖モ其餘ノ詞ニ至リテハ讀癖
ニ任セテ音便ノ儘ニ讀ムハ別ニ仔細ナシ然レトモ明ニ辭
ヲ綴リ文ヲ作ルニ方リテハ須ラク正法ノ變化ニ從ヒテ之
カ送假名ヲ寫スヲ可トス

○略字及濁音字ノ事

古來慣用ノノ 厶 卩 乙 等ノ略字ハ總テ之ヲ用ヒス
シテ トモ トキ コト ナリ ト寫ス

又濁音字ニハ固有名詞ノ外濁音符ヲ附セス其例左ノ如シ

誰^{タレ}カ^カタ^タメ 出^イツ^ツ 過^スク^ク 論^ロン^ンス^ス 得^エス^ス 甚^シハ^ハダ^ダ
幾^{ナニ}ト^ト 何^{ナニ}ソ^ソ 未^ミタ^タ 必^{カナラ}ス^ス 然^{シカ}レ^レト^トモ
先^マツ^ツ 再^{マタ}ヒ^ヒ

中根 淑 送假名大概 (明治三十八年十月)

本書著作ノ越意

日本中古以來、假名交リ文漸ク行ハレ始メケルニ、其ノ文ノ便利ナルヲ以テ、後世ニ及ビテハ、公私ノ文書ヲ初メトシテ、諸君ノ著者ニモ皆之ヲ用ヒ、今日ニテハ之ヲ國文ト稱シテ、我ガ國隨一ノ文章トスルニ至レリ、然レドモ此ノ文章ヲ屬スルニ當リテ、漢字ノ末ニ假名ヲ送ルコトヲ論ジタル者ハ、昔ヨリ未ダ見ザル所ナリ、余明治五年陸軍兵學寮ニテ兵部日本地理小誌ヲ撰述セシトキ、始メテ送り假名ヲ一足セント思ヒシカド、當時大イニ上木ヲ急ギシカバ、唯大方ニ取捨シテ止ミヌ、同ジキ八九年ノ頃、日本文典ヲ作ルニ及ビ、其ノ附録トシテ、附ケ假名送り假名ノ二篇ヲ掲ゲ、略之ヲ論ジタリシガ、其ノ頃ハ是等ノ事ニ意ヲ注クル者モナク、余モ又一々ハ其ノ說ヲ守ラザリキ、是一ツニハ、余ガ說ノ法則ニ拘泥シテ實用ニ不便ナル者儘アルヲ以テナリ、同ジキ十五年、西村茂樹君文部省編輯局長タリシトキ、小學教科書ノ送り假名ヲ一定セント思ヒ立タレテ、余モ時々其ノ議ニ關リ、頓テ其ノ書成リタリ、此ノ時專ラ之ヲ擔任シタルハ内田嘉一君ナリ、爾來右編輯局出版教科書ノ送り假名ニ甚ダシキ不同ナカ

リシハ、實ニ君ノ力ナリ、其ノ後二十二年ニ至リ、官報局ニテ送り假名ヲ定メタリト聞キシカド、當時之ヲ見ルベキ必要モアラザリシカバ、今日マデ如何ナル法ナリヤエ知ラザリシ、頃者金港堂書籍會社ニ於イテ、同會社出版ノ書籍ハ一定ノ送り假名ヲ用ヒントノ議起リテ、余其ノ撰定ノ依頼ヲ受ケタリ、因ツテ參考ノ爲メ始メテ官報局ノ送假名法ヲ閱シタルニ、是ハ旨ト余ガ二十年前ニ作リタル日本文典中ニ用ヒタル品詞ノ名稱言語ノ配置ト文部省ノ送り假名寫法トヲ彼此打チ混ジ、而シテ更ニ送り假名ニ必要ナキ者ヲ書キ添ヘタルニ過ギザレバ、竟ニ參考トスルニハ足ラザリキ、サレバ今此ニ作リ出デタル書ハ、余ガ當初日本文典ニ掲ゲタル者ト、文部省ノ送假名寫法トヲ根本トシ、其ノ便ナルハ存シ、其ノ不便ナルハ改メ、以テ簡ニシテ遮ヒ易キヲ主眼トシタル者ト知ルベシ、世或ハ余ヲ以テ送り假名規則ノ首唱者ト思フ者アレド、是決シテ然ラズ、之ヲ書ニ筆シタルハ余ガ日本文典コソ初メナレ、サレド之ヲ可否討論シタルハ、當時陸軍參謀局ニ同ジク職ヲ奉ジタリシ陸軍少佐木村信卿ト文部省編輯局員那珂通高トノ二君ナリ、故ニ余ガ論ジタル項中ニハ、此ノ二君ノ意見ニ係ル者モ少カラズ、縱ヒ過チハ己獨リ之ヲ受ケテ辭セザルモ、功ハ決シテ一人之ヲ占ムベキニアラズ、因ツテ之ヲ錄シテ以テ世ノ人ニ告グ、

送り假名ノ規則ヲ設クルニハ、先ヅ送り假名ハ何ノ爲メニ著クルヤヲ詳カニスルコト肝要ナリ、往昔漢文ニ捨テ假名ヲ附

ケタルガ即チ假名交リ文ノ漢字ニ假名送ル本ニシテ、唯「人ヲシテ讀ミ易カラシム」ノ一言以テ之ヲ蔽フベシ、サラバ古代ノ文ニ送リ假名ノ寡キハ如何ニト云フ者アラン、蓋シ古人ハ讀書ノ難易ニ甚ダ心ヲ措カズ、大抵ハ先ニ漢籍ヲ讀ミテ、後ニ國文ヲ修メタレバ、是等ノ疎漏ハ、サマデ心ニ感ゼズ、而シテ板本軍書ノ如キニ至リテハ、捨テ假名多キヲ以テ送リ假名ヲ略シタルナリ、且夫古人ハ、假名交リ文ノ中ト雖モ、往々漢文ノ如キ反リアル字句ヲ挿ムコトアリ、是文章ノ體製猶幼稚ニシテ、未ダ十分ノ發達ヲ得ザリシヲ以テナリ、然ルニ方今ハ國家年ヲ逐ヒテ文華ニ進ミ、政府其ノ文柄ヲ執リ、滿天下ノ人ヲ驅ツテ、幼ヨリ學ニ就カシムル時ナレバ、維新以前ノ學ブモ學バザルモ唯其ノ人ノ欲スル所ニ一任シタル時トハ、大イニ其ノ形勢ヲ異ニセリ、サレバ苟モ文字ニ從事スル者ハ、務メテ後生ノ爲メニ其ノ書ヲ讀ムニ易カラシムコトヲ圖ラザルベカラズ、是送リ假名ニ一定ノ規則アラシムコトヲ望ムニエンノ第一義ナリ、

送リ假名法ヲ立ツルニハ、務メテ簡ニシテ易カラシムコトヲ要ス、譬ヘバ此ニ一法ヲ立ツルモ、其ノ法ノミニテ通ゼザルトキハ、更ニ又特別法ヲ設ケザルヲ得ズ、而シテ此ノ特別法ニ歸スル者多クレバ、前ノ法ト並ビ立チテ、全ク二ツノ法トナルナリ、此クノ如クシテ法ニ法ヲ重ネ行クトキハ、終ニ繁冗ニ勝ヘザラントス、故ニ法ヲ立ツルニハ、必ズ條項少クシテ據リ易キヲ以テ第一ノ目的トス、然レドモ只一ニ法ニ任ズル

トキハ、是ヲ以テ反ツテ不便ヲ來シ、終ニ法ナキノ勝レルニ如カザルコトアリ、サレバ其ノ間ニ處スルニハ、先ヅ瑣細ノ不便ハ、之ヲ忍ビテ法ニ據ラシメ、而シテ其ノ甚ダ不便ナル者ハ、別ニ之ガ爲メニ一格ヲ設クベキナリ、倘シ瑣細ノ不便ヲモ忍ブ能ハザルトキハ、千歳ヲ經トモ、法ノ立ツベキ期アルコトナシ、故ニ送リ假名ヲ一定スルニハ、則チ法ヲ先トシ、便利ヲ次ギトスルノ意ヲ以テセザルベカラズ、前ニ論ゼシ如ク、送リ假名ハ人ヲシテ書ヲ讀ミ易カラシメンガ爲メナルモ、或ハ法ノ爲メニ假名ヲ制限シテ、反ツテ讀ミ難カラシムルコトナシトセズ、然レドモ是百中ノ一ナルガ上ニ、文章ノ勢ヒ必ズ誤讀ノ恐レナキ者ナリ、譬ヘバ「若シ」ト「若シ」、「盡ク」ト「盡ク」、「少シ」ト「少シ」ト「少シ」トノ類ニテ、形ハ同ジキモ、事ノ上ニ於イテ必ズ讀ミ分ツコトヲ得ルガ如シ、（英語「スプリング」ハ、「春」「泉」「彈機」「根原」等ノ數義アレドモ、前後ノ文ニ由リテ、會テ誤ルコトナキガ如シ）又「自ラ」ト「自ラ」トノ如キモ、其ノ用ヒ所ニ由リテ、必ズ輒ク讀ミ分クベシ、ヨシ誤リテ讀ミ違ヘタリトモ、此ノ二ツハ元同義ノ語ニテ、「躬ツカラ」ト「己ツカラ」トナレバ、義理ニ於イテハ少シモ違フコトナキナリ、是等ノ境ニ老嫗心ヲ起シテ裁然タルニ能ハザルトキハ、法ハ終ニ法ナキニ終ルベシ、

法ハ便利ノ最モ多キ處ヲ擇ビテ立ツルヨリ善キハナシ、固ヨリ送リ假名ニ原則ナド云フ者アラザルヲ以テナリ、余初メ其

ノ規則ヲ日本文典ニ載スルニ方リ、副詞ノ「蓋シ」「概ネ」ノ類ハ、其ノ字中ニ「ゲダシ」「オホムネ」ノ語ヲ含ミタル者ナレバ、更ニ又「シ」ヲ送リ「ネ」ヲ送ルニ及バズトノ意ナリキ、後西村茂樹君、此等ニハ便利ノ爲メ假名ヲ送ラント思ヘド、理ニ於イテ斷ジテ送ルマジヤ、ト問ハレタルコトアリ、余之ニ答ヘテ曰ハク、便利ヨリ云ハバ、送ル方宜シカルベシ、余ガ初メニ理ト思ヒシコトモ、必ズシモ理トモ覺エズ、サルハ動詞ノ「飽キ」「押シ」ノ「キ」モ「シ」モ、實ハ字中ノ聲ニテ、「飽」ハ「ア」「押」ハ「オ」トノミ訓ズルニ非ザレバ、「蓋シ」ト書スモ「概ネ」ト書スモ何ノ不可アラシ、ト云ヘリシヨリ、遂ニ之ニ決シタルコトアリキ、斯クノ如ク理ハ何レニモ附キテ、是ヲ原則ト定メ難キ者ナレバ、唯便利多キ方ニ法ヲ設ケテ、其ノ瑣細ノ不便ヲ忍ブヨリ外、別ニ良法ハアラザルナリ、

名詞中、動詞ヨリ變ジ來リタル者ニハ、假名ヲ送ルト送ラザルトノ論者アリ、今一切之ヲ送ルコトニ定ム、然ルトキハ、異例ナル「人笑ヘ」「空頼メ」「振ル舞ヒ」「刈ル萱」ナド云フモ、皆誤讀ノ處ナカルベシ、其ハ僅ニ二三ニ過ギザルコトナガラ、「向キ」ト「向カヒ」、「渡シ」ト「渡リ」、及ビ「往來ス」「溺死ス」等ノ如キ、音讀ト訓讀トノ分別ナキ類ハ頗ル多シ、而シテ是等ノ爲メニ謂ハユル特別法ヲ設クルトキハ、則テ例ノ法ヲ繁雜ニスル者ニシテ、法アルガ故ニ反ツテ人ヲ煩ハスニ至ルベシ、又或ハ小學教員ノ中ニハ、讀本中領收書

ノ書式ニハ、「請取」トノミアルヲ、文章ノ方ニハ、「請ケ取り」トヤウニ假名ヲ送ルハ、實ニ兒童ヲ惑ハスノ基ナリ、ト云ヘル人アリト聞ク、是大イニ辨ゼザルベカラズ、其ノ假名ヲ送ル送ラザルノ可否ハ姑ク舍キ、先ヅ第一ニ、文章ト日用ノ書類ト必ズ一致セシメント欲スルハ、最も心得難キコトナリ、譬ヘバ電信ノ文ヲ見ヨ、唯簡ニシテ盡スヲ主トスルガ故ニ、事ノ辨ズル限リハ、主客モ省キ、天爾^テ遠波^ハモ省キ、助動詞モ省キ而シテ幾千幾百幾十幾箇ト云フハ、唯四ツノ數字ヲ重ヌルノミナルニアラズヤ、今電信ニ斯ク用フル故、讀本ノ文モ斯クセヨト云ハバ、豈理ナランヤ、蓋シ書籍中ノ文章ハ、唯送り假名ノミニ止ラズ、其ノ他ノ事モ、務メテ法ニ據ラザルベカラズ、決シテ暖簾看板領收書ト其ノ科ヲ同ジクスベカラズ、況ヤ我が國ノ尺牘文ノ如キ、舊ヲ守リテ少シモ進マズ、其ノ文字ノ用法、大イニ書籍中ノ文ニ異ナル所アリ、是等ヲモ異議ナク授クル者ノ、反リテ「請ケ取り」ノ如キ書キ方ヲ非難スルハ、豈偏見ノ甚ダシキナラズヤ、若シ「請取申候」ノ類ヲ標準トシテ論ズルトキハ、遂ニ一切ノ動詞ニモ、假名ヲ送ラザルヲ正シトスルニ至ルベシ、斯カル領收書ノ如キ、帳簿ノ如キ、願書ノ如キ、文字ノ用法ニ異同アルコトヲ詳カニ教ヘテコソ、教員ノ教員タル所モアレ、其ノ分別ヲ説明スルニ能ハズシテ、之ヲ書籍ニ一任セントナラバ、教員ノ尊キ所、余其ノ何處ニ在ルヲ知ラザルナリ、

往昔漢字ニ日本ノ譯語ヲ附スルニ方リテハ、實字ト虛字トノ

別ナク、吾ガ一語ニ合フ者ハ一語ニ、二語ニ合フ者ハ二語ニ、三語四語ニ合フ者ハ三語四語ニ訓ジ、必ズ實字ニハ名詞、虛字ニハ動詞ヲ充ツベシトハ定メザリシナリ、故ニ「驪」(鬼馬)「鞋」(藁靴)ノ如キアリ、「炎」(火ノ穗)「源」(水ナ本)ノ如キアリ、「宮」(御屋)「徑」(小道)ノ如キアリ、「松」(草切ル)「瞬」(目叩ク)ノ如キアリ、「陷」(落チ入ル)「挿」(差シ挟ム)ノ如キアリ、或ハ「詔」(御言宣リ)「動」(稍モ爲レバ)ノ如キアリ、「將」(當)「使」ノ如キハ、先ヅ第一ノ訓ヲ讀ミテ、再ビ下ヨリ第二ノ訓ヲ讀ムニ至ル、此ク便ニ從ヒ、種々ノ詞ヲ組ミ合ハセテ訓ジタル者ナレバ、語中ニ含ム文字ハトマレヌクマレ、語尾ノ假名ノ送り方ニ於イテハ、理ヲ以テ一定スル能ハズ、是余カ務メテ便利多キ所ニ就キテ法ヲ求メタルユエンナリ、

送り假名ハ、漢字ノ音訓ト假名トヲ交ヘ書スルニ由リテ生ズル者ナレバ、吾ガ國ノ外ニハアルコトナシ、而シテ之ヲ論ズルハ、文法ヲ論ズルトハ大イニ其ノ趣キヲ異ニス、故ニ文法ハ、詞ノ品種ヲ一々學ゲテ之ヲ極ムルヲ專用トスルモ、送り假名ニハ、後詞ノ如キ、感謝詞ノ如キ、本來ノ名詞ノ如キ、動詞中ノ佐行奈行變格ノ如キ、將ク動詞形容詞ノ働キノ下ニ附ク助動詞「行キタリ」「至ルナリ」「善キカナ」「嬉シカリケリ」ノ類)ノ如キハ、之ク之ヲ論ズル必要ヲ見ズ、又漢語動詞ノ下ニ添フル「シ」「ス」「セ」、(「録シ」「書ス」ノ類)漢語形容詞ノ下ニ添フル「タリ」「タル」及ビ「ノ」(「肅然

タリ)「悠々タル」「堂々ノ陣」ノ類)ノ如キ、何人モ萬ガ萬曾テ説ルコトナキ者ハ、皆説キ及サズ、是送り假名ハ文法ト同ジカラザルヲ以テナリ、

凡 例

一 漢字ニ送り假名ヲナスハ、本讀ミ易カラシメンノ趣意ナレバ、送ル送ラザルノ分別決シ難キ者ハ、總ベテ送り方ニ定ム、

一 動詞ニテ一たび定リタル送り假名ハ、名詞副詞接續詞等ニ變ズルトキモ、其ヲ改ムルコトナシ、代名詞ノ副詞トナリ、形容詞ノ名詞又ハ副詞トナルモ、副詞ノ接續詞トナルモ、皆相通ジテ異ナルコトナシ、是法ヲ簡ニシテ守リ易カラシメンガ爲メナリ、

一 特別法ハ、原己ムヲ得ザルニ出ヅ、故ニ多ク之ヲ設クルハ尤モ不可ナリ、因ツテ此ノ條中ニハ、務メテ之ヲ設ケズ、唯名詞ノ第六條副詞ノ第二條ノ二ツアルノミ、

一 語尾又ハ助動詞等ニ異ナル所アルモ、理ニ於イテ一法ニ歸著スル者ハ、總ベテ一類中ニ收ム、之ヲ分ツトキハ、イト煩ハシキガ爲メナリ、「高サ」「サ」「強ミ」「弱ミ」ヲ一類トシ、「靜カナル」「古ビタル」ヲ一類トシ、「近ヅク」「棹サス」「法トル」「横タフ」ヲ一類トスルガ如シ、

一 毎詞題名ノ次ギヘ説約ノ文ヲ學ゲタルハ、人ノ記憶シ易

カラシコトヲ欲シテナリ、又詞中ノ條項毎ニ一々鄙見ヲ添ヘタルハ、其ノ法ト便トノ理由ヲ説キ、且語原ヲ探リテ、解シ易カラザル詞ノ因ツテ來ル所ヲ明カシタルナリ、

一「我」「吾」「余」「則チ」「即チ」「乃チ」及ビ「行フ」「往ク」「適ク」「之ク」ノ如ク、文字異ナルモ訓釋同ジキ者ハ、其ノ一二ヲ舉ゲテ餘ヲ略シタリ、サレド漢字ヲ使用スル上ニハ、縦ヒ和釋ハ同ジトモ、一方ニ字義ヲモ重ンズレバ、此ヲ舍テテ彼ヲ取ルコトアルハ免レザル所ナリ、但シ送り假名ニ差違ナキ者ハ、都ベテ省略ス、

一 附録ノ數條ハ、送り假名ト相待ツテ國文ヲ整フル者ナレバ、是又等閒ニ看過スベカラズ、唯余ガ淺學寡聞ナル、本書ト云ヒ附録ト云ヒ、猶考究ノ盡サザル者多カルベシ、世ノ學者諸君ヨ、書中ノ一語一項ニ論ナク、更ニ便利ノ良法アラバ、幸ヒニ教誨ヲ咨シマザレ、余不敏ト雖モ決シテ之ヲ改ムルニ踟躕セザルベシ、

名 詞

名詞ノ送り假名ヲ一括シテ云ハバ、土地姓氏書籍神祠佛宇公廳校舍橋梁船舶等ノ名ハ、如何ナル動詞アリトモ、漢字ノミヲ書シ、普通ノ語ノ動詞形容詞ヨリ變ゼル者ハ、其ノ元ノ形ニ從ヒ、又音訓ノ誤リ易キ者ハ、一字ノ假名ヲ送ル、

飽キ 押シ 恥ヂ 報イ 驅ケ 瘦セ

右ハ本四段中二段下二段ノ動詞ナリ、此クノ如キ單純ナル動詞ノ名詞トナルニハ、一切假名ヲ送ラザル論者アレド、之ヲ實地ニ試ムルニ、音訓ノ誤リヲ生ズル者、「便」ト「便リ」、「餘」ト「餘リ」ノ類、又ハ語尾ノ辨ジ難キ者「返リ」ト「返し」、「暮レ」ト「暮シ」ノ類、多ケレバ、總ベテ假名ヲ送ルヲ善シトス、又「福ヒ」「勢ヒ」「類ヒ」ノ類、「扇ギ」「帶ビ」「疊ミ」ノ類モ、名詞トシテハ其ノ體裁宜シカラズト云フ者アレド、一ハ音訓ノ誤リナキ爲メ、一ハ規則ノ不同ナカラシガ爲メニ、是又假名ヲ送ルベシ、

入替^レ替^レ 折^レ反^レ 請ケ取リ 書キ付ケ

右二重動詞ノ名詞トナル者ノ中、上ノ二語ノ類ハ、俄ニ見テハ何レモ讀ミ分ケキ故ニ、二語共ニ假名ヲ送ル、次ギノ二語ノ類ハ、必ズシモ然ラザルモ、一法ニ歸センガ爲メニ亦之ニ倣フ、

燈シ火 願ヒ書 染メ物 植エ木 或ル人 行ク末 來シ方

右上ニ動詞ヲ戴キタル名詞モ、亦其ノ動詞ニ假名ヲ送ル、「染メ物」「植エ木」ノ類ハ、音讀ニ誤ル恐レナキモ、前ノ類ト一定センガ爲メニ同ジ法ニ從フ、「或ル人」「行ク末」「來シ方」ノ類ハ動詞助動詞ノ連體言ヲ被リテ、前トハ少シ異ナレド、熟シテ名詞トスル上ハ、猶此ノ一類タルベシ、

此ノ類ハ、道理ヨリ云フモ便利ヨリ云フモ、共ニ假名ヲ送ルベシ、

右何レモ語原ヲ究ムレバ、動詞ヨリ來レル者ナレドモ、此

ノ文字ヲ以テ段ノ働キヲ爲サシムルコトモ非ザレバ、皆元來ノ名詞ノ如ク假名ヲ送ラズ、「鎧」「鎧」ノ類モ、今ハ勅詞ニ用ヒザレバ、此ノ一類ニ加ヘテ可ナルベシ、

此ノ類ハ、本假名ヲ送ルベキニ在ラネド、一見シテ讀ミ易

カランガ爲メニ斯ク書ス、此ノ外「上」ト「上」ト「中」ト「中」ト「下」ト「下」ト「下」ト「下」トノ類ハ、語尾ノ假名ヲ記

サザルモ、大方辨ズベシ、或ハ讀ミ違フトモ、更ニ害ゲナカルベシ、〔古ヘ〕ハ、前々條ノ「後ヘ」ト同ジ類ニ見ユレドモ、「古」ノ一字ニ「往ニシヘ」ノ訓ヲ與ヘタルナレバ、「後」ニ「ヘ」ヲ添ヘタルトキハ自ラ異ナリ、

善シ 惡シ 悲シミ 樂シミ

形容詞ヨリ變ジテ名詞トナル者ハ、右ノ如ク本ノ詞ト同ジ形ニ書ス、

代名詞

代名詞ノ送り假名ヲ總括シテ云ハバ、「我」是「其」彼ノ類ニ「レ」文字ヲ送ラザルコトト、「何」^{ナニ}「如何」^{イカニ}等ニ

區別アルコトノ一ツニテ、大概ヲ盡セリ、
我^ワ我^シ汝^ナ汝^{ナレ}汝^{ナニチ}彼^カ彼^{カレ}己^シ己^{シレ}誰^タ誰^{タレ}

「我」ハ「ワ」トモ「ワレ」トモ訓ズ、「汝」以下ノ文字
皆同例ナリ、唯「汝」ト「汝」トハ、後世用ヒズシテ、之
ニ換フルニ「汝」ヲ以テス、

「己」ハ「レ」文字ヲ送ラザレバ、「己ニ」誤リ易シト云フ者アリ、サレド是ハ文義ノ上ニテモ誤ラザルノミナラズ、字畫ニ注意スレバ、決シテ誤ルコトナシ、則チ「オノレ」ト十干ノ「ツチノト」ハ、共ニ己（音紀）ナリ、「スデニ」「ヤム」「ヲハル」ハ、共ニ巳（音以）ナリ、十二支ノ「ミ」ハ、巳（音以）ナリ、書ク人モ讀ム人モ、善ク此ノ別ヲ辨フベシ、

「我が輩」ヲ「我輩」ト書クハ、宜シカラズ、縦ヒ一ノ熟語ト見做スモ、「ガ」文字ハ必ズ送ルベシ、是「君ガ代」

「梅ガ枝」ノ類ナレバナリ、

是^コ是^コ其^{ソレ}其^{ソレ}彼^{カレ}彼^{カレ}何^{ナニ}何^{イカ}如^{ガニ}何^{イッ}レ何^{イッ}處^コ何^{イッ}地^チ何^{イッ}時^ツ

右事物ニ用フル代名詞モ、前ノ人代名詞ト異ナルコトナシ、(古クハ我ヲ「ア」トモ「アレ」トモ云ヒシガ、後世ハ用ヒズ、)「是ノ」「其ノ」等ハ、「ノ」文字ヲ書スルコト勿論ナリ、又文字ニ就キテ其ノ差別ヲ云ハバ、「是」「此」「茲」等ハ「ココ」トモ訓ズレドモ、「之」ハ「ココ」トハ訓ゼズ、「爰」ハ「ココ」トハ訓ズレドモ、「コ」トモ「コレ」トモ訓ゼズ、畢竟漢文中ノ用ヒ方ニ、少シ異同アルヲ以テ、

訓ニモ自ラ廣狹アルナリ、「其^ツハ」「其ノ」ト誤リ易キニ似タレド、「ノ」文字ノ有無ニテ明カニ辨ズベシ、疑問ノ意味ヲ含メル「何^{ナニ}」以下ノ六ツハ、副詞ト通用スルコト多シ、送り假名ハ雙方共ニ異ナルコトナシ、猶副詞ノ部ニ委シク言フベシ、

形容詞

形容詞ノ送り假名ヲ約メテ言ハバ、「シ」「キ」「善^キ」「清^キ」ノ類、「シ」「シキ」「惡^シ」「嬉^シ」ノ類ノ働キアル假名ヲ皆送ルコト、「靜カ」「裕カ」ナドノ「カ」「健ヤカ」「賑ヤカ」ナドノ「ヤカ」ヲ送ルコト等ヲ心得レバ、其ノ餘ハ大抵誤ルコトナシ、

善^キ 清^キ 忝^シ 惡^シ 嬉^シ 樂^シ 靜^キ 遙^キ 羨^シ 急^シ
忌^マ ハシキ 歎^カ ハシキ 穢^ハ シキ 紛^ハ シキ

動詞ヨリ變ジ來ル「羨マシ」「急ガシ」ノ類ハ、變化ノ文字ヨリ送ルコト勿論ナリ、「好モシ」「頼モシ」「狂ホシ」ハ「好マシ」「頼マシ」「狂ハシ」ノ轉ナルベケレバ、是又「モ」「ホ」ヲ送ルベシ、「忌マハシ」「歎カハシ」ノ類モ、變化ノ文字ヘ「ハシ」ヲ添フベシ、「穢ハシ」「紛ハシ」ノ「ラ」ハ變化ナラザル故、別ニ送ルベカラズ、是等ノ異同善ク察スベシ、

稀ニハ「嬉シ涙」「長々シ夜」ノ如ク「キ」ヲ省キテ形容スル者アレド、是等ハ皆一ノ熟語ナリ、サレド假名ハ必ズ

送ルベシ、右同類中「同ジ」ト云フ語ハ熟語ナラザルトキモ屢々「キ」ヲ省キテ用ヒラル、コトアリ、但シ送り假名ノ上ニハ、サマデ論ズルニハ及バザルナリ、「ラシ」ト云フ詞ノ上ニ戴クハ、大方名詞ナレドモ、或ハ動詞ヨリ轉ジテ「羨ラシ」「愛ヅラシ」「辱ヅカシ」モ同ジ類ナリ）ナドト云フモアリ、皆其ノ語ノ下ヘ「ラシ」ト送ルベシ、

高サ 低サ 嬉シサ 苦シサ 靜ケサ 長閑ケサ 強ミ 弱ミ
「サ」ハ分量トサマトヲ形容シ、「ミ」ハ意思トサマトヲ形容ス、右「嬉シサ」「苦シサ」ノ外ハ誰人モ誤ルコトナカルベシ、「重ゲ」「輕ゲ」ノ「ゲ」モ、形容ノ意ナレドモ、是ハ「酒氣^{サウケ}」「熱氣^{ショウケ}」ノ「氣^ケ」ト同ジ語ニテ、一種ノ名詞ナレバ、假名ニテ記ストモ、送り假名ニハ非ズ、又「露ケシ」ト云フ詞ハ、此ノ類ノ中ヨリ變ジタルナルベシ、前ニ示シタル「靜ケシ」「遙ケシ」ノ類ニ、名詞ヨリ變ゼルハ是ノミナレバナリ、

靜カナル 裕カナル 小サナル 大^イナル 黄ナル 斜ナル
愚カナル 疎ツカナル 盛^シナル 古ビタル 荒ビタル

「ナル」ノ上ニ冠ル詞ハ、本來何ノ詞タルニ拘ラズ、語尾ニ變化アルカ、音訓ノ誤讀シ易キ者ハ、此ク假名ヲ送ルベシ、「古ビタル」「荒ビタル」ノ類ハ、共ニ「ル」文字「ラ」文字ヲ送ルベカラズ、

健ヤカ 賑ヤカ 穩ヤカ 細ヤカ 速ヤカ

是等ノ詞ハ、皆「ヤカ」ヲ送ルベシ、サスレバ「穩シ」「賑ハシ」「細々」ナドト書ク爲メニモ便リ善シ、「適サカ」「吝サカ」モ、同ジク「サカ」ヲ送ルベシ、

一ツ ニツ 三ツ 廿チ 三十ヂ

「ツ」ハ、漢字ノ「箇」ノ義ニテ、數ノ語尾ニ非ザレバ、必ズ別ニ添フベシ、「チ」ハ「ツ」ニ同ジク「ヂ」ハ「チ」ノ音ノ濁レルナリ、

動、詞

動詞ハ送り假名ノ根本トモ云フベキ者ナリ、今其ノ大要ヲ云ハバ、「變化ノ文字ヨリ送ル」ト云フコト、一言以テ之ヲ盡セリ、サレド第一ノ變化ハ論ナキモ、再ビ變化スル者（「變ヘ」ノ「變ル」トナル類）ト、二重動詞（「登リ行ク」ノ類）トノ送り方、並ビニ誤讀シ易キ者（「近ク」ト「近ヅク」トノ類）ニハ、變化ナキ語尾ヨリ送ルトノ三ツハ、尤モ辨ジ置カザルベカラズ、

飽^{ウケ} 押^{オシ} 耻^{ハジ} 報^{ホウ} 驅^ク 瘦^{ソウ}

右四段中二段下二段ノ働キヲナス詞ハ、變化スル假名ヨリ送ル、「裏返ス」「氣使フ」「雲立ツ」「目立ツ」「近寄ル」ノ如キ、他ノ詞ト熟シタル動詞許多アレド、何レモ此ノ三法ニ屬ス、

成^{ナリ}來^キル 逃^{ニゲ}行^{ユク} 生^{ナマ}替^カリ 並^{ナリ}居^ル 跳^{ハネ}入^ル 調^{テウ}べ^ヘ難^シシ 壓^{オシ}倒^ス 遣^{ヤス}り歸^ルス

右二重ノ動詞ハ、誤讀シ易キ者ノミニハアラザレドモ、總ベテ假名ヲ送ルベキコト名詞ノ條中ニ云ヘルガ如シ、或ハ三重四重ニナリテモ一々假名ヲ送ル、（「打チ捨テ置ク」「申シ上ゲ奉リ候フ」等ノ如シ）「挿ム」「擘ク」「抽ヅ」等ノ如ク、一字ニ附シタル二重動詞ハ、猶一語ノ動詞ニ同ジ、改メテ「差シ挾ム」「突ン裂ク」「抜キ出ヅ」ト書クニハ及バザルナリ、

曰^{イハ}ハク 申^{ウタ}サク 見^ミマク 見^ミラク 恐^{コソ}ラク

「ハク」ノ反「フ」、「サク」ノ反「ス」、「マク」ノ反「ム」、「ラク」ノ反「ル」トナル、是ハ本「曰フ」「申ス」「見ム」「見ル」「恐ル」ヲ延ベテ斯クシタルナレバ、二字共ニ寫スヲ正シトス、（「恐ラク」ハ、多ク副詞ニ用ヒラル）

試^シミ 顧^コミ 鑑^{カン}ミ 夢^ムミ

「試ミ」ハ「心見」、「顧ミ」ハ「回リ見」、「鑑ミ」「夢ミ」モ、「赫見」「夢見」ニテ、本二語合シタル者ナリ、「見」ハ一段ノ働キニテ、別ニ變化アルベキヤウナケレドモ、中古以來「後ロ見」ヲ「後ロム」ト働カシタルコトサヘアレバ、是等モ皆「ミ」「ム」ヲ送りテ働キヲ取ル方便ナリ、

變^カル 交^{カウ}ル 聞^クユ 興^{キョウ}ル

中二段下二段ノ斯カル詞ハ、或ハ「變ハル」「交ハル」「聞コユ」「興コル」ト書ク者アリ、是道理ヨリ云フモ便利ヨリ云フモ、斯クマデ送ルニハ及バザルナリ、其ノ故ハ「變

ル」「交ル」ハ、本ノ語ナル「變フ」「交フ」ノ時ヨリ
「ハ」ノ變化アル詞ニ非ズ、「聞ユ」「興ル」モ亦「コ」ノ
變化アル詞ニ非ザレバナリ、況ヤ此ノ假名ナクトモ他ニ誤
リ讀ム憂ヘナキヲヤ、

食^シラヒ 訪^トラヒ 畏^スマル

「食ラヒ」「訪ラヒ」モ皆變化ハ「ヒ」ニ在レバ、是ヨリ
送ルベキ理ナルドモ、「食ヒ」「訪ヒ」トノ別ナキ故、斯ク
書スルヲ便トス、「誘ヒ」「誘ナヒ」「畏ル」「畏マル」ハ、
義ハ同じキモ訓異ナル故、亦之ニ倣フ、

書カス 合ハス 食ハス 興ス 落ス 懲ス 出ス 顯ス
枯ス

初メノ三語ノ如ク四段ノ働キヨリ轉ジ來ル者ハ、「カ」「ハ」
等ノ變化アル字ヨリ送ル、「及ス」ハ四段ヨリ轉ジ來レド
モ、「ボ」ノ聲變化ニハ非ズ、次ギノ三語ノ如ク中二段ノ
働キヨリ轉ジ來ル者、又次ギノ三語ノ如ク下二段ノ働キヨ
リ轉ジ來ル者ハ、「ス」ヨリ送ル、「ス」ノ上ニ接スル聲ハ
其ノ語ノ變化ノ字ニハ非ザレバナリ、

「盡キ」「盡ク」ト云フ中二段ノ語ノ「盡シ」「盡ス」トナ
ルニモ、「ク」ヲ送ルベカラズ、斯カル終止言ニ「ス」ヲ
添ヘテ働カスハ、他ニ例ナキコトナリ、「過ス」ヲ「過ス」
ト云フコトハアレド、他ハ皆「落ス」「變ス」ノ如ク、於
ノ段阿ノ段ナドノ聲ヨリ接ス、俗言ニ「愛想ヲ盡カス」ト云
フ如ク、「カ」ノ聲ナドヨリ接スベキヲ、「ク」ヨリ接スル

ハ特例ナリ、サレドトニ斯クニ變化ノ字ト思ヒテ送ルハ宜
シカラズ、「落ス」「懲ス」ノ「ト」「ラ」等ノ聲ト同じ者
ト心得ベシ、

伴ナフ 罪ナフ 音ナフ

語尾ニ「ナフ」ト著ク詞ニ二種アリ、「行フ」「曠フ」「賄
フ」ノ類ハ元來一語ニテ、「ナ」文字猶字中ニ含メリ、
然ルニ右ニ舉ゲタル類ハ、名詞ニ「ナフ」ヲ添ヘテ働カシ
タル者ナレバ、皆「ナフ」ト送ルベシ、

安ンズ 甘ンズ 輕ンズ 肯ンズ 語ンズ

右ハ「安クス」「甘クス」「輕クス」ノ轉訛ニテ、本ハ副詞
ト動詞トノ合シタル者ナリ、サレド今ハ併セテ一ノ動詞ト
見做スコト當前ナルベシ、「肯ンズ」モ語原ハ明カナラザ
レドモ、「ニ」ヲ「ン」ニ轉ジタルナルベシ、「語ンズ」ハ
「空讀ミス」ノ略ナリ、「空ニス」ナラント云フ者アレ
ド、斯クテハ物ヲ忘ル、方ノ義ニナルナリ、サレバ「安ン
ズ」「甘ンズ」ノ一種ニハ非ザレドモ、其ノ書キザマノ同
ジキニ由リテ、姑ク此ノ中ニ加フ、

近ヅク 遠ザク 名ヅク 傷ヅク 指サス 棹サス 法トル
司ドル 實ノル 名ノル 連ナル 異ナリ 横タフ

右ハ名詞又ハ形容詞ヲ戴キタル動詞ナリ、漢文ニテハ一字
ニテ斯カル意義ニ用フレドモ、日本ニテハ斯ク訓ゼザレバ
通ゼズ、(動詞ノ第一條ニ云ヘルトハ、此ノ所ニ差ヒア
リ)「近ヅク」「遠ザク」ノ類ハ「近ク」「遠ク」ト誤ラザ

ランガ爲メニ斯ク書シ、「指サス」ハ「指」スト誤ラザランガ爲メニ斯ク書ス、因ツテ之ニ倣ヒ、其ノ誤リノ恐レナキ「法トル」「司ドル」ノ類モ、皆一法中ニ收ム、サレド「導ク」「耕ス」ノ類ハ、「道」トモ「田」トモ讀ム字ナラネバ、語尾ノ變化ヨリ送ルベシ、此ノ差別善ク思フベシ、「連ナル」ハ「連爲ル」ナリ、故ニ規則動詞羅行四段ノ働キヲナス、「異ナリ」ハ「異ニ在リ」ナリ、故ニ不規則動詞羅行四段ノ働キヲナス、サレド假名ハ共ニ「ナ」文字ヨリ送ルベシ、

「横タフ」ハ他ニ類ナキ語ナレド、亦此ノ中ニ加フベシ、俗ニ「敵對」ヲ働カシテ、「敵タフ」ト云フ者アレバ、「横帶」ヨリ訛レルカ若シハ「ウロタヘ」ヲ「ウロタフ」ト働カシタル類ナルカ、

閱ス 欲ス

右ノ二ツハ、動詞ヘ重ネテ「ス」ヲ添ヘタルニテ、「狩リス」「浴ミス」ト云フト同ジ類ナリ、「閱」ハ本「毛見」ナリ、(稻ノ生長シタルヲ毛ト云フ)「欲」ハ本四段働キノ詞ナレド、其ノ働キ久シク廢レタリ、「倦ズ」ト云フ詞ハ之ニ反シ、本ノ働キ「倦ム」ハ存シテ、「倦ズ」ノ方ハ廢レタリ、但シ「閱」モ「試ム」「鑑ム」ノ如クニハ働カズ、「欲」モ「欲ラン」「欲ル」等ノ働キ絶エタレバ、直チニ「シ」「ス」「セ」ヲ添フル方宜シカラン、「來ル」ト云フ語ハ、元來「來」ヘ助動詞ノ「タリ」ノ添

ハリタルナレドモ、併セテ一ノ動詞トシテ、今ハ「來リタリ」トモ使ヒ、又「タリ」ノ生質ヲ變ジテ、「來ル」ヲ終止言トシ、又或ハ「來ス」トモ使フ程ナレバ、斯ク假名ヲ送ルベシ、「來タリ」(本來ハ之ヲ終止言トス)ト使フトキハ自ラ別ナリ、

春メク頃 蠡メク蟲 渡セル橋 流ル、水

右ノ如ク動詞ヲ以テ名詞ヲ形容スルハ、則チ分詞ナリ、今語尾ノ働キニ從ヒ動詞ノ中ニ收ム、是ノ類「蠡メク」ナドノ外ハ、大抵送り假名ヲ誤ルコトナシ、

副 詞

送り假名ノ困難ナルハ、副詞ヨリ甚ダシキハナシ、凡ソ一原ナル詞モ、其ノ使用ニ由リテ、動詞ニモ名詞ニモ將タ形容詞ニモナルハ、當前ノ事ナレドモ、副詞ニ至リテハ、何レノ詞ヨリモ不規則ニ轉ジ來ル者アルガ故ニ、尤モ其ノ區別ヲ立テ難ク又本來ノ副詞モ送り假名ナクテハ屢々音讀ニ誤ル恐アレバ、副詞ノ一篇ノミハ、道理ニ由ランヨリモ、寧ロ便宜ニ就クコト肝要ナリ、サレド法ノ立ツベキ限リハ之ニ從ヘリ、

副詞ノ送り假名ノ大略ヲ云ハバ、本來ノ副詞ハ一字ヲ送り、形容詞代名詞動詞等ヨリ變ズル者ト、「ニ」ヲ履ム詞ノ他ヨリ來ル者トハ本ノ形ニ從ヒ、而シテ重不詞ハ下ニ推リ、字ヲ添フ、

蓋シ 先ヅ 若シ 則チ 將タ 寧ロ 甚ダ 獨リ 斯ク
殆ド 漸ク 恰モ 頗ル 盡ク 但シ 最モ 暫ク 聊カ
縦ヒ 未ダ 曾テ 頓テ 轉タ 凡ソ 概ネ 故ラ 或ハ
強チ 自ラ 手ラ 必ズ 苟モ 況ヤ 剩ヘ 併ラ

斯ク本來ノ副詞ナル文字モ、訓ニ由リテ考フレバ、凡ソニツノ分チアリ、第一ハ「蓋シ」「先ヅ」「若シ」「則チ」ノ類ニシテ、是單純ナル一語ノ副詞ナリ、第二ハ「概ネ」

(大旨)「故ラ」(殊更)「必ズ」(假ナラズ)「況ヤ」(言ハシヤ)ノ類ニシテ、是等ハ種々ノ詞ノ合シタル者ナリ、サレド今ハ其ノ漢字ヲ目當テトシテ、一樣ニ副詞ト見做スコトナリ、第一ノ單純ナル副詞モ、誤讀ナカラン爲メニハ、語尾ノ假名ヲ送ルヲ便利トシ、又第二ノ種々ノ詞ノ合シタル副詞モ、同ジク然スルヲ便利トス、若シ其ノ詞ヲ析キテ「必ナラズ」「況ハンヤ」ト書クトモ、唯煩ハシキノミニテ、別ニ正シキノモ非ズ、且ツ「概ネ」「凡ソ」ノ如キハ、何處ヨリ送ルベシヤ終ニ定メ難シ、故ニ何レモ斷ジテ語尾ノ一字ヲ送ルヲ便トス

又 且 猶 唯 元 稍 儘 皆 昔 今 否

是等ハ前條ノ第一ノ類ニ屬スベキ者ナレドモ、誤讀ノ恐れモアルマジケレバ、是ノミハ特ニ假名ヲ送ラズ、

「否」ハ前ノ語句ヲ非トスル同ニテ、用法他ノ者ト異ナレドモ、亦此ノ一類トシテ假名ヲ送ラズ、「シカラズ」ト訓ズルトキハ、動詞タルコト勿論ナリ、

「相見ル」「相語ル」ノ「相」ハ、本「合ヒ」ノ義ナレバ、日本語ニテハ動詞ナレドモ、漢字ニテハ動ニハアラデ、純粹ノ副詞ナル故、文字ヲ目當テニ副詞トスルヲ好シトス、且語尾モ一定シテ移ラザル故、假名ヲモ送ラザルベシ、(名詞ノ「入リ相ヒ」「相坂」ハ、當テ字ニ填メタルナリ、)

只管 縱使 許多 許何 若干

右二字ヲ併セテ訓ラ下シタル者ハ、語尾ノ假名ヲ送ラズ、中ニハ普訓兩用ノ文字モアレド、何レニ讀ミテモ妨ゲナカルベシ、(「縦ヒ」ト書キ「幾バク」ト書クハ自ラ別論ナリ、)

善ク 清ク 小サク 大キク 惡シク 嬉シク

右形容詞ヨリ變ジ來ル者ハ、本ノ詞ト送り方ヲ同ジクス、

「大キク」ハ「大キニ」トモ用フ、

屢々 各々 偶々 抑々 世々 愈々 熟々 倩々 諸々

此ノ類ノ重ネ詞ハ、假名ノ送り方、人ニ由リテ皆不同ナルガ、何レモ一得一失アリ、其ノ「屢」「偶」トヤウニ一字書シ置クハ、理ニ於イテ正シケレドモ、時ニ音讀ノ誤リアリ、又疊字ノ略符「々」ヲ添フルトキハ、漢文ノ「世世」「各各」「數數」ナドト用ヒタルト辨別ナシ、稀ニハ「屢々」「偶々」ト書シタルモ見ユレド、是モ然ルベカラズ、(「各ノ」ナドハ、「ノ」文字語尾トハ思ハレズ、) 又小サキ搖リ字即チ「ミ」ヲ捨テ假名ニ著ケタルモアリ、是モ體

裁上善シトモ見エズ、種々ノ書キ方ヲ比較スレバ、文部省編輯局ニテ定メタル其ノ字ノ下ニ假名ノ揺リ字ヲ添フル方、先ヅハ理ト便トノ中間ヲ得タル者ナランカ、此ノ外「ホトホト」ハ大方「ホトシンド」ト云ヘバ、「殆ド」ト書シテ、「蓄シ」「先ヅ」ナドノ一類ニ見ルベシ、「ヤウヤウ」ハ「稍」ノ延ビタル語ニテ「漸」ノ字ニ當レド、「漸」ハ「ヤウヤク」トノミ訓ズル故、是又「殆ド」ト同ジカルベシ、

既ニ、誠ニ 眞ニ 遂ニ 故ニ 遙カニ 平カニ 大イニ
徒ニ 徒ラニ 直ニ 直チニ 詳ニ 詳カニ 長ヘニ 長ナ
ヘニ 愚カニ 疎ソカニ 忽チニ 忽セニ 穩ヤカニ 速ヤ
カニ 巧ミニ 試ミニ 頻ニ 悠ニ 互ニ 妄ニ 漫ニ 恣
ニ 蔑ニ

語下ニ「ニ」ヲ添ヘテ副詞トスル者ニ種々ノ生質アリ、故ニ其ノ書キ方又同ジカラズ、「遙カニ」「大キニ」ノ類ハ形容詞ト同ジキ語尾ヲ送ル、「徒ラニ」「直チニ」ハ「徒ニ」「直ニ」ト別ツ爲メニ「ラ」「チ」ヲ送り、「巧ミニ」「試ミニ」ノ類ハ動詞ト同ジキ語尾ヲ送ル、「頻ニ」「悠ニ」「互ニ」「妄ニ」「漫ニ」ハ此ノ文字ニテ「頻ル」「悠フ」「互フ」「妄フ」「漫ル」ト用フルコトナク、全ク動詞ノ働キヲ作サザル者ナレバ、猶名詞ノ「士」「楯」、動詞ノ「閱ス」「欲ス」ノ如ク、語尾ヲ送ラザルヲ善シトス、(前ニ云ヘル「相」ノ字モ、是ト一理ナリ、)

漢文ニテハ、「立」ノ一字ヲ「タチドコロニ」ト訓ズルコトアリ、是等ハ、國文ニテハ「立ち所ニ」ト書クヲ正シトス、
益スミミ 代ルミミ 行クミミ 見スミミ 次ギミミ
返スミミ

右ハ動詞ヲ二ツ重ネテ副詞トシタル者ナリ、漢文ニテハ唯一字ニテ重ネ詞ノ意ニモ用フレドモ、我ガ國ノ文ニ書スルニハ、此ク動詞ノ語尾ニ副フルニ二ツノ揺リ字ヲ以テスルコト、尤モ便利ヨク覺ユ、

初メテ 總ベテ 極メテ 兼ネテ 反ツテ 至ツテ 因ツテ 敢テ 以テ 須ラク 庶幾ハクハ 恐ラクハ 或ハ 動モスレバ

右ハ何レモ動詞ノ書キ方ト異ナルコトナシ、「敢」ノ字「以」ノ字ハ「敢フ」トモ「以タン」トモ働カスコトアラザレバ、前ノ「頓ニ」「悠ニ」ノ例ニ倣ヒテ、語尾ヲ送ルベカラズ、

豈 何 如何 何爲レゾ 焉

「豈」ハ今副詞ニノミ用フレドモ、本ハ「何」ト異ナルコトナシ、「何」ハ多ク疑問代名詞ニ用ヒラル、是ハ「ナニ」ト云フ語ニテ、「ナ」ト「ニ」ト合シタルニ非ズ、「ナド」ハ「何ト」、「ナヅ」ハ「何ゾ」ノ略ナレバ、何ノ字ハ、「ナニ」又ハ「ナシ」ト訓ムベシ、「如何」ハ「ニ」「シ」等ヨリ送ルベシ、「何」ト「如何」トノ送り方ノ同ジカラ

ザルハ、語ノ生質異ナルヲ以テナリ、(「如何ガ」トハ云ヘド「ナガ」トハ云ハヌニテ悟ルベシ) スク別ツトキハ、「何事」「何程」「何様」「何時」「如何ナル」「如何程」「如何様」ナドト書スルニモ、通ジテ一定ス、(「何」ノ字ヲ「何ントナレバ」ト用フルトキハ、「如何ン」ノ如ク「ン」ヲ添フベシ、)

接續詞

接續詞ハ、副詞ト相通用スル者尤モ多ク、動詞ヨリ變ジ來ル者之ニ次グ、其ノ假名ノ送り方ハ、副詞動詞ノ時ト異ナルコトナシ、

則チ 將タ 沉ヤ 剩ヘ 併ラ 又 且 及ビ 並ビニ 因ツテ 尋イデ 以テ 而シテ 雖モ

「及」ノ字、古クハ「マタ」ト訓ジ、或ハ「ト」(與ノ義)トモ訓ジタレド、後世ハ動詞ノ時ノ訓ミ方ヲ其ノマ、ニ用ヒテ接續詞トス、「而シテ」ハ「而モ」トモ云フコトアレバ、「シテ」ト送ルヲ善シトス、「雖モ」ハ「言ヘドモ」ニテ、動詞ト後詞ト合シタル者ナルガ、動詞トモ後詞トモ定メ難ク、先ヅハ接續詞トスル方、當ヲ得タルガ如クナレバ、茲ニ收ム、

是ハ送り假名ナクトモ、ヲサミミ讀ミ誤ル恐レハ非ザレドモ、猶副詞ノ第一條ノ例ニ倣ヒテ一字ヲ送ル、加之 就中

附錄

斯ク漢字ヲ二字用フル類ハ、訓ノ詞ニ拘ラズ、唯文字ヲ目當テニ接續詞ト見做シテ、假名ハ全ク送ルベカラズ、但シ是等ハ「然ノミナラズ」「中ン就ク」ト書スル方、國文ノ體ニ稱フ、

世人文章ヲ屬スルニ方リ、其ノ最モ不規則ナルハ送り假名ナルガ、猶其ノ外文字ノ書キ方用等ニ於イテモ、異同アル者寡シトセズ、是等モ亦一定ノ規則ヲ設ケテ、國文ノ書法ヲ整ヘンコトヲ欲ス、因ツテ其ノ中ノ稍肝要ナル者ヲ擇ビ

出シテ附錄トス、
安達太郎山岩代 驛館川豊前 入野村讃岐 大佛氏香橙木
射干草 海鵒魚

右ノ如キ讀ミ分ケ難キ文字ハ、必ズ假名ヲ附クベシ、形象文字ハ目ニ入り易キ一得アレドモ、或ハ是ノミニテハ辨ジ難キ一失モアリ、故ニ是等ハ必ズ假名ヲ附クベシ、然スルトキハ其ノ文字ヲモ言葉ヲモ知りテ、兩得ノ益アリ、(支那小説ナドノ目ニ遠キ熟字ヲ取り來リテ、意譯ノ旁訓ヲ附クル如キコトハ、大イニ國文ニ害アレバ、是等ハ一切杜絶スベシ、

日ク 帝^{テイ} 父母^{フボ} 祖父^{ソフ} 男^{オトコ} 乳母^{ニクボ} 今年^{コトシ} 昨日^{ケシュ} 今^{イマ}
舟人^{フナト} 商人^{シヤウジン} 唐^{カラ} 事^{コト} 衛^ヱ 故郷^{コキョウ} 千歳^{チンサイ}

右ノ外、音訓又ハ兩訓何レニモ讀ミ得ベキ文字甚ダ多シ、大抵文勢ニ由リテ何レナリヤヲ知ルト雖モ、若シ必ズ誤讀ナカラシメント思フ者アラバ、假名ヲ附クルヲ善シトス、

(平假名交リノ文ニハ、儘假名ニテ書スモ可ナリ、)

事 コト 時 トキ 者 モノ 程 ホド 儘 マ、計リ バカリ 故 ユエ

右ノ類ハ、文章中文字ヲ用フルモ假名ヲ用フルモ妨ゲナシ、但シ一文章ノ中ニ於イテハ、務メテ不同ナカラシマハス、

「行クコトアラバ」「行クトキハ」ナドノ「コト」「トキ」ハ、假名ニテ可ナレドモ、事物日時ヲ指ストキハ、必ズ漢字ヲ用フベシ、「者」ハ漢字ニテモ假名ニテモ、其ノ人ノ好ミニ從フベシ、但シ此ノ字ハ「物」ノ字ト和訓同ジケレドモ、漢文ニテハ用法同ジカラザル故、誤リナキヤウニ注意スベシ、「儘」モ「故」モ、副詞接續詞等ニハ、必ズ漢字ヲ用フベシ、

有ラズ 在ラズ 非ズ

右三種、詞ノ上ニテハ同一ニシテ替ラザレドモ、漢字ニテハ各々同ジカラズ、「有ラズ」ハ常ニ假名ヲ用フル故、論ズルニ及バズ、「在ラズ」ハ「家ニ在ラズ」ナドト書キテ、人ナレバ其處ニ居ラズ、事物ナレバ其處ニ無キヲ云フ、「有リ」「在リ」ノ別モ、斯クノ如シ、

畢竟自動詞ト他動詞トノ差ヒアルナリ、「非ズ」ハ「是」ノ字ノ反對ニテ、「此クハアラヌ」ノ義ナリ、

悠々 漸々 晴ル、ホノミミ をさ／＼

「悠悠」「漸漸」ト正畫ニ書スハ、固ヨリ論ナシ、サレド普通ノ書ニハ、略字ヲ用フルコトモ古來ノ通習ナレバ、是モ一概ニハ斥ケ難キナリ、

支那ニテハ、漢字ノ略符ニ多ク「二」ヲ用フレドモ、吾ガ片假名ノ「ニ」文字ニ紛ハシケレバ、「々」ニ從フヲ善シトス、「々」ハ「全」ナラントノ説アリ、假名ノ疊字「晴ル」、「分ル」、「ノ如キモ、一語中ノ重音ナレバ、常ニ略符ヲ用ヒテ妨ゲナシ、「聞ハバ」「捨テテ」ノ如キハ、略符ヲ用フベカラズ、サルハ「聞ハ」ト「バ」トハ二ツノ語、「捨テ」ト「テ」トモ亦二ツノ語ナレバナリ、又平假名二字ノ略符ハ、元來支那ノ二字ノ略符ノ如ク、字ト字ノ中間ヨリ、下ヘ掛ケテ書キ下スヲ古キ法トスレドモ、今ハ二字ノ下ヘ別ニ寫スヲ普通トス、

所謂 所以 頃者 數多

上ノ二語ノ類ハ、既ニ送り假名ノ接續詞ノ條ニモ云ヘル如ク、成ルベクハ豎テニ書キ下スヲ善シトス、「頃者」ハ「此ノ頃」ト云フト少シ異ナル故、此ノ字ヲ用フル方便利ナリ、

ワラハ マシマシ ナカミミ ヲリミミ サレバ アラマシカヒ 何デウ 何トゾ 此ナタ 其ナタ 彼ナタ

是等ノ中、漢字ノ充テ難キ者ハ、假名ヲ用フベシ、「姜」ヲ「ワラハ」ト讀マスニハ、假名ヲ附クベシ、(童ハ別ナリ)「マシマシ」ハ略符ヲ用フベカラズ、「マシマス」トモ働ク動詞ナレバナリ、「ナカミ」ヲ「中々」、「ワリミ」ヲ「折リミ」ト書ク類ハ、當テ字ナレバ、成ルベクハ用フベカラズ、(聲ヲ借りテ隨意ニ字ヲ填メタルモ、萬葉集以後久シク行ハレ來リシコトナレバ、容易ニハ改メ難キモ、今ヨリ後ノ文章著書等ニハ、務メテ避クベキコトナリ、「カヒナシ」ヲ「甲斐ナシ」、「頼モシ」ヲ「頼母シ」、「簡月」ヲ「一ヶ月」ト書ク類、今ハ必ズ斯クセザレバ稱ハザル程ニマデナレリ、故ニ是等ノ慣用ハ俄ニ破リ難カルベシ)「此ナタ」「其ナタ」ノ類ハ、斯ク書スヲ便トス、「此處」「其處」ハ、皆文字ナル方宜シカルベシ、「彼處」ノ「シ」ハ休メ字ノ如クニモ聞ユレド、語原明カナラザル故、唯自然ニ添ハリタル音ト見故スベシ、「駿バラ」「奴バラ」ノ「バ」ノ如シ)但シ「此ナタ」以下ノ數語ハ、平假名交リナドノ文ニハ、全ク假名ヲ用フルモ可ナルベシ、

打ツテ 困ツテ 盛ンニ 中ン就ク 據ン處ナク ユエン

此ノ類ハ、皆一ツノ訛音、又ハ餘聲ヲ添ヘタル者ナレドモ、文章上其ノ氣勢ヲ寫ス爲メニハ、欠クベカラザル者ナレバ、聲ノマ、ニ寫スヲ善シトス、「ウ」ト「ン」ト「ツ」トノ三音ノ辨ハ、餘曩ニ委シク記シタル者アレバ、此ノ書ノ終リニ添ヘ置クベシ、

合ハセ 併セ 向カヘ 迎ヘ 入ル 納ル

「併セ」ハ他動ノミニテ、「合」ノ字ノ如ク「併ハス」トハ働カズ、故ニ「ハ」文字ヲ添ヘズ、「迎ヘ」モ他動ノミニテ、「向」ノ字ノ如ク「迎カン」トハ働カズ、故ニ「カ」文字ヲ添ヘズ、「迎ヘ」ハ下二段ノ働キナレバ、「迎ヒ」ト書クハ誤リナリ)「納ル」モ同ジク他動ノミニテ、「入」ノ字ノ如ク「納ラン」トハ働カズ、(世俗常ニ「入」ノ字ヲ「納」ノ字ノ處ニ用フ、今救ヒ難シ) 猶此ノ類多シ、皆字義ヲ詳カニシテ假名ヲ送ルベシ、是ノ類ハ皆ト送り假名ニ屬スルコトナレドモ、之ヲ擧グベキ條項ナカリシ故茲ニ附記ス、

「ウ」「ン」「ツ」三音ノ辨〔省略〕

佐藤仁之助 新撰送假字法 (明治三十二年)

緒言

凡、世人の文章を書記するに、最、緊要なるは、送假字、及、句讀の法なるべし。さるは、送假字は、文の誤讀を防ぎ、句讀は、よく語句の斷續關係等を明かにするが故なり。然して、古來、我が國の文章には、一定の法あれば、之を書記するに當りて、送假字を附くる人々の目的は、大概、同一なれども、唯、總合の範圍に、寛狹の差あるが爲に、未、一致せず、以つて今日に至れり。かゝれば、現今、世上に名ある道々の人々等が、ものしたる文章と雖へども、其の送假字の法、甚、亂雜なるもの少からず。抑、近來、我が國の文法を論ずる學者、日に多く、其の作れる文典も、亦、實に少からずと雖へども、かく、最、緊要なる送假字の法の亂雜なるを憂へざるのみならず、之が法則を述べて、文海の羅針を與へむとする者の世に聞こざるは、抑、送假字法の容易に一定し難きが爲か。將、さばかりは、論するに足らずとするが爲か。さはれ、かくのみ打捨て置けば、愈、後進の文章の書記方に惑ふのみならず。遂には、東洋の一大獨立國たる日本人士の文章には、送假字の法なしと言はるゝに至らむは、吾

人のいかに傍觀すべき者ならむや。

是に於て予は、往年、おほけなくも、斷然、是が法則を述べて、世の習弊を矯正せばやと思ひたちて、即、專語原に溯り、原則に照らし、且又、慣習の用法と、實用の便宜とを考へ、本書の編修を企てたるに、吾が師、文學博士黒川眞賴翁は、最初より特に力を添へて、仔細に校閲せられたりき。かくて、遂に一部の教案を作りて、先、中學生徒が作文の際、常に此の法則を語記し、其應用に習熟することを勤めしめたり。さるは、當時、中學の諸生は、未來、國家樞要の地に立つべき者なれば、是等の人々に規律ある文章の書記方を習熟せしむるは、斯文の發達を企圖するには、最上の方便ならむと思へるに由れるなりき。爾來數年、某中學において實驗し、又大いに發明する事少からず。然るに、頃日、書肆松榮堂主人の訪ひ來て、いかで之を印行して、世に公にし、他の中學生徒等をはじめ、總べて、斯道に従事する人々等が模範とせば、子が當初の目的を達する一端にはあらずやと、切に勸むるまゝに、乃、從來の底本を淨書して、主人に與へつ。さて思へば、予が淺學菲才を顧みずして、ものしたる本書にあれば、尙、未、考究の足らざる處、又、實用に適せざる處も、將、なからずしもあらじ、希はくは、江湖の博識、是正を賜はゞ、豈予が幸福のみならむや。

明治三十二年十一月

佐藤仁之助識す

例言

一 本書は、宗と、普通文の送假字法を述べたり。故に、官府の願届文、及、日用書簡文の送假字法をば論せず。さるは、此の兩種の文には、普通文と相異なる法ありて、一様には、論じ難ければなり。

一 本書は元來、中學校生徒等が普通文を書記するに就きて述べたる者なれど、固より、著述、其の他、一般の普通文に應用し得らるべき者なりとす。

一 本書は、先、各品詞に附くべき送假字の法則を述べて、其の條下に、總べて、用例を掲げたり、一見、煩雜のごとしと雖へども、先、法則を記憶して、次に、其の應用に習熟するに便利なればなり。

一 本書は、我が國の文典を、一應、學び了へたる者の参考とせむが爲なれば、術語用方等は、悉しく説明せず。只八品詞の定義のみは、便宜に依りて説明せり。

一 本書中に用ゐたる文法上の分類、及、術語等は、讀者の便利ならむが爲に、多く、舊來の名稱に仍れり。唯、新に設けたるは、注記法の條に「・」小讀點の一目を増したるのみ。其の他は、變更したる者なし。

一 本書中に引用せる散文、及、歌等、は多く、中古の書物に據れりと雖へども、主に、現今、中學校の教科書となれる國文讀本各種の中に、採用したる者を採れり。さる

は、生徒等の常に講讀せる者は、理解し易きのみならず、應用の便、頗、多ければなり。然れども、又、例證に必要ある時は、上古の書に據れるもあり。又、近古の書なりと雖へども、中古の格と違はざる者は、亦、固より引用せり。

一 例證に、引用せる書名中にて、著く世に聞こえたる書名は、略稱を用ゐたり。例へば、源氏物語なるには、總角、紅葉賀と其の帖名のみを掲げ、又、平家物語・平家物語の類は、平家・保元、神皇正統記・源平盛衰記の類は、正統記・盛衰記と掲げ、又、萬葉集卷二・古今和歌集卷十五の類は、萬葉・二、古今・十五とのみ掲げたり。尙、用例の下に、引用書目の記したらぬは、予が信する送假字法に據りて、試に作れる文なり。

明治三十二年十一月

編者再識す

新撰送假字法一覽

○ 名 詞

本成名詞及、動詞の變成名詞には、送假字を附けず。但、形容詞の變成名詞には、送假字を附く。

○ 代 名 詞

代名詞には、送假字を附けず。但、が・の等の助詞に續く時は、之を送る。

○ 動 詞

新撰送假字法 目次

總論

第一章 名詞

第一節 本成名詞

人・海・心・秀吉・京都・草薙劍・日本外史・等

第二節 變成名詞

一、動詞より變成せる名詞

霞・恨・教・宿り・樂しみ・謂はれ（醉泣・物語・植木・）の類、及、用例

二、形容詞より變成せる名詞

重み・深さ・樂しさ・亮けさ・清げ・嬉しげ・賢しら・清らか・同じ人、の類、及、用例

第二章 代名詞

第一節 人代名詞

我・己・汝・誰・我等・己等・汝等・誰等・の類、及、用例

第二節 指示代名詞

是・其・彼・何・是等・其等・何等・の類、及、用例

第三章 動詞

第一節 正格活用の動詞

動詞には、其の語尾の活用を送假字とす。但、一字の動詞には、送假字を附けず。

○ 形容詞

形容詞には、其の語尾の活用を送假字とす。

○ 副詞

本成副詞、及、名詞の變成副詞には文字の右脚邊に「、」點を附けて、送假字を附けず。但、に・かに・らかに・やかに・げに・しげに・らに・らかに・を語尾とせる副詞・及、動詞・形容詞より變成せる副詞には其の本來の語尾を送假字とす。

○ 接續詞

本成接續詞には、文字の右脚邊に「、」點を附けて、送假字を附けず。變成接續詞には、其の本來の語尾を送假字とす。

○ 助詞

助詞の中にて、動助詞のなり・べし・ごとし・及靜助詞のて・とも・ども・ばかり・より・まで・のみ・の十詞は悉く假字を用ゐる。

○ 感歎詞

感歎詞は、總べて、假字を用ゐる。但、あゝ・かなの二語に漢字を用ゐる時は、其の右脚邊に「、」點を附けて、送假字を附けず。

行く・見る・起く・受く・の類、及、用例
誤り易き動詞の表

「用」の字の活用

恥ぢ・懼ぢ等・の用例

動詞と、動詞より變成せる名詞との用例

正格活用動詞表

第二節 變格活用の動詞

く・す・往ぬ・等の注意、及、用例

變格活用動詞表

第三節 良行一種活用の動詞

「有り」の送假字に關する注意、及、用例

咲けり・増せり・立てり・思へり・汲

めり・降れり・善かり・嬉しかり・の

類、及、用例

一種活用動詞表

第四節 動詞の送假字に關する諸注意

一、咲き滿つ・捨て置く・の類、及、用例

二、打渡る・搔曇る・の類、及、用例

三、討たしむ・討たす・受けさす・討たる・

受けらる・の類、及、用例

轉用動詞活用表

四、遣はす・落とす・果たす・の類、及、

用例

五、曰はく・恨むらく・掛けまく・の類、
及、用例

六、書いて・笑うて・讀んで・取つて・の

類、及、用例

動詞音便表

第四章 形容詞

第一節 久志幾活用、志久志々幾活用

「無し」の送假字に關する注意、及、用例

形容詞語尾活用表

輕々し・をくし・心易し・間近し・の類、
及、用例

恨めし・怖ろし・の類、及、用例

第二節 形容詞古格語尾活用法の注意、及、
用例

第三節 形容詞の語尾を音便とする注意

形容詞音便表

善い・悲しい・忝う・久しう・重んずる等、
の用例

熟語にて成れる形容詞、及、用例

第五章 副詞

第一節 本成副詞

恰・未・轉・凡・嘗・等、及用例

且・且らく・暫らく・暫し・の類、及、用

例

例

例

例

流石・大概・只今・以來・畢竟・若干・の

類、及、用例

年々・往々の類、及、用例

既に・共に・遙に・頻に・恣に・の類、及、

用例

大きに・大いに・忽に・忽せに・の類、及、

用例

明かに・定かに・の類、及、用例

高らかに・重らかに・の類、及、用例

細やかに・長閑やかに・の類、及、用例

清げに・賢げに・の類、及、用例

嬉しげに・耻かしげに・の類、及、用例

寒さに・憂さに・の類、及、用例

戀しさに・寂しさに・の類、及、用例

清らに・美味らに・の類、及、用例

佗しらに・賢しらに・の類、及、用例

第二節 變成副詞

敢へて・定めて・總じて・果たして・の類

及、用例

善く・久しく・頼もしく・長閑けく・の類、

及、用例

熟語にて成れる副詞、及、用例

第六章 接續詞

第一節 本成接續詞

且・則・抑・又・但・若は・（就中・加之・

及）の類、及、用例

「若くは」の用法に關する注意

第二節 變成接續詞

并に・然るに・然れども・雖へども・且・又・

の類、及、用例

第七章 助詞

第一節 動助詞

なり・べし・ごとし・の類、及、用例

第二節 靜助詞

て・とも・ども・ばかり・より・まで・

のみ・の類、及、用例

第八章 感歎詞

あ・あゝ・あは・あはれ・あはや・あな・

あなや・あら・いざ・いで・いでや・や・

やあ・やよ・やよや・か・かな・よ・な・

かし・は・も・を・ね・の類、及、用例

嗚呼・哉、の用例

附説目次

第一 平假名・片假名

第二 異體の假字（ん・ン・及、略字）

第三 濁音符(全濁符・半濁符等、及、用例)

第四 符號字(送字・踊字・疊字符・延音符・等、及、用例)

第五 注記法(句點・讀點・小讀點・圈點・虛尖點・實尖點・雙柱・單柱・段落・單鈎・重鈎・括弧・大圈等及、用例)

新撰送假字法

文學博士 黒川眞頼 閣

佐藤仁之助 編

總論

送假字とは、語尾の活用する文字に附くる假字にして、文意の變化を明かにする者なり。今の所謂、假字交り文において文の主體たる語を寫せる語は、活用することなければ、送假字を附けず。其の客體たる語は、活用するが故に、誤り易ければ總べて送假字を附く。此の二法は、今の文章を書記するに就きて、自然に起れる原則なり。されば、畢竟、送假字の法は、此の二大原則に據るに止まる事にはあれど、中には、語尾の活用する者も、其の用法に依りては變じて文の主體を表はす語と成る時あり。又、副詞、接續詞の類には、此の二原則の兩者に亘れる者あり。是等は、よく、其の語原を究めて、原則に準據せざれば、一概に律し難きのみならず、又、

慣用の便宜をも考へざるべからざる者なり。是、方今、世人が書記せる文章の語句の支離せる原因なるべし。加之、方今の人は、句讀段落等の注記法を等閑にして、省みざる者少からず。是、亦、送假字法と共に法なかるべからざる者なり。送假字の法は、かく錯雜せるがごとくなれど、其語原を究め、原則に準據し、又、慣用の便宜を考へて總括すれば、文法科に所謂、八品詞は、大略、左の三種に區別するを得べし。

送假字を附けざる者

名詞、代名詞、動詞より變成せる名詞

本成副詞、本成接續詞、

送假字を附くる者

動詞、形容詞、形容詞より變成せる名詞、

變成副詞、變成接續詞、

送假字のみにて書くべき者

助詞、感歎詞、

此の中にて、假字のみにて書くべき者を、配當せるは、不審に思ふ人もあるべけれど、是は、助詞、感歎詞は、往々、眞假兩字を混用して、甚、不體裁なる者あれば、之を一定せむが爲なり。さて、かく大別して、尙、各品詞中には特例を設けたる者もあれど、要するに、先、此の三大別を本とし、各品詞條下の法則に據り、又、附説なる注記の諸記號を用ゐば、よく完全なる文章を書記するを得べし。

第一章 名詞

本成名詞、及、動詞の變成名詞には、送假字を附けず。但、形容詞の變成名詞には送假字を附く。

○名詞とは、あらゆる、事物の名をいふに用ゐる語なり。是に、本成名詞、變成名詞の二種あり。

第一節 本成名詞。本成名詞とは、本來、名詞と成れるものにて、常に、漢字を用ゐて書ける者なり。例へば左のごとし。

人、馬、海、山、風、水、心、驛、顔、春、秀吉、
正宗、武藏、京都、吉野山、隅田川、草薙劍、日本外史、
勉強者、

本成名詞は、文中にありて、他の品詞との區別、最、判然なれば、特に、用例を掲げず。

第二節 變成名詞。變成名詞とは、他の品詞より用方に依り變じて名詞と成れる者なり。是に、二種あり。即、左のごとし。

(イ) 動詞より變成せる名詞。

(ロ) 形容詞より變成せる名詞。

(イ) 動詞より變成せる名詞。動詞の變成名詞とは、動詞の第二活用、即、連用言の言ひ据りて、名詞となれるものなり。例へば、左のごとし。

四段活用動詞の變成名詞、

歎、許、勝、疑、富、祭、

一段活用動詞の變成名詞、

着、似、干、見、射、居、

中二段活用動詞の變成名詞、

生、耻、戀、恨、老、懲、

下二段活用動詞の變成名詞、

得、掛、瘦、隔、重、致、諫、榮、晴、飢、

變格活用動詞の變成名詞、

來、(加行)

爲、(左行)

死、(奈行)

良行一種活用の變成名詞、

有、

此のごとき變成名詞と、普通の動詞とを、書き分け、或は、ある文中より甄別せむとするには、變成名詞は、其の下に、必、は、も、ぞ、なむ、や、か、の、が、こそ、等の係詞、及、に、を、へ、と、より、から、まで、ばかり、等の靜助詞又、動助詞の指定のなり又、動詞の左變、良行一種、及形容詞等あるを標準とすべし。例へば、左のごとし。若、なき時は、が等を、補すべし。

望、限、歎、此の形見を見たまひてこそ、さすが欣求淨

の望もおはしけりと、限なき歎の中にも、いさゝか、頼もしげには宜ひけり。(平家)

疑、未、天の明けざらむ前に、勝負を決せむ條、

何の疑か候ふべき。(保元)

光、久方の、光長閑けき、春の日に、しづ心な

く、花の散るらむ。(古今・一)

偽、人の心、すなほならねば、偽無きにしもあら

ず。(徒然草)

過、過は安き所になりて、必、仕る事に候ふと言

ふ。(徒然草)

遊、萬の遊にも、勝負を好む人は、勝ちて興あら

むためなり。(徒然草)

志、此の人々の深き志は、此の海にも、劣らざる

べし。(土佐日記)〔編者注、以下この類の用例は省く。〕

以上は四段活用動詞の變成名詞の例なり、此の他下に掲げたる

諸動詞の變成名詞も總べて之に準らへて知るべし。

又、動詞と動詞と重なりて成れる一名詞、例へば

醉泣、罷申、

又、名詞と動詞と重なりて成れる一名詞、例へば

夜撃、物語、野分、

又、動詞と名詞と重なりて成れる一名詞、例へば

植木、假屋、流失、

等のごときものは、亦、一字の變成名詞に倣ひて、送假字を

附けず。例へば、左のごとし。

醉泣、罷申、夜撃、物語、野分、植木、假屋、流失、〔用例

略〕

又、一音の動詞にて成れる變成名詞は、元より送假字の必要

なけれど、注意の爲に、熟語となれる變成名詞を擧ぐれば、

左のごとし。

鹽干、形見、射向、家居、耻、試、報、老、仰、企、教、

定、初、消、晴、植木、往來、有、〔用例略〕

○動詞より變成したる名詞の中に、左に掲ぐる類は、各、

本來の所屬に従ひ、特に一字、若くは、二字の送假字を附

く。用例中一字下げたるは、

普通の變成名詞なり

一、宿り、(旅宿) (良行四段)

名詞より動詞と成れる者なり。若、單に、宿とのみ書

ければ宿(ヤド)と區別なし。

二、樂しみ・悲しみ・親しみ・苦しみの類(麻行四段)

形容詞より動詞と成れる者なり。若、單に樂・

悲・親・苦とのみ書けば音讀と區別なし。

動詞の更に他の行に活用したる者習(ナラヒ)と

區別するが爲なり。

四、謂はれ・囚はれ・切られ・赦されの類(良行下二段)

皆、轉用動詞なれば送る事論なし。尙、云はゞ謂(イヒ)

切(キリ・キレ)囚(ヒトヤ)等と混すればなり。

宿り、花散らす、風の宿りは、誰か知る。我に教へよ。

行きて恨みむ。(古今・三)

雨宿り、資朝卿、東寺の門に、雨宿りせられたりけるに、

宿、(徒然草) 勅なれば、いとも畏し。鶯の、宿はと問は

ゞ、いかゞ答へむ。(大鏡)

樂しみ、樂しび、悲しび、「用例略」

好しみ、伊豫守、ちご童の時、當寺住居の好しみあり

て、「下略」(盛衰記)

習はし、手枕の隙間の風も、寒かりき。身は習はしの

物にぞ、ありける。(拾遺・十四)

習、道々の才藝も、亦、父祖には及び難き習なれ

ば、(十訓抄)

謂はれ、貞満が朕を恨み申しつる處、一義、其の謂は

れあるに似たり。(太平記)

切られ、西光が切られの事。(平家)

赦され、行幸、他處へ成らば、御赦されを被つて、「下

略」(保元)

囚はれ、笠置没落の時、囚はれとなりて、「下略」(文

貞公御事蹟)

(ロ) 形容詞より變成せる名詞。形容詞より變成せる名詞

とは、形容詞の語根に、み・さ・し・さ・け・さ・げ・し

げ・ら・しら・らか・し・の添はりて名詞と成れる者

なり。例へば、左のごとし。

甲、み、重み・薄みの類、

乙、さ、深さ・高さの類、

丙、しさ、樂しさ・戀しさの類、

丁、けさ、亮けさ・長閑けさの類、

戊、げ、清げ・安げの類、

巳、しげ、佗しげ・悲しげの類、

庚、ら、清ら・美味らの類、

辛、しら、賢しら・佗しらの類、

壬、らか、清らか・安らかなの類、

癸、し、善し・惡し・同じ人・嬉し涙の類、

甲、みの用例

本條のみは、石の重み・紙の薄みなど云ふに用ゐるみに

して、音便に重んず、輕んずなど云ふこと普通なり。此の

他、苦を荒み、山高み、又、雲の薄みを行く月のなどのみ

あり。此等は、其の意義固より、異なれど、送假字法は、

皆、同じことなれば、因に、此に掲ぐるなり。

荒み、高み、茂み、薄み、「用例略」

乙、丙、さ・しさの、用例

深さ、廣さ、戀しさ、悲しさ、

「用例略」

丁、けさの用例、

亮けさ、長閑けさ、寒けさ、遙けさ、

「用例略」

戊、巳、げ・しげの用例

清げ・安げ・珍しげ・苦しげ・怪しげ・心苦しげ・言甲

斐なげ、

「用例略」

庚、辛、ら・しらの用例

清ら、賢しら、

〔用例略〕

壬、らか・の用例、

安らか・麗らか、

〔用例略〕

癸、しの用例、

本條のしは、久志幾、志久志々幾活用の終止言より變成して名詞となり更に名詞に續きて熟語となりたる者なり。

善し惡し、友無し千鳥、同じ事、惡し様、賢し人、嬉し涙、黠し心、長々し夜、

〔用例略〕

第二章 代名詞

代名詞には、送假字を附けず。但、が・の等の助詞に續く時は、が・のを送る。

○代名詞とは、名詞に代へて用ゐる詞なり。是に二種あり。

人代名詞・指示代名詞是なり。

第一節 人代名詞。人代名詞とは、人の名に代へて用ゐる詞なり。例へば、左のごとし。

我 余 吾 予 己 汝 彼 誰

我・己・彼・誰などのれは送假字とせず。左の表に就きて、原語にれの音の添ひたるも、添ひたらぬも、尙、一名詞なる

を見るべし。

われ、おのれ、のれ、なんぢのんぢは、語尾の活用にあらず。故に送假字を附けざるなり。又、表中括弧を施せるは、古語にして、方今普通には用ゐざる詞なり。

わ(あ)、	われ、	(あれ)、	我、
おの、	おのれ、		己、
な、	(なれ)、	なんぢ、	汝、
か、	かれ、		彼、
た、	たれ、		誰、

我、夏山に、啼く郭公心あらば、物思ふ我に聲な聞かせそ。(古今・三)

〔以下用例略〕

又、我等・彼等・汝等などのごとく、熟字となれるにも、亦、送假字を附けず。例へば、左のごとし。

我等、彼等、汝等、己等、〔用例略〕

○人代名詞の原語の、我・己・汝・彼・誰などのがのといふ助詞に連なりたる時の用例は、左のごとし。

我が、我が心、慰め兼ねつ。更科や、姨捨山に、照る月を見て。(古今・十七)

己が、彼の、誰が、〔用例略〕

第二節 指示代名詞。指示代名詞とは、事物・地位・方向等を指し示すに用ゐる詞なり。其の本來の指示代名詞は、左の

ごとし。

是、之、維、此、斯、其、夫、彼、何
是、其・彼・などのれも、亦、送假字とせず、左の表に就きて、見るべし。

こ、	これ、	是、
そ、	それ、	其、
あ、	あれ、	彼、
か、	かれ、	

是、之、是に由りて、之を觀れば、惻隱の心無きは、人に非らざるなり。(孟子)

其、彼、〔用例略〕

又、是等・其等・彼等などのごとく、熟字と成れるも、送假字を附けず。例へば、左のごとし。

是等、此等、〔用例略〕

○指示代名詞の原語の、是・其・彼などの、か・のといふ助詞に連なりたる例は、左のごとし。

彼の、かく別れ難く言ひて、彼の人々の口綱、諸持にて、此の海邊にて荷ひ出だせる歌。

其の、〔上略〕其の月は、海よりぞ出でける。武藏野に、生ふとし聞けば、紫の其の色ならぬ、草も睦まし。

第三章 動 詞

動詞には、其の語尾の活用を送假字とす。但、一字の動詞には、送假字を附けず。

○動詞とは、あらゆる事物の動作をいふに用ゐる詞なり。是に三種あり。正格活用・變格活用・一種活用是なり。

第一節 正格活用。正格活用とは、語尾活用の順序正しき者なり。其の動詞は、即、四段活用・一般活用・中二段活用・下二段活用是なり。其の類語を擧ぐれば、左のごとし。

四段活用の動詞。

行く、寫す、打つ、祝ふ、讀む、知る、

一段活用の動詞。

着る、似る、干る、見る、射る、居る、

中二段活用の動詞。

起く、落つ、戀ふ、恨む、老ゆ、懲る

下二段活用の動詞。

得、受く、瘦す、捨つ、兼ね、辨ふ、譽む、消ゆ、枯る、植う。

○注意、正格四種の動詞中にて、阿行・也行・波行・和行に活用する動詞の假字は其の音の紛れ易きが爲に、誤りて書くことあり。例へば、教ふを教ゆ・植うを植ゆ・率ゐを率ひ・報いを報ひなど書くがごとし。此等は、波行なるを也行、和行なるを也行、也行なるを波行と全然、心得誤るより起れるなれば、一々慥に、其の活用語を譜するより、他

なければ、此に一法あり。即、名詞の假字遣を語記するがごとく、活用の類語の最、少き者のみを語記して、多き者は、類推する法是なり。左表に就きて、了知すべし。

○誤り易き動詞の表

阿行下二段 活用動詞	也行 活用動詞	和行 活用動詞	活用 動詞	活用 動詞	也行中二段 活用動詞	也行 活用動詞	下二 活用動詞	段 活用動詞	用 活用動詞	詞
得 ^ゲ	射 ^セ る、鑄 ^コ る、	居 ^イ る、廢 ^ヘ る、用 ^{モト} める、率 ^{ヒツ} める、	植 ^ウ う、飢 ^ウ う、掘 ^ウ う、	老 ^ロ う、悔 ^ク う、報 ^{ホウ} う、	宵 ^ヨ う、癒 ^ユ う、覺 ^{カク} う、	消 ^{シユ} う、崩 ^ク う、越 ^コ う、	榮 ^エ う、泣 ^{ナク} う、越 ^コ う、	費 ^ヒ う、痿 ^シ う、煮 ^ニ う、	映 ^{エイ} う、冷 ^{レイ} う、殖 ^{シク} う、	燃 ^{エン} う、萌 ^{モウ} う、
					壓 ^{オス} う、聞 ^ク こう、	肥 ^ヒ う、凍 ^{コウ} う、	絶 ^{ツツ} う、潰 ^{ヅツ} う、	聳 ^{ソウ} う、生 ^{シユ} う、	吠 ^{ヘイ} う、見 ^ミ う、	

阿・也・和・三行の、一段・中二段・下二段活用の動詞は、大略、此に掲ぐるのみなり。但、阿・也・和・三然れば、此の他に阿行・也行・和行のごとく聞こゆる動詞は、波行の動詞なりと知るべし。

○「用」の字は、和行一段活用なるが正格なれば、本書は、斷然、之に準據せり。

○又、左行と多行との動詞の活用にて誤り易き者あり。例へ

ば耻^{ハジ}ちを耻^{ハジ}じ・懼^{オソ}づを懼^{オソ}ず・攀^ヒづを攀^ヒずなど書くがごとし。此も亦、右に倣ひ左表に據りて、記憶すべし。

多行中二段 活用動詞
落 ^オ つ、懼 ^{オソ} づ、朽 ^ク つ、閉 ^フ づ、耻 ^{ハジ} づ、攀 ^ヒ づ、紅葉 ^{コハナ} づ、

此の表になきは、左行下二段の動詞なり。但、中二段には、左行の活用なし。

閉^フぢ、 谷の戸を閉ぢや果てつる。「下略」(拾遺、十六)
耻^{ハジ}ぢ、 心ある者は耻ぢずになむきける。
懼^{オソ}ぢ、 盲目、蛇に懼ぢず。
紅葉^{コハナ}ぢ、 櫛・楓の誠に色、美しう紅葉ぢたるを植ゑさせ

て云々。
此の他、言はぬを言わぬ、思はずを思わすなど書くも、亦、誤なれど、四段活用に、和行の活用なきを知れば、決して、誤ることなし。

以下に掲ぐる動詞の用例は、正格諸活用の動詞の變成名詞となれる者と、普通の動詞と語尾送假字の差異を示せるなり。

四段活用動詞の用例。

歎^{ナガシ}き、 是ほどに、美しき上臈を失ひて、歎^{ナガシ}き給ふらむ父母の心の中こそ、いとほしけれ。(盛衰記)
歎^{ナガシ}、 夕されば、野にも山にも、立つ烟、歎^{ナガシ}よりこそ、燃え初めけれ。(大鏡)
志^シし、 日本の半を志^シし、みながら望まば、帝王は、

何處を知らせ給ふべきにか。(正統記)

志、總べて、人を苦しめ、物を虐たぐる事、賤し

き民の志をも、奪ふべからず。(徒然草)

打ち、谷に下り、峯に昇り、引駈け、引駈け、打ち

けるに、(盛衰記)

鞭打、此の馬鞭打に、三月月の月程なる月影のあり

ければ、名を得たり。(盛衰記)

思ひ、飛鳥川、淵は瀬になる、世なりとも、思ひ初

めてむ、人は忘れじ。(古今・十四)

思、世の中に、思あれども、子を戀ふる、思に勝

る思、無きかな。(土佐日記)

望み、尊氏は征夷將軍、並に、諸國の總追捕使を望

みけれど、(正統記)

望、更に忠を致し、利運の望をも企てつべし。

(正統記)

偽り、偽りても、賢を學ばむをば、賢と云ふべし。

(徒然草)

偽、偽の無き世なりせば、いかばかり、人の言の

葉、嬉しからまし。(古今・十四)

落ち、中二段活用動詞の用例。

たわゝに、置ける白露。(古今・四)

落穂、あるは、裾わの田井に下りて、落穂を拾ひて、

穂組を作る。(方丈記)

戀ひ、君、戀ひて、世を経る宿の、梅の花、昔の香に

ぞ、猶、匂ひぬる。(土佐日記)

戀、我が戀は空しき空に満ちらぬし。思ひやれど

も、行く方もなし。(古今・十一)

恨み、恨み侘び干さぬ袖だにあるもの、

恨、然れば、初、興宴より起りて、永き恨を結ぶ

類多し。(徒然草)

老い、年経れば、齡は、老いぬ。然はあれど、花をし

見れば、物思もなし。(古今・二)

老、おほかたは、月をも愛でじ、是ぞ此の、積れ

ば人の、老となるもの。(古今・十七)

下り、己は、水尾の御門の、下りおはします、正月の

望の日、生れて侍れば、(大鏡)

下口、阪の下口にかゝる。

明け、夕月夜、おぼつなきを、玉櫛笥、二見の浦は、

明けてこそ見め。(古今・九)

有明、朝ぼらけ、有明の月と、見るまでに、吉野の

里に降れる白雪。(古今・六)

仰せ、御船より、仰せたぶなり。朝北の、出でこ

ぬさきに、綱手はや引け。(土佐日記)

仰、人は、許し候はずとも、強矢・遠矢・打物な

どの時は、仰を蒙るべしと、深く申し切つたり。

(盛衰記)

隔て、かねを隔て、首もちぎるばかり、引きたる

に、(徒然草)

隔、冬、狭き所にて、火にて物、炙りなどして、

隔無きどち、差向ひて、多く飲みたる、いとをかし。

(徒然草)

重ね、例へば、富士の山を、二十ばかり重ね上げた

らむ程して、(伊勢物語)

衝重、物、食ひ散らしたる衝重を、御簾の中へ差入

れて、罷り出でにける。(徒然草)

答へ、忠度と申す者見参に申し入れたきことあり

て、参りたりと、答へければ、(盛衰記)

答、正行朝臣は、頭を地に附けたるまゝ、とかく

の御答をもなさず。(太平記)

定め、第一の事を、案じ定めて、其の外は、思ひ棄

て、一事を勵むべし。(徒然草)

定、陸奥の御子、又、東へ向かはしめ給ふべき定

あり。(正統記)

覺、此の木、無からましかばと、こそ、覺れし

か。(徒然草)

覺、遅き梅は、櫻に咲き合ひて、覺、劣り、け推さ

れて、枝にしほみつきたる、心憂し。(徒然草)

恐れ、我だに恐れて落とさねば、人も怖れて、え落

とさす。(盛衰記)

恐れ、恐をなして、給はらざる時は、我が能く思し

召す怠狀なり。(保元)

飢え、飢るす寒からず、靜に過ぐすを楽しみとす。

(徒然草)

飢、皆飢を支へて麥の熟するを待つを得たり。

○正格活用四種の動詞は、其の語尾の活用を送假字とする定なれば、左に其の活用圖を掲ぐ。之に依りて、送假字を附すべし。以下活用圖を掲ぐる者、皆、之に倣ふ。

○正格活用動詞表〔活用圖略〕

第二節 變格活用。變格活用とは、正格活用に異なる特別の語尾活用ある動詞なり。此の動詞は、即、加行・左行・奈行の三行のみなり。其の類語、極めて少く、左の例のごとし。

加行變格活用の動詞。

來、

左行變格活用の動詞。

爲、大坐す、

奈行變格活用の動詞。

往ぬ、死ぬ、

○注意。來・爲の二活用の送假字は、總べて、假字にて書くを普通とす。良行四段の來るは必、殊に、左行變格のすは名詞眞字にて書くべし。眞字にて書くべし。即、罪す・蔑す・論す・奏す・物語す・勉強す

すなど、書すること最、多し。大坐すも、亦、おはすと書くを普通とせり。尙左の例に就きて見るべし。加行・左行兩變格の用例は特に全活用を掲ぐ。

加行變格活用動詞の用例。

こ、き、く、くる、くれ、〔用例略〕

左行變格動詞の用例。

せ、し、す、する、すれ、〔用例略〕

奈行變格活用の用例。

死に、 我も死に、聖も失せなば、尋ね聞きてむやと

て、(徒然草)

死、 本意のごとく清きしに(死)をすべし。(増鏡)

○變格活用動詞表

種名	活用	動詞	將然言	連用言	終止言	連體言	已然言	命令言
變格	加行	來	こ	き	く	くる	くれ	こ
格	左行	爲	せ	し	す	する	すれ	せ
活	變格	大坐	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
用	奈行	死往	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

第三節 良行一種活用。良行一種活用とは、良行四段活用の一種の活用にして、是に一格・二格・三格の三類あり。其の類語を擧ぐれば、左のごとし。

良行一種第一格。

有^{アリ}り、居^ヰり、侍^ヰり、

良行一種第二格。

咲^サけり、押^オせり、打^ツてり、思^{オモ}へり、住^{スミ}めり、降^フれり、

良行一種第三格。

善^{ヨシ}かり、惡^{アク}しかり、

○注意。第一格の有り限りては、眞字のみを用ゐず。假字にて書くを普通とせり。例へば、左のごとし

良行一種第一格活用の用例。

あら、

あり、 愛敬ありて、詞、多からぬこそ、厭かずむかは

まほしけれ。(徒然草)

あり、 名にしおはゞ、いざこと問はむ。都鳥、我が思

ふ人はありやなしやと、(古今・九)

ある、 あれ、あれ、〔用例略〕

良行一種第二活用の用例。

此の活用は、四段活用の動詞の、第一格なる、有りて連なりて、活用する者なれば、其の類語も、甚、多くして枚擧に堪へざれば、二三の類語を掲げ、其の實地の用例は、只、良行の一行のみを掲ぐ。下條の第三格活用の用例も、亦、之に倣ふ。

加行

左行

咲^サけら、咲^サけり、咲^サけり、咲^サける、咲^サけれ、聞^キけら、聞^キけり、聞^キけり、聞^キける、聞^キけれ、指^{サシ}せら、指^{サシ}せり、指^{サシ}せり、指^{サシ}せる、指^{サシ}せれ、致^{サシ}せら、致^{サシ}せり、致^{サシ}せり、致^{サシ}せる、致^{サシ}せれ、〔下略〕

降れら、降れり、降れり、降れる、降れれ、〔用例略〕
 良行一種第三格活用の用例。

善^{ヨシ}から、善^{ヨシ}かり、善^{ヨシ}かり、善^{ヨシ}かる、善^{ヨシ}かれ、
 樂^{タカラ}しから、樂^{タカラ}しかり、樂^{タカラ}しかり、樂^{タカラ}しかる、樂^{タカラ}しかれ、
 寒^{サムイ}けから、寒^{サムイ}けかり、寒^{サムイ}けかり、寒^{サムイ}けかる、寒^{サムイ}けかれ、
 多^{オホシ}から、多^{オホシ}かり、多^{オホシ}かり、多^{オホシ}かる、多^{オホシ}かれ、〔用例略〕
 戀^{コイ}しから、戀^{コイ}しかり、戀^{コイ}しかり、戀^{コイ}しかる、戀^{コイ}しかれ、
 〔用例略〕

○一種活用動詞表

種活用第一行良				種名
格第三	格二	格一第	活用	例詞
善 ^{ヨシ} 惡 ^{アク} し	降 ^コ れ 思 ^{オモ} へ 押 ^{オシ} め 打 ^{ウチ} せ 啖 ^{ハク} け	侍 ^{サマ} 居 ^イ 有 ^ユ	侍 ^{サマ} 居 ^イ 有 ^ユ	侍 ^{サマ} 居 ^イ 有 ^ユ
から	(有 ^ユ) ら	ら	連用言	連用言
かり	り	り	終止言	終止言
かり	り	り	連體言	連體言
かる	る	る	已然言	已然言
かれ	れ	れ	命令言	命令言
かれ	れ	れ		

第四節 動詞の送假字に關する諸注意

(一) 咲^{サキ}き、滿^{ミツ}み、落^{オチ}ち、行^イく、捨^{スツ}て、置^{オキ}く、などのごとく、
 あらゆる、動詞の連用言より、下の動詞に續く時は、上下共
 に其の動詞の活用を送假字とすべし、例へば、左のごとし。

(例證中、一段下に掲げたるは、既に變成名詞となれる者の例なり。)

張り替^カへ、義景、皆を張り替^カへ候^{コト}はむは、遙^{トホ}にたやすく
 候^{コト}ふべし。(徒然草)

乗替^{ノリカ}、軍は、後陣を頼^{タノ}み、乗替^{ノリカ}郎等を相待^{オモムカ}ちてこそ、

敵^{テキ}には組^{クミ}むことなれ。(盛衰記)

流れ行^ユく、流れ行^ユく、我が身藻屑^{ソコ}と、なりぬとも、君、

柵^{ササ}となりて止めよ。(十鏡)

行届^{ユキト}、其の事、成^ナり難^{ガタ}く、却^{サカ}りて己^ミに不行届^{ユキト}の罪、生^ナずるを以て、謀^{マカ}を罪^{ツミ}して、己^ミの罪を脱^{ツケ}したるなり。

(鳥の鳴音)

堀^{ホリ}り捨^{スツ}て、愈^{ユヘ}、腹立^{ハラ}ちて、切株^{キキ}を堀^{ホリ}り棄^{スツ}てたりけれ

堀^{ホリ}、ば、其堀^{ホリ}の跡、大きなにてありければ、池^{イケ}の僧^{ソウ}

正^{マサ}とぞいひける。(徒然草)

(本文中には動詞なるも變成名詞なるもあれば別に例を挙げず)

(二) 打渡^{ウチワタ}る・取圍^{トルイ}む・搔疊^{カサガサ}るなどいふ語の、打^{ウチ}・取^{トル}・搔^{カサ}などは、皆、語勢を強^{ツヨク}むるが爲に添^{ソフ}へたる詞にして、所謂、添^{ソフ}詞(副詞とは)といふ者なり。是等は、其の用法、自^{ミヅカ}、局^{クマ}れる所あれば、前條の普通の連用言より動詞に續きたる者、又は、全くの副詞と混ぜざらしめむが爲に、上の動詞の語尾は、總べて、送假字を附けず。若^シ、熟^{ジュク}して、變成名詞となりたる時は、普通の變成名詞の例に依り、又、音便言になりたる

る時は、特に送假字を附くべし。例へば、左のごとし。

相構へて、打渡る、推取る、搔疊る、差置く、
立別る、取圍む、振延へて、引具す、突立つ、

相構へて、右衛門督（信賴）は、御邊（惟方）に大小、事を申し合はすとこそ聞こゆれ。相構へて、相構へて、隙を伺ひ、玉體恙無くおはします様に、思案せらるべし。（平治）

打着つゝ、重盛、弓の筈にて、鎌田が兜の鉢を丁と撞く。

撞かれて、ゆらゆる間に、兜を取つて、打着つゝ、緒を強くこそ、締められけれ。（平治）

押寄せ、平家の大勢、押寄せて攻めむには、時刻をやとらすべき。（平治）

搔切りて、景尚、向ふ者ども、十三騎討ち取りて、痛手負ひければ、馬より飛び下り、腹、搔切りて臥しにけり。（盛衰記）

引切つて、正成は、着たる小袖の片袖を引切つて、此の押裏んで、首を押裏んで、岸の上にぞ、差置きたる。（太平記）

立別れ、立別れ、いなばの山の、峯に生ふる、まつとし

聞かば、今、歸りこむ。（古今・八）

取巻き、吉良、石堂、高、上杉の人々、六千餘騎にて、湊河の東へ駈け出で、後を切らむとぞ取巻きける。

（太平記）

振延へて、春日野の、若菜摘にや、白妙の、袖振延へて、人の行くらむ。（古今・一）

引具して、然るに、政宗、僅に五十騎ばかり引具して、

常州を經、岩城と相馬の境に至る。（常山紀談）

突立ちて、程經て、光賴卿、突立ちて、惡しう参りて候ひけりとて、靜々と歩ち出でられけり。（平治）

添詞の名詞となりたる例。

打聽、釋迦の剗石・塞の河原など言ふ所々、ありて、巡り

拜むなり。参り給ひなむやと案内の人の言へど、打聽も床しからぬ上、云々（富士日記）

引合、卷物一卷、泣くく、鎧の引合より取り出たり。

（盛衰記）

添詞の音便言となりたる例

搔い狹んで、二人を右左の脇に搔い狹んで一締、締めて、「いざ、己等教經が御供申せ。（盛衰記）

引つ組んで、高綱、さる剛の者なれば、さうなくよもせられじ、互に、引つ組んで落ち重なり、腰の刀にて

刺し違へ、耻ある士、二人失ひて、鎌倉殿に、十損

取らせ奉らむと、思ひて、云々。（盛衰記）

（三）討たす・受けさす・討たしむ・討たる・受けらるなど

のごとくあらゆる、動詞を使役、被役、可能、自然、敬語などの動詞とるに當りて、往々、討しむ・討す・受さす・討れ・受られなど書くは、誤り易し。是等は、總べて動詞本來

の活用と、使役・被役・可能・自然・敬語等の動詞の活用とを併はせて送假字とすべし。例へば、左のごとし。

知らすれ、櫻こそ、思ひ知らすれ。咲き匂ふ、花も紅葉も、常ならぬ世を、(使役)(總角)

突かせて、築かせ、植ゑさせ、釘貫せさせ、由らしむ、討たるれ、取られ、上せられ、待たるゝ、急がれ、信ぜられ、[用例略]

あられ、かくてもあられけるよ、と(可能)(徒然草)見えわかる、絞られ、思し召され、仰せられ、吹かせられ、位に即かせ、諫めさせ、[用例略]

○轉用動詞活用表

種別	段				敬語
	使役	被役	自然	可能	
第一	せ	せ	す	する	すれ
第二	させ	させ	さす	さする	さすれ
第三	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ
第四	れ	れ	るゝ	るれ	れ
第五	られ	られ	らるゝ	らるれ	られ

(四) 四段活用動詞の遣はむ・習はむ・又、中二段活用の盡きむ・延ひむ・懲りむ、下二段活用の果てむ・肥にむ・濡れむ等の語を左行四段活用に移して、遣はさむ・習はさむ・盡くさむ・延ばさむ・懲らさむ・果たさむ・肥やさむ。

濡らさむ・などのごとく用ゐる事あり。斯かる動詞は、總べて本來の動詞の語尾をも併せて送るべし。例へば左のごとし。

遣はす、習はす、動かす、起こす、盡くす、落とす、延ばす、懲らす、下ろす、果たす、出だす、肥やす、冷やす、殖やす、癒やす、濡らす、晴らす、馴らす、遣はし、習はし、句はす、[用例略]

落とさむ、吾が身は、三千餘騎にて、一の谷の後、鶴越

を、落とさむとて、(平家)

落ち、血の涙、落ちてぞたぎつ。(下略)(古今十六)

果たして、果たして、矢に中りて、失せ給ひにけり。

(徒然草)

果て、ある人、縣の四年五年果てゝ例の事ども、皆、

しをへて、[下略](土佐日記)

肥やせ、火の用心。おせん泣かすな。馬、肥やせ。

肥に、大なる車、肥にたる馬、金玉のかざりも、心あ

らむ人は、うたて愚なりとぞ見るべき。(徒然草)

肥やし、苗に水を灌ぎ肥やしをして養ふ。

○本條の習はし・句はすと、使役の句はせ・句はす・又、習はせ・習はすなどと、送假字を混同せざるやうにすべし。其の使役なる例は、

句はせ、梅、香を、櫻の花に句は、せ、て、柳が枝に、

咲か、せ、てしがな。(後拾遺・一)

習はせ、手本、書き習は、せ、などして(紅葉賀)

(五) 動詞の語尾、及、語尾に助詞の添ひたるを延音にしたる者、例へば、曰ふを曰はく、恨むるを恨むらく、聞かむを聞かまく・聞くなるを聞くなり・などのごとき延音は、延音の部分を通じて、送假字とす。例へば、左のごとし。

動詞の延音。

曰はく、(曰ふ) 希はく、(希ふ) 思はく、(思ふ)
 通はく、(通ふ) 疑はく、(疑ふ) 待たく、(待つ)
 聞かく、(聞く) 申さく、(申す) 恐らく、(恐る)
 恨むらく、(恨むる) 戀ふらく、(戀ふる)
 言へらく、(言へる) 思へらく、(思へる)

助詞の延音。

聞かまく、(聞かむ) 言はまく、(言はむ)
 見まく、(見む) 掛けまく、(掛けむ)
 越はまく、(越はむ) 聞くなり、(聞くなる)
 道ふならく、(道ふなる) 更けぬらく、(更けぬる)
 咲かなく、(咲かぬ) 明かしつらく、(明かしつる)

〔用例略〕

(六) 四段活用動詞の書きてを書いて・笑ひてを笑うて・讀みてを讀んで・取りてを取つて・などのごとく、本來活用の音を、音便に移して、送假字とすることあり。是等は、專、中古の消息文、又は戦記文等には多く見えたれど、元來、音便言なれば、古書等に、其の時の談話語、又は語勢を取る處にては、さも書くべけれど、通常の文章には、尙、正格に書

くを宜しとす。但、方今の普通文中には、往々、啼いて・言うて・讀んでなどを啼ひて・笑ふて・讀むでなど書き誤る者多ければ、左に表示して、其の非なる理由を述ぶ。

四段活用・奈行變格・良行一種第一格等の動詞の正しき活用の發聲を、音便に移すは、元來、習慣の便に依りし者なれば、悉く、一定の法あるにはあらねど、其の最、普通なる者を類別すれば、左表のごとし。

○動詞音便表

種名	母音		撥音		促音		音	
音便假字	い	う	ん			つ		
音便となる動詞語尾	き、ぎ	し、	ひ、	び、	み、	り、	に、	ひ、
	ち、	り、						
動詞の活用	加行四段活用	左行四段活用	波行四段活用	波行四段活用	麻行四段活用	良行四段活用	奈良變格活用	波行四段活用
	多行四段活用	良行四段活用	良行一種第一格活用					

左の例證より一段下に掲げたるは、音便となりたらぬ例にて、彼此参照の便あらしめむが爲なり。

啼いて、(啼きて、) 指いたる、(指したる、) 迷うて、(迷ひ、) 向うて、(向ひて、) 思うて、(思ひて、) 學んで、(學びて、) 飛んで、(飛びて、) 慎んで、(慎みて、) 踏ん、(踏み、) 畢んぬ、了んぬ、(終り、) 死んで、(死に、) 打つて、(打ちて、) あつて、(ありて、) 承つて、(承りて、) 〇()は一段下げた例。用例略]

第四章 形容詞

形容詞は、其の語尾の活用を送假字とす。

○形容詞とは、あらゆる、事物の形容をいふに用ゐる詞なり。是に二種あり。久志幾活用、久志々幾活用是なり。其の類語を擧ぐれば、左のごとし。

第一節 久志幾活用の形容詞。

善し、遠し、白し、

志久志々幾活用の形容詞。

惡し、涼し、悲し、

○注意 形容詞の無しは、動詞の有りを假字にて書くがごとく、なく・なし・なき・なけれと書くを普通とせり。例へば、左のごとし。

〔用例略〕

志久志々幾活用の用例は、著ければ示さず。

○形容詞語尾活用表

種 名	例詞	將然言	連用言	終止言	連體言	已然言
久志幾活用	善	く	く	し	き	けれ
志久志々幾活用	惡	しく	しく	し	しき	しけれ

又、左に掲ぐる類の形容詞も、總べて右の格に従ひ送假字を附くべし。

長々し、輕々し、

つきつきし、おどろおどろし、ゆゆし、ををし、

心易し、心苦し、薄赤し、間近し、

〔用例略〕

又恨めし・頼もし・怖ろしなどのごとく、動詞より變成せる形容詞は、動詞本來のまゝを送假字とすべし。例へば、左のごとし。

恨めし、睦まし、怖ろし、痛まし、亂りがはし、

〔用例略〕

第二節 久活に屬せる安し・寒しを安けし・寒けしといひ、又、志久活用に屬せる惜し・悲しなどを、惜しけし・悲しけしなどのごとく送假字するは、久活、志久活の古格にて、上代には、多く用ゐられたりしが、今も稀々には残りて用ゐらるゝことあり。其の送假字は、左表に據るべし。

○形容詞古格語尾活用表。

種 名	例詞	將然言	連用言	終止言	連體言	已然言
久志幾活用	善	けく	けく	けし	けき	け
志久志々幾活用	惡	しけく	しけく	しけし	しけき	しけ

明らけき、惡しけく、寒けく、長閑けく、長閑けし、

〔用例略〕

第三節 形容詞の語尾を音便とする注意。

形容詞の善く・惡しくを善う・惡しうなど書き、又、善し・善き・惡しきを善い・惡しいなど書き、或は重みす・輕みすを重んず・輕んずなど書くは、皆、音便言なれば、動詞の音便言と同じく、能く其の用ゐるべき時を考ふべし。是も往々、善ひ・惜しひ・輕むすなどのごとく、書き誤る者あれど、其の非なることは動詞の音便言に準らへて知るべし。

○形容詞音便表

程 名	音便假字	音便となる形容詞語尾	形容詞の活用
母 音	い	し き	久志幾活用
母 音	う	く	久志幾活用
撥 音	ん	み	形容詞の添語

善い、(好き,)悲しい、(悲しき,)忝う、(忝く,)久しう、久しく、)重んずる、(ん)は一段下げ。用例略〕

此の音便のう・んに關する諸注意は、總べて動詞の音便の條に同じ、參看すべし。

又、熟語にて、形容詞と成れる者、例へば、

咲く花、 見る人、

落つる石、 枯るゝ木、

くる時、 逸する馬、

死ぬる兵士、 或る人、

咲ける花、 善かる家、

親知らずの嶮、 忘れじの行末、

遙なる山、 長閑やかなる日影、

信實なる人、 窈窕たる淑女、

などのごとく、動詞・助詞等の多く重なりて成れる者は、總べて本來の送假字を用ゐる、例へば、左のごとし。〔用例略〕

○謂はゆる・云はゆる・あらゆるなどのごとく、下句を形容せる語は、右に準じ、總べて、本來の送假字法に據るべし。

若、漢字のみにて所謂・所有・など書かば、「ゝ」を文字の右脚邊に附けて、下句と區別すべし。例へば左のごとし。

所謂、重盛など、暗愚無才の身を以つて、蓮府

槐門の位に至る。(盛衰記)

あらゆる、あらゆる、功臣、多く亡びしかど、張良は、身を全くしたりき。(正統記)

第五章 副 詞

本成副詞、及、名詞の變成副詞には、文字の右脚邊に「、」を附けて、送假字を附けず。又、に・かに・らかに・やかに・げに・しげに・さに・しさに・らに・しらに・を語尾とせる本成副詞、及、動詞形容詞の變成副詞には、其の本來の語尾を送假字とす。

○副詞とは、動詞・形容詞等に添はりて、其の意を種々に限定するに用ゐる詞なり。是に本成副詞、變成副詞の二種あり。

第一節 本成副詞。本成副詞とは、本より副詞にのみ用ゐらるゝ詞にて、語尾に活用なき者なり。其の類を擧ぐれば、左のごとし。

(イ) 本 成 副 詞。
 始^{ハジメ}會^{カヒ}直^{ナホ}抑^{ヨメ}屢^ル交^{カウ}率^{ソウ}逾^ユ恰^{チヤ}
 甚^{ヘタ}適^{タツ}雷^{ライ}唯^{タラシ}數^ス悵^{ササ}自^{ミヅカラ}彌^ミ宛^{アタカモ}
 太^{ハタ}倩^{セン}翅^テ惟^{タラシ}頗^{スル}間^マ各^{オノオノ}聊^{イカガ}豈^{イタカモ}
 酷^{ハタダ}熱^ツ忽^{オナ}只^{タラシ}東^{トウ}姑^{シバ}旦^{カン}況^{イフ}豫^{アツカシ}
 孔^{ハナ}尙^{ナホ}乍^{オナ}止^{トメ}乃^{ナラ}頃^{シバ}嘗^{カシ}知^チ剩^{アツサヘ}
 痛^{ハタダ}猶^{ナホ}奄^{オナ}第^{タビ}即^{ソコ}少^{シバ}曾^{カシ}轉^{マウ}今^{イマ}
 苦^{ハタダ}仍^{ナホ}倏^{オナ}祇^{タラシ}便^{ソコ}暫^{シバ}必^{カナラ}凡^{オホソコ}未^{イマダ}
 深^{ハタダ}秘^ヒ偶^{オナ}徒^{タラシ}輒^{ソコ}亟^{シバ}蓋^{カシ}概^{オホソコ}愈^{イコ}

絶^{ハツ}約^{ヤク}先^{マヅ}衆^{シュウ}原^{ゲン}旋^{セン}劇^{ゲツ}又^{マタ}自^{ミヅカラ}寧^{ネイ}若^{ニホ}良^{リヤウ}較^{カウ}差^サ尤^{モトモト}寧^{ネイ}無^ム躬^{コウ}亦^{オモ}殆^{ハイ}幾^キ復^{フツ}親^{シン}元^{ゲン}尤^{モトモト}素^ソ軀^コ也^ヤ記^キ粗^ソ倍^{ハイ}益^{イク}纖^{セン}稍^{シヤウ}舊^{キウ}咸^{ケン}固^コ舉^{キョ}滋^シ略^{リョク}

○以下に掲ぐる用例は、特に、他と紛れ易き者のみを掲ぐ。其の他は、之に準へて知るべし。

〔用例略〕
 ○且^{マツ}・且^{マツ}らく・暫^{シバ}らく・暫^{シバ}し、などのごとく、同字異義の者は、誤讀なからむが爲に、便宜、送假字を附くべし。例へば左のごとし。

且^{マツ}、路、迂にして窄く、攀ち躋りつゝ、且^{マツ}、望み且^{マツ}、行く。(提醒記談)

且^{マツ}らく、先、彼へ下りて、且^{マツ}らく兵の機を助け、北國を討ち隨へ、重ねて大軍を起して、天下の藩屏たるべし。(太平記)

暫^{シバ}らく、旁、恐ある申事にて候へども、暫^{シバ}らく御心を鎮めおはしまして、(盛衰記)

暫^{シバ}し、屢、涙を拭ひつゝ、暫^{シバ}しありて言ひけるは、(駿臺雜話)

又、漢字を用ゐて書く只管・流石等の類、及、漢語の畢竟・漸次・一切等のごとく、總べて、漢字を用ゐる者も、亦、本

○本成副詞にして、語尾に種々の助辭を持てる者。

○大きに・大いに・忽に・忽せに・などのごとく、同字兩訓の者は、便宜、送假字カチマデを附けて、區別すべし。例へば、左のごとし。

用例略

(口) かにを語尾とせる副詞は、例へば、左のごとし、
明かに、平かに、朗かに、定かに、

(ハ) 名らかにを語尾とせる副詞は、例へば、左のごとし。

荒らかに、重らかに、
高らかに、清らかに、
黒らかに、安らかに、

用例略

(三) やかにを語尾とせる副詞は、例へば、左のごとし。
穩やかに、細やかに、緩やかに、長閑やかに、

用例略

(イ) にを語尾とせる副詞は、
 濫^{ミダリ}に^ニ 互^{カガヒ}に^ニ 夙^{ツト}に^ニ 壓^ヲに^ニ 正^ヲに^ニ 卒^ツに^ニ 既^ツに^ニ
 頻^{シキリ}に^ニ 稀^ヒに^ニ 右^{ミダリ}に^ニ 纒^ヲに^ニ 雅^ヲに^ニ 舉^ツに^ニ スデに^ニ
 餘^{ナリ}に^ニ 怒^ナに^ニ 上^{ウヘ}に^ニ 遙^{トホ}に^ニ 方^{カタ}に^ニ 訖^ツに^ニ 業^ノに^ニ スデに^ニ
 假^カに^ニ 殊^ツに^ニ 東^{トウ}に^ニ 俄^ガに^ニ 將^{マダ}に^ニ 共^{トモ}に^ニ 業^ノに^ニ スデに^ニ
 巧^{タカク}に^ニ 更^{タラシ}に^ニ 茲^{ココ}に^ニ 竊^{ヒソカニ}に^ニ 祇^{タラシ}に^ニ 與^{トモ}に^ニ 終^ツに^ニ ツヒに^ニ
 恣^{ソコニ}に^ニ 漫^{マダニ}に^ニ 懇^ネに^ニ 日^ヒに^ニ 多^{オホク}に^ニ 俱^{トモ}に^ニ 遂^ツに^ニ ツヒに^ニ
 試^{コト}に^ニ 專^{モトメ}に^ニ 誠^{マコト}に^ニ 年^{トシ}に^ニ 僅^{ワザ}に^ニ 偕^{トモ}に^ニ 竟^ツに^ニ ツヒに^ニ

花やかに、健やかに、鮮やかに、若やかに、

〔用例略〕

(ホ) げにを語尾とせる副詞とは、例へば、左のごとし。

重げに、消げに、賢げに、古げに、快げに、

〔用例略〕

(ヘ) しげにを語尾とせる副詞とは、例へば、左のごとし。

樂しげに、嬉しげに、苦しげに、忙しげに、厭はしげに、恥かしげに、包ましげに、頼もしげに、

〔用例略〕

(ト) さにを語尾とせる副詞は、多く副詞句の用をなす。

〔用例略〕

例へば、左のごとし。

寒さに、憂さに、難さに、善さに、

〔用例略〕

(チ) しさにを語尾とせる副詞も、多く副詞句の用をなす。例へば、左のごとし。

寂しさに、戀しさに、涼しさに、悲しさに、

樂しさに、嬉しさに、

〔用例略〕

(リ) らにを語尾とせる副詞とは、例へば、左のごとし。

清らかに、厚らかに、美味らかに、

〔用例略〕

(ヌ) しらにを語尾とせる副詞とは、例へば、左のごとし。

〔用例略〕

佗しらに、戀しらに、賢しらに、

〔用例略〕

第二節 變成副詞。變成副詞とは、動詞、形容詞、及、熟語

等より變じて副詞と成れる者なり。例へば、左のごとし。

(イ)

動詞より變成せる副詞。動詞より變成せる副詞は、皆、ての語尾を持ち熟語となりたる者なり。例へ

ば、左のごとし。

取へて、肖へて、追ひて、却りて、反りて、

兼ねて、極めて、定めて、重ねて、都て、

總べて、渾べて、續きて、尋きて、初めて、

始めて、甫めて、以ちて、因りて、依りて、

〔用例略〕

(ロ)

形容詞より變成せる副詞。形容詞より變成せる副詞とは、久活・志久活の連用言にて、く・しくを語尾

とせる者なり。例へば、左のごとし。

善く、早く、固く、久しく、樂しく、悲しく、

煩はしく、頼もしく、願はしく、歎かはしく、

心易く、言痛く、

亮けく、長閑けく、平けく、安らけく、

〔用例略〕

(ハ)

熟語より成れる副詞。熟語より成れる副詞にして、語尾を多く送假字とせざれば、誤謬を生じ易き者、

數類あり。例へば、左のごとし。

安んぞ、惡んぞ、焉んぞ、安んか、何處にか、

何ぞ、曷ぞ、奚ぞ、盍ぞ、胡ぞ、

何ぞや、何とぞ、何時ぞや、如何にぞや、

争で、争でか、何時しか、何しかも、

如何にして、如何なれや、何とて、

恐らくは、宣はくは、希はくは、須べからくは、

案するに、詮するに、惟みに、惟みれば、

初より、元より、固より、素より、

どつと、だぶと、からくくと、むづと、

暗然として、暗々として、

辛苦して、危くして、逃げずして、

是に於いて、之に因りて、

此の故に、故が爲に、

此くのごとく、斯くのごとく、

又、疊語にては、

おめく、しかく、いとく、

泣くく、行くく、知らずく、

縦、

縦、動功の賞には、預からずとも、此の首遺物返

し送り、今一度、替れる貌を見せ奉らばや。(盛衰記)

縦令、新院國を奪はせ給ふとも、仙院晏駕の後、

僅に十箇日の中に、此の御企、宗廟の御計も計り難

く、保元)

第六章 接 續 詞

本成接續詞には、文字の右脚邊に「、」を附けて、送假字を

附けず。變成接續詞には、其の本來の法に従ひて、送假字を

附く。

○接續詞とは、文・句・語等を連接するに用ゐる詞なり。是

に本成接續詞、及、變成接續詞の二種あり。

第一節 本成接續詞。本成接續詞とは、本より接續詞にのみ

用ゐらるゝ語なり。但、及、就中、加之、旁の四語は、本成

接續詞の例に倣ふ。

且、カシ 則、スナハチ 乃、スナハチ 抑、ソダシ 又、マタ

但、タダシ 若は、モシバ 將、マカシ 就中、ナカニ 加之、ソノヘ 及、カ 旁、ヨナリ

若は、古より、大日本とも、若は、大の字を加えず、日

本とも書けり。(正統記)

徒然なる夕暮、若は、物あはれなる明ぼの、(明石)

若は、は、助詞ともに接續詞となれるなれば特に

送假字を附くこと右のごとし。但、方今は、

若くはとのみ用ゐれど若はの語原は、形容詞の志

久活用にはあらぬを、モシと云ふ語尾の、志久活

第七章 助詞

用の詞に似たるを以つて、混じたるなるべし。然れば、古書には、皆、若^レはとのみ用の、若^クは用のたる例なし。故に本書には、若^クはの例を擧げず。因に云ふ副詞にて若^モ、若^モ、若^ヤ等のこときは、皆、送假字を附くべし。

思ひ出で、若^モ尋ぬる、人あらば、ありとな言ひそ定なき世に（新古今・十八）

若^ヤと隠れて見ばやと思し返して佛殿の方を御覽するに（太平記）

將、就中、加之、及、旁、〔用例略〕

第二節 變成接續詞。變成接續詞とは、動詞に助詞の添ひて熟語となりたる者、又は、接續詞の相重なりたる者等なり。

例へば、左のごとし。

并^{ナラビ}に、故^{ユヘ}に、而^{シカ}も、或^{アル}は、（或^{アル}謂^{イヒ}は）
而^{シテ}して、然^{シテ}して、而^{シテ}るに、
然^{ラバ}らば、然^{ラバ}れば、然^ルるに、然^ルるを、
然^レれども、雖^イへども、
且^ツ又、又、將^{マデ}又、
然^リりと雖^イへども、然^{ラバ}らば則^{スナハチ}

〔用例略〕

助詞の中に於いてなり・べし・ごとし及、て・とも・ども・ばかり・より・まで・のみ・の十詞は、悉く假字にて書き、漢字を用ゐず、依りて送假字を附けず。

○助詞とは、各種の詞の其の意を盡さざる時、其の意を助くるに用ゐる詞なり。是に二種あり。動助詞、靜助詞是なり。

第一節 動助詞の中に於いて、なり・べし・ごとしの三詞の用例は例へば、左のごとし。

（イ）なりは漢字にては、也と書けど假字にて書くべきこと、左の例のごとし。さて、なりには、二種あり。

其の一は詠歎のなりにして、其の一は、指定のなりなり。

詠歎のなりの用例。〔略〕

指定のなりの用例。〔略〕

（ロ）べしは漢字にては、可しと書けど、假字にて、書くべきこと、左の例のごとし。

〔用例略〕

（ハ）ごとしは、漢字にては、如しと書けど、假字にて書くべきこと、左の例のごとし。

〔用例略〕

第二節 靜助詞の中に於いて、て・とも・ども・ばかり・より・まで・のみ・の七詞は漢字にては、而・共・計・從・自・

迄・而已・耳、と書けど、假字にて書くべきこと、左の例のことし。

〔用例略〕

第八章 感 歎 詞

感歎詞は、總べて假字を用ゐる。但、あゝ（嗚呼）かな（哉）の二字を慣用に倣ひ、漢字を用ゐる時は、其の文字の右脚邊に「ゝ」を用ゐて、送假字を附けず。

○感歎詞とは、何事にまれ、人心に感ずる事ありて、發する聲を表はすに用ゐる詞なり。左に、其の普通なる者を擧ぐ。

あ、 あゝ、（嗚呼）あは、あはれ、あはや、

あな、 あなや、 あら、

いざ、 いで、 いでや、

や、 やあ、 やよ、 やよや、

か、 かな、（哉）

よ、 な、 かし、 は、 も、

を、 ね、

〔用例略〕

國語調査委員會編 送假名法

(明治四十年三月)

例言

祝詞宣命ヨリ、日記類、軍記類、現今ノ普通文ヲ通觀スルニ、時代ニヨリ、使用者ニヨリ、送假名ノ方法ハ毫モ一定セルモノニアラス。規則ヲ以テ之ヲ律セントスレバ慣用ニ背キ、慣用ニ委スレバ亂雜際涯ナカラントス。一般ノ法文、教科用書等ニ於テ、少クトモ大體ノ統一ヲ有セシムベキハ國家ノ體面上ヨリイフモ必要ナリ。コレ今諸家ノ手ニ成レル送假名法及ビ從來ノ慣例ヲ參照シテ、本法ヲ規定セル所以ナリ。

從來世ニ出デタル送假名法ニシテ、調査者ノ目ニ觸レタルモノハ、官報局ノ送假名法、濱田健次郎氏ノ副假字法規、中根淑氏ノ送假名大概、女子高等師範學校ノ送假名法、佐藤仁之助氏ノ新撰送假字法、文部省ノ送假名寫法、箕輪醇氏ノ送假名辨、高等師範學校水曜會ノ送假名法、其他幼年學校、東京府第一中學校、徳島師範學校、靜岡師範學校ノ送假名法等ナリ。從來ノ送假名法ハ送ルベキモノト、送ルベカラザルモノトヲ規定セリ。本法ハ簡約ナランコトヲ欲シテ、送ルベキモノノミヲ擧ゲタリ。故ニ本法以外ノモノハ、送假名ヲ附セザルモノト知ルベシ。

本法ハ活用語ノ語尾變化ヲ送假名トスルヲ主眼トセリ。活用ハ常ニ最後ノ一音ニアルヲ以テ、普通ノ活用語ハ皆最後ノ一音ヲ送ルヲ通則トス。又副詞ノ三音以上ノモノハ一字ヲ送ルコトト定メタリ。故ニ附録トシテ卷尾ニ二字以上ヲ送ルベキ動詞、形容詞、副詞等ノ一覽表ヲ添ヘタリ。本則ヲ見テ疑義アルトキハ參照スベシ。

本法ハ現行普通文ヲ標準トシテ規定シタルモノニシテ書翰文、口語文ニハ之ニ準ジテ、多少ノ斟酌ヲ要スベシ。

本法ハ普通ノ漢字ニツキテ大體ノ法則ヲ定メタルニ過ギザルヲ以テ、本法ノ及バザルトコロハ、句讀點、傍訓、假名書等便宜ノ方法ニヨルモノトス。

明治四十年六月

國語調査委員會

送假名法ノ四綱領

- (1) 活用語ノ語尾變化ヲカキアラハスコト。
- (2) 語ノ末ニ附屬スル助詞、助動詞ヲカキアラハスコト。
- (3) 語ノ末ニ含マルル接尾語ヲカキアラハスコト。
- (4) 漢字ヲ音讀スルモノハ漢字以外ヲカキアラハスコト。

送假名法

第一則 漢字ヲ以テ活用語(動詞、形容詞、助動詞)ヲ書キアラハストキハ、語尾ノ活用スル部分ヲ送假名トナスベシ。

(1) 普通ノ活用形

(例)

書カズ 書キタリ 書クベシ 書ケドモ
起キズ 起キタリ 起クベシ 起クルナ

告ゲズ 告ゲタリ 告グベシ 告グルナ

死ナズ 死ニタリ 死ヌベシ 死ヌルナ

決セズ 決シタリ 決スベシ 決スルナ

善ク 學ブ 善シトナリ 善キ人 善ケレドモ

苦シク 思フ 苦シトイフ 苦シキ時

學ブ可ク 學ブ可シ 學ブ可キコト 學

花ノ如ク 花ノ如シ 花ノ如キ人

活用形ノ音便ニヨリテ他ノ音ニ轉ジタルモノ。

燒キテ 燒イテ

思ヒテ 思ウテ

積ミテ 積ンデ

遊ビテ 遊ンデ

立チテ 立ツテ

長クナル 長ウナル

悲シキカナ 悲シイカナ

形容詞

助動詞

形容詞

(3)

從來延言ト稱シテ、活用形ノ延ビタルモノト見做シタルモノ。

(例)

願フ 願ハク
恐ル 恐ラク
見ム 見マク
言ヘル 言ハラク

除外一

也ノ終止形、候ノ連體形、終止形ニハ送ラズ。

(例)

朝ニ道ヲ聞イテ、タニ死ストモ可也。

除外二

或、非、否ニハ活用ノル、ラヲ送ラズ。

(例)

或人ハコノ説信ズベキニ非ズ。當時ノ傳説カ、否ズンバ後人ノ附會ナルベシトイヘリ。

除外三

曰ハハヲ送ラズ。

(例)

孔子曰ク仁者ハ山ヲ樂シムト。

(説明)

漢字ニハ變化ナク、國語ニハ語尾變化アリ。送假名ノ必要ココニ於テ生ズ。故ニ送假名法ノ第一原則トシテハ、マツ活用語ノ語尾變化ヲ書キアラハサシメザルベカラズ。本則ハ普通文法ニ於テ説ク所ノ、四段以下ノ動詞活用、形容詞ノクシキ活用、助動詞ノ活用等、イヅレモソノ活用スル部分ヲ書キアラハスベキヲ示ス。「牛ヲ賣テ書ヲ買フ」「人觸バ人ヲ斬ル」ノ如ク、十分ニ語尾ノ活用ヲ書キアラハサザルトキハ、「賣リテ」「賣ツテ」ノ如ク、「觸レバ」「觸ルレバ」ノ如ク幾様ニモ讀ミ得ベキ嫌ア

リ。之ニ反シテ「城ヲ陷トシイル」「終日眠ムル」ノ如ク、
濫リニ活用形以外ヲ送ルコトモ亦無益ナリ。故ニ活用語
ノ活用スル部分ヲ明瞭ニ書キアラハスヲ以テ標準ト定
ム。コノ規則ニ伴ヒテ、燒イテ思ウテノ如ク、音便ヨリ
來レルモノハ、活用形ノ他ノ音ニ轉ジタルモノナレバ、
亦之ヲ書キアラハスベク、從來延言ト稱シタルモノハ、
文法上未ダ適當ナル説明ナケレドモ、假ニ活用形ノ延ビ
タルモノト見做シ、コノ條下ニ收ム。

除外例ハ慣例ニヨリテ設ケタルモノトス。

第二則 活用語ノ活用セザル部分ニ他ノ語ノ活用形ヲ含ムモノハ、送假名トシテ之ヲ書キアラハスベシ。

(1) 動詞ノ中ニ他ノ動詞ノ活用形ヲ含ムモノ。

(例) 驚カス 動カス 纏ハス 惑ハス
行ハル 塞ガル 語ラフ 移ラフ 老イバム

(2) 動詞ノ中ニ形容詞ノ活用形ヲ含ムモノ。

(例) 怪シム 悲シム 樂シム 悲シブ
全クス 辱クス 全ウス 辱ウス

悲シガル 嬉シガル

(3) 形容詞ノ中ニ動詞ノ活用形ヲ含ムモノ。

(例) 騒ガシ 歎カシ 喜バシ 願ハシ 疑ハシ
歎カハシ 忌マハシ

(説明) コレハ第一則ヲ基礎トシテ立ち、シカモ其ノ例
外ト見ルベキ規定ナリ。即チ一ノ動詞ヨリ轉ジテ更ニ他

ノ動詞トナレルモノ(1)、又ハ形容詞トナレルモノ(3)、
及ビ形容詞ヨリ轉ジテ動詞トナレルモノ(2)、ノ二種三
類ニ關スル規定ニシテ、ソノ本ノ動詞、形容詞ノ活用ヲ
書キアラハサシムルヲ主眼トスルモノナリ。要スルニ同
一ノ漢字ガ語尾活用ヲ異ニスル種々ノ活用語ニ用キラル
ルトキ、最モ單純ナル活用語ノ活用ヲ本トシテ、他ノ活
用語ノ送假名ヲ定ムベシトイフ規定ナリ。然レドモ一
コノ動詞ハコノ形容詞ヨリ出デタリト、語原ノ詮索ヲナ
サンコト繁雜ナレバ、コレヲ鑒別センニハ左ノ方法ニヨ
ルベシ。

(イ) マヅ活用スル部分ヲ取除クベシ。而シテナホ動詞
又ハ形容詞ノ活用形ヲ有スルカ否カラ檢スベシ。例ヘバ
惑ハス、騒ガシ、ノ如キハ最後ノ音ス又ハシヲ省クニ、ナ
ホ惑ハ、騒ガ、ノ如キ他ノ動詞ノ活用形ヲ有ス。コレ即チ
惑ハシ、惑ハズ、騒ガン、騒ガズ、ナド、イハユル未然段
ノ活用形ナレバナリ。之ニ反シテ起ス、聞ユ、ノ如キ動
詞ハ最後ノ音ス、ユヲ省クニ、オコ、キコ、トナリテ、
動詞ノ活用形ニアラズ。故ニ起ス、聞ユ、ノ場合ニハコ
ヲ送ラスコトト知ルベシ。

悲シム、苦シム、ノムヲ省ケバ悲シ、苦シ、トナリテ形容
詞ノ終止形ヲ有スルヲ以テ、コレヲハシヲ送ルモノト知
ルベク、戒ム、嗜ム、ノ如キハ、ムヲ省キテイマシ、タシ、
ノ形容詞ナケレバ、シヲ送ラザルモノト知ルベシ。

(ロ) 全ウス、久シウス、ノ如ク形容詞ノ音便ヲ有スルモノハ、第一則(2)ニ準ジテ、同ジク之ヲ送ルベシ。

(ハ) 語尾ニ接尾語アルモノハ、ソノ接尾語ヲ省キテ、活用形ヲ有スルカ否カヲ見ルベシ。悲シガル、歎カハシ、ノ悲シ、歎カ、ノ如シ。

(ニ) 驚カス、動カス、ノ如キハ各一ツノ動詞ナレドモ退カス、叩カス、ノ如キハ退ク、叩ク、ノ動詞ニスノ助動詞ノ添ヒタルモノナリ。第一則ニ據リテ活用ノミヲ送ルコトトスレバ、一ハ驚ス、動ス、ト書キ、一ハ退カス、叩カス、ト書分ケシメザルベカラズ。カクテハ教育上多少ノ困難ヲ免レザルベシ。本則ニ從ヘバ、コノ不便ナキコトヲ得ベシ。

第三則 ケシノ語尾ヲ有スル形容詞ニ用キラレタル漢字ニハ、猛シノ一語ヲ除ク外、スベテケシヲ送假名トナスベシ。

(例) 遙ケシ。 豊ケシ。 長閑ケシ。

(説明) コレ亦第一則ノ除外例ニシテ、慣用ヲ主トシタル規定ナリ。ケシノ語尾ヲ有スル形容詞ハ大抵カニトナリテ副詞ノ形ヲナスモノナリ。速ニ、遙ニ、ノ如シ。コレ等ハ速シ、遙シ、ト書キテ、スミヤケシ、ハルケシ、ト讀マシムルコト普通ナラザレバ、スベテケシト書クモノト定ム。

第四則 形容動詞ニ用キラレタル漢字ニハ、語尾ノナリ、タ

リ、カリ、ヲ送假名トシテ書キアラハスベシ。

(例) 詳ナリ。 異ナリ。 立派ナリ。 斐タリ。 巍然タリ。 滔々タリ。

善カリ。 惡シカリ。 苦シカリ。

(説明) ココニ形容動詞ト稱ヘタルモノハ、副詞ノ形ヲ有スル形容詞ノアリニ連リテ約リタルモノナリ。其ノ語尾ニ、ナリ、タリ、カリ、ノ三種アリ。コレ等ハ文ノ中間ニ於テハ其ノ本ノ形ニ、ト、ク、ヲ履ミテアラハルコト多キモノトス。故ニ今ソノニ、ト、ク、以下ヲ送假名トスル標準ニヨリ、語尾ノナリ、タリ、カリ、ヲ送ルコトト定ム。

タリ、カリ、ノ語尾ヲ有スルモノニ於テハ、世上ノ慣用イヅレモ一致セリト雖モ、ナリノ語尾ヲ有スルモノハ詳カナリ、豊カナリ、ナドノ如ク、カヲ送ル人ト、送ラザル人トアリ。本則ニヨレバカヲ送ラザルモノトス。

第五則 副詞ヨリ轉ジテ活用語ニ用キラレタルモノハ、活用以外尙、副詞ノ送假名ヲ附スベシ。

(例) 再ビス。 以テス。 (動詞) 未ダシ。 甚ダシ。 (形容詞) 専ラナリ。 頻リナリ。 (形容動詞)

(説明) 活用語ヨリ轉ジテ副詞トナレルモノハ、尙ソノ活用形ヲ送假名トスルコトト定メタルヲ以テ、(第七則参照) 副詞ヨリ活用語トナレルモノハ、亦已ニ副詞トシ

テ用キタル送假名ヲ附セシメ、ソノ形ヲ同一ナラシムルヲ目的トス。(第八則参照)

第六則 漢字ノ二字以上ヲ以テ複合活用語ニ訓ジタル場合ニハ、ソレゾレ送假名ヲ附スベシ。

(例) 流シ出ス 流レ出ツ

折リ込ム 折レ込ム

(説明) 漢字ノ二字以上ヲ國語ニ訓ジ用キルニハ(イ)苛責ム、隱匿フ、周章シ、目出度シ、ノ如ク、漢字ハ二字以上ニシテ、國語ハ單體語ナル場合アリ。(ロ)壓制ク、狡猾シ、ノ如ク漢字ハ二字以上ニシテ、國語モ亦複合語ナレドモ、意義ノ上ヨリ之ヲ當テテ、複合ノ各部ニ別別ノ漢字ヲ當テザル場合アリ。(ハ)落シ入ル、投ゲ打ツ、ノ如ク、複合ノ各部ニ別別ノ漢字ヲ當テ用キル場合アリ、本則ノ規定ハ(イ)(ロ)ニハ關係ナク、(ハ)ノ場合ヲノミ指スモノナリ。オトシイルヲ陷ル、ココロヨシ、ヲ快シノ如ク、複合語ノ全部ヲ一字ノ漢字ニテ示シ、又ハ落シイル、心ヨシ、ノ如ク一部分ヲ假名書ニスル場合ハ、亦モトヨリ本則以外ノコトトス。除外 二音ノ動詞ノ上部ニ來リタルキハ時宜ニヨリ、ソノ送假名ヲ省クコトヲ得。

(説明) 打語ラフ、差出ス、引受ク、等ノ打、差、引、ノ如キハ本ハ動詞ナレドモ全ク接頭語ノ如ク用キラレタルモノナリ。カクノ如キ場合ニ、一一ソノ送假名ヲ附セシ

ムコトハ、慣用ニソハザルガ如シ。有、受、取ノ如キニ音以下ノ動詞ノ複合語ヲナストキモ亦同ジ。然レドモ成リ、成シ、拔キ、拔ケノ如ク二音ノ語ニシテ自他ノ辨別ヲ必要トスルガ如キ場合ハ、之ヲ送ラシメザルベカラズ。故ニ本則ノ附則トシテ誤解、誤讀ヲ生ゼザル時ニ限り、上部ニ來ル二音語ノ送假名ヲ省クコトヲ許シ、多少ノ融通ヲ與ヘタルモノトス。

第七則 活用語ヨリ轉ジテ副詞、接續詞ニ用キラルルモノニハ、ソノ活用ヲ書キアラハシテ送假名トナスベシ。但シ副詞、接續詞ニノミ用キル漢字ノ場合ハ、尙第八則ノ例ニ據ル

(例) 因ツテ 極メテ 總ジテ 及ビ 案ズルニ 敢ヘテ 委シク 餘リニ 代ル

(説明) 動詞、形容詞ノ副詞トシテ用キラルルモノハ頗ル多シ。副詞ハ元來活用ナキ語ナレバ、己ニ副詞トシテ用キラルルニ於テハ、一一其ノ活用ヲ示ス必要ナキガ如クナレドモ、孰カ動詞、形容詞ニシテ、孰カ副詞ナルカラハ辨別センコト、文ノ解剖ノ知識ナキ時ハ困難ナル場合モアルベケレバ、スベテ活用語ニ準ジテ、ソノ送假名ヲ其ノ儘ニ送ルコトト定ム。豫テ、渾テ、於テ、雖モ、況ヤ、ノ如ク、國語ノ語原訓法ヨリイヘバ、活用語タルコト明瞭ナルモノト雖モ、普通ノ慣用上其ノ漢字ノ活用語ヲ寫スニ用キラレザルモノハ、尙普通ノ副詞ニ準ズベシ。

第八則 二音ノ副詞モシ、ヨシ、ヨク、カクノ四語、及ビ三

(例) 若シ 縦シ 能ク 克ク 斯ク (二音ノ例)

併シ。聊カ。
殆ド。爭デ。
必ズ。自ラ。
尤モ。甚ダ。
但シ。雖モ。
(三音以上ノ例)

重音ニテ一字ノ漢字ヲ當ツルモノハ、誤讀ヲ生ズル處ア

ル時ニ限り、語ノ右側下ニミテ附シ、送假名ヲ附セズ。
除外ニ日外、加之、遮莫、流石、就中、假令、生憎ノ如
ク漢字ノ熟語ヲ訓讀シタルモノニハ、送假名ヲ附セズ。
第九則 副詞、接續詞ノ語尾ニ助詞接尾語アルモノハ、ソノ

送ルベキ部分ヲ添ヘテ送ルベシ。

(例) 争デカ 必ズシモ 聊カモ 併シナガラ

(説明) 第八則ノ例ニヨレバ、コレ等ハ、争カ、併ラ、聊モ、等ト書クベシト思惟スルモノアラン。世上亦往往上ノ如キ送假名ヲ附スル人アリ。ヨリテ本則ヲ以テ之ヲ明ラカニス。

第十則 名詞、代名詞等ニハ送假名ヲ附セザルヲ通則トスレドモ、動詞ヨリ轉ジテ名詞トナレルモノ中、左ノモノニハ、本ノ動詞ノ活用ヲ書キアラハシテ送假名トスベシ。

(1) 漢字音ヲ活用シタル動詞ノ名詞トナレルモノ。

(例) 封ジ
通ジ
察シ
達シ
書損ジ

(2) 第一則第三項ノ動詞ヨリ名詞トナレルモノ。

(例) 思ハク。

(3) 第二則第一項ノ動詞ヨリ名詞トナレルモノ。

(例) 語ラヒ。習ハシ。

(4) 第十五則ノ動詞ヨリ名詞トナレルモノ。

(例) 赤ラミ
定マリ

(5) 動詞ニ助動詞ノ添ハリテ名詞トナレルモノ。

(例) 謂ハレ
使ハシメ

(6) 名詞ヨリ直ニ動詞ニ活用シ、更ニ其ノ連用形ノ名詞トナレルモノ。

(例)

製シ
製シ
ニ

(7) 分詞ノ性質ヲ有シテ、名詞ト動詞トノ中間ニ在ルモノ。

(例) 聞キニ來ル 買ヒニ行ク

(説明) 名詞ハ音訓ノ別ナク、單體語、複合語ヲ論ゼズ、本來ノ名詞ト、他ノ品詞ヨリ轉成シタルモノトヲ問ハズ、スベテ送ラザルヲ通則トスルコト、綱領ノ趣旨ヨリイフモ明白ナリ。普通ノ具體名詞ニ就イテハ、何人モ疑義ナカルベケレドモ、動詞ヨリ轉成シタルモノニハ、或ハ送假名ヲ附シ、或ハ之ヲ附セズ、爭ヒ、滯リ、行ヒ、ノ如ク書ク人ト爭、滯、行、ノ如ク書ク人トアリ。今ハ活用語トノ區別ヲ明瞭ナラシメンガ爲ニ、スベテ送假名ヲ附セザルコトト定メ、唯本則及ビ次ノ二則ニイヘルモノハ、其ノ除外例ト定ム。

代名詞ノ下ニ來ルベキ助詞ハ、必ズ書キアラハスモノトス。我が國、其ノ山ノ如シ。

國語ノ構造上名詞ヨリ動詞トナルモノハ棹サス、巢クフ、春メク、ノ如ク、複合語又ハ接尾語ヲ加ヘタルモノ多ク、(第十五則參照) 本條(6)ニイヘルモノハ其ノ例極メテ罕ナリ。マタグ、ツナグ、クモル、ノ如キモ國語ノ性質ヨリイヘバ、股グ、綱グ、雲ル、ニテ、名詞ヨリ動詞ヲ生ジタルモノナレドモ、コレ等ハ踳グ、繫グ、疊ル、等適當ナル漢字ノ動詞ヲ使用スレバ、注意スル必要ナシ。ココニイヘルモノハ、名詞ト動詞ノ語幹ト全ク相同ジクシテ同一ノ漢字ヲ使用スル場合ニ限ルモノトス。

(7) ハ今日ノ文法書類ニ於テ、未ダ何等ノ説明ナキモノ

ニシテ、外國文典ニイハユル分詞トイフモノニ似タリ。聞キニ、買ヒニ、トイフ時ハ名詞トシテ取扱フモ差支ヘナキガ如クナレドモ、「演説ヲ聞キニ來ル」「書物ヲ買ヒニ行ク」ノ如ク、客語ヲモ採リ得ベキヲ以テ、一面ハ尙動詞ト見做シ得ベシ。故ニコレ等ハ尙動詞ノ例ニヨリテ送假名ヲ附スルノ簡便明瞭ナルニ如カズト信ズ。

第十一則 動詞、形容詞ノ下ニサ、ミ、ゲ、ソノ他ノ接尾語ヲ附加シテ成レル名詞ハ、動詞、形容詞ノ送ルベキ部分ヲ添ヘテ送ルベシ。

(例) 甘ミ 重ミ 可笑シミ 憎シミ

樂シサ 露ケサ 歸ルサ 傷マシサ

物思ヒゲ 心有リゲ 物思ハシゲ

(注意) 悲、樂、親、苦、惜ハ動詞ヨリ出デタル名詞ト見做シ、送假名ヲ附セズ。

第十二則 動詞ヨリ轉ジテ名詞トナレルモノノ中、左ノ如キ場合ニハ、時宜ニヨリ送假名ヲ附スルコトヲ得。

(1) 自他兩様ノ動詞ニ用キラルル漢字ニシテ、單獨ニ名詞トシテ用キラレ、又ハ複合名詞ノ一部分トシテ用キラレ、自他辨別ノ必要ヲ感ズルトキ。

(例) 殘シ 渡シ 預ル人主

(2) 漢字ヲ音讀セル同形ノ語アリテ、辨別ノ必要ヲ感ズルトキ。

(例) 變リナシ(變ナシ)

讀ミ書キ (讀書)

(説明) 本則ハ慣用ヲ重シジテ、特ニ名詞ノ下ニ送假名ヲ附スルコトヲ許シタル規定ニシテ、誤讀誤解ヲ生ズル虞アリテ、萬ヤムヲ得ザル時ニノミ、之ヲ用キル精神ナリ。本則ヲ廣ク取レバ、スベテノ無形名詞ハ大抵送假名ヲ取ルコトトナリテ、前則説明ノ部ニイヘルコトハ全ク無用ノ事トナルノミナラズ、使用者ニヨリテ廣狹幾様ニモ解シ得ベケレバ、遂ニ送假名法ヲ一定スルコト能ハザルベシ。故ニナルベク送假名ヲ取ラザルコトヲ主限トシテ、本則ノ應用ハ出來得ベキダケ、之ヲ緊縮スベキモトス。

第十三則 數詞ハ一ツ、二ツ、三ツ、等數フルトキノツ、半バノバ、萬ヅノヅ、ヲ送ルベシ。

(例) 二ツ 五ツ紋

第十四則 連續セル語句ノ品詞トシテ用キラルルモノハ、各品詞ノ送ルベキ部分ヲ送ルベシ。

(例) 食ハズ嫌 然リト雖モ 何ヲ以テカ

然ル程ニ 怪シカラヌ

(説明) 國語ノ意味ヨリイヘバ連續セル語句ナレドモ、漢語ノ熟語ヲ以テ之ニ當テタルモノハ、モトヨリ之ニ據ラズ、第八則除外ニイヘル加之、遮莫、ノ如キコレナリ。第十五則 オヨソ單語ニ當テタル漢字、僅カニ其ノ一部分ニ該當セリト見ユル場合ニハ、其ノ他ハ送假名トシテ書キア

ラハスベシ。

(イ) 指サス 棹サス 畫ガク 鞭ウツ

(ロ) 春メク 黄バム

(ハ) 赤ラム 薄ラダ 安ラケシ 安ラカニ

(ニ) 定マル 連ナル 靜ケシ 横タハル 元ヨリ

(説明) 漢字ハ概念ヲ示ス文字ニシテ、同一字ヲ以テ或ハ名詞の概念ヲ示シ、或ハ動詞の概念ヲ示スコト、珍シカラヌコトナリ。(イ)ニ舉ゲタル漢字ノ如キハ名詞トシテモ用キ、動詞トシテモ用キルモノナリ。然レドモコノ場合ニオケル國語ノ動詞ハ、全ク複合語ニシテ、名詞ハ其ノ一部分ニ含マレタリ。故ニ單ニ其ノ活用ノミヲ送リテ、指ス、畫ク、鞭ツ、等トナスコト、甚ダ不十分ナルニ似タリ。(ロ)ノ春メク、黄バム、ナド接尾語ヲ加ヘテ活用語ヲ作レル場合モ亦然リ。(ハ)ハク、シ、キ、活用ノ形容詞ノ語幹ヲ示ス漢字ニシテ、國語ノ性質上ク、シ、キ、活用ノ形容詞ノ語幹ハ他ノ語ノ上下ニ連結シテ熟語ヲナシ、(例)ハ赤旗、腹赤、薄著、手薄、安物、目安)又ハ獨立シテ名詞ノ如ク用キラルルコトモ多キヲ以テ、自ラ漢字ノ一定ノ訓義タルガ如キ觀アリ。(ニ)ノ漢字ハ普通ノ人名、地名、其ノ他ニ用キラレテ、慣用上亦自ラ其ノ定訓ヲナセルガ如キ心地スルモノナルヲ以テ、合シテ本則ヲ立テタリ。梳、掌ノ如キハクシケヅル、ツカサド、ト訓ズルノミニテ、名詞トシテ用キラルルコトナ

シ。故ニ第一則ニ據リ、單ニ其ノ活用ノミヲ送假名トシテ梳ル、掌ル、ト書クモノトス。

本則鑒別ノ法、卽チ漢字ハ十分ニ其ノ語ニ該當セリヤ否ヤヲ驗セント欲セバ、動詞ノ場合ニ在リテハ、其ノ連用形ガ其ノ漢字ノ訓トシテ通用スベキカ否カヲ見ルベシ。凡ソ動詞ハ、連用形ニ於テイハエル假體言ヲナシ、名詞トナルモノニシテ、帶^{オビ}ズ、光^{ヒカリ}ル、願^{ネガヒ}フ、ノ動詞ハ連用形ニ於テ帶^{オビ}ズ、光^{ヒカリ}ル、願^{ネガヒ}フ、ノ名詞トナリ、動詞ニ用キラレタル漢字ハ、直ニ名詞トシテモ通用スベシ。然ルニ本則ニ舉ゲタル指^{ササユ}、春^{ハル}、薄^{ウス}、定^{サダメ}、ノ如キ、イヅレモユビサシ、ハルメキ、ウスラギ、サダメマリノ名詞トシテハ通用シ難シ。カクノ如ク連用形ガ其ノ漢字ノ訓トシテ通用シ難キ場合ニハ、漢字ハ十分ニ其ノ動詞ニ該當セザルモノト知ルベシ。

大阪毎日新聞 スタイル・ブック

(昭和八年二月改訂増補)

送り假名法

動 詞

動詞は、その活用する部分に假名を送ること

一、活用語に他の活用語が添はつた場合には、活用語の活用しない部分にも假名を送る

(イ) 延音の動詞

例——語らふ 計らふ

(ロ) 自動詞の他動詞に轉じたもの

例——動かす 騒がす 喜ばす

(ハ) 形容詞に他の活用語が添はつて動詞に轉じたもの

例——怪しむ 悲しむ 樂しむ 全う(く)する

二、副詞から轉じて動詞形となつたものには、副詞の假名を送るところに假名を送る

例——再びする

複 合 動 詞

複合動詞の下につく動詞は、すべて一般動詞の活用にしたがつて假名を送ること

一、上の動詞が二音のものは、紛らはしくない限り假名を送らない

(イ) 紛らはしくない場合

例——受取る 斬込む 引下げる 打切る 乗替へる 繰返す

(ロ) 紛らはしい場合

例——折り込む 折れ込む 生き残る 生れ残る

二、上の動詞が二音のものでも、下の動詞を假名で書く場合には、上の動詞はその活用にしたがつて假名を送る

例——受けとる 斬りこむ 引きさげる 打ちきる 乗りかへる 繰りかへす

三、上の動詞が三音以上のもものは、一般動詞の活用にしたがつて假名を送る

例——動き出す 思ひ出す 考へ込む

四、單語の一部に漢字をあてたやうに見ゆる動詞は、漢字以外の部分に假名を送る

例——赤らむ 薄らぐ 先だつ 近づく 名づける 指さす 横たはる 渦まく 巢くふ

形 容 詞

形容詞は、「く」または「しく」の部分を送ること

一、單語の一部に漢字をあてたやうに見ゆる形容詞は、漢字以外の部分に假名を送る

例——煙たい 眠たい 平たい

二、動詞の活用語に他の活用語が添はつて出来た形容詞は、その活用しない部分にも假名を送る。

例——騒がしい 喜ばしい 勇ましい

三、副詞から轉じた形容詞は、副詞の假名を送るところに假名を送る

例——甚だしい

數 字

數字には假名を送らない、たゞしつぎの數字だけには假名を送ること

一つ 二つ 三つ 四つ 五つ 六つ 七つ 八つ 九つ

副詞、接續詞

副詞、接續詞は假名で書くこと、たゞし副詞のうち、あるものは漢字を用ひてもよい、その漢字を用ひる場合には、つぎのやうに假名を送る

一、三音以上の副詞は、最後の一音だけ假名を送る

例——未だ 聊か 必ず 忽ち 甚だ 遙か 殆ど 最も 僅か

二、動詞から轉じて副詞となつたものは、動詞の例にしたがつて假名を送る

例——極めて 強ひて 盛ん(り)に 頻りに 恐る／＼

返す／＼ 泣き／＼ 行く／＼

三、送り假名のある語に、さらに助詞の添はる副詞は、そのまゝ假名を送る

例——明らかに 高らかに 花やかに 未だに 忽ちに 遙かに 僅かに 聊かも 必ずしも

四、延音の動詞から副詞となつたものは、その延音以下の假名を送る

例——願はくは 恐らくは 宣はく

名 詞

本來の名詞は假名を送らないこと

例——人、家、山、海、春、草、櫻

一、動詞の名詞法による名詞のうち、二音のものは假名を送らない

例——貸、借、恥、舞、醉

たゞし「讀み書き(讀書)」などのやうな紛らはしいものは假名を送る

二、動詞の名詞法による名詞のうち、三音以上のものは動詞としての活用部分に假名を送る

例——思ひ、飾り、眺め、習ひ、流れ、眠り、光り、響き、考へ、戦ひ、争ひ、慮り

たゞし聲、霞など、物の名は假名を送らない

三、他の活用形をふくむ動詞から來た名詞は、その動詞の場合と同様に假名を送る

例——語らひ 習はし

四、延音の動詞から來た名詞は、その動詞の場合と同様に假名を送る

例——思はく 計らひ

五、動詞と名詞との中間の性質をもつ語は、その動詞の場合と同様に假名を送る

例——賣りに來る 買ひに行く 頼みに行く 聞きに來る

六、形容詞から轉じた動詞の名詞法による名詞は、その動詞の場合と同様に假名を送る

例——悲しみ 樂しみ

七、名詞を活用した動詞の名詞法による名詞は動詞として活用した部分の假名を送る

例——宿り

八、漢字音を活用した動詞の名詞法による名詞は、動詞として活用した部分の假名を送る

例——察し 達し 案じ 感じ

九、形容詞の語幹と見られる名詞のうち、三音以上のものは、その最後の一音を送る

例——暖・温か 新た 細か

一〇、單語の一部に漢字をあてたやうに見ゆる名詞は、漢字

以外の部分に假名を送る

例——明らか 麗らか 高らか 細やか 艶やか 花やか

〔注〕 固有名詞または固有名詞に準ずるものは、この限りでない

例——江戸堀上通 小松原通 △△會社取締役 衆議院
第一控室

代 名 詞

代名詞は假名で書くこと、人代名詞のうち、あるものは漢字を用ひてもよいが、その場合は假名を送らない

例——私 僕 君 汝 吾等

〔注〕 我れ、己れ、我が、誰がなどは假名で書く

内田百閒 動詞の不變化語尾について

(『東炎』昭和十年二月号)

もゆ

口語にして、

もえる

に漢字を當てはめると、

燃ゆ

燃える

である。「燃」の字は「も」と讀む。

もやす

に漢字を當てはめると、

燃す

とすべきか、

燃やす

とすべきか。

「もや」を語幹として扱ひ、變化する「す」だけを語尾として送るべし、と云ふのが、文部省國語調査委員會編纂の送假名法である。

私の意見はこれと異なり、「もやす」の「や」は、變化はしないけれども、語尾である。ヤ行下二段の不變化段である。

エ、ユに移る變化が、ア段のヤに現はれた不變化語尾であ

る。だから、「や」は語尾である。語幹として扱ふべきでない。故に送つて「燃やす」と書く。即ち、不變化語尾「や」と變化語尾「す」と共に送るべし。

さうすれば、「燃」はいつも「も」と讀む事になる。國音を漢字に托する時、或は「も」と讀み、或は「もや」と讀む様な扱ひ方は適當でない。文部省國語調査委員會の規定は、この點に關して不徹底である。

もつと根本の問題について考へれば、國語に漢字を假用する事を廢し得ざる限り、一字の漢字に托する國音の負擔を出來るだけ軽くする事、漢字をなるべく軽く扱ふ事、これが國語整理の第一歩である。「燃」を、ある時は「もや」讀とむのは、常に「も」と讀むよりも、漢字を重用する方針であり、文部省國語調査委員會の方針は、國語整理の理想に逆行するものである。しかし、理窟の立たない、筋道の通らない扱ひ方をすれば、いくら漢字の負擔を軽くしても、混亂を來たす。

「思ふ」を「思もふ」とする根據はない。この「も」は語幹の一部である。語幹を送る事の可否まで溯つては、語尾の扱ひ方に手がつけられなくなるから、送るのは、語尾に限ると云ふ立て前にして、文部省國語調査委員會の示した四綱領の第一、

活用語ノ語尾變化ヲ書キアラハスコト。

を左の如く改めれば、私は納得するのである。

活用語ノ語尾ヲ書キアラハスコト。語尾ニ變化語尾ト不變

化語尾トノ二種アリ。

不變化語尾とは何ぞや。

盡く 盡きる

「盡」は「つ」と讀む。この動詞の他動詞の一形

つくす

に漢字を當てはめる時、どう書いたらいいか。「つくす」は、サ行四段活用である。「す」が變化するのである。文部省國語調査委員會「送假名法」の綱領「活用語ノ語尾變化ヲカキアラハスコト」によれば、

盡す

である。

同書例言の中に「本法ハ送ルベキモノノミヲ擧ゲタリ。故ニ本法以外ノモノハ、送假名ヲ附セザルモノト知ルベシ」とあるから、右に擧げた綱領及び、更に第一則、

漢字ヲ以テ活用語ヲ書キアラハスコトキハ、語尾ノ活用スル部分ヲ送假名トナスベシ。

に従へば、「活用セザル部分ハ送假名トスベカラズ」となるのである。従つて「つくす」は「盡す」でなければいけない。ところが、第二則に、

活用語ノ活用セザル部分ニ、他ノ語ノ活用形ヲ含ムモノハ、送假名トシテ之ヲ書キアラハスベシ。

とある。さうして、例として、

驚カス 惑ハス 語ラフ

等が擧げてある。「活用語ノ活用セザル部分」を送り假名として書きあらはせと云ふのは、私の不變化語尾説と一致する様であるが、次に煩雜な無理な説明をつけて、規則を窮屈にしてある。曰く、

要スルニ同一ノ漢字ガ語尾活用ヲ異ニスル種種ノ活用語ニ用ヒラルトキ、最モ單純ナル活用語ノ活用ヲ本トシテ、他ノ活用語ノ送假名ヲ定ムベシト云フ規定ナリ。然レドモ一語原ノ詮索ヲナサンコト繁雜ナレバ、コレヲ鑒別センニハ左ノ方法ニヨルベシ。

マヅ活用スル部分ヲ取除クベシ。而シテナホ動詞（又ハ形容詞）ノ活用形ヲ有スルカ否カラ檢スベシ。例ヘバ「惑ハス」ハ最後ノ「ス」ヲ省クニ、ナホ「惑ハ」ナル他ノ動詞ノ活用形ヲ有ス。コレ卽チ「惑ハン」「惑ハズ」ナド、イハユル未然段ノ活用形ナレバナリ。之ニ反シテ「起ス」「聞ユ」ノ如キ動詞ハ最後ノ音「ス」「ユ」ヲ省クニ「オコ」「キコ」トナリテ、動詞ノ活用形ニアラズ。故ニ「起ス」「聞ユ」ノ場合ニハ「コ」ヲ送ラスコト知ルベシ。

右に従つて、「つくす」を檢すると、最後の「す」を取り去つても、なほ「つく」は、「つき、つく」と上二段に變化する。だから「く」の字も送らなければならない。「盡す」でなく、盡す

これは私が右の規定を應用して作つた形ではなく、同書附録

に「二字以上ノ假名ヲ送ルベキモノ」として、

盡くす 竭くす

と明記してある。

「愛想をつかす」と云ふ場合は如何にすべきや。

盡かす

として「す」を取り去ると、後は「つか」である。「盡く」は上二段であつて、「つか、つき」とはならない。だから、「つか」の「か」は語幹に入れて、

盡す

とするのが、文部省國語調査委員會の規則である。そこで、

盡く

盡くす

盡す

となり、「盡」を「つ」と讀んだり、「つか」と讀んだり、煩雜は云ふまでもなく、「盡す」を「つくす」でなく「つかす」であると鑒別する事が出来るであらうか。ルビを振れば、どんな無理でも讀めるけれど、ルビにたよつて漢字を用ゐるなどは、國語整理の上から、最も避く可き事である。

これを私の云ふ不變化語尾として見れば、「つかす」の「か」も「つくす」の「く」も共に不變化語尾である。「く」は上二段として活用すると云つても、それは別の動詞であつて、この「つくす」はサ行四段であり、「く」は活用しない、即ち不變化語尾である。「つかす」の「か」は上二段には現は

れて來ないけれども、同じ活用の要素なるKが、ア段に現はれてゐるに過ぎない。

即ち同じく不變化語尾である。不變化語尾を送る事にすれば、

盡く

盡くす

盡かす

となり、「盡」は常に「つ」である。送り假名に法則を設ける以上、不變化語尾を認めた法則に従ふべきであると私は思ふ。

上掲國語調査會の鑒別法の中に、「起ス」「聞ユ」が擧げてある。しかしこの抜ひ方もいけない。右に従へば、

起く

起す

聞く

聞ゆ

「起」は「お」又は「おこ」と讀み、「聞」は「き」又は「きこ」と讀む。この煩雜と不統一を強ひる規則の根據は薄弱であり、寧ろ研究不十分の結果の獨斷である。「おこす」の「こ」は、上二段「起く」のKが不變化段のオ段に現はれた語尾であり、「きこゆ」の「こ」は四段「聞く」のKが不變化段のオ段に現はれた語尾である。何れも決して語幹の一部ではない。語幹は右の二例に於いては、何れの變化を問はず常に、「お」又は「き」だけである。その他は語尾である。語尾に

變化語尾と不變化語尾とあり。

起く

起こす

聞く

聞こゆ

とすべきである。

從來の國文典は、動詞の何れの活用に於いても、オ段に現はれる語尾を取り扱つてゐない。

慣用の四段活用とか、下二段活用とかの一切の活用形式を先づ全部こはしてしまつて、更めて新しい活用形を考へるとすれば、オ段に出て来る語尾も、活用の一段として認める事が出来るであらう。ただ從來の活用形式には全然オ段が扱はれてゐないから、オ段に現はれた語尾は、不變化語尾の一例として扱つておくのである。

オ段に現はれた不變化語尾の類語を左に列挙する。上段は原動詞である。

起く

聞く

の外に、

過ぐ

落つ

亡ぶ

起こす

聞こゆ

過ごす

落とす

亡ぼす

及ぶ

下る

思ふ

動詞の轉來形容詞にもその例がある。

恐る

好む

頼む

狂ふ

以上に文部省調査委員會の規定を適用すれば、下段は全部次の様に書かなければならない。

以上

過す

落す

亡す

及す

下す

思ふ

「思ふ」が「おもほふ」と讀めるか。「下す」が「おろす」と讀めるか。「くだす」と讀み分けられるか。「及す」が「およぼす」と讀めるか。漢字を音讀しないか。これ等の不安を去るには、ルビを振らなければならない。漢字にルビを振らなければ、解らない様な送假名法は、國語整理の妨害になるばかりである。前掲の不變化語尾を送つた書き方「思ほゆ」「下ろす」等に従へば、誤讀の憂ひもなく、一つの漢字の讀

み方は、上段も下段も常に同一である。

次の轉來形容詞も國語調査委員會の規定に従ふと、

恐し

好し

頼し

狂し

と書かなければならない。「好し」が「よし」でなく「このもし」であると判讀する事が出来るか。「頼し」が「たのもし」と讀めるか。

その癖、「このまし」は、

好まし

とすると例示してある。「好まし」の「し」を取り去つた後の「好ま」は動詞として四段活用をするからである。「このもし」の「し」を除いた「このも」は現行の活用形式では變化しない。「も」はオ段に現れた語尾である。國語調査委員會はその扱ひを全然無視してゐる爲、こんな變な規定が出来上がったのである。即ち、

「このまし」は「好まし」と書く

「このもし」は「好し」と書く

と云ふ無理が生じるのである。

オ段の語尾を無視した爲に起こつた皮肉な例が、同委員會の

「送假名法」に載つてゐる。前掲第二則「活用語ノ活用セザル部ニ、他ノ語ノ活用形ヲ含ムモノハ、送假名トシテ之ヲ書キアラハスベシ」の例語、「動カス。惑ハス。語ラフ」等の中に

移らふ

が擧げてある。最後の「ふ」を除いた後の「移ら」が四段に活用するから、「ら」を送ると云ふのである。誤植でないと思ふのは、卷末の附録にも「移らふ」として擧げてある。しかしこれは云ふまでもなく、誤りである。假名遣ひが間違つてゐるのである。

移ろふ

でなければいけない。即ち原動詞「移る」のラ行がオ段に現れた不變化語尾「ろ」を送らなければならない。ところが「ろ」は現行の活用形には載つてゐない語尾である。そこで「送假名法」の起草者は、「らふ」「ろふ」の同音にまどはされて、オ段の變化と云ふ事に氣附かず、うつかり、「移ら、移り」の「ら」を送つたものと思ふ。その間違ひのまゝ書けば、

移らふ

と送る根據があり、正しく「うつろふ」とすれば、「ろ」は語幹に入れなければならない、妙な規則である。即ち

移ふ

と書いて、「うつろふ」と讀まなければならないのである。オ段の不變化語尾として扱へば、

移ろふ
にて何の問題も起らない。

冒頭に引例した

燃やす

の「や」は、原動詞「燃ゆ」の語尾が、ア行下二段活用 of 不變化段なるア段に現はれた不變化語尾である。

冷やす

生やす

費やす

等みなその類語であり、「や」は不變化語語尾であつて、決して語幹として扱ふ可きものではない。ア行以外の例では、

冷ます

覚ます

出だす

晴らす

負かす

逃がす

等のア段の語尾は、すべて不變化語尾として送る可きである。

「逃がす」の「す」を取り去つた後の「逃が」が「逃が、逃ぎ」等と活用しないからと云つて、

逃す

と書いて、「にがす」と讀めと云ふのは無理である。「晴らす」

の「す」を取り除いた後の「晴ら」が、「晴ら、晴り」等と活用しないから、

晴す

と書いて、「はらす」と讀めと云ふのは無理である。

上二段自動詞を原動詞とする四段他動詞の不變化語尾の數例

生かす

過ごす

盡かす

盡くす

起こす

落とす

延ばす

亡ぼす

懲らす

下ろす

「生かす」の「生か」が「生か、生き」とは變化しない、「延ばす」の「延ば」が「延ば、延び」と變化しない事は、「過ごす」の「ご」、「落とす」の「と」と同斷である。即ち上掲の類語の最後の「す」を除いた上の語尾は、全部一律に不變化語尾として、送るべきものである。

起す

と云ふ風に、「す」の上を送らないならば、また全部一律に「す」の上の語尾を取り去る可きである。文部省國語調査委員會の「送假名法」が、上例の中、

盡くす

だけに「く」を送る事を定めたのは、不徹底極まり、特に「延ばす」が「延ば、延び」などと活用する筈もないのに、「延ばす」の「ば」を活用語尾の如く誤認して卷末の附録に延ばす

と例記し、自分で立てた規則の無理を、自分で證明してゐるなどは、不見識である。

例 下二段他動詞を原動詞とする四段自動詞の不變化語尾の數

下がる
分かる
掛かる
被さる
隔たる
重なる
教はる
締まる
閉まる
極まる

止まる
止まる

覺わる
植わる
(コノ假名遣疑義アリ。原動詞、覺ゆガ思ふ思はゆ
リ出タリトスレバ覺はるトスベキカ。示教ヲ乞フ。)

据わる (轉ジテ坐る)

上掲數節の類語群は、みなその不變化語尾が、原動詞の活用の中にないもの、即ち、

掛け、掛け、掛く、掛くる、掛くれ、掛けよ。

のどこにも、「掛かる」の「か」は出て來ない。換言すれば、「か」は活用しないのである。さう云ふ例ばかり挙げたのである。

この他、原動詞に於いては活用するけれども、その動詞の中では不變化語尾となつてゐるもの、例へば

動かす

の「す」を除いた「動か」は、その儘、「動か、動き」と活用する。しかし、「動かす」の中では、この「か」は、「負かす」の「か」、「起こす」の「こ」と同じく不變化語尾である。

かう云ふ不變化語尾を含む動詞は、國語調査委員會の送假名法にも、不變化語尾と云ふ言葉は使つてないけれども、その不變化部分を語尾として送る事に規定してあるから、一一例語を列記する煩を省く事にする。

大正六年、漱石全集第一版が岩波書店から刊行せられた時、私は同門の二三君と共にその校正にあたつた。

これより先數年、先生のまだ在世せられた當時、既に、先生の新著及びその頃盛に醜刻された縮刷版の校正にあたつて、私の手にかけた數は、恐らく十冊に近かつたらうと思ふ。

校正をする際、一ばん苦しんだのは、語尾の取扱ひ方であつた。校正は原作者の原稿通りにするのが本當である。

しかし、新著の場合でも、その時原稿として與へられるのは、新聞の切抜である。新聞社のルビ附活字で都合よく植えられた語尾は、全然信用する事は出来ない。ルビ附活字は初めから附いてゐるルビを語幹として、その餘りを勝手に語尾に出すのである。原作者の原文の語尾とは何の關係もない。

醜刻の縮刷版の校正の時は、なほ更である。

さうして、先生はさう云ふ問題には、割合に無頓著であつた。勢ひこちらで、何かの機會に、得られた材料によつて、例へば、新聞の切抜に書き入れをしてゐられる先生の文章とか、書きつづしの原稿の文章とかによつて、先生の文章癖を観察する外はなかつた。

さう云ふ觀察によつて知り得た先生の癖は、大體

聞こえる

恐ろしい

と云ふ風な書き方であつた。

この「こ」や「ろ」を見つめてゐる内に、又度度手にかけて、

語尾として校正する間に、不變化語尾と云ふ事を考へ始めた。

先生の死後刊行せられた漱石全集の校正の際には、先生の手稿を見る事が出来たのも二三篇あつた。それは新聞社の内部の人が、毎日連載された小説の原稿を、丹念に保存しておいたのが手に入つたのである。

しかし、それは勿論全集全體の一部分に過ぎないので、大部分は單行本又は切抜を原稿として校正しなければならなかつた。

その通りにやりさへすればいいと云ふ本人の原稿がなくて、漱石全集の様な大部分物の校正をするには、何等かの據りどころなり、方針なりが確立してゐなければ、出来るものではない。

その方針が國定教科書に採用せられてゐる文部省制定の送假名法ですめば、一ばん簡單であるけれども、その文法は先生の文章を律するに全然不適當である事は、一緒に仕事をするみんなの意見であつた。

それで、これから實際の仕事にあたる者が、相談協議の結果、行文中の先生の用字癖、慣用の送り假名等を基礎にして、一つの「校正文法」を作らうと云ふ事になつた。

みんなの協力によつて、半紙四五十枚の原案が出来上がった。それを私が經めて謄寫版に書き上げた。「漱石全集校正文法」と云ふ表紙を著けて、本の様な形にした。その中で、

不變化語尾を初めて明確に取り扱った。

その「校正文法」は、私の手許に近年まで、まだ幾冊も残つてゐただけで、轉轉と居を移す内に、何時の間にか無くなつてしまつた。それが今手許にあれば、本稿を草するにも、もつと用例を豊富にする事が出来たのに残念である。

大正十三年、大村書店からゲーテ全集が刊行せられる際、私はその發案者の一人として編纂にたづさはり、再び校正文法の起草にあたつた。その本は幸ひ見つかつたので、本稿の用例は主として、その中から摘用した。

凡例十項のうち、初めの三項に次の如く記してゐる。「一、ゲーテ全集文典は全集翻譯者の備忘に資する爲、主として語尾の取扱ひ方を規定す。二、規定は文學上の作品に慣用せらるる一般の用例に従ひ、これに起草者の私見を加へて統一せり。三、不變化語尾の取扱ひ方に關しては文部省編纂國定教科書の文法と據る所を異にす」

ゲーテ全集文典の起草によつて、私は不變化語尾に關する所見を、一層明らかにした様である。

爾後十年私は大體自分の建てた方針を、自分の文典として文を行つてゐる。特に最近の一兩年、筆研に親む事が多くなつてからは、實際その場合にあたつて、不變化語尾は全部必ず送り假名として、扱はなければならぬと痛感する事が多いので、この稿を草して大方の叱正を仰ぎたいと思ふのである。

附言。活用と變化との兩語を同意義に混用せり。

引用せるは、大正十五年二月、國定教科書共同販賣所發行文部省內國語調査委員會編纂、第二十版翻刻版「送假名法」なり。

三宅 正太郎
若林 方雄
野田 信夫

送り假名法(案)

『國語運動』昭和十四年三月號

(一) 訓讀みの漢字一字を用いる言葉では、その漢字に對し、原則として二音までを受持たせる。

例 僅か 確か 温たかい 鋭どい 恐ろしい 抜かう
喜こぶ 従がう 驚ろかす 味わい 戦かい 疑がい
半ば 趣むき 穩やかに 嚴そかに 漸やく 及び
但し

ただし副詞・接續詞・および五音以上の動詞・形容詞の場合、三音を受け持たせ得る。

例 (副詞) 甚だ 頗る 専ら 最も 忽ち 抑も 必ず
再び 快よく 詳らかに 悉とく 恣ままに
(接續詞) 或は 況や 並に 尤も 従つて
(動詞) 試みる 顧みる 考える 鑑みる 梳する
櫛わす

(形容詞) 快よい 詳らかな 著るしい 甚だしい 醒
さい

(二) 言葉の終りが変わることのない名詞には假名を送らな
い。

例 東京 愛 机 水晶

(三) 変わり得る言葉の終りは、品詞の種類にかかわらず、常に假名をもつて表わす。

複合語になつた場合も同じである。

例 明ける 明きらか 明かるい

浮く 浮かぶ 浮き 浮き草

生きる 生かす 生き 生き物

向く 向き 向こう 向かい

感じ 達し 綴じ 負け 動き 終り 曇り 騒ぎ

怒り

ただし、物を表わす名詞は、動詞の第二段活用形と同じ形でも、読み誤まる恐れのない場合は、その語尾を送らない。

例 帶 光 霞 煙 疊

(備考)

(ア) 従がつて、同じ字でも物を表わさなときは、語尾を送る。

例 黒光り 折り畳み

(イ) 動作がそのまま名詞となるものは、動詞の取扱か
いをする。即ち表記の但書を適用しない。

例 猿廻し 帶上げ 灰落とし 紙挟み 踊り 舞
い 流し 流れ

(ウ) 次のようなものは例外とする。

例 受取書 取締役 振替口座 但書

(四) 独立の意味を持たない接頭語には仮名を送らない。

例 相成り 差上げる 打切る 引受ける 取扱かう

(五) なるべく仮名を使う。即ち仮名で書くことによつて送り仮名の問題をなくする。

(ア) 漢字を使うのが無理である場合

例 みずから おのずから たとえ あわてる お

どす うたた あらわに うしろ あまつさえ

おかしい (行き) にくい うるさい ゆする

やにわに どうして

(イ) 簡単な副詞・接続詞

例 かつ(且つ) また(又) いま(今) ただ(只)

みな(皆) むしろ(寧ろ) あに(豈に) はた

(將た) ほぼ(略ぼ) もし(若し) まず(先ず)

さきに(曩に) よし(縦し) よく(能く) かく

(斯く) なお(尙お) ついに(遂に) かつて

(嘗て) しかし(然し) しかして(而して) ほぼ

ど程) よし(由) つぎ(次) なに(何) ため

(為め)

(備考) この趣旨から、この種の言葉に漢字を用いる場

合にも、なるべく上記のカッコの内に示したよう

に、仮名を送る。(なお上記の(一) 参照)

(ウ) 代名詞、但し漢語のものを除く

例 わたくし わたし われわれ きみ かれ あ

なた だれ この これ その それ どの

どちら

(エ) 読み方に迷うおそれのある場合

例

後 のち

あと うしろ

うまい

あまい

甘い

ぎの通りとする

後ち

後ろ

細そい

細かい

苦がい

苦しい

直ちに

直ぐに

直きに

読み書き

読書(下クショ)

生け花

ほそい

こまかい

ひらに

たいらに

たいらかに

直に

すぐに

じきに

きらい

くるしい

ただちに

きき

きき

きき

きき

きき

きき

きき

にがい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

きらい

半(ハン)
半ば

(六) 以上の簡条になくても、読み方に迷うおそれのある場合は、送り仮名をつける。

例 三つ 万ず 食べ物 悪る者 優さ男 生ま物

野田 信夫 「送り假名法(案)」について

〔國語運動〕昭和十四年三月號

まえがき

前からわれわれは國語協會の事業の一つとして、送り仮名、句読點、その他、書きものをするときに心得ておくべき事柄に関する規則や参考資料を一纏めにして世に出したいと思つて居た。それで昭和十三年の秋から、會の了解を得て、三宅正太郎氏、若林方雄氏、及び筆者の外、岡崎理事も加わつて、先づ「送り仮名」から手をつけた。前に掲げたのはその結果を一應まとめ上げた案である。これに對し、廣く世の御批評を仰ぎ、少しでも完全なものにするため、これを雜誌に發表して、読者諸君の御意見をお聞かせ願ひ次第である。

この案の主旨

この送り假名法を立案するに當つては、つぎの主旨に従つた。

(一) 送り假名は文を読みやすくすることを眼目とする。と。従がつて自然假名はなるべく多く送ることになる。しかししてこれは、現にこの頃の新聞や小説などで實際に廣く行なわれて居る傾向とも一致する。

(二) 漢字は借りものであるとゆう見方をとること。従來送り假名法の根本は、漢字を本體とし、假名を單に補助的なものと見て居た。即ち言葉の本体、即ち語幹は出来るだけ漢字で表わし、活用する部分だけを假名で示すのを原則とした。この案は、この考えを打ち破つて、漢字は單に読み易くするための借りものであつて、決して語幹を表わすものでないとゆう見方をとつた。(案(一) 参照)

(三) 変化する言葉のおわりをすべて送り假名にすること。従來は送り假名を以て、その言葉の「活用」する語尾を表わすものとして來たが、これでは余り文法に捕われ過ぎるから、同一語中の「活用」ばかりでなく、他の語として変化することのある部分は、みな送り假名とする。

(案(三) 参照)。なおこの點については後ちに述べる「従來の送り假名の不合理な例」のうちで説明する。

(四) 規則の文句を平易にし、条項の數を少なくすること。

即ち一般の人に意味の分りにくい文法用語を避け、なるべく包括的な規則にする。文部省の國語調査委員會の「送假名法」は十五則、これに手を加えた服部嘉香氏の「私案」は五十箇条、また木枝増一氏の案は四十箇条から成つて居る。これでは実用に適しない。

一字二音の方式

この案は、大体において、現今世に行なわれて居るところを統合整理したものに過ぎないことは、後ちに掲げる對照表を見れば明きらかである。

ただ一つ、この案獨特の方式は、訓讀みの漢字一字に二音を當てるとゆう試みでる。これはまだ、どこにもない方法である。なぜかかる方式を採つたかとゆうと、前にも述べた通り、(一) 漢字は單に借りものに過ぎないと考えたためと、(二) かく定めることによつて、煩らわしい數々の規則やその例外規定などがなしに、誰れでも機械的に送り假名を送れることになり、規則が極めて簡單になるためである。

例えば、次ぎに掲げる文部省の國語調査委員會の方法における、第八則から第十一則までの複雑な規則は大方いらなくなる。何の理窟もなしに、確力 確カニ 赤ラミ 樂シサ などの送り假名がつけられる。

他方この一字二音は、一寸見なれない送り假名を伴なうの

はやむを得ない。例えば、疑ガイ 扱カウ 行ナウなどである。これらは、漢字は語幹を占めるものでないと認めれば何でもないのであるが、一般に見慣れない送り假名である。

しかしこれは多く四音以上の動詞・形容詞・副詞に目立つので、數は余り多くない。また送り假名は次第に多くなつて行く傾向にあるから、これらも次第に目障りにならなくなるであらうと思われる。現に 盛ニ よりも 盛ンニ の方が遙かに多く行なわれている。しかし一概に急に実行が困難かと思つて、この案の(一)には、許容条項を設けた。

要するにこの一字二音は、四音から成る動詞などの場合に、一寸見慣れない送り假名を伴うが、その他はいずれも現在世に行なわれている通りの結果となる。この一字二音の案に對する批評を特に望むものである。

國語調査委員會の「送假名法」とこの案との比較

國語調査委員會の「送假名法」の例言によると、「本法ハ活用語ノ語尾變化ヲ送假名トスルヲ主眼トセリ、活用ハ常ニ最後ノ一音ニアルヲ以テ、普通ノ活用語ハ皆最後ノ一音ヲ送ルヲ通則トス。又副詞ノ三音以上ノモノハ一字ヲ送ルコトト定メタリ」とある。如何に假名を節約することに努めたかが明きらかであらう。しかし、この通則通りに、押し通せば規則は割合に簡單になるのであるが、それではいかにも読みにくいために、例外が百出し、その例外に對する規則を作らな

ければならなくなつたので、遂に十五条に互る煩らわしい規則になつた。

いまこの度のわれわれの案と、この委員會の規則とを對照して見ると、次の通りになる。以下に第何則とあるのは、同委員會の「送假名法」の規則を意味する。また「この案」または「私案」とあるのは、前に掲げたわれわれの案のことである。

第一則 漢字ヲ以テ活用語（動詞、形容詞、助動詞）ヲ書キアラハストキハ、語尾ノ活用スル部分ヲ送假名トナスベシ

これは私案でもその通りであること勿論であるが、それに止まらず、私案では、必らずしも活用する部分に限らない。私案（一）参照。またこの第一則には除外例が設けてある。即ち 或 非 否 には「ル」「ラ」を送らず、曰クに「ハ」を送らないとある。私案には勿論かゝる除外例はない。

第二則 活用語ノ活用セザル部分ニ、他ノ語ノ活用形ヲ含ムモノハ、送假名トシテ之ヲ書キアラハスベシ。

これは例えば ウゴカス とゆう動詞は、それ自身では、「ス」が変化するばかりであるが、ウゴカ は ウゴク と詞の一変形であるから、動ク 動カスと送るべしと言う意味ゆう動である。これも私案はその通りである。上記の私案の（三）は、この第一則と第二則とを、包括して居るつもりである。なおこの第二則については、別に述べることがある。

第三則 「ゲシ」の語尾ヲ有スル形容詞ニ用キラレタル漢

字ニハ、「猛シ」ノ一語ヲ除ク外、スベテ「ゲシ」ヲ送假名トナスベシ。

これは口語には無いが、この案の（一）で大体同じ結果になる。

第四則 形容詞ニ用キラレタル漢字ニハ、語尾ノ「ナリ」「タリ」「カリ」ヲ送假名トシテ書キアラハスベシ。

これも大体口語にはない。兄タリ とか 師タリ など書く場合にタリを送らない人もないであらう。ナリ・タリ・カリは仮名で書く以外に書き方のない言葉である。ただ問題は「詳カナリ」か「詳ナリ」かの点であつて、ナリやタリの問題ではない。この点についても、なおのちに述べる。

第五則 副詞ヨリ轉ジテ活用語ニ用キラレタルモノハ、活用以外尙、副詞ノ送假名ヲ附スベシ。

これは私案の（一）の但書によつて、大体同じ結果となる。例えば 再ビス 甚ダシ 等である。なお第八則参照。

第六則 漢字ノ二字以上ヲ以テ複合活用語ニ訓ジタル場合ニハ、ソレゾレ送假名ヲ附スベシ。

これは 流シ出ス 流レ出ス 折リ込ム 折レ込ム 等をゆう。これ等の 流シ 流レ 折リ 折レ が接頭語でない限り、その変化する語尾に仮名を送ることは、私案の（三）に含まれる。よく世間では、この規則を紛らわしい場合に限るべしとする例を見るが、紛らわしいか否かを判別することは煩らわしい。私案では接頭語と認められるもの以外は、全

部仮名を送るのである。なおここに注意すべきことは、この規則は複合動詞に限るので、複合名詞に関する規則は第十二則以外は全く欠けて居る。

第七則 活用語ヨリ轉ジテ副詞、接續詞ニ用キラルモノ
ニハ、ソノ活用ヲ書キアラハシテ送假名トナスベシ。但シ副詞、接續詞ニノミ用キル漢字ノ場合ハ、尙第八則ニ據ル。

これも私案(三)で明きらかである。極メテ 及ビ の類である。

第八則 二音ノ副詞「モシ」、「ヨシ」、「ヨク」、「カク」ノ四語、及ビ三音以上ノ副詞、接續詞ニ用キラレタル漢字ニハ、最後ノ一音ヲ送假名トシテ添フベシ。

私案においては、(五)により、モシ・ヨシ・ヨク・カク・イエドモ・ミズカラ等は仮名で書くから、送り仮名の問題は起らない。その他のものうち、例えば、然シ 必ズ 聊カ甚ダ などは私案の(一)で同じ結果になる。

しかしこの規則の生む重大な結果は、カニ・ヤカニなどの語尾を持つ副詞が、單に「ニ」の字だけを送ることになる点である。例えば 遙ニ 緩ニ などとなる。このことは、なお後ちに述べる。

第九則 副詞、接續詞ノ語尾ニ助詞、接尾語アルモノハ、ソノ送ルベキ部分ニ添ヘテ送ルベシ。

これは第八則のような規則をこしらえるから、必要になつ

た規則で、第八則からいえば、「必シモ」「聊モ」でもよいように思われるが、これ等は「必ズシモ」「聊カモ」とせよとゆう意味である。私案によれば、これ等も一樣に(一)の但書によつて「必ズシモ」「聊カモ」である。

第十則 名詞、代名詞ニハ送假名ヲ附セザルヲ通則トスレドモ、動詞ヨリ轉ジテ名詞トナレルモノ中、左ノモノニハ、本ノ動詞ノ活用ヲ書キアラハシテ送假名トスベシ。

(1) 漢字音ヲ活用シタル動詞ノ名詞トナレルモノ

(例) 封ジ 通ジ 察シ 達シ 書損ジ

(2) 第一則第三項ノ動詞ヨリ名詞トナレルモノ

(例) 思ワク

(3) 第二則第一項ノ動詞ヨリ名詞トナレルモノ

(例) 語ラヒ 習ハシ

(4) 第十五則ノ動詞ヨリ名詞トナレルモノ

(例) 赤ラミ 定マリ

(5) 動詞ニ助動詞ノ添ハリテ名詞トナレルモノ

(例) 謂ハレ 使ハシメ

(6) 名詞ヨリ直ニ動詞ニ活用シ、更ニ其ノ連用形ノ名詞トナレルモノ

(例) 宿——宿リ 皺——皺ミ

(7) 分詞ノ性質ヲ有シテ、名詞ト動詞トノ中間ニ在ルモノ

(例) 聞キニ來ル 買ヒニ行ク

これも私案の(一)及び(三)に含まれてしまう。然るにすべて名詞には仮名を送らないことを、通則にしてしまつたから、色々の例外規定が必要になつて来るのである。私案では(二)及び(三)の但書の名詞以外は、語尾を送ることが通則なのであるから、かかる煩雑な規則は要らない。しかも上に列ねた七項目以外の誇り 定メ などは リメ をつけられない。これなどは「活用語ノ語尾變化ヲ送假名トス」とゆう原則とも矛盾する。名詞などとうゆう文法的概念にとらわれた結果である。

第十一則 動詞、形容詞ノ下ニ「サ」「ミ」「ゲ」ソノ他ノ接尾語ヲ附加シテ成レル名詞ハ、動詞、形容詞ノ送ルベキ部分ヲ添ヘテ送ルベシ。

これも前同様の例外を認めた規則でやはり日本語の活用を重んぜず、名詞とうゆう形式的概念にとらわれた規則である。これによると 甘ミ 樂シサ 物思ヒゲ 等とすべしとゆうのであるが、この規則の注意書によると、樂、悲、苦、惜等は「動詞ヨリ出デタル名詞ト見做シ送假名ヲ附セズ」とある。これは甚だ紛らわしいばかりでなく、讀みにくい。案では甘ミ(本来は仮名でアミミ)、樂シサ は勿論、悲シミ、苦シミ、惜シミ等となつて、何の紛らわしさも起こらず、極めて讀みやすい。

第十二則 動詞ヨリ轉ジテ名詞トナレルモノノ中、左ノ如キ場合ニハ、時宜ニヨリ送假名ヲ附スルコトヲ得。

(1) 自他兩様ノ動詞ニ用キラルル漢字ニシテ、單獨ニ名詞トシテ用キラレ、又ハ複合名詞ノ一部分トシテ用キラレ、自他辨別ノ必要ヲ感ズルトキ

(例) 殘^リ 渡^リ 預^{ケ人}
シ^シ シ^シ リ^{リ主}

(2) 漢字ヲ音讀セル同形ノ語アリテ、辨別ノ必要ヲ感ズルトキ

(例) 變^リナシ(變^{ナシ}) 讀^ミ書^キ(讀^ク書)

これもすべて私案では(三)に含まれて居る。なるべく仮名を送るまいとするから、かかる例外が幾つもある必要となる。

第十三則 數詞は「一ツ」「二ツ」「三ツ」等數フルトキノ「ツ」「半バ」ノ「バ」「万ヅ」ノ「ヅ」ヲ送ルベシ、私案では(一)及び(六)で同様の結果となる。

第十四則 連續セル語句ノ品詞トシテ用キラルルモノハ、各品詞ノ送ルベキ部分ヲ送ルベシ。

これは 食ハズ嫌 然リト雖モ 等とすべしとゆうのであつて、私案では、やはり(三)に含まれて居る。

第十五則 オヨソ單語ニ當テタル漢字、僅カニ其ノ一部分ニ該當セリト見ユル場合ニハ、其ノ他ハ送假名トシテ書キアラハスベシ。

これは例えば、指サス 黄バム 赤ラム 定マル 等であるが、やはり私案の(一)及び(三)に含まれる。したがつて、畫ク 荷ウ となるとところがちがう。

ただし、實ノル 巢クウ 名ヅケル などは、今日一般の人から見て、實 巢 名 などの漢字一字を動詞に使うことの方が不自然に考がえられるから、規則でことわる必要もないかと思う。

以上の國語調査委員會の送り仮名法は、明治四十年六月の制定であるから、今から三十年も昔のものである。その當時としては大いに進歩したものであつて、何分書きものには文語体が一般に行なわれ、書く人も大体において漢文を書く氣持で筆をとつていた頃であるから、活用する言葉の活用する部分を常に送り仮名とすることをきめただけでも相當に進歩したものであつたに違いない。

しかし時世はドンドン進んで、現今においては、口語体が廣く行なわれるようになり、新聞や小説などは、讀者を本位とするところから、益々仮名を多く送るようになって來たのは、自然の成り行きである。この点において、上に掲げた國語調査委員會の送り仮名法は、相當に改める必要に迫られて居る。現に國定教科書も、大体においてこの方法を守つて居るけれども、樂シミ 明カルイ などは、國語調査委員會の方法とは違つて來て居る。

大体において、國語調査委員會の方法は、(一) 語尾の活用のみに送り仮名を限つた点と(二) 名詞とゆう文法上の形式概念に捕われて、日本語特有の活用語尾を送り仮名から省き去つた点とに、最大の缺陷がある。そのために無理が生じ

て 始メル 樂シサ はよいが 始マル 樂シミ はいけな
いなどという矛盾が出て來る。しかもそのため規則が複雑になつて、第十、十一、十二則の三ヶ条は語尾の活用を葬つたために生じた厄介な例外規定に外ならない。

從來の送り仮名の不合理な例

現在一般に行なわれておる送り仮名法には大體二つの系統がある。一つは前に掲げた文部省の國語調査委員會の方法に従がうもの、他の一つは、法制局用字例によるものである。勿論前者の方が整つたものであつて、後者は甚だ統一もなく断片的であるばかりでなく、極めて時代遅れのものであるが、法律文が大体これによつて居るので、官公署の文書や會社などの書類も、これを一つの標準としてゐる。そこでつぎに、これらの送り仮名法のうち、二三不合理なものを抜き出して見よう。

(一) 集メル は正しくて、集マル は誤り

なぜかとゆくと、前にも述べた通り、アツメルは、文語でアツメ・アツム……と活用するから、口語のアツメルはアツメまで活用しないけれども、國語調査委員會の第二則(1)によつて、集メルである。

ところがアツマルの方は、文語のアツムとゆう動詞の活用形の中にアツマのマがないので、上記の規則にあて嵌まらない。それで 集ル と書かなければ誤りにされる。同様に

始マルも誤りで 始ル としなければならぬことになつてゐる。

ところが一方、起キルの方は、文語の 起キ・起クのうち、起キにルがついものと見て、起キルでよい。しかし 起コル はいけない。ところが 浮カブは、文語で 浮カ・キ・クであるから、それでよい。

かかる方法は、一々頭の中で元になる動詞の活用を言つて見てからでないと、送り仮名がつけられないような束縛を加えているのである。要するに、動詞の語幹は仮名で書いてはいけない。語幹は漢字に限る。とゆう建前であるから、こんなことになる。

しかしわれわれは、漢字が、何の理由で日本語の語幹を占領して居るのか、少しもその根拠を知り得ない。従がつて、何故に 集メル は正しくて、集マル が誤りかが分らない。そのために 集ル とあつた場合、アツマルかアツメルか読むのに迷わされる。アツメルときは 集メル と書くから區別がつくとうのは、読む人に不親切である。そこで、われわれは、およそ同一の動詞でも形容詞でも、言葉のおわりの「変り得る部分」(「活用スル部分」でない)は、すべて常に送り仮名で表わすことを正しいと思う。現に後ろにつけた對照表にも出ている通り、衆議院の速記でも「家の光」でも 集マル を採用している。

また オキル とゆう動詞は、文語體では 起ク・起キ

と活用するから、當然ク・キを送るが、口語體になると オキ まで変化しないから 起ル と書く例が少なくない。これではオコル と全く區別がつかない。これ等はみな、漢字が語幹を表わすとう原則の誤りから来る日本語の書き方の不合理に外ならない。

(二) 表ス か、表ワス か

國語調査委員會式に行けば、表ス である。しかるに服部嘉香氏によれば、これは副詞「あらは」を活用したもの(「大言海」で、「あらは」が副詞である以上、同委員會の第八則によつて、最後の「音」は「は」を送り仮名とすべきであるから「表ハス」で差支ない。但し「あらは」が副詞であるか否かについては、學者の間に異論があるとの事である(「假名遣と送假名」六〇—六一ページ)。今度は厄介な文法學上の問題に絡んで来た。こうなると文法を知らなければ、送り仮名も書けないことになる。すべて一般の人にも使わせよとする規則に、特殊の専門知識を持たなければ判断のつかないようなものは、役に立たない。私案では(一)で簡単に片附いている。

(三) 靜カニ、遙ニ

このように並べて見て、これが二つとも正しいと聞かされては、難かしいものだと感じるばかりであらう。靜カニ がよければ、なぜ 遙カニ でいけないのか。(「送假名法」三七ページ、及び第三則の説明参照)。

服部嘉香氏は、副詞の接尾語カニ・ヤカニ・ラニ・ラカニ

を送り仮名として書き表わすことを提案して居られる（同じ本の六八ページ）。結構であるが、同氏があとで述べて居れる通り、接尾語とゆうものに關する文法学説がまだ一定してない。それで「送り仮名を定める上に甚だ不便を感じる」とゆうて居られる。しかし送り仮名に文法の知識はいらないのであつて、私達の（一）で解決がつくのではないかと思う。

（四）及、且、並

法制局の方法はすべてこれ等に語名を送らない。何の理由か知らないが、恐らく読み手よりも書き手の手間を省くためであろうか。「及」は接続詞としては語尾が変化しないが、元来 及ブ とゆう動詞から来たものであらう。「並」も然り。

非常に漢字の多く續いて来る法律文や役所の書きものに、こんな接続詞から送り仮名を節約して居るのだから、甚だ読みにくい。ただし現在行なわれている法律の間にはこれらの送り仮名は全く不統一である。

憲	法(明治三三)	及	但シ	若ハ
議院	法(明治三三)	及	但シ	若ハ
民事訴訟法	法(明治三三)	及ヒ	但	若クハ
民	法(明治三九)	及ヒ	但	若クハ
商	法(明治三三)	及ヒ	但	若クハ
刑	法(明治四〇)	及ヒ	但	若クハ
刑事訴訟法	法(大正一)	及	但シ	若ハ

敬護 法(昭和四)

及 但シ 若ハ
國家總動員法(昭和三) 及 但シ 若ハ

これで見ると、法律文の送り仮名はその成立年代によつて変化している。及ヒのヒがつくと、但シのシがなくなるものらしい。それが大正頃また昔に返つて、及ヒのヒがなくなつて但シのシが復活した。何のためにこんな変り方をするのか、國語は役人の私し物でない。自分等だけで勝手に扱かうべきものでない。

（五）買と借

國語調査委員會の方法では、名詞、代名詞には仮名を送らないのを通則とし、名詞とゆう文法上の概念に捉らわれて、動詞の活用語尾の存在を無視してしまつた。そのために第十則のような例外規定が必要となつたが、その例外規定の（7）に「分詞ノ性質ヲ有シテ、名詞と動詞トノ中間ニ在ルモノ」には動詞の活用語尾を送ることを認めて居る。日本文法に「分詞」などという概念もいかがかと思ふけれども、それは兎に角として、この定めは甚だ不明瞭で、このままでは用を為さない。それがため、動詞から轉じて名詞になつた言葉のうち、二音以下のものには仮名を送らず、三音以上のものには最後の二音を送る、とゆう方法が一部に行なわれるに至つた（「大毎」、「家の光」）。

しかしこれでも問題は解決しない。その結果、更に一箇条

を設けて、動詞と名詞との中間の働らきを持つ語は、動詞の場合と同様に仮名を送る、などとゆう規則を置くに至つたので、又々あいまいなことになつてしまつた。現に「大毎」でも「家の光」でも、「借」は送らず、「買ヒ」は送ることになつてゐる。かかる區別はどうやつて付けるか。紛らわしいこと甚だしい。借ニ行クと買ヒニ行クと、なぜ區別があるのか。服部氏の私案の如きも、数々の説明はあるが、やはり借と買ヒとの區別の仕方はあいまいである。狩リ釣リ 類はどうすればよいのか。そのため小学読本でも不統一である。

小学読本、巻の五、「二つの玉」のところにある 狩リや釣リ は、皆ニ行ク につづいてゐるから、動詞に近いと見て リを送り、巻の十二の九八ページにある 狩は、狩ヲナサツタ となつて居るので、純粹の名詞と見て リを送らないのであらう。服部氏の前に掲げた本の、一四八ページに 釣(名) 釣リニ行ク とあるのも、この考えであらう。しかし、一体なぜこんな區別が必要であるのか。

本枝氏の案(「國語・國文」十三・十)の第三則にも同様な規則があつて、例を見ると、「になる」「に行く」の前に來るときは動詞としての送り仮名をつける例が挙げてある。「になる」「に行く」の前に來るときはすべて送り仮名をつけ、然らざる場合はすべて送らないのか否か不明である。送らないとすれば、店開きした お髪上げした は誤りとな

る。また次ぎの區別は何んと説明がつくか。

言知れぬ喜びが、彼の胸に湧上つて來た。(小学読本、

卷十二、108)

萬壽の驚と喜はどんなであつたでせう。(小学読本、卷

八、43)

同様のことは ハジメ の場合にも見られる。小学読本から二、三の例を挙げよう。

七月初(卷十一、99)

始は(卷六、110)

旗艦を始め(卷十一、57)

始め二つは名詞で、あとは副詞であるので、送り仮名があつたり、なかつたりするらしい。名詞概念がここにも付きまといつてゐる。

むすび

要するに、わが國では、まだ言葉を書き表わす規則さえ、一定して居ないことは、附表の「送り仮名對照表」を見れば明きらかである。しかし廣く行なわれてゐる書き方のうちにも、上記のやうな不合理、不統一がある。われの仕事われは、聊かこれを合理的なものとし、且つ統一に一步を進め得れば、幸これに過ぎるものはない。なお引きつづき、次ぎには「句読法」の案を發表して、廣く御批評を仰ごうと思つてゐる。(おわり)

送り仮名對照表（後につけた注書き参照）

送り仮名遣 法（私案）	國語調査 委員會	小学讀本	衆議院	大阪毎日	家の光	服部氏
疑がう	疑う	疑う	疑う	疑う	疑う	疑う
伴なう	伴なう	伴なう	伴う	伴なう(?)	伴なう	伴なう
始まる	始る	始る	始まる	始る	始まる	始る
始める	始める	始める	始める	始める	始める	始める
起きる	起きる		起きる	起る	起る	起きる
起こる	起る	起る	起る	起る	起る	起る
浮かぶ	浮かぶ	浮かぶ	浮ぶ	浮ぶ	浮かぶ	浮かぶ
異なる	異なる	異なる	異なる	異なる	異なる	異なる
呼び集める	呼(び)集める	呼(び)集める	呼び集める	呼び集める	呼び集める	呼び集める
呼ばわる	呼ばわる		呼わる	呼ばわる	呼ばわる	呼ばわる
助かる	助る	助る	助かる	助る	助かる	助かる
確かめる	確める	確める	?	?	確かめる	確かめる
伸ばす	伸ばす		伸ばす	伸ばす	伸ばす	伸ばす
過ごす	過ごす	過す	過す	?	過す	過す
働らき	働	働	働き	働き	働き	働き
残り	残(り)	残り	残り	残り	残り	残り
狩り	狩	狩、狩り	狩	狩(?)	狩(?)	狩、狩り(?)
仰せ	仰	仰、仰せ	仰せ(?)	仰せ	仰せ	仰
笑い聲	笑い聲(?)	笑い聲	笑い聲(?)	?	笑い聲	笑聲

釣り針	釣り針(?)	釣針	釣針(?)	?	釣針	釣針
住まい	住まい	住まい	住まい	住まい	住い	住い
樂しみ	樂	樂しみ	樂み	樂しみ	樂しみ	樂しみ
新たな	新な	新な	新な	新たな	新たな	新たな
珍しい	珍しい	珍しい	珍しい	珍しい	珍しい	珍しい
恐ろしい	恐しい	恐しい	恐ろしい	恐しい	恐しい	恐しい
明かるい	明い	明かるい	明るい	明るい(?)	明るい	明るい 明かるい
向こうの	向こうの	向こうの	向うの	?	向うの	向こうの
溫たかい	溫い	溫い	溫い	溫かい	溫かい	溫かい
靜かな	靜かな	靜かな	靜な	?	靜かな	靜かな
遙かに	遙に	遙に	遙に	遙かに	遙かに	遙かに
盛んに	盛に	盛に	盛に	盛んに	盛んに	盛んに
殆んど	殆ど	殆ど	殆ど	殆ど	殆ど	殆んど (藤村・武者小路)
したがつて	従つて	従つて	従て	したがつて	従つて	従つて
(従がつて)						
おいて	於て	於て	於て	おいて	おいて	於いて (鷗外・菊地)
(於いて)						
および	及び	及び	及び	および	および	及び
(及び)						
もし(若し)	若し	若し	若し	もし	もし	若し
ただし	但し	但し	但し	ただし	但し	但し
(但し)						但し (法制局)
並びに	並に	並に	並に	ならびに	並びに	並びに

もつて (以つて)	以て	以て	以て	もつて	以て	以て	以て
この	此の	此の	此	この	この	此の	此ノ

注意(一) この表で対照した言葉は、送り仮名の上で、一番問題となるような言葉に限った。

(二) 仮名づかいは、全部この雑誌の編集方針に従がつて改めた。

(三) 対照した資料は、現今實際に行なわれて居るものを主とし、学者の案は、服部嘉香氏のものだけにとどめた。

國語調査委員會：同委員會編纂『送假名法』(明治四十年)

小学読本：現在の『小学読本』卷三—卷十二

衆議院：衆議院事務局速記課『衆議院速記録基準用字集』(昭和十年)

大阪毎日：大阪毎日新聞社『スタイル・ブック』(増補改訂、昭和八年)

家の光：産業組合中央會「家の光」編輯部『家の光用語の規準と用例』(昭和十一年)

(四) 『小学読本』の段の中に空白になつて居るところは、例を探し出し得なかつたものである。読者のうちお気付きの方から、知らせて下されば幸である。

(五) 一番下の段に掲げた、有名な文学家の名前は、上記の各資料中、われわれの案と一致するものが、一つもない

けれども、これ等の作家たちに既にその例が見られることを示すために、特に加へたのである。したがつて、他の資料にわれわれの案と一致するものがある場合は、作者の名を一々挙げなかつた。

(六) 一番下の段の終りに、法制局の現在使つて居る送り仮名の一部を示した。

平井 巖男 「送り假名法(案)」を讀む

(『國語運動』昭和十五年二月號)

第三卷第三号で野田・三宅・若林三氏合案の「送假名法(案)」を拜見し、これこそは國語運動の重要な一面を開拓し始められたものと、頗る欣快に堪へなかつた。私はわが國語の記載法の一としての送り假名が、極めて煩はしく、一般大衆はいはずもがな、學者先生をもつて自任するその道の専門家でさへ、亂脈、不統一を極める現状を思ふと、國語そのもののために、ことは記載法の末梢なりとして捨てざるに忍びないものを感じる。正確無比であるべき國定教科書中にさへ屢々この誤、又は不統一が発見される

のは、如何に送り假名が煩はしく困難なものであるかを物語って居る。私はかつてこの法則に苦しみられつゝある仕事に携はった思出を持ち、従つて今も尙この問題には多少の關心を持ち續けて居るので、卑見を述べて讀者諸君のお教を乞はんとするものである。

野田氏の案はさすがに要領を得たものである。殊に訓讀みの漢字一字に二音又は三音をあてるといふのは劃期的な試である。しかしこの案で一番問題となるのはこの點で、世間の賛否も恐らく相半ばするであらう。煩雜をさせて文法にとらはれず、すべて機械的に音数主義によつたことは、一般大衆には歡迎せられるかも知れないが、あまりに便宜主義に墮するやうに思はれる。やはり原則としては活用する部分のみを送ることとし、從來の語幹と不活用語尾とにわけ、(不活用語尾とは、或る活用の場合は変化しないが別の活用があつて変化し得る部分を、活用のない一種の語尾と認めてこの様に假りに名づける。語根とは語幹から不活用語尾を取り去つた如何なる場合にも変化することのない部分をいふ。例へば「始まる」「集まる」といふ語は別に「始める」「集める」といふ活用があるので、「ま」「まる」を不活用語尾と認め、「はじ」を、語根と認める。即ち語根と不活用語尾とをあはせて語幹と呼ぶ見方である。勿論語幹と語根の一致する語も多い。語根には送らず、不活用語尾だけは語幹ではあるが、送るとい

ふことにするのが言葉の個性・法則性を重くする合理的な措置ではないかと思ふ。尙二音を原則としながら、副詞・接續詞及び五音以上の動詞・形容詞の場合は三音を受け持たせる例外規則は、動詞・形容詞のどの活用形をもつて音数を計算する規準にするのであるか。例としてあげてある「試みる」・「顧みる」・「考える」・「鑑みる」等は終止・連體・假定(已然)形こそ五音であるが、未然・連用等の活用形は四音である。未然・連用形には「試ろみ」・「考がへ」(私は甲を試ろみ、弟は乙を試ろみた)と送り、他は「試みる」・「考へる」と送るのは不統一のそしりを免かれない。よしんば終止形を規準にするとしても一々終止形に還元する煩はしさがあり、機械的を長所とする音数主義の原理に一貫しないところが出来ゑる。又例語の「驚ろかす」の如きは五音の動詞なので、三音を受け持たせて「驚ろかす」となるが、「驚く」の場合は四音であるから「驚ろく」となつて矛盾を生ずる。

そこでこの法則を實施するにしても、むしろ例外を設けず、すべて二音とする主義を徹底させる方が合理的であると思ふ。

第三則は私のいふ不活用語尾に相當するものであるが、これを品詞の種類にかゝはらずすべて送ることにしたのはどうであらうか。名詞などは動詞から轉じたものでも、送らないのを原則とし、誤り易い理由の立つものだけに送ることにするがよいと思ふ。

從來の國語調査會送假名法では第二則として、活用しない部分に他の語の活用形を含むものだけを送つてゐる。これも不活用語尾ではあるが、これだけでは不十分で、なほ範圍を擴めて語根にまでさかのぼる必要がある。その結果、「起くる」「聞こえる」「上ぼる」「上がる」「下だる」「下がる」等あまり見なれないものも幾分出来るが、これによつて誤讀を少くし、單なる語尾送り假名主義の弊を救ふことが出来る。

第四則は國語調査會案にもあるものであるが、私は世間の慣用はむしろ送る方に傾いてゐるのではないかと思ふ、現行國定教科書では複合活用語にして二音の動詞が上に來た場合は送らないのを原則としてゐるが、一般の著書・出版物、世間の慣用を見るに、送つてゐるものが多い。一方接頭語的なものとさうでないものを判別することは煩はしい點もあるのも、私はむしろ總べて送ることにしたいと思ふ（私案第三則を見よ）。他の個條は全然賛成である。

以上の卑見を本として試みに一つの私案を作つた。もとより杜撰なもので缺點だらけであるが、私の意のあるところはわかつて戴けると思ふ。どうぞ忌憚のない御叱正をお願いしたい。甚だ禮にならはない妄評とこの拙案が、送り假名法大成のために少しでも役立つならば、望外の幸とするところである。

送假名法案

一、活用語ハ語尾ノ活用スル部分ヲ送假名トスル。

(例) (動詞) 書ク 死ヌ 來ル

(形容詞) 深イ 苦シイ 鋭イ

(助動詞) 可シ 如シ

二、スベテ不活用語尾アル場合ハソレヲモ送假名トスル。不活用語尾トハ或ル活用ノ場合ハ變化シナイガ別ノ活用ガアツテ變化スル部分、及ビ副詞カラ轉ジテ活用語トナツタ場合、モトノ副詞ノ送假名ヲ語尾ト見做シテイフ。

(例一) (動詞) 始マル(始メル) 集マル(集メル)

起コル(起キル) 加ハル(加ヘル)

浮カブ(浮ク) 向カフ(向ク)

(形容詞) 明キラケシ(明カルイ)

(形容動詞) 清ラカナリ(清イ)

(例二) (動詞) 再ビス(再ビ) 以テス(以テ)

(形容詞) 未ダシ(未ダ) 甚ダシ(甚ダ)

(形容動詞) 専ラナリ(専ラ) 頻リナリ(頻リ)

三、漢字ノ二字以上ヲ以テ複合活用語ヲ表ハス場合ハスベテソレト送假名ヲツケル。

(例) 流レ込ム 折リ込ム 取り始ム

舞ヒ遊ブ 引キ受ケル 取り扱フ

四、二音ノ副詞・接續詞ハ假名書トシ、三音以上ノモノニ用

ヒラレタ漢字ニハ最後ノ一音ヲ送ル。但シ活用語ヨリ轉ジ
タモノハ不活用語尾ニ準ジテ送ル。

(例一) もし よし よく かく いま さて また

かつ まず 併し 殆ど 必ず 但し 聊か
自ら 甚だ 雖も

(例二) 極めて 及び 委しく 餘りに

五、形容動詞ニハ語尾ノ「ナリ」・「タリ」・「カリ」ヲ送
リ、語幹ノ尾音ノ「カ」トナルモノニハ、「カ」ヲモ送ル。

但シソノ漢字ガ同音ノ語トシテ他ノ場合ニモ使用サレルト
キハ活用シナイ所マデサカノボツテソレ以下ヲ送假名トス
ル。

(例一) 立派ナリ 異ナリ 堂々タリ 燦タリ

烈シカリ 善カリ 靜カリナリ 速カリナリ

詳カリナリ

(例二) 高ラカナリ(高イ) 廣ヤカナリ(廣イ)

冷ヤカナリ(冷エル) 明キラカナリ(明ケル)

六、名詞ハ送假名ヲツケナイノヲ原則トシ、讀ミ誤ルオソレ
アルトキニ限り送假名ヲツケル。

(例一) 東京 愛机 水晶 受取書 取締役

(例二) 流シ―流レ 生物―生キ物―生マ物 動キ―動

通ジ―通 習ハシ―習 定マリ―定メ 宿リ―宿

残リ―残シ 渡リ―渡シ 變リナシ―變ナシ 歩

ミ―歩 預ケ金―預カリ金 樂シミ―樂

七、ソノ他讀方ニ迷フオソレアルトキハ送假名ヲツケル。

(例) 表ス―表ハス 細イ―細カイ 危フイ―危ナイ

交ル―交ハル 斷ツテ―斷ワツテ 直チニ―直グ

ニ―直キニ

小學國語読本の送り假名〔省略〕

文部省 送りがなのつけ方 (案)

(昭和二十一年三月)

送りがなのつけ方

【通則】

第一 動詞の送りがな

は し が き

一、この「送りがなのつけ方」は、國語を書き表はすのに漢字を用ひる場合、單語としてどの部分を漢字で記し、どの部分をかなで示すかについて、現代の口語文に適するやうに基準を定めたものである。

二、この「送りがなのつけ方」は、通則と用例との二部から成る。

一、通則は、おほむね單語の品詞別に從つて、できるだけ簡單なものとした。

一、用例は、それぞれの語の五十音順に掲げた。括弧の中は、参考になる例を示したもの、△印をつけたかなは、文章の種類により、その他必要のある場合には、省き得るもの、傍線をつけたものは、かな書きにすることが望ましいものである。

一、用例の中に掲げてない語の書き表はし方は、通則によつて判斷するものとする。また用例の中に漢字を用ひてある語について、その漢字をかなに改めて書くことは、もとより妨げない。

一、動詞は活用語尾を送る。

【例】書く。起きる。受ける。勉強する。

二、活用語尾を送るだけでは、誤讀、難讀のおそれのある動詞は、その前の音節から送る。

【例】表はす。現はす。

三、活用しない部分に、他の動詞の活用形をふくむ動詞は、そのふくまれてゐるものの語尾から送る。

【例】動かす。傳はる。喜ばす。

【注意】右において、誤讀、難讀のおそれのないものは、そのふくまれてゐるものの語尾を送らない。

【例】浮ぶ。押へる。捕へる。振ふ。向ふ。分る。

四、活用しない部分に、他の動詞の活用形に準ずるもの（語尾の音が變化してゐるもの）をふくむ動詞は、そのふくまれてゐるものの語尾から送る。

【例】肥やす。及ぼす。滅ぼす。加はる。定まる。始まる。

【注意】右において、誤讀、難讀のおそれのないものは、そのふくまれてゐるものの語尾を送らない。

【例】荒す。起す。積る。果す。

五、活用しない部分に、形容詞の語幹をふくむ動詞は、その

ふくまれてゐるもの以外をかな書きとする。語幹が「し」で終るものは、「し」から送る。

〔例〕近づく 遠のく 重んずる 赤らめる 怪しむ 悲しむ 苦しがる

六、活用しない部分に、副詞をふくむ動詞は、副詞としての送りがないから送る。

〔例〕確かめる

七、活用しない部分に、名詞をふくむ動詞は、そのふくまれてゐるもの以外の部分をかな書きとする。

〔例〕指さす 先だつ 先んずる 春めく 黄ばむ

〔注意〕「象どる」「司どる」「貫ぬく」「伴なふ」「荷なふ」「賃のる」「基づく」「畫がく」などは、それぞれの漢字を、

動詞を表はすものと見て、活用語尾だけを送つても差支へない。

八、動詞と動詞と複合したものは、前のにも後のにも送りがなをつける。

〔例〕思ひ立つ 譲り渡す

〔注意〕右において、前の動詞が二音節で、接頭語のやうに用ひられてゐるもの及び誤讀のおそれのないものは、その送りがなを省くことができる。

〔例〕(イ) 差出す 引受ける

(ロ) 成立つ 割當てる

第二 形容詞の送りがな

一、形容詞は活用語尾を送る。

〔例〕白い 強い 無い

二、語幹が「し」で終る形容詞は「し」から送る。

〔例〕美しい 悲しい 苦しい

三、活用語尾を送るだけでは、誤讀、難讀のおそれのある形容詞は、その前の音節から送る。

〔例〕大きい 小さい 暖(溫)かい 冷たい 細かい

四、活用しない部分に、動詞の活用形をふくむ形容詞は、そのふくまれてゐるものの語尾から送る。

〔例〕勇ましい 騒かしい 喜ばしい

〔注意〕右において、誤讀、難讀のおそれのないものは、そのふくまれてゐるものの語尾を送らない。

〔例〕佗しい 戀しい

五、活用しない部分に、動詞の活用形に準ずるもの(語尾の音が變化してゐるもの)をふくむ形容詞は、そのふくまれてゐるものの語尾から送る。

〔例〕恐ろしい 頼もしい

〔注意〕右において、誤讀、難讀のおそれのないものは、そのふくまれてゐるものの語尾を送らない。

〔例〕荒い 悔しい

六、副詞をふくむ形容詞は、副詞としての送りがなから送る。

〔例〕甚だしい

七、活用しない部分に、名詞、形容詞の語幹をふくむ形容詞は、そのふくまれてゐるもの以外の部分をかな書きとする。

〔例〕(イ)際どい 平たい

(ロ)古めかしい 軟(柔)らかい

八、動詞と形容詞と複合したものは、その動詞にも、形容詞にも、送りがないをつける。

〔例〕聞き苦しい。

第三 副詞・接續詞の送りがない

一、副詞、接續詞は最後の一音節を送る。

〔例〕先づ。若し。殊に。必ず。併し。但し。尤も。

〔注意一〕二音節の副詞、接續詞のうち、次のやうなものには送らない。

〔例〕又 唯(只)

〔注意二〕名詞としても、副詞としても用ひられる次のやうなものには送らない。

〔例〕今 元 昔 皆

二、「に」を送るだけでは、誤讀のおそれのある副詞は、その前の音節から送る。

〔例〕直ちに 新たに 徒らに。

三、「かに」「やかに」「らかに」などのついた副詞は、これ

らを送る。

〔例〕靜かに 豊かに 賑やかに 滑らかに

〔注意一〕右の種類の語が、「な」「で」などの語尾をとる場合も、同様に「か」「やか」「らかに」の部分から送る。

〔例〕靜かな 靜かで 賑やかな 賑やかで 滑らかな 滑らかで

〔注意二〕「やかに」「らかに」のついた副詞のうち、次のやうなものは、慣用によつて、「や」「ら」を省くことができる。

〔例〕鮮かに 穩やかに 爽やかに 健やかに 速やかに

に 明らかに 朗らかに 詳らかに

四、副詞、接續詞の語尾に、更に助詞、接尾語が加はつて、別の副詞、接續詞となつてゐるものは、もとの副詞、接續詞の送りがないから送る。

〔例〕必ずしも 若しも 併しながら 若しくは

五、活用語と關係のある副詞、接續詞は、その活用語の語尾を送る。

〔例〕餘り 始め 絶えず 盛んに

依つて 従つて 就いては 並びに 及び

〔注意〕●印は音便形である。

六、副詞の一部分に、名詞、形容詞の語幹をふくむものは、

そのふくまれてゐるもの以外の部分をかな書きとする。

〔例〕(イ)手づから

(ロ)浅はかに

第四 名詞の送りがない

一、本来の名詞は、かなを送らない。

〔例〕紙 時 銅 思 山里 品物 國民 性格

二、活用語から轉じた名詞(複合名詞をふくむ)は、原則として活用語本来の送りがないをつける。

〔例〕動き 調べ 残り 苦しみ 生き物 物知り
歩み 寄り

三、活用語から轉じた名詞(複合名詞をふくむ)のうち、誤讀、難讀のおそれのないものは、その送りがないの一部又は全部を省くことができる。

〔例〕見合せ(「合はせ」の「は」を省いたもの)
打合せ(「打ち」の「ち」と、「合はせ」の「は」とを省いたもの)

組答 話 日附 勤人 申込

四、形容詞の語幹に、「さ」「み」「け」「げ」などがついて、名詞となつてゐるものは、これらのかなを送る。語幹が「し」で終るものは、「し」から送る。

〔例〕暑さ 親しさ 甘み 寒け 眠け 惜しげ

五、數を數へる語尾の「つ」は送る。

〔例〕一つ 二つ 三つ 四つ 五つ 幾つ

備考 以上に掲げた以外の品詞、代名詞、連體詞、感動詞並びに助動詞、助詞は、字を用ひないのを原則とする。

日本速記協会 會議錄用字の手引き

(昭和二十六年一月)

送りがなのつけ方

一、動詞は活用語尾を送るが、語幹に名詞、形容詞、他の動詞などを含む場合は、もとの送るべき部分から送る。

(イ) 行_う 承_る 伴_う 基_く 費_す

(ロ) 味_い 味_わ 異_い 異_{なる}

怪_{しい} 怪_{しむ} 広_い 広_{まる}

明_{ける} 明_{かす} 預_{ける} 預_{かる}

住_む 住_{まう} 語_る 語_{らう}

読み誤られるおそれのあるものは、特に語幹の一部を送る。

表_{わす} 著_{わす} 現_{わす} 脅_{かす} 煩_{わす}

二、動詞と動詞と複合したものは、前のにもあとのにも送りがないをつけるが、前が「受・請・打・繰・差・取・引・割」であとが漢字動詞の場合は、上の送りがないを省く。

(イ) 申_し 上_{げる} 呼_び 出_す 乱_れ 飛_ぶ

(ロ) 受_入れる 打_切る 繰_返す 差_出す 取_扱う

引_渡す 割_当てる

三、形容詞は活用語尾を送るが、語幹に名詞、動詞、他の形

容詞などを含む場合は、もとの送るべき部分から送る。

(イ) 荒_い 快_い 少_い 珍_{しい}

(ロ) 涙_い 涙_ぐましい 黄_色 黄_色い 疑_う 疑_わしい

恐_{れる} 恐_ろしい

憎_い 憎_らしい 荒_い 荒_つぽい

読みにくいものは、特に語幹の一部を送る。

明_るい 暖_かい 危_うい 大_きい 小_さい 冷_たい

短_かい

四、動詞と形容詞と複合したものは、その動詞にも形容詞にも送りがないをつける。

恐_れ多_い 待_ち 遠_しい 粘_り 強_い

五、副詞、接續詞は最後の一音節を送るが、「かに・やかに・らかに」のついたものはこれを送り、活用語・名詞、他の副詞などを含む場合は、もとの送るべき部分から送る。

(イ) 及_び 必_ず 但_し 再_び 最_も

(ロ) 確_かに 穏_やかに 明_らかに

(ハ) 絶_える 絶_えず 従_う 従_つて

折_し 折_しも 別_し 別_して

必_ず 必_ずしも 少_し 少_しも

「に」を送るだけでは読みにくいものは、特にその前の音節から送る。

新_たに 大_いに 盛_んに

五_いに 巧_みに

六、名詞のうち、活用語から転じたものは、もとの送るべき部分を送るが、主として名詞に用いるもの、意味が活用語の場合とかわつたもの、その他特に定めたものはこれを省く。

(イ) 謠 帶 卸 係 煙 疊

(ロ) 折 組 肥 卷

(ハ) 次 割 話

七、動詞が含まれて複合名詞となるものうち、意味が活用語の場合とかわつたもの、物の名または特殊の術語となつたものなどは、その送りがなの一、部または全部を省く。(前の動詞が二音節ならばその送りがなを省く場合が多い。)

(イ) 見 舞 召 使 覚 書 控 室 申 訳 場 合 小 使 手 当

心 持 値 打

(ロ) 折 詰 箱 詰 座 敷 物 置 字 引

(ハ) 取 引 割 合 受 付 書 留 問 屋 切 手 手 続 下 請

手 付 小 包

附 送り仮名事項索引

この索引は、送り仮名の問題を事項別に分類した上で、ある類型の問題を「送り仮名法文獻集」に収めた文獻ではどう規定しているかが求められるように、編んだものである。文獻は「」の中に略称で示した。その下に、該当する規定のある箇条の番號、または章節の名称・番号を掲げた。

活用する語（通則）

- 【官報】総則第二原則・第二変則
- 【調査】四綱領（1）第一則
- 【官報】総則第二原則 第十～十一則

一則

- 【中根】動詞
- 【佐藤】一覽○動詞 第三章
- 【調査】第一則 第二則（1）（2） 第五則 第六則
- 【大毎】動詞 複合動詞
- 【運動】（1）

活用語から派生した動詞

- 【案】第一
- 【会議】一
- 【中根】動詞
- 【佐藤】第三章第四節（三）（五）
- 【調査】第二則
- 【大毎】動詞一 複合動詞四
- 【内田】動詞の不変化語尾について

副詞から派生した動詞

- 【運動】（三）
- 【案】第一の三～五
- 【会議】一（ロ）
- 【中根】動詞
- 【調査】第五則
- 【大毎】動詞二
- 【案】第一の六
- 【会議】五
- 複合動詞（接頭語化したものを含む）
- 【官報】第十二則
- 【中根】動詞
- 【佐藤】第三章第四節（1）（2）
- 【調査】第六則
- 【大毎】複合動詞
- 【運動】（四）

形容詞【官報】総則第二原則 第五～九則

- 【案】第一の八
- 【会議】二
- 【中根】形容詞
- 【佐藤】一覽○形容詞 第四章
- 【調査】第一則 第二則（3） 第三則 第五則
- 【大毎】形容詞
- 【運動】（1）
- 【案】第二
- 【会議】三

活用語から派生した形容詞

- 【官報】第五則（二）種
- 【中根】形容詞
- 【佐藤】第四章第一節
- 【調査】第二則
- 【大毎】形容詞二
- 【運動】（三）
- 【案】第二の四～五
- 【会議】三
- 副詞から派生した形容詞
- 【調査】第五則
- 【大毎】形容詞三
- 【案】第二の六

【會議】五
複合形容詞

【官報】第九則

【佐藤】第四章第一節

【調査】第六則

【案】第二の七、八

【會議】四

形容動詞【官報】形容詞第六則 動詞第十

一則 副詞第十四則(一)

・(四)

【中根】形容詞 副詞

【佐藤】第五章第一節

【調査】第四則 ↓副詞の項

【大毎】副詞、接統詞三 名詞九

【案】 ↓副詞の項

【會議】 ↓副詞の項

副詞から派生した形容動詞

【調査】第五則

活用しない語(通則)

【官報】総則第一原則・第一変則

【官報】総則第一変則 第十三

十五則

【中根】副詞

【佐藤】一覽○副詞 第五章

【調査】第八、九則

【大毎】副詞、接統詞

【運動】(一)(五)(イ)

【案】第三

【會議】五

活用語から転成した副詞

【官報】第十四則(三)・(五)

【中根】副詞

【佐藤】第五章第二節

【調査】第七則

【大毎】副詞、接統詞二・四

【運動】(三)

【案】第三の五

接統詞【官報】総則第一変則 第十八

二十則

【中根】接統詞

【佐藤】一覽○接統詞 第六章

【調査】第八、九則

【大毎】副詞、接統詞

【運動】(一)(五)・(イ)

【案】第三

【會議】五

活用語から転成した接統詞

【官報】第十九則

【佐藤】第六章第二節

名詞

【調査】第七則

【運動】(三)

【案】第三の五

【官報】総則第一原則 第一、三

則

【中根】名詞

【佐藤】一覽○名詞 第二章

【調査】第十則

【大毎】名詞

【運動】(一)(三)

【案】第四

動詞から転成した名詞

【官報】第二則(乙)

【中根】名詞

【佐藤】第一章第二節一 第三章

第一節

【大毎】名詞一、八

【運動】(三)

【案】第四の二、三

【會議】六

動詞から派生した名詞

【佐藤】第一章第二節一

【調査】第十一則

【大毎】名詞四

【運動】(三)

↓ 動詞の項で延言の条

形容詞語幹から転成した名詞

【大毎】名詞九

形容詞から派生した名詞

【官報】第二則(甲)

【中根】名詞 形容詞

【佐藤】第一章第二節二

【調査】第十一則

【大毎】名詞六

【運動】(三)

【案】第四の四

複合名詞

【官報】第三則

【中根】名詞

【案】第四の二、三

【会議】七

固有名詞

【中根】名詞

【大毎】名詞〔注〕

代名詞 【官報】第四則 形容詞第七則

【中根】代名詞

【佐藤】一覽○代名詞 第二章

【調査】第十則

【大毎】代名詞

【運動】(五)(ウ)

数詞

【案】備考

【官報】形容詞第八則

【中根】形容詞

【調査】第十三則

【大毎】数字

【案】第四の五

連語が一品詞として使われる場合

【官報】接続詞第二十則

【調査】第十四則

漢字の訓が語の一部分にしか当たらない

と見える場合

【中根】動詞

【調査】第十五則

【大毎】複合動詞四 形容詞一

名詞一〇

【案】第二の七 第三の六

【会議】一三

読み方に迷うおそれのある場合

【官報】名詞第二則(乙) 第三則

動詞第十則

【中根】名詞 動詞

【調査】第八則除外一 第十二則

【運動】(五)(エ)(六)

【会議】一三五

(注意) 仮名書きにする方がよいものについてはこの索引では省略した。

解

說

解説

一 送り仮名問題發生の基盤

送り仮名問題は、国語をいかに書き表わすかという表記法の問題の一部分である。少なくとも今後は、そのような視角から問題をながめる必要がある。

表記法の問題を分けて考えるならば、他に仮名づかい・用字法・句読法など、また場合によつては書式などの問題がある。従来これらを「国語の書き表わし方」という一つの視角から総合的に論ずることが、ほとんどなかった。従つてこれらの問題は、どちらかと言へば、ばら／＼に展開して来ている。たとえば仮名づかいのときは、歌文を作る必要上、古くから論ぜられてゐる。つとに藤原定家の「下官集」などがあり、江戸時代には国学者の研究によつて「歴史仮名遣」という一つの規範が立てられたのであつた。明治時代にはいつてからも、いち早く仮名づかいを扱つた実用語学書や教科文典が出てゐる。ところが送り仮名に目を転ずれば、事情は全く違ふ。学者の研究もほとんど見当らず、よるべき規準がなかった。従つて教科書にさえ統一が見られない有様だつた。小学教科書の送り仮名を統一しようとの動きは、明治十五年（一八八二）に至つて文部省編輯局長の西村茂樹が試みたのが、最初である。その日から今日まで七十年を経た。しか

も今日なお送り仮名は問題にされている。それは何に基づくのであろうか。その要因と認められるおもなものをあげれば、次の通りであらうか。

一 国語を表わすのに漢字を混ぜ用いてゐること。――漢

字は元來日本語と性格の違うシナ語を表わすための文字だから、国語には漢字の表意的用法では表わせない部分がある。またたとい漢字の表意的用法で表わせるものであつても、場合によつては、かなり読みづらいこともある。（例）ハナハダという言葉を表わす「甚」と書き表わした場合の「甚大だ」。なおこれではジンダイダとも読める。）

二 国文の表記のそも／＼の母体が漢文であり、現行のものも漢文書き下し体から出ていること。――それならばすべて仮名（あるいはローマ字）で書けば問題は解消するかと言うに、一方では漢字を混ぜ用いると便利な点もあり、また文化の継承という点からも、急に漢字を全廃することは出来なからう。かつ送り仮名がまち／＼でも、漢字に慣れた者ならば読み取ることが出来る（例）「石ヲ投テ」「去ル」。従つて書く側の便利から言えば、仮名を余り多く送るのは煩わしい。

三 ある言葉から転成、または派生した言葉の多いこと

（例）望・ノゾム（動詞）・ノゾミ（名詞）・ノゾマシイ（形容詞）「垂・タレル（自動詞）・タラス（他動詞）」「震・フル（文語自動詞）・フルエル（自動詞）・フル

ウス（他動詞）。

四 ある漢字の意味に當る国語が幾通りかあつて、しかもこれを漢字と仮名とで書いた時、煩わしい形を生ずる場合もあること。——たとえば「下る」は、サゲル・クダサルを別にしても、サガル・クダルのどちらにも読める。そこで、これを区別するために「下がる」「下だる」のような表記が現われることにもなる。

このほか現状においては、次の事も一つ加えられるであらう。

五 国民の各人の表記法が固まるよすがとなつた文獻——教科書や新聞などの送り仮名が、文体の変遷という事情もあつて時代によつて變つてゐるため、年齢層によつても食い違いが生じがちであること。（たゞしこの事は、嚴密な実態調査を経なければ、立証されない。）

送り仮名が現在も十分統一されてゐないのは、以上のような事情に基づくとと思われるが、これらの要因をふまえて、今後われ／＼は送り仮名の問題を解決して行かなければならぬ。

二 送り仮名法の略史

明治このかた今日まで、送り仮名を一定にするための色々な試みや案が考えられ、また実行に移されて來た。

明治九年（一八七六）、中根淑は「日本文典」を著し、そ

の下巻に「送り仮名法則」の項を附録してゐる。そこには、送り仮名ハ、文字ノ働キヲ示ス為ニ用フル者ナレ共、其ノ法定リナシ、或ハ多ク用フル者モアリ、寡ク用フル者モアリ、又ハ多寡打チ交ヘテ用フル者モアリ、各其ノ意ニ任セテ之ヲ用フルニ由リ、今ニ於キテ其ノ規則立タザレバ、竟ニ一定ノ期アル事ナシ、是ニ由リテ余不敏ヲ願フ、仮リニ其ノ用法ヲ書シテ、以之ヲ示スノミ、（七四丁表）

と述べてゐる。これが恐らく送り仮名を問題とした最初の文獻であらう。もつとも同じ中根の「送仮名大概」（明治二十八年、一八九五）によれば、この問題を最初に取り上げた人は中根でなく、陸軍參謀局の陸軍少佐木村信卿や文部省編輯局員の那珂通高であつたらしい（この資料集の二四ページを見よ）。しかし書物に書かれた限りでは、やはり中根が一番早いとすべきであらう。ところでこの問題が木村・那珂・中根らによつて取り上げられたについては、次のような事が想像される。すなわち木村や那珂が実務上、送り仮名の不統一が不便・不体裁であることを問題とし、国語学に見識のあつた中根に相談したのであらう。（中根は明治五年—八年の間陸軍參謀局に出仕し、陸軍少佐になつた。また後には文部省編輯局にも出仕してゐる。）

さて中根が送り仮名の要領として「日本文典」に掲げてゐるのは次の四つである。

一 変化ノ声ヲ送ル者……………飽キ・飽クの類

二 語中ノ声ヲ送ル者……………長サ・直チの類

三 語中ノ声ヲ送ラザル者……………勢・既・則の類

四 規則外ノ者……………以・雖の類

この中根の送り仮名説は、後に一部改められて「送仮名大概」となったが、右の大綱に關する限り、（直接の影響のありなしは別として）後々までも諸種の送り仮名の原則とされた所と、ほぼ同じである。これ以前に、国語表記の実践面で、助詞・助動詞のたぐいは大体仮名書にされている。とすれば、右の要領の一と三とは国語の性格上当然期待される規定である。また二と四とは、慣用や實際上の便宜から設けられた例外と見ることが出来る。従つて国文法の知識を利用して送る仮名の規準を定めようとすれば、（一々の言葉での送り様に出入りはあるとしても）まずこうした大綱は動かないであらう。たとえは内田嘉一の「送仮名写法」（文部省編輯局定、明治十六年以前？）（注一）に、

本邦ノ文、概ネ漢字ト仮名トヲ交ヘテ之ヲ写ス。漢字ハ多ク衆語ノ本ヲ写シ、仮名ハ多ク衆語ノ末ヲ写ス。

と言つているのも、同様の送り方を予想させる。なお面白い事に、中根がその価値を認めなかった浜田健次郎の送り仮名説（注二）においてもほとんど同じ原理を掲げ（「副假字法規」明治二十年刊。同書五六べ）、官報局の「送仮名法」（明治二十二年、一八八九）にもこれが受け継がれている（この資料集の

九五ページを見よ）。

注一 倉野憲司「送り仮名について」（『国語と国文学』第二十卷第六号）から引用。先に本文で述べた通り、編輯局長

西村が小学教科書の送り仮名を統一しようとしたことを考え、また一方明治十七年に出た『小学読本』（高等科）が内田の纂述したものであることを思えば、「送仮名写法」は当時の教科書の送り仮名の規準になつたものである。原典をまだ見る機会が得られなくて残念である。中根が浜田説を評価した事は、この資料集の一一四ページを見よ。

注二

明治も二十年を過ぎるころから送り仮名を取り上げた文獻が多くなつて來ているが、明治三十二年（一八八九）には佐藤仁之助の「新撰送仮字法」が出た。この書は、教育の面で使われることを意圖したようであるが（同書緒言参照）、この書には、そのほかにも特色が認められる。その一は、このころおよびそれ以前の送り仮名法が、いわゆる普通文（注）のみを対象としているのに対し、和文・和漢混交文・漢文書き下し体のいずれにも通ずる規定を設けようとしたらしい事である。（「新撰送仮字法」は毎条に実例として、これら諸種の体の文を引いている。）その二は、送り仮名問題を句読法と關係づけて扱つた部分のある事である（第五章第一節など）。もちろんこれ以前も、句読法や附け仮名を送り仮名と並べて説いた本はあるが、それを一つにより合せて語を書き表わす手段としたものは見当らない。ハナハダを「甚、」と書けと言う時、この、はその語を表記するのに欠いてはならない要

素となるのである。ここでは送り仮名を単にそれだけで孤立した問題としてではなく、一層総合的な立場からの問題に移されている。しかし、このような考え方は、その後あまり発展するに至らなかった。たとえば、国語調査委員会の「送仮名法」(明治四十年、一九〇七)の例言では、こう述べている。

本法ハ普通ノ漢字ニツキテ大体ノ法則ヲ定メタルニ過ぎザルヲ以テ、本法ノ及バザルトコロハ、句読点、傍訓、仮名書等便宜ノ方法ニヨルモノトス。〔附点は編者〕

注 普通文とは、「文章語体の文語の一種で、明治以後、普通の文語として広く行はれたもの」(日本文学大辞典・山田孝雄「日本文法講義」には次のように説明されている)。「現代の文語と目すべきものは大体書籍、雜誌等に於ける論説の如きもの、又所謂口語体以外の雑録類又詔勅法令に用ゐらるる文章の如きものをさす」と知るべし。又その語法も平安朝の語法によるといふものあれども必ずしも然らず。なほ之に参ふるに漢籍訓読の余習を以てし、(豈、なんすれぞ、それ、然らんや等の語)更に近頃の外国訳語の感染と明治以來の新風潮とを加味したるものなれば、必ずしも古法に則るとはいふべからず。〕

さて国語調査委員会が芳賀矢一を中心にして編んだ右の「送仮名法」は、その時までの諸種の送り假名法を一応總決算したものと見えよう。(例言には、中根・浜田・佐藤の説を始め十種以上の文献を参照したと書いてある。) しかも送り假名法を規定したゆえんとして、

一般ノ法文、教科書等ニ於テ、少クトモ大体ノ統一ヲ有

セシムベキハ国家ノ体面上ヨリイフモ必要ナリ。(例言)と言っているのは、時代の氣運をも考え合わせて注目すべきことである(注一)。従前の送り假名法は、佐藤の著述のように詳しいものでも、これを実践に移す段になると、ある場合にはそれを規定する簡条を欠いているため、どう書くべきか決めかねるものが出て来る(注二)。この点で調査会のもものは、(もちろん十分ではないが)相当によく整ったものである。十五の規則をもつて様々な場合を律し得た功績は、認めなければならぬ。当時として立派なものだったし、また權威のある機関が決めたものだったから、かなり広い範圍にしかも長い間行われた。しかしこれも「現行普通文ヲ標準トシテ規定シタルモノニシテ、書翰文、口語文ニハ之ニ準ジテ、多少ノ斟酌ヲ要スベ」(例言)きものだったので、口語文が盛んになるにつれ、これを口語文に適用するに當つて条文の解釈に差が著しくなつて來た。(ただし文語文に適用する場合にも疑義がなかつた訳ではない。)そこでこれを補う意図で、服部嘉香や木枝増一の送り假名法が世に問われるに至つた。適用すべき対象が口語であるか文語であかの別は、送り假名を考える上でかなり影響の大きな問題だと見られたのである。

注一 佐藤も「新撰送假字法」の緒言に、次の言をなしている。「……かくのみ打捨て置けば、愈、後進の文章の書記方に惑ふのみならず。遂には、東洋の一大独立國たる日本人士の文章には、送假字の法なしと言はるゝに至ら

注二

むは、吾人のいかで傍観すべき者ならむや。」

たとえば佐藤は、ツヒヤスを「費やす」と書くように規定しているが、タスカルについては何の規定もない。従つて「助る」と書けばよい訳だが、ツヒヤスの場合を考えると片手落ちと言ふべきである。また動詞連用形から転じた名詞には送り仮名をつけないという規定がある。これによると、ムキ・ムケ・ムカヒの区別がつかなくなる。ことにムキとムケとは文脈によつても区別出来ない場合が予想される。これらは規則の不備である。これは一例である。由来送り仮名法であるからには、そのどの簡条かを適用することによつて、送り仮名を要するすべての言葉が書けなければならない。しかし実際には、「送り仮名対照表」でも分る通り、どう書くべきか決まらない例が出て来る。またその送り仮名法の著者が、規定と相反する送り仮名を使っている例もある。

こうして示された改良案は、適用の際の解釈が確定すること、および色々な場合を漏れなく規定することに努めたから、その簡条の数はきわめて多くなった。服部嘉香の「正しい仮名遣と送仮名」(昭和十一年、一九三六)におけるものは五十則、木枝増一の「送仮名法」(昭和十三年、一九三八)は四十則という数にのぼる。ところで規則の数を増せば、あるいはあらゆる場合を尽すことが出来るかも知れないが、実用の点からは思わしくない。そこでこうした行き方に対する批判が現われるのは自然である。昭和十年代は、日本語の海外進出が大きく取りざたされた時であるが、同十四年(一九三九)の三月に、雑誌『国語運動』に従来のと全く別の原理に立つ

た送り仮名法が発表された。その案の主旨は、この資料集の一七九ページ以下に引いてあるから、ついて見られたい。これは漢字に一定の音節数だけを与えようという原理、語尾の変る語やそれから転じた語は品詞によらずその変る部分を送ろうという原理——すなわち文法論の知識を待たず形の上から決めて行こうという態度である。立案者の一人である野田信夫の言葉を借りれば、「一般の人に意味の分りにくい文法用語を避け、なるべく包括的な規則にする」のでない限り、「実用に適しない」(この資料集の一八〇ページ参照)という主張である。実務を執る者にとつては、作成する文書の送り仮名を統一する必要がある。従つて以前から衆議院速記課とか法制局・陸海軍などの官庁、また民間の会社などで、それらの規定を持っていた所もある。このような場合、規定があら過ぎれば形の決まらない語が出て来るし、これを防ぐため細かい規則を定めれば煩わしくて使い切れない。ここに、三宅・若林・野田案のような、従来に行き方と全く違う原理に立つ送り仮名法の現われる原因があつた。

ところでこの案の(五)を見ると、「なるべく仮名を使う。即ち仮名で書くことによつて送り仮名の問題をなくする。」と述べている。ここまで来れば、単に送り仮名だけの問題ではなくなる。つまりこの解説の始めに述べた通り、送り仮名の問題を送り仮名として孤立させて扱つたのでは、解決がつかないのである。ことに当用漢字表制定以後、これにのつとつ

て文章を書く場合には、表記法という総合的な立場から考えなければならぬ。

さて『国語運動』の案は、送り仮名の煩わしい問題を解決するために、仮名を多く送るまたは仮名書きにする道を選んだ。仮名を多く送るようになったのは、確かに一般の傾向であり、ある程度送り仮名の多いことは、読みやすさを増すであらう。理論の上でも、送り仮名を多くすれば、筋を通すことが出来るし規則や例外の数を減らすことが出来る。またそうする時、漢字に対する訓の音節数を一定にすることも出来る（たとえば「明く・明かるい・明きらかに」「助かる・助ける」）。こうした事情が教育の面で好都合と考えられたためであろうか、昭和十年代から国定教科書の送り仮名は著しく多くなった。この種の送り仮名法の理論と見なせるものは、倉野憲司「送り仮名について」（昭和十七年、一九四二『国語と国文学』六月號）である（注一）。しかしながらこうした方法で送り仮名に理論的統一を与えると、世上の慣用とはかなりへだたってしまう。教育と慣用とは一応別だとの考え（注二）も成り立つかも知れないが、それにしてもこの食い違いの大きい事は不便である。かつ教科書流の送り方は、漢字に慣れた者には「余分な長たらしさ」と受け取られる。そこで、終戦後公文用語を改良するに当って設けられた送り仮名法でも、ひところの教科書のように多い送り仮名は認めていない。

注一 内田百閒「動詞の不変化語尾について」（昭和十年、一九三五）の説は、動詞の送り仮名に關し、倉野説に先行するものである。内田は、漱石全集その他の校正の間に於いてこのような説を探るに至つたむねを、右の論文に述べている。

注二

既に明治時代にも「蓋シ書籍中の文章ハ、唯送り仮名ノミニ止ラズ、其ノ他ノ事モ、務メテ法ニ拠ラザルベカラズ、決シテ暖簾看板領取書ト其ノ科ヲ同ジクスベカラズ、」（中根「送仮名大概」、この文献集の一六ページを見よ）という意見がある。

先の『国語運動』案は送り仮名問題を実務の上で処理するため、なるべく仮名を多くすることを唱えた。しかし一方では、この考え方に抵抗がない訳ではない。たとえば衆議院・参議院の速記・議事録編集などの仕事をしている人たちの間では現在でも、仕事の能率や読みやすさの点で余り仮名を多く使いたくないとの意見があるようである。

昭和二十一年（一九四六）十一月、内閣訓令をもって当用漢字表が制定され、次いで音訓表の制定を見、公文書がこれによるべきことが定められた。そこで公文書においては、送り仮名だけを取り出して論ずることに、さほど意味がなくなっている。こうして「公文用語の手びき」（昭和二十二年、一九四七）にせよ「表記の基準」（昭和二十五年、一九五〇）にせよ、具体的に個々の語についてその書き表わし方を規定するという方法を採用した。もちろん実例をも添えたのはこの時に始るのでなく、国語調査会の「送り仮名法」の附録とか服

部のもの、近くは「送りがなのつけ方(案)」(昭和二十一年三月)などが、規則のほかに用例集をつけている。実用に役立つものを作ろうとすれば、用例集の形をとるのが最も有効であろう。ただしそのような用例集が出来るためにも、原理・規則をはっきり立てる理論的研究の必要なことは、もちろんである。(なお終戦後の諸文献で右に述べたものについては、この解説の三参照。)

以上、実務や教育や公用文などの面と関係づけて送り仮名の問題を見て来たが、このほかに常に送り仮名が問題になるのは、新聞という報道面の仕事である。時期が前後するけれども、大阪毎日新聞社の「スタイル・ブック」(増補改訂版、昭和八年、一九三三)は色々な意味で注目すべきものである。新聞には各社にそれぞれ、しきたりになつた用字法や送り仮名法があつたらしい。新聞社が当用漢字のわく内で仕事をするようになつても、紙面から推せば、そのような相違はあると思われる。しかもこれを通じて感ぜられるのは、スペースの節約のためか、どちらかというとな仮名を少なく送る傾向のあることである。

時代の移るにつれて、送り仮名は全体として多くなつて来た。にもかかわらず、書く側の便利から言えば、余り多く送りたいくないという事情は、なお失せてはいない。実践面における送り仮名の統一も依然十分ではないのである。すなわち問題は今日以後に残されていると言わなければならない。し

かも一層よい解決のためには、送り仮名のほかに、使える漢字の範囲・仮名づかい・用字法・句読法・記号の使い方などを含めた表記の問題として、総合的に考えることが、是非必要なのである。

三 文献 解題

——この資料集でふれた送り仮名法について——

1 送仮名法

内閣官報局編纂

明治二十七年(一八九五)五月、八尾書店刊。明治二十二年(一八八九)四月付の官報局長高橋健三の序文によると、この書は、はじめ、局員浜田健次郎の起稿に係り、さらに局員の審査に付し、数回の討議を経て多少の修正改竄を加えて完成したものを、印刷に付して局員に分つたとある。すなわち、はじめは、官報局内部のものとして印刷されたのであるが、後、他官庁から照会請求する者が絶えず、また、一般の需要も多かつたので、明治二十七年に至り、官報局長奥田義人の序をつけて発行されたものである。この書の内容は、起稿者浜田健次郎が著わした「送仮字法規」明治二十年(一八八五)刊と、条章の立て方、品詞の呼び方すべて同じである。ただ「送仮字法規」においては、漢字と仮名とを混用する限り、その一を尊び一を卑しむのは正当でなく、仮名のつけ方に定規を定めなければならないとして、仮名の位置を重んじているのに対して、この書では、送り仮名は漢字の用法を示

すものとして、仮名の方を従としてゐる。公の立場で送り仮名法を定めた最も早いものとして注目すべきである。

2 送仮名大概

中根淑著

明治二十八年（一八八五）十月、金港堂発行。中根淑は、早くその著「日本文典」（明治九年、一八七六、刊）において送り仮名の規則を述べているが、この書ではさらに詳説して、実例をあげてある。この書の目的は、普通文（当時普通の文語として広く行われたものをさす）の送り仮名を定めることである。送り仮名は文章を読み易くするものであるという立場に立ち、法則には例外が多くては記憶に不便であるから例外を認めないという方針をとっている。そのため、当時としては全体にやや多く送る傾向にあり、しかも慣用によつて送り仮名を少なくすることはしない。その結果、ここにいる普通文と、領収書、帳簿、願書などの書き方と違つてくる点があるが、それについては、著者は、それは手紙の書き方と、書籍の中の文章の書き方とが異なるのと同じことで、相違するのは当然であると言明している。このように立場がはつきりしており、しかもかなり核心をついた事を述べているので、以後の諸種の送り仮名法を作る時の参考にされているばかりでなく、送り仮名の問題を考える時、今もって忘れることのできない書である。

3 新撰送仮字法

佐藤仁之助著

明治三十二年（一八九九）十二月、松榮堂書店発行。著者は、この書の序文において、国語の書記法の中でも送り仮名の統一のないことは独立国として恥すべきことであるから、これを一定しなければならぬとし、語源にさかのぼり、原則に照らし、慣習と実用を考へて送り仮名を定めたと言っている。この書は、はじめから当時のいわゆる普通文の送り仮名法を定めようとしたもので、公の願届や日用の書簡文と区別しているところに特色がある。一々の条項のあとには和歌・物語・軍記などの文章に適用した例を事細かに掲げてある。元来、中学生に与えて成績をあげていたものをまとめたものであるとすることで、文法的な説明が多く、その知識に基づいて運用するようになってゐる。

4 送仮名法

国語調査委員会編纂

明治四十年（一九三六）三月発行。国定教科書共同販売所翻刻（七月）。法のほかに、附録「動詞、形容詞、副詞、接続詞ニ当ツル普通ノ漢字ニシテ二字以上ノ仮名ヲ送ルベキモノ（形容動詞ヲ除ク）」の表がついている。

序文によれば、送り仮名は、古来一定しないものであり、慣用ばかりでも規則ばかりでもこれを一定することはできない、しかし、法文・教科書等で少なくとも大体の統一がない

ということとは、国家の体面にもかかわることであるので、従来ある送り仮名法及び慣例を参照して、定めたものであるという。法則の立て方は簡略を旨とし、すべて十五則、送り仮名法としてはよく整理されているものと見るべきである。細かい点で適用の際二様に解釈されるものがあり、またもともと当時の普通文である文語文に即して考えたものであるから、口語文が広く使われるようになると、その規定がないという不便もある。しかし、とにかく法則が簡単で使いやすいために、この後長く送り仮名の規準として用いられ、各種の送り仮名論も、その改訂という形をとるものが多かった。

5 スタイル・ブック

大阪毎日新聞社

昭和八年（一九三三）二月、増補改訂版発行。この書は、大阪毎日新聞社で、新聞編集上の必要から作られたものであるが、社内外の需要が多く、増補改訂版が出されたものである。形はポケット型で、句読法・仮名づかい・送り仮名法・擬声語・あて字・数字・国有名詞・振り仮名・敬語その他すべて十七項目、新聞原稿を書く上に要を得てしかも親切な用例があげられている。この資料集には、その中の「送り仮名法」の部分の翻刻した。この送り仮名法は、数多くの実例に当って生じたさまざまな問題を、落ちなく集めて、法則としてまとめたものである。法則は単に文法的説明だけからするものでなく、音節数によつて扱いを異にする規定をもあげて

いる。実務に即した送り仮名法として、各方面に利用されたことがうなずかれる、特色あるものである。

6 動詞の不変化語尾について

内田百閒

雑誌『東炎』第四卷第二号（昭和十年、一九三五、二月号）国語調査委員会の「送仮名法」が、文語に適用する規則として作られたものであったため、口語文が普通文として普及してくるにつれて、さまざまな不便が起つてきた。この論文では、その中でも「変わる（変える）集まる（集める）起（起きる）落（落ちる）」など、活用語尾そのまゝの形ではないが、同じ語幹から派生した他の動詞と比べてみると語幹ではない部分を不変化語尾と名づけ、その部分から仮名を送ろうということを唱えている。この点は、国語調査委員会の「送仮名法」が作られた当初から問題となるべき点であったが、このように自ら文章を書く人が、漱石全集の校正に当って苦心した結果、多くの実例から決めたものである。よく問題の範囲を尽しており、説得力もある。また、これらの現象に「不変化語尾」という名称をつけてその概念をはっきりさせたことは、後に送り仮名をつけるかつけないかを決める上の目安として役立つところ大きいものである。

7 正しい仮名遣と送仮名

使ひ方 服部嘉香著

昭和十一年（一九三六）十一月、早稲田大学出版部発行。こ

の書はもと、著者が書いた作文指導書の附録として出そうとされながら、約二年間出版が遅れていたものを整理して単行本としたものである。著者は数多くの作文指導書を著わして、用字の問題を明らかにする必要を強く感じていたわけであるが、当時仮名づかい・送り仮名について扱べきものに動搖の見られた状態にあり、いよいよ混乱を増していくのを正そうとしたのである。

中でも、特に著者が力を入れたのは送り仮名の部である。

仮名づかいの部では、臨時国語調査委員会の審議により決定された「仮名遣改訂案」を非として歴史的仮名遣を説き、送り仮名の部では、国語調査委員会の「送仮名法」を批判して、その改訂案「新送仮名法（私案）」を出している。

国語調査委員会の「送仮名法」の改訂を要する理由として、著者は次の六箇条をあげている。

一 「送仮名法」は、明治四十年——實質的には明治三十九年の後半期——の制定であるから、單に時代的に見ても大いに古いのである。

二 「法」は、制定当時の事情に照らし、明らかに暫定的のものであり、説き足りない部分、未解決のまゝの部分が多くないのである。

三 「法」の例言に、「本法ハ現行普通文ヲ標準トシテ規定シタルモノニシテ、書簡文、口語文ニハ之ニ準ジテ多少ノ斟酌ヲ要スベシ。」とある通り、普通文即ち

文語文を標準としたもので、口語並びに口語文の大きに発達した今日では、当然、それに応じた大改訂を加へねばならん筈である。

四 「法」の綱領の(3)に「語ノ末ニ含マルル接尾語ヲカキアラハスコト。」とある一項は甚だ不確実なもので、いろ／＼厄介な問題を残してゐるのである。

五 「法」の規定と、「法」の説明文とに、前後矛盾するものがあり、説明文中にも、確信に乏しい用例も交つてゐるのである。

六 「法」の規定に「時宜ニヨリ」として、例外的に認めてゐるものを、小学校、中学校の国語教科書には、あらゆる場合に適用するものとして、誤用した例が少なくないのである。(二九—三〇ページ)

これらの点を実例をあげて詳説し、次に「送名假法」全文を掲げ、さらに試案を掲げている。ここに「送仮名法」全文を掲げたのは、「この旧式送仮名法の改訂案がまだ出来てをらず、教科書、公用文、候文などは、それに拠るの外ない事情にあるからである。私案中にそれとの対照を明らかにしておいたのも、利用者の隨意選択に便利なやうに」とのためである。「新送仮名法（私案）」の方も「全部が私案ではなく」調査会。「送仮名法をわかりやすく排列し、同時にその不備、矛盾を正し、例語を豊富にし、特に現代文（口語文）に適切なものとするを主眼と」したものである。したがって私

案そのものは「送仮名法」の改訂というべきもので、法則は全部で五十、それぞれの条下に、起りうべき用例を豊富にあげ、もし法則を変えらばそれに従って変り得る形をも示してある点、実際に多くのことばを扱ったところから得た知識によつた懇切な書物である。副詞の語尾として「かに」「やかに」「らかに」を一括した部類とし（名前はつけていない）、仮名を送ることを決めたのは、後々、副詞の送り仮名をつける時の目安となつた。

8 送仮名法

木枝 増一

雑誌『国語・国文』第八巻第十号（昭和十三年、一九三八）現代日本語の問題特輯号所載。この論文は、はじめに送り仮名法についてその定め難いことを述べ、明治以来の諸種の送り仮名法と、当時改訂中の文部省の新読本「小学国語読本」巻一から巻十一までの送り仮名の實際を調査したものとの参照し、実例を集成して「現代送仮名私案」を作つて載せてある。明治以来の送り仮名法では、特に、中根淑・国語調査会、服部嘉香の送り仮名法を主として参照対照してある。法則の数はすべて四十、参照の項目に上記の送り仮名法や実例との關係を詳しく述べている。小学国語読本の実例の上に立っているため、その方面の用例が豊富であること、受取書・候文の規定にまづ、以てゐる点に特色がある。大体の方針は国語調査委員会の案に沿ひ、動詞の不変化語尾は、観点の相

違からあるもののはつけ、あるもののはつけないという結果になつてゐる。従来の諸種の送り仮名法の集成として便利であるが、文法上の知識が必要なこと、項目が細かすぎることにために實際に行われるには不便であつたように思われる。

9 送り仮名法（案）

三宅正太郎

若林 方雄

野田 信夫

野田 信夫

送り仮名法（案）について

雑誌『国語運動』第三巻第三号（昭和十三年、一九三八、三月号）所収。この「送り仮名法（案）」は、従来の送り仮名法が文法の知識をもとにしてゐたため、その知識がなければ正しくつけられないのを改め、だれにでも、やさしく使えるように、漢字が分担する音節の数を最大三音に限る方針をとつた点に特色がある。これは、漢字は借り物であつて、語幹を表わすものではないという考えから出てきているものである。また、読み方の誤りやすい名詞・形式名詞に送りがないをつけること、送り仮名の複雑な副詞・接續詞の仮名書きを勧めてゐる点では、表記法全体との考慮があらわれている。

この「送り仮名法（案）」の成立の事情・主旨、従来の送り仮名法特に国語調査会の「送仮名法」の批判については、制定者の一人、野田信夫の「送り仮名法（案）」について詳しく。口語文が広まるにつれて口語文に即した送り仮名が考

えられ、すでに大阪毎日新聞社の「スタイル・ブック」に見られるような送り仮名の増加の傾向があつたのであるが、この「送り仮名法(案)」は特別の法則を立てて、文法的には理由づけられないほど多く送る道を開いたわけである。

「送り仮名法(案)」を読む

平井 厳男

雑誌『国語運動』第四卷第三号(昭和十四年、一九三九、三月号)所収。これは「送り仮名法(案)」の批判であるが、かなりよく核心をついている。そして、最後に、その批判にもとづいて改訂案を出しているが、要を得たものである。

ここでは、「送り仮名法(案)」について次のような点を批評している。

(1) 音数主義をとつたことは画期的な試みであるが、あまり便宜に墮したきらいがある。不活用語尾を認めれば、従来の語尾送り仮名主義のままで言葉の個性・法則性を重んずることができる。

(2) 漢字には、二音をあててのを原則として、副詞・接続詞及び五音以上の動詞・形容詞には三音を受け持たせるというやり方では、未然、連用形では「試ろみ・考がへ」終止形では「試みる・考へる」となるといふ不統一が起る。

(3) 不活用語尾に送るのはよいが、すべての品詞に適用するのは煩わしい。名詞は、動詞から転成したものでも、紛れやすいものだけに送ればよい。

(4) 複合動詞は、その上のものが接頭語的なものかどうか

を見分けるのは煩わしい。すべて送るのがよい。

10 送りがなのつけ方(案)

文部省

昭和二十一年(一九四六)三月。この書は、「くざり符号の使ひ方〔句読法〕(案)」「くりかへし符号の使ひ方〔をどり字法〕(案)」「外国の地名・人名の書き方(案)」と共に、文部省で編修または作成する各種の教科書・文書などの国語の表記法を統一する規程を示すために作られたパンフレットのひとつで、かねて諸官庁や一般社会の用字上の参考となることをめあてとしたものである。直接担当したのは、教科書局調査課国語調査室である。昭和十年代以来論議の多かった口語文の送り仮名法を、文法的区分によつて定めた通則と、五十音順に排列した用例とから成る。この書の規定の特色は、一応法則によつて送り仮名をつけても、慣用によつては省きうる部分を明記し、適用に伸縮の幅を持たせていること、および仮名書きが望ましい語を指摘して、その面から送り仮名の問題を解決しようとしたことである。この、慣用によつては省いてもよいという部分を、語によつて勝手に取捨しては送り仮名を統一することはできないが、もし、一貫して省く、あるいは一貫して省かないとすれば、それぞれに筋の通つた送り仮名のつけ方をすることができると、利用の範囲の広いものである。後に出た総理庁・文部省編集「公文用語の手びき」の中の「送りがなのつけ方」の項は、この「送りがなのつけ

方(案)を踏襲したものであり、「文部省刊行物表記の基準」にも、その法則の立て方は受け継がれている。このように、この書は、口語文に適用する送り仮名のつけ方を示して簡潔で要を得、よく行き届いた貴重な資料であるが、売品にならなかったこと、その後は漢字制限・かなづかい改訂の問題が、国字国語問題の中心に押し出されて来たことのため、送り仮名について論ずる人が少なくなつたことによつて、人々の注目を引く機会が少なかった。

11 文部省著作教科書「中等国語」の送り仮名 文部省

ここに「中等国語」という教科書は、昭和二十三年(一九四八)度使用のため、昭和二十二年(一九四七)度から改訂編纂が始められ、以後毎年多少の改修を加えて翻刻されている文部省著作教科書である。ここに用いられた表記法は、昭和二十一年(一九四六)十一月以来発表された現代かなづかい・当用漢字表・同別表・同音訓表を取り入れてあり、送り仮名も、それらを採用するにあつて、改めて、文部省の教科書編修の係で検討して決めたものである。しかし、別に教科書の送り仮名法として書き表わしたものはなく、教科書編修の係では、最初、中等教科書株式会社と協力して作つた「中等教科書表記の基準」という二十三ページの謄写印刷物(昭和二十一年、一九四六、十一月)をもとにして、あとは、さらに音訓表をあてはめて、一語一語の適用を協議して決

ていた。

ところが、昭和二十三年(一九四八)二月から文部省告示として発表された「教科用図書検定基準」に、各科共通の規定として、表現の項3ノ7に、

送りがなは、おおむね現行の教科書の用例による。

という条件が掲げられた。(昭和二十六年、一九五一、九月発行の単行本まで引続き同様。)この基準作成の当時は、教科書が国定一本の時であり、中でも国語教科書の送り仮名は標準と考えられるから、この「中等国語」の送り仮名は、検定教科書編集者の特に注目するところとなつた。しかし、前述の通り、公表された法則はないのであるから、検定教科書の編修者は、文部省内部の人に個人的に聞いたり、「中等国語」の本文から帰納したり、あるいはやむを得ず一般に慣用されているなるべくやさしいと思われる送り仮名を採用するというような方法をとるよりほかなかった。

その後、文教協会発行の「総合当用漢字表」(昭和二十五年一九五〇、五月刊)の巻末に「現行教科書公用文おくりがな対照表」に、音訓表にあげられた語についてだけは発表された。また、久松潜一編「新編国語辞典」(昭和二十六年、一九五一、二月発行)の附録にこの「中等国語」編修に当つた文部省関係の人によつて、送り仮名の実例があげられた。これらによつては、複合語や転成語の送り仮名の細かい点、かな書きの範囲などについては知るよしもない。しかし、前記のパンフレット「中

等教科書表記の基準」を参照し、「中等国語」本文の実例をいくつか拾い出して考えあわせれば、その方針を知ることができる。

この教科書の送り仮名は、なるべく仮名を多く送ること、同じ漢字にあてる音節を一定しておくことなどがその特色である。たとえば、「変わる。当たる・果たす・集まる・積もる・決まる」などのいわゆる動詞の不変化語尾はすべて送る、(ただし、起す・起る・落す・終る・聞える・悔むの六つは例外)。「明かるい(明ける) 恐ろしい(恐れる) 確かめる(確か)」など、他の品詞に転成したのも、漢字の受け持つ音節は決まっている、「打ち合わせる」「取り扱う」など、複合動詞の上のにも下のにも送りがないをつける、「田植え・夕暮れ・横書き」など、名詞になってもとの動詞としての語尾を書き表わすもののがかなり多いことなどである。また、昭和二十四年(一九四九)の、改訂版では、「果たして」は全部仮名書きにして、送り仮名の問題から離してしまうようなことも行われている。このようなことのため、一般によく普及した公文用語の送り仮名と一致しない点が多く、それらを一本にすべきであるということも言われるようになった。

〔備考〕 中等教科書株式会社(後の中教出版株式会社)では昭和二十四年(一九四九)六月に「中等教科書表記の基準(改訂)——送りがないのつけ方——」を出し、同社の検定教科書の指導書の附録としても載せている。これは、同社の検定教科書の文法の理論をとり入れた規則の立て

方に改め、独自の見解から送り仮名を決めたもので、文部省著作の「中等国語」に採用したものと違ふものである。その方向は慣用を重んじて、一般社会の習慣と大差ないものにしうとして見える。個々の用例については、この資料集のどこでも扱うことができなかったが、特に独自の立場をとる送り仮名法として注意しておく。

12 公文用語の手びき

総理庁・文部省編集

昭和二十二年(一九四七)九月初版、昭和二十四年(一九四九)三月改訂版、印刷局発行。この中に「送りがないのつけ方」の項がある。これは、前の「送りがないのつけ方(案)」を、現代かなづかいと当用漢字表にあてはめ、改訂版の時、さらに音訓表にあてはめて書き改めたものである。その際、大体において、「送りがないのつけ方(案)」で、送り仮名を略してもよいとされた方を採用しているが、複合動詞の送りがなは、上のにも下のにもつける方を採用している。ただし用例の部は、必ずしも「送りがないのつけ方(案)」の用例と同じものばかりではない。「公文用語の手びき」は、総理庁・文部省が中心となって運営した「公用文改善協議会」の事業として、各官庁に配布されて公用文の規準となつたものである。一般の公用文はもとより、法令文の送り仮名も原則としてこれによつてゐる。また、現代かなづかい、当用漢字表以下の国語政策が実行されて、新しい文章を書かなければならなくなつた時において公にされてゐた唯一の送り仮名法でもあつ

た。当用漢字の普及のため文部省から出されたパンフレット「五十音順当用漢字音訓表」で、音訓表にとられた語の送り仮名を示すのもこの「送りがなのつけ方」によっている。このようにして、この「送りがなのつけ方」は、官庁方面で現在最も広く行われているものと言うことができる。

13 文部省刊行物 表記の基準 文部省調査普及局国語課

昭和二十五年（一九五〇）九月、文部省発行。まえがきによれば、「文部省刊行物の表記の基準となるべきものを、実務に役立たせるために編集」したもので、「実務上使用度の高いことばで、表記について迷いやすいものを集め」、当用漢字表、同別表、同音訓表、同字体表を総合して編みかえたものとしてある。したがって、この書のおもな部分は、実際の語例を集めた用例集の部分であるが、巻頭に「表記の基準」という項目があり、漢字の使用法とともに、送り仮名のつけ方がはいっている。この送り仮名のつけ方は、前掲「公用文用語の手びき」の中の「送りがなのつけ方」の行き方を踏襲してさらに簡単にし、それに仮名書きにするものを定めた項目が加わっている。一般に、漢字の使用制限の線を推し進めて、仮名書きが多くなっているで、これまで送り仮名の問題とされていたものでも、かなり解消してしまっている。この書の送り仮名の一つのねらいは、公用文と教科書と二本立ての送り仮名が用いられていたのが都合なので、なんとか

統一しようとしたものであるらしく、その両方の行き方がとられている。しかし、その結果は、法的に類推することがむずかしくなり、個々の語を用例で引いてみないと、どう書くべきかがわからなくなっている。従って、ここに掲げられていない語については、どのような規定に従って書いていいかがわかりにくい。

なお、この書のまえがきには最初、

国語の表記については、なお研究すべき点が多い。したがってこの基準もまた、今後関係各方面の協力を得て、いつそう完全なものにしたい。

とあった。ところが、同年十二月、統計出版株式会社から、「国語の書き表わし方（文部省編）」と表題を改めて売品として発行した時には、文部省調査普及局国語課の署名で、次のように改められた。

国語、国字の簡易化の具体策として、現代かなづかい、当用漢字、同音訓、同字体等が制定、公布されて以来、国民一般に実行されているが、これらはいわば大綱を定めたもので、細部にわたってはその基準は必ずしも精密ではない。したがって、たとえば送りがなをどこから送るか、漢字とかなのどちらを用いて書き表わすかなどについては、人により本により、はなはだしいときには同じ本の中でもさへまちまちになり、種々の問題が起りがちである。

この本は、これらの不便を除くために、特に実務上使用

度の高いことばで、その書き表わし方について迷いやすいものに重点を置き、「中略」：教育上、実務上の便利なりどころを示そうとしたものである。

この本は元来、文部省刊行物の表記の基準を示すために編集したものであるが、同時にこれが広く各方面にもよるべき基準として使用され、実務上の、また教育上の能率増進に資するところがあれば幸である。(まえがき)

このため、一般には、文部省で発表した送りがなのつけ方ないし表記法として受け取られ、実用に供されることも多いようである。

14 会議録 用字の手引き

日本速記協会編集

昭和二十六年(一九五二)発行。一月、日本速記協会発行。

この書は、衆議院の議事録作成のための手引書である。この中に「送りがなのつけ方」の項がある。これは、法則の立て方は「公文用語の手びき」の「送りがなのつけ方」と大体似ているようであるが、衆議院では古くから用字の手引が出ているほどで、実務上の必要から、独自の行き方をとっている。その二、三の例を、公文用語・表記の基準と比べてみると、次のようになる。

公文用語	基準	会議録
受け入れる	受け入れる	受入れる
打ち切る	うち切る	打切る

繰り返す	くり返す
差し出す	さし出す
取り扱う	取り扱う
引き渡す	ひき渡す
割り当てる	割り当てる
互に	互に
但し	ただし
従つて	したがつて
覚書	覚え書
値打	値うち
繰り返す	繰返す
差し出す	差出す
取り扱う	取扱う
引き渡す	引渡す
割り当てる	割当てる
互に	互いに
但し	但し
従つて	従つて
覚書	覚書
値打	値打

大体において漢字制限の趣旨に沿って、当用漢字表の使用上の注意事項に協力しているのであるが、実務上の必要から、どうしても漢字のふえる線が出ていると見てよいであろう。この点はむしろ新聞の行き方に似ているものがある。なお、衆議院記録部では、「第八回(第十一回国会)発言用語集、国会のことば 第一号」を昭和二十七年(一九五二)三月に発行して、国会で発言された言葉の種類を全部採録し、漢字かな交りで書き表わしている。これは、送り仮名は法則を立てても例外や、取り扱いにくい用例が必ず出てくるので、個々の適用のしかたは、この実例集によるようにという役目をも負わされているのである。

国立国語研究所刊行書

昭和24年度 国立国語研究所年報 1

昭和25年度 国立国語研究所年報 2

国立国語研究所報告 1 八丈島の言語調査

国立国語研究所報告 2 言語生活の実態 (秀英出版)
—白河市および附近の農村における— (発行)

国立国語研究所報告 3 現代語の助詞・助動詞
—用法と実例—

国立国語研究所資料集 1 国語関係刊行書目 (昭和17—24年)

国立国語研究所資料集 2 語彙調査
—現代新聞語の一例—

国立国語研究所資料集 3 送り仮名法資料集

昭和27年 3 月

国立国語研究所

東京都新宿区四谷霞丘
聖徳記念絵画館内
電話赤坂(48) { 0389
2874

COLLECTION OF 'OKURIGANA RULES'

CONTENTS

Foreword

Introduction

Word List Compared from the Point of Okurigana Rules

List of Various Okurigana Rules

Official Gazette Department in Cabinet: Okurigana Rules, 1889

Nakane: Outline of Okurigana, 1895

Satô: Newly-edited Okurigana Rules, 1899

Japanese Language Research Committee: Okurigana Rules, 1907

Oosaka Mainiti Press: Okurigana, Style Book, revised, 1933

Utida: On Okurigana of Non-inflexional Part of Verb Ending,
1935

Miyake, Wakabayasi & Noda: Proposal on Okurigana Rules,
1939

Noda: Explanation of 'Proposal on Okurigana Rules', 1939

Hirai: I Read 'Proposal on Okurigana Rules', 1940

Japanese Language Research Section in Ministry of Education
in Japan: How to Use Okurigana (Proposal), 1946

Stenography Association in Japan: How to Use Okurigana,
Handbook of Letters for Minutes of Council Use, 1952

Appendix—Index by Subjects on Okurigana Rules

Commentary

- 1 Why Okurigana Problem Arose
- 2 Historical Sketch of Okurigana Rules
- 3 Explanatory Notes of Publications on Okurigana Rules
Listed

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
YOTUYA, SINZYUKU, TOKYO